



文學士佐成謙太郎著

謠曲大觀

首卷

東京 明治書院

序

佐成謙太郎君の「謠曲大觀」が完成された。首尾の卷を併せて、全部七卷、約四千頁の大著である。今その第一卷の世に出づるに當つて一言を添ふることは、余の光榮であるばかりでなく、又本書に對していさゝか關係を有してゐる余の義務であることを信ずるのである。
思へば、はや一昔のことである。故芳賀博士が東京帝國大學の教壇を引退されて、余がその後を襲うて國文學講座を擔任することになつた頃、余は責任の頗る重大なることを思うて、密に講座以外に種種の計畫を立てた。不敏な余一人の力では、如何に研究に沒頭し、精進した所で、成就し得べき所は恐らく言ふにも足らないであらう。若し今與へられた新しい余の立場の便宜をかり、多數同學諸君の協力を得て、國文學の諸方面に或事を企つることを得るならば、一方に

は不振の斯學を起し、又一方には斯學に對する世の蒙を啓く上に貢獻し得る所が多からう。それには具體的な方策として、雜誌の發刊、新研究叢書の出版、新註釋書の著述、特殊辭典の編纂、講演旅行等々を實行したいものであると考へた。而してその中の一二は、同感同學諸君の多大な協力援助を得て、現に實行の途中に在り、又或ものは準備中に在るのである。當時新註釋書として余の求めた所は、過去の業績を集成すると共に、これを增補し、訂正し、且つ先人の成し得なかつた方面に向つて、現代の新學問を以て新しい開拓をなしたものといふのであつた。かういふことが一朝一夕に成し得べきことでない位は萬々承知のことであつたが、余はこれを新進氣鋭の學者諸君に希望し、勸誘して、各自の造詣の深いものについて實行されんことを懇求した。固より余の志をよく理解してゐてくれられる諸君は、余の企てを贊成されたが、繁務その他の事情で、その一つも成功しな

い中に、十年の歳月は空しく過ぎ去らうとしてゐる。幸に佐成君はこの間不斷の努力を以て謠曲註釋の大業に當られた。二百數十番に亘つてこの難業に從事された不退轉の勇氣は、實に敬服に餘りある。余はこゝに本書の完成を見るに至つて、恰も大きくて、壯健で、容色勝れた嬰兒の產婆役を務めた人のやうに、得意と愉快とをおぼえるのである。

かういつては君に對して非常に失禮に當るかも知れない。併しこれは余の衷情である。思ふに、本書は余の勸說を待たずとも、いつかは固より世に出づべきものであつた。佐成君の謠曲(能樂)研究は周知のことであり、君は實に斯學の大家である。その平素の熱心、忠實な態度は、時々發表されたものに由つて世人の推重してゐる所である。その年と共に進んでゐる蘊蓄は早晚必ず纏められて、世に出づべきものであつたと信ずる。余の勸說は唯その時期を早めたに

過ぎない。

君が余の企てを賛成して、本書の完成を約されてから、暫くすると、數百枚の原稿を携へて來て示された。余はそれを披見して、何の助言を挿むべきものを發見しなかつた。唯その成功の日を待つのみであつた。然るに、その後君は又大部の稿本を持參されて、全部稿を改めたといつて示された。余は君の業に忠實なのに驚歎した。そして初稿より更に一段の進歩を示し、面目を一新してゐるのを知つて、本書の完成の日を待つ念は一層深くなつたのである。

かうして只管成功の機を待つてゐたところ、本年に入つて、この大業の略完成したことを報告され、且つ深見畫伯の畫譜・演能圖等をも示された。余は我が事のやうな喜をおぼえて、直ちに國文學註釋書出版に最も豐富な經驗を有つてゐる明治書院を紹介した。幸に明治書院は本書出版の大業を快諾されて、現代印刷製本技能の限りを

盡して、活字に、印刷に、體裁に、紙質に、裝幀に、十分の注意・意匠を用ひられることになつた。今その第一卷を見るに、余の期待に背かず、この種の著として確に劃期の大著勞作として、又よく書架を飾るに足る美本として、これを世に奬め得ることを喜とし、光榮とする

蓋し、新を追ふばかりが我々の能とすべきものではあるまい。況や奇を衒ふが如きは、寧ろその國家社會に及ぼす弊の多きに堪へないのである。我が國は世界特殊の文化を有し、又誇るべき古典文藝を有する國であるに拘らず、國民は餘りに祖國の文化に冷淡であり、餘りに自國の古典文藝に無知である。謠曲(能樂)は我が古典文藝の一として、我々の眞面目な鑑賞・研究を必要とするものである。のみならず、我々はその特質・價値を世界に紹介して、世界の藝術に寄與せんと期すべきものであらう。けれども、特殊な古典藝術であるから、我々と雖も、卒爾としてその詞章に臨み、演能を觀れば、到底十分に理

解し、鑑賞することを得ない。豫め必要な知識を準備して置かなければならないのである。

然るに、古來謠鈔「拾葉抄」「通解」などの、詞章の註釋書や、又特殊な研究などもあるが、いづれも十分に纏まつたものでない。隨つてそこに非常な不便があつた。本書はあらゆる方面を集めてゐる所に特色の一がある。この點に於て、先づ時弊を救ふものである。卽ち各曲には第一に解說を設けて、能柄・人物・所・時・作者・梗概・出典・概評を述べ、それから頁を三段に區劃して、中段には詞章がある。詞章の中には演出の場合の、間狂言の詞・ワキゼリフから、型・裝束等を示してある。上段には語句の註釋がある。下段には口語譯がある。そして終には諸流・古謠本の考異等が掲げてある。かくて獨り詞章の註釋・口譯に止らず、謠曲、能樂を知るに必要な事項を悉く網羅してある。思ふに謠曲は、その詞章のみを讀むすら頗る困難である。出典の多い語句

の義を明らかにすることの困難な上に、緣語・掛詞から、語句の連續關係を知ることに、又容易ならぬものがある。本書の註釋と口譯とは、一見容易なやうに見えて、實に人知れぬ涙の苦勞の多かつたことを信ずる。能の演出方面は、その專門家達に祕められたものがあつて、學者研究の便を缺くことが多い。余の如き斯道に淺いものは、實に本書を津梁として始めてよく舞臺に親しむことを得るを喜ぶものである。

要するに、本書は研究者の好參考書として、啓發を受くるものの多いことを信ずると共に、又一般謠曲能樂鑑賞家に、一般の知識を授けて、その鑑賞の確實な基礎を作らしめる上に、甚だ有効であると信ずる。余は躊躇なく、これを學界と一般家庭とに推奬する。

昭和五年十月

藤村作

緒言

本書の成功は一に恩師文學博士藤村作先生の御高庇によるものであります。

思へば、私が小謠・仕舞の教へを受けたのは、今を去る三十餘年小學生時代のことでありました。やゝ長じて謠曲を今少し深く研究したいと考へはじめた頃から、是非欲しいと思つたのは、演能の仕科を示す型附でありました。謠本に記されてゐない詞章、間語の詞でありました。謠曲文の難解に苦しむ毎に、他の古典文藝には續々として口語譯が出るのに、謠曲にはどうして誰も譯をつけてくれないのだらうと疑ひました。大正七年大學院に入つて、室町時代の文學を專攻することとなつて以來、更に深く根本的に謠曲を硏究したいと志しました。しかし能樂の前史は渾沌として把握することが出來

ない。謠曲の眞意は幽玄にして捕捉することが出來ない。終日書庫に閉ぢ籠つて一行の資料をも求め得なかつたことが幾度あつたことであらう、長歎息して街道に出れば、電燈の光が眩しく眼を射る。謠曲などといふものは、自分の趣味としておぼろに鑑賞して置けばよいのだ、自分の研究題目は他のものに代へた方がよいのだなどと、幾度か心が動きました。然しまた思ひ返して、研究を續けて行くうちに、資料は少しづつ積み重なつて行きました。偶然、間語の寫本を手にした時の喜びは、ほんとにいひやうのないものでありました。この間、恩顧・辱知の方々が、或は觀能の便を與へ、或は資料を貸與し、或は懇切に教示して、直接間接私の研究を援けて下さつたことは、實にありがたい仕合でありました。大分材料が整つて參りました。

藤村先生から本書の編述をお勸め戴いたのであります。さて愈、筆を執つて見ると、容易に體裁が整ひません。口語譯は可なり困難

な業でありました。またしても筆を投げたくなりました。先生は常に激勵して本書を完成するやうに鞭撻して下さいました。
遂に出來上りました。顧みればそれほど長い歲月ではなかつたのであります。微力な私に兎に角これだけのものの出來たのは、全く神佛の冥護だと思はれてならないのであります。
さて、かうして出來ました本書は、これを七卷に分ち、首卷に總說及び畫譜を、別卷に索引を載せ、その間の五卷に現行曲二百三十五番を曲名の五十音順に從つて收めました。各曲の取扱ひ方については、例言に於て細述することと致します。
なほ、表紙の圖案、首卷の畫譜、每曲演能圖等はすべて深見坦郎畫伯に揮毫して貰ひました。氏は能畫について三十年餘の研鑽を積まれた斯道の權威で、本書の爲にその蘊蓄を傾けて妙筆を揮はれたことは、著者の最も欣幸とするところで、讀者諸君も亦これを諒とせら

れるであらうと信ずるのであります。

本書の刊行について、明治書院が多大の好意を寄せられ、すべて著者の望むがまゝの體裁に出版せられたこと、印刷所も亦複雜な組版を整備して、幾回ともなき校正を快諾せられたことは、著者として愉悦に堪へないところであります。

背及び扉の文字は、古稀の齢を超えた父に書いて貰ひました。幸ひに兩親とも健在で、本書の刊行を喜んで貰へるのは、子として何よりも嬉しいことで、かうした私情の一端をこゝに漏らしても、讀者諸君はこれをゆるして下さるだらうと思ふのであります。

昭和五年十月五日父の七十一回誕生日に

佐成謙太郎

例言

全般に亘つて

能樂の演奏には、シテ方・ワキ方・狂言方・囃子方等の役柄がありますが、その主體をなすものはシテ方で、一般に行はれてゐる謠本も亦シテ方のものであります。そして、このシテ方には觀世・寶生・金春・金剛・喜多の五流（海若も一流を樹立しましたが、その謠本は觀世流のものを踏襲してゐます。）がありまして、各流二百十番乃至百八十番を現行曲としてゐます。そして、その大部分は各流共通のものでありますが、その間に多少の出入がありまして、五流現行曲は凡て二百三十五番となるのであります。（最近金剛・喜多の二流で廢曲としたものは、當然これを削除し、金剛流で新しく加へることとしたものも、未だ流布してゐないのでありますから、これを省略しました。）

本書は上述二百三十五番を、（翁）は別曲として第一に擧げ、（鸚鵡小町）以下を曲名の五十音順に從ひ、毎曲、解説・本文・語釋・口語譯考異の五部門に分つて、これを掲げました。そして、本文・語釋・口語譯の三項は、彼此對照する便宜を考へて、上中下の三段に、互に相對するやうに記しましたが、その間に自ら繁簡の差異があつて、多少前後するこ

とを區切れませんから、一曲を數節に分つて【一】【二】【三】等の符號を附し、讀み易いやうにしました。

なほ、各部門を通じて、謠曲名には必ず「」の符號を附けてこれを表示し、流名には往々觀(觀世)、寶(寶生)、春(金春)、剛(金剛)、喜(喜多)の略符號を用ゐました。

解說について

解說に於ては、また能柄・人物・所・時・異稱・作者・梗概・出典・概評の諸項に細分して記しました。

イ 能柄

能樂五番立の分類、脇能・二番目・三番目等の分類は、確乎たる根據のあるものともいへませんが、その曲柄を知るのには甚だ便宜なものであり、夢幻能・劇能等の名稱は、著者の私に與へたものでありますが、これも脚色の大體を知るのに便宜でなからうかと思ひましたので、兩者とも每曲にこれを揭げました。

ロ 人物

舞臺に登場する每曲の役柄・人物は、發聲順又は登場順によつて揭げました。

ハ　所

謠曲に描かれてゐる場所は、一曲の中でも多少移動するのが普通でありますが、ここには、その主要な場所を擧げました。　前後の二段に於て主要場所の移る場合には、これを表示しました。

ニ　時

謠曲に描かれた時は、明確でないものが少くありません。　さうした場合には、能樂實演の取扱上指定してゐる季節を、括弧を施して、(一月)(二月)のやうに記しました。

ホ　作者

謠曲の最も著しい作者が世阿彌であることには疑ひがありませんが、どの曲がだれの作であるかは、明言し難いものが少くありません。　本書には、世阿彌の著書によつて明らかなものは勿論これを明示し、なほ後世の書ではありますが、作者目錄として相當有力なものと認められてゐる吉田兼持の能本作者註文、觀世元章の二百十番謠目錄の說をも揭げて置きました。　なほこの外、作者、制作時代等を知る傍證となるべき古記錄、金春禪竹の著書、室町時代公卿日記等の所見をも揭げました。この項に就ては、丸岡桂氏の古今謠曲解題から得たものが多いのでありますが、著

者自身も亦同樣の搜索を試みましたので、同書の遺漏を多少補ひ得ました。なほ質文學士の書經釋記に就ての研究に負ふ所も少くありません。

ヘ　梗概

一曲を通じた口語譯を試みたのでありますから、梗概は一見してその大要を知り得る程度にとゞめました。

ト　出典

謠曲の主材は大部分先進文藝から得たものでありまして、これを知ることは、謠曲作者の創作態度を見る上にも、謠曲を正しく解釋する上にも、必要なことでありますから、典據の索め得たものは、なるべく詳しくこれを引いて謠曲とを對照する便に供へました。

チ　概評

すべて文學藝術の批評鑑賞は、その人々の主觀から出るもので、客觀的な一定の基準は定め難いものだと思ひます。著者の主觀から出發した批評などを述べるのは、誠におこがましいことではありますが、初心の人々には多少參考になることもあらうかと思つて、敢て卑見を略述しました。

本文について

イ 底本の選定

謡曲の本文は、諸流とも大體同一でありますが、その間に多少詞章の出入した所があります。それで、本書の底本には、謡曲の大成者觀阿彌・世阿彌の流系であり、その後引續いて現在も最も流布してゐる觀世流のものを採り、觀世流で行はれてゐないものは、上懸として觀世に最も近い、そして現在觀世に次いで廣く行はれてゐる寶生流を採り、上懸二流に行はれてゐないものは、下懸三流の中で流系の最も古い金春流を採り、次いで金剛流を採り、最後に五流の中最も新しい喜多流の文を採りました。

ロ 本文の校訂

本文の底本には、その流の現行謡本を採りましたが、漢字・假名遣等は、古謡本及び諸流謡本を參酌して、その穩當なものに從ひました。

用語・用字は各流を通じて、一定の樣式に統一しましたが、句讀はすべてその流現行曲の主張に從ひました。

漢字には、「何々にて候（さふらふ）」「何々にて候（さふら）へば」の外は、「さん候（さふらふ）」などと、候を濁音で謡ふ場合も

すべて振假名を施しました。そしてその振假名は字音假名遣に從ひましたが、謠曲には特殊な謠ひ方が少くありませんので、さうした場合にはすべてその謠ひ方の發音に從つて、「御字」「青墓」「泡く」などと記し、「謠よ」「案うる」なども、「うヶう」「さカうる」と謠はないことを明示する爲に、「謠よ」「案うる」と記し、假名でも、讀み誤る恐れのあるものは、「今日見ずは」などと、特に片假名を傍につけて、これを明示しました。

謠曲では、上の音が字音のタ行又は撥音ンで、その次の音がア行・ヤ行・ワ行、又はハ行「は」である時は、その音がタ行又はナ行或はその拗音に轉じて、「今日は」「御入り候」「陰陽」などと謠ふものでありますが、かうした場合、漢字の振假名にはその發音假名を記しましたが、假名書きの場合には、これに一々傍訓を施すのは、餘りに煩はしいので、省略しました。それらはすべて、「善神は」「他生の緣ありて」「利物をなど」と謠ふのであります。

章句・節附の名稱、次第・道行・下歌・上歌・クリ・サシ・クセ・ロンギ等は、すべて謠本の指定に從つてこれを附し、呼掛・語・待謠等の名稱も括弧を施してこれを記しました。たゞ、カヽル・打切は本書の如き性質のものには、煩はしいばかりで必要のないものと思

つて省きました。
なほ謠がかりの部分と節をつけないたゞ詞の部分とは、その句頭に、前者には『 後者には「の印を附けて、これを辨別しました。（口語譯等に附けた「」は、會話文又は引用文を表示したもので、これとは全く意味を異にしてゐます）

ハ本文の補修

能樂の實演を一度でも觀たことのある人は、誰でもすぐ氣づくやうに、謠本や從來の謠曲註釋書に記してゐる詞章は、能樂詞章の全部ではありません。謠本に記されてゐない狂言詞やワキ詞（時としてはシテ詞をも）を知らなくては、精細に謠曲を理解することが出來ないのであります。たゞこれらの詞は寫本として、役者の家家に相傳してゐるだけで、世間には殆ど出てゐないのでありますが、著者は幸ひにしてこれを見出すことが出來ましたので、すべての曲を通じて、舞臺で述べられるほどの詞は、洩れなくこれを收めるやうに力めました。その中、
シテ詞・ツレ詞　は、その流現行のものに從ひ、
ワキ詞　は、現在家元の存續してゐる唯一のワキ方である脇寶生流の古寫本により、寶生流に求め得なかつたものは、高安流・春藤流などに從ひました。（寶生流以外

に據つた場合は、その都度その旨を斷つて置きます)

狂言詞　は、もと狂言には大藏・和泉・鷺の三流があり、現在はその中大藏・和泉の二流が行はれてゐるのでありますが、その詞は謠曲の他の部分に比べて流動性の多いものでありまして、現在行はれてゐるものでも、同じ流の中にも例へば大藏流の茂山派と山本派、和泉流の三宅派と山脇派と野村派など、それ〴〵可なりの相違があるのであります。それで、本書では成るべく古い原形に近いものに據りたいと思ひ、狩川杜園舊藏の大藏流古寫本(推定寛政頃)に據り、大藏流にないものは和泉流に據りました。

二　型附

能樂は一種の劇であり從つて謠曲は一種の脚本と見られるのであります。それで、「ト書き」のない脚本が、舞臺を想像するに不都合であるやうに、型附の記されてゐない謠曲文は、能樂の演奏を想像することの困難な、從つて謠曲として十分に鑑賞することの出來ないものだと思ひます。それで、本書にはこの型附を「ト書き」風に記して見ました。そして、その型附には著者所藏の觀世大夫清親型附本を本とし、帝國圖書館所藏觀世流舞本その他の型附本、木下敬賢氏の能樂蘊奧集・大和田建樹氏

の「能の栞」池内信嘉氏の「能の見方と謠の聞き方」謠曲界連載の「うたひ通解」大觀世連載の「能の型」等を參酌し、殊に著者の觀能手控を參考としました。

尤も、能の型附は極めて些細な點まで嚴密に規定してゐますと同時に、變型の少くないものでありますが、さうした詳細な型附の記載は本書の目的とするところでもなく、又却つて全篇通讀の妨げともなるものでありますから、たゞ演出の大體を想像し得る程度に略記することにとゞめました。

なほ、現行曲二百三十餘番のうち、凡そ百番內外が屢〻實演せられるもので、型附本等の參照すべきものも多いのでありますが、他の百數十番には實演せられる機會が少く、型附も殆ど見當らないのであります。著者はなるべく廣く求めて、その大體を知るに力めましたが、一二の曲に就ては、裝束附及び登場人物の出入を記すにとゞまつたものがあります。

ホ　活字の差別

以上擧げました謠本以外の狂言・ツキ等の詞及び型附は、謠曲として完全な本文を作る爲に必要な條件であると信じますが、謠本に記されてゐる部分とその他の部分とには、可なり輕重の差がつけられてゐるやうに思はれます。その上、謠本以外

の部分は、著者の必要と認めて新しく加へたものでありますから、その裏書を明らかにする爲に底本に記されてある部分は十二ポイント、その他の間は九ポイント、上欄は八ポイントとして、活字の大小を以てこれを辨別しました。——狂言詞は、底本にも時折記してあることがあります。その場合、その文が實演に使用してゐるものと同様のものである時にはこれに從ひ、大差ある時には著者の用ゐた狂言實本の文に從ひ、底本の文を參考として上欄に掲げ、いづれにしても、その都度これを明示して置きます。その底本に從つたと否とに拘らず、狂言詞はすべて九ポイントとして、體裁を整へました。

語釋について

謡曲の語句の解釋は、早く豐臣氏の頃から大仕掛に行はれ、徳川末期、犬井想軒の謡曲拾葉抄に於て一度大成したのであります。その後、明治時代に入つて、大和田建樹氏の謡曲評釋、丸岡桂氏の觀世流改訂謡本(刊行會本)通解等に於て、更にこれを修補せられて、著者の新しく加へ得る所は甚だ少かつたのでありますが、多少は修正し得たかと思つて居ります。

本書に掲げた語釋は、なるべく煩雜にならないやうに、要領を記すやうに注意しましたが、引歌・引用句などはなるべく洩れなく掲げるやうにし、縁語・掛詞なども一々指摘するやうに心掛けました。

語釋は本文の上段に置いたのでありますが、それではいひ足りない時には、その曲の末尾に「附記」として掲げました。

口語譯について

謠曲の口語譯、謠曲文の全體を通じて、一貫した解釋を施すことは、これまでまだ試みられたことがないと思ひます。否、これまでは、謠曲は「綴れ錦いちやんちやんこ」のやうなものだ、などといはれてゐて、全篇を通じた逐語的譯は出來にくいものと考へてゐた人が少くないやうに思ひます。著者は大膽にもこれを試みて、その二三十を謠曲界に連載して、讀者の教へを乞うたのでありますが、こゝにすべての曲に亘つて口語譯を試みることとしました。著者自身が讀んでもいひ足りない節が少くない、將來大に修正せらるべきものではありますが、從來全くなかつたものだけに、讀者諸君の參考にもならうかと期待してゐるのであります。

考異について

イ　諸流異同

前に述べました通り、各流の詞章には多少の異同がありまして、この差異を詳説することは、各流の主張を見る上にも、謠曲を解釋する上にも、參考となるものでありますが、些細な相異まで一一指摘しますと、非常に煩雑なものとなり、頁數も甚しく增加しますので、些細なものはこれを省略し、やゝ著しい相異は必ずこれを掲げることとしました。

ロ　古謠本異同

謠曲の詞章は、殆ど原形のまゝ傳へられて來たのでありますが、元祿以前とその以後とでは、やゝ著しい差異の認められるものがないでもありません。そしてこの古謠本從つて原形に近いものを知ることは、いづれの點から見ても、大切なことだと思ひますので、慶長光悦本をはじめ元祿以前の古謠本の索め得ましたものは、その最も古いものに從つて、これを現行曲と比較して、その相異は大小となくすべて原文のまゝで指摘しました。

なほ、世子六十以後申樂談儀、金春禪竹の五音次第・五音三曲集等に謠曲の一節を引いてゐますものは、これこそ原形を知る最も大切な資料でありますから、本項の末、又は解說の作者の項に於て、その全文を擧げ又は現行曲との異同を辨じて置きました。

能畫について

每曲冒頭に揭げました演能圖は、緖言に申し述べました通り、すべて深見山郎畫伯の揮毫に係るものであります　これまでにも、演能の版畫又は寫眞は數多くありますが、現行曲すべてを網羅したものは、深見畫伯のものが最初であると思ひます。畫伯が本書の爲に苦心して終にこれを完成せられたのは、また一には斯道の劃期的事業であつたと信じるのであります。

首卷について

首卷は能樂畫譜と能樂總說との二部門に分ち、別に謠曲總說として、謠曲文構成要素の研究、謠曲引歌考の二篇を加へました。

イ　能樂畫譜

畫本の寫眞版を除いた彩色畫はすべて深見旦郎畫伯の手に揮毫せられたものであります。

さて、能面にしましても、能裝束にしましても、その種類が甚だ多いのでありますが、その代表的なもの、凡そ現行曲の演奏に必要なものは、本書に收めたものだけで大抵これを盡してゐると思ひます。殊に能作物・能小道具類には、特殊演奏にのみ用ゐられるものをも收めました。たゞその分類及び排列の順序は、本書の如き研究を第一義とするものでは、多少の無理をしても、類似によつて區別した方が便宜であると考へまして、深見畫伯の折角書きあげられたものをも、著者の方針によつて、なるべく系統的に排列しかへました。勿論これには畫伯の諒解を經てゐるのでありますが、美術的な立場からは多少遺憾の點を生じたことと思ひます。畫伯にお詫びするとともに、讀者諸君の御諒承を願ふ次第であります。

ロ　能樂總說

能樂全般に亘つて、成るべく洩れなく概說するやうに力めました。

由來能樂は、過去の演藝・文藝その他諸種の藝術を綜合集成したわが國最初の完成

演劇として、論究すべき方面が甚だ廣いのでありますが、能樂の起原沿革は未だ研究し盡されないで、模糊たる狀態にあり、その詞章體形は複雜して一律に論じ難く、その演奏樣式は相傳として、簡潔な說明が與へられてゐず、結局どの方面にしましても、これを明確にすることは、容易な業でありません。著者はその道の素人で、まことに不案內ではありますが、兎に角これまで研究して來ました成果、能樂・謠曲界・謠曲講座・國語と國文學・國文敎育・日本文學講座・日本風俗史講座などに揭載しました拙稿を整理修補し、更に新な項目を加へて、能樂、謠曲の各方面に亘つての說明を試みました。もとより不備の點が多々あらうと恐れてゐます。大方の示敎を仰いで修正して行きたいと存じます。

八　謠曲細說

能樂總說では、一つの項目に就て詳述することは、徒らに岐道に走る恐れがありますので、すべて概說するにとゞめましたが、それ〴〵の項目に就ては、なほ深く考案したい問題が多いのであります。その中、我々の謠曲研究に最も手近であると思はれる、謠曲文構成要素の解剖的研究、謠曲出典の研究について、二度これを詳說したいと思ひ、前者については、謠曲界に連載しました舊稿を整理增補し、後者につい

ては、各曲の主材はその曲の解説に掲出しましたので、各曲を通じて部分的に見て最も有力な出典である古歌引用の様式を、新に整理して見ました。尤も引歌と申しましても、一二句又は詩想の類似に過ぎないものに就ては、取捨に迷つたのでありますが、研究の便宜を思つて、やゝ範圍を廣くしてこれを採ることにしました。

なほその毎歌章、曲名の下に本書の頁數を示して、本文檢索の便に供しました。

謠曲大觀 首卷 目次

能樂畫譜綱目

能樂總說細目

第一章　能樂の生成

第二章　能樂の大成

謡曲細説細目

第一 謡曲文構成要素の研究

第二　謠曲引歌考

能樂畫譜



能舞臺全景)

（高砂演能）圖

第一圖



能面（尉面）

第二圖



第三圖



能面（男面）

第四圖



能面（男面）

第五圖



能面（男面）

第六圖



能面　女面

第七圖



第八圖

能面（女面姥面）



能　面（異形面）

第九圖



能面 (異形面)

第十圖



能面（異形面）

第十一圖



第十二圖



第十三圖


翁烏帽子
風折烏帽子
金風折烏帽子
大臣烏帽子（上頭掛）
梨打烏帽子
前折烏帽子
靜烏帽子
洞烏帽子
侍烏帽子
折烏帽子（上頭掛）
小結烏帽子
小立烏帽子
劔先烏帽子
初冠
初冠追懸
老松初冠
井筒初冠
杜若（戀之舞ニ用フ）
杜若（澤邊之舞ニ用フ）
唐冠
透冠

第十四圖



第十五圖



第十六圖



第十七圖



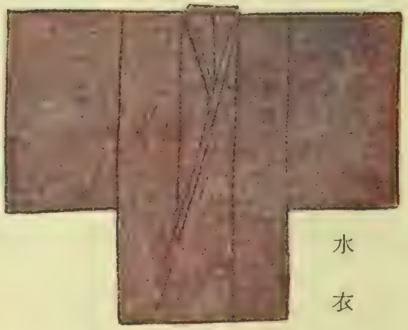
第十八圖



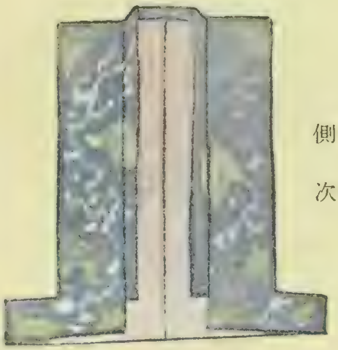
第十九圖



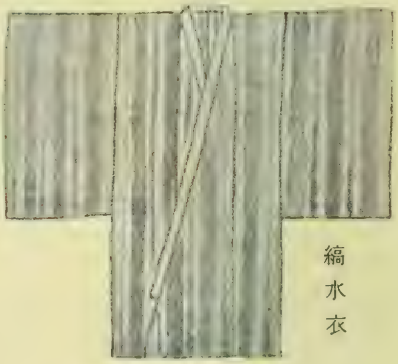
第二十圖



水衣



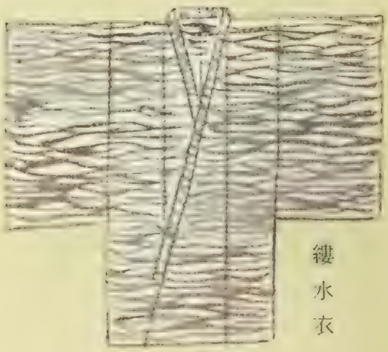
側次



縞水衣



色入唐織



縷水衣



色無唐織

第二十一圖



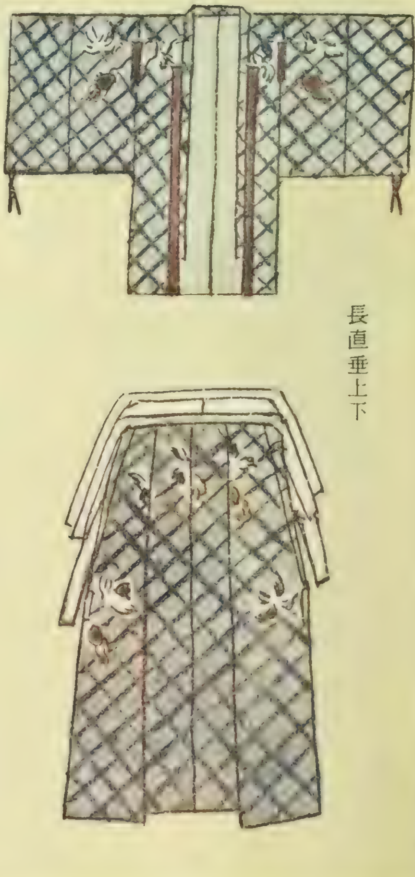
第二十二圖



直垂上下



素袍上下

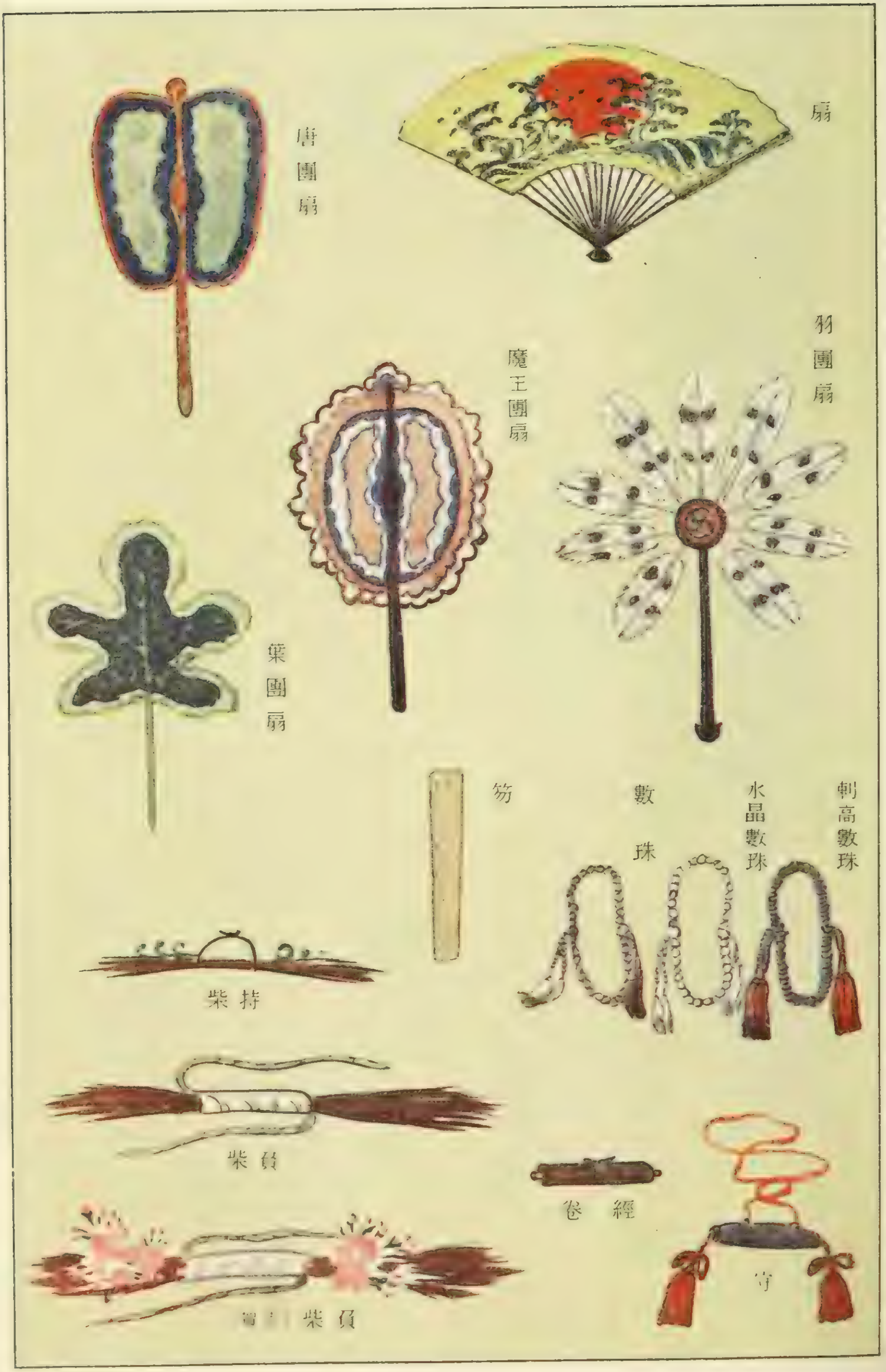


長直垂上下

第二十三圖



第二十四圖





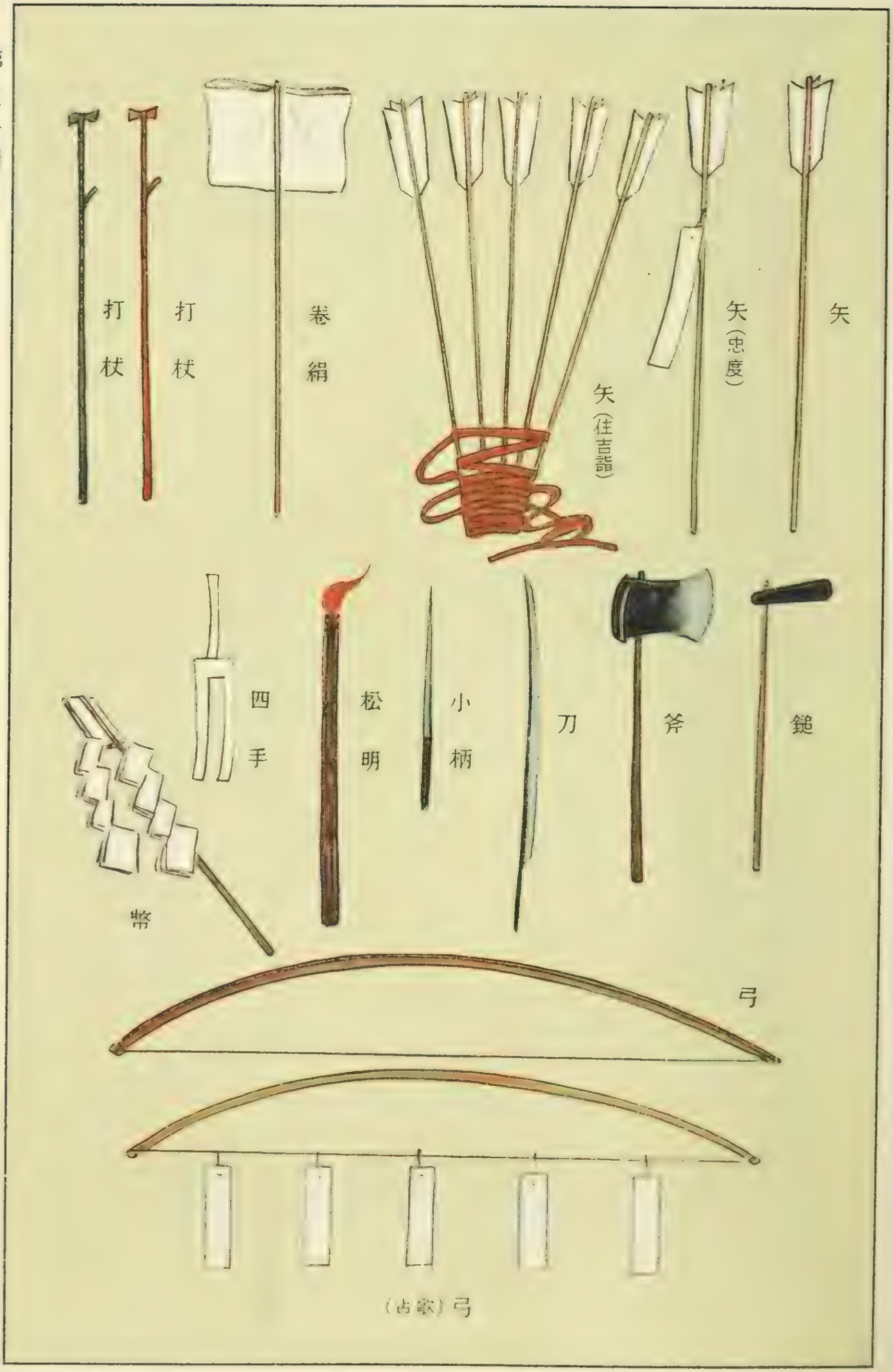
第二十五圖

第二十六圖



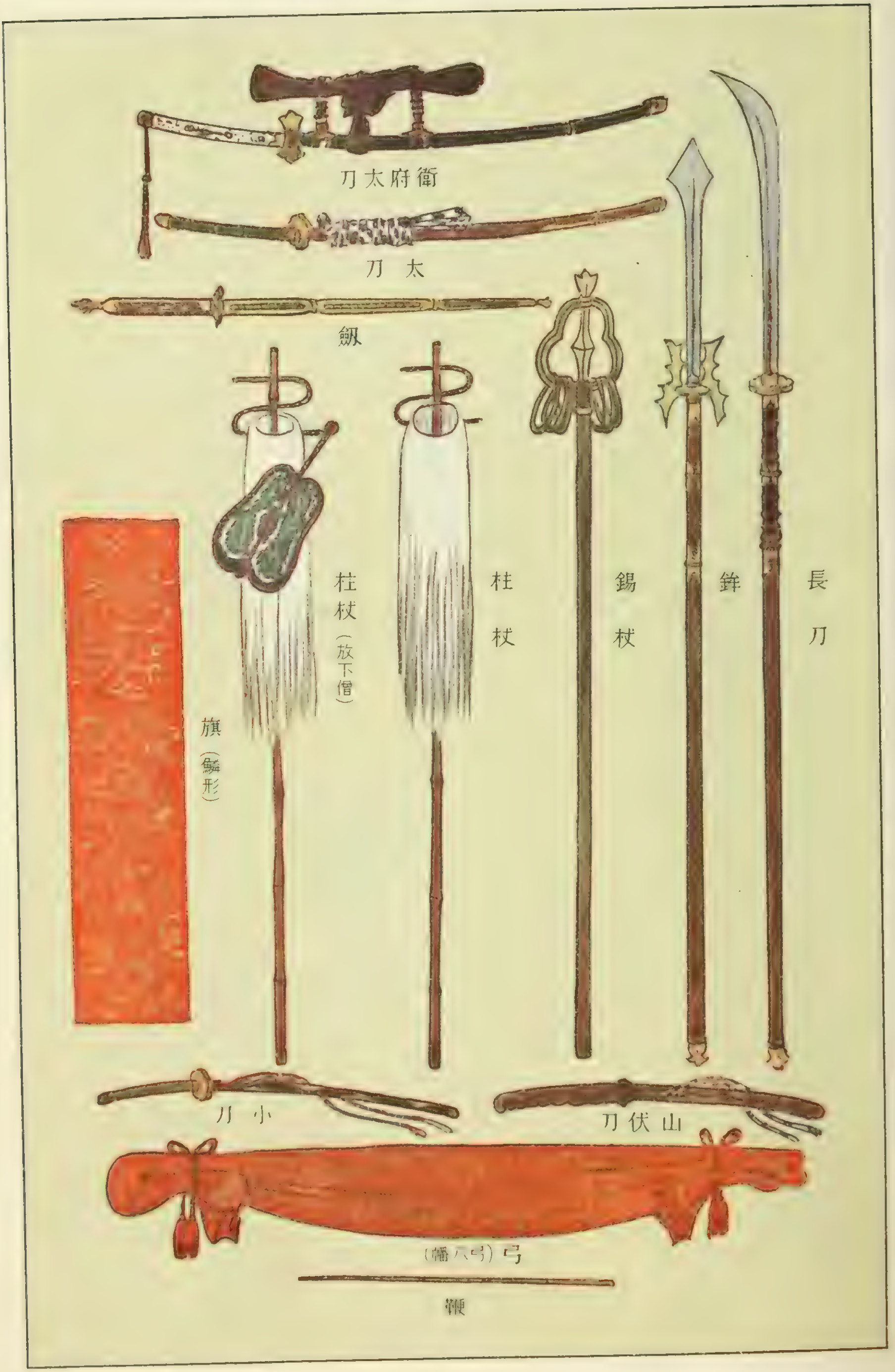
第二十七圖

能小道具（弓・矢等）



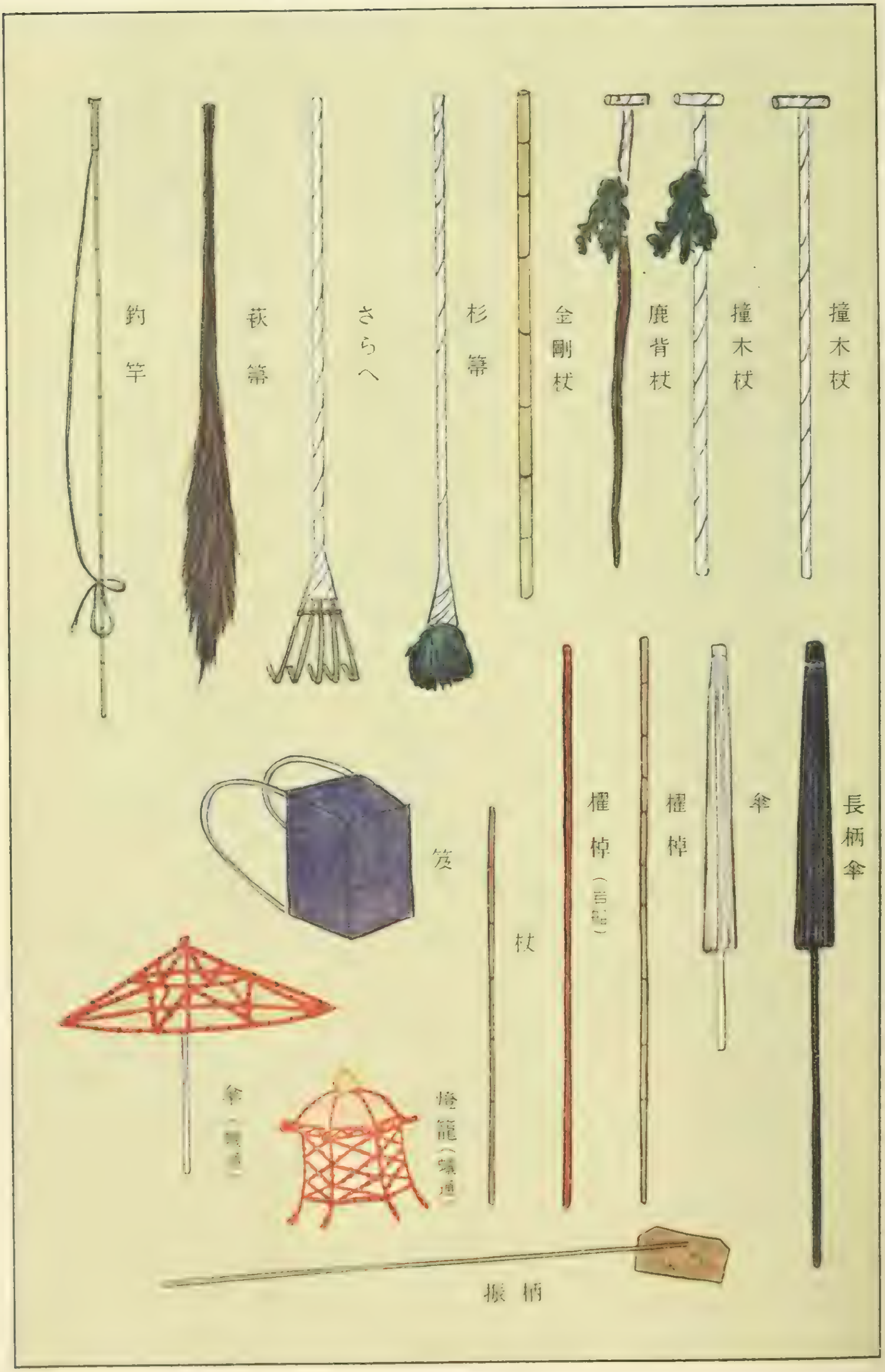
第二十八圖

能小道具 （太刀・柱杖等）



能小道具（杖・箒等）

第二十九圖



第三十圖



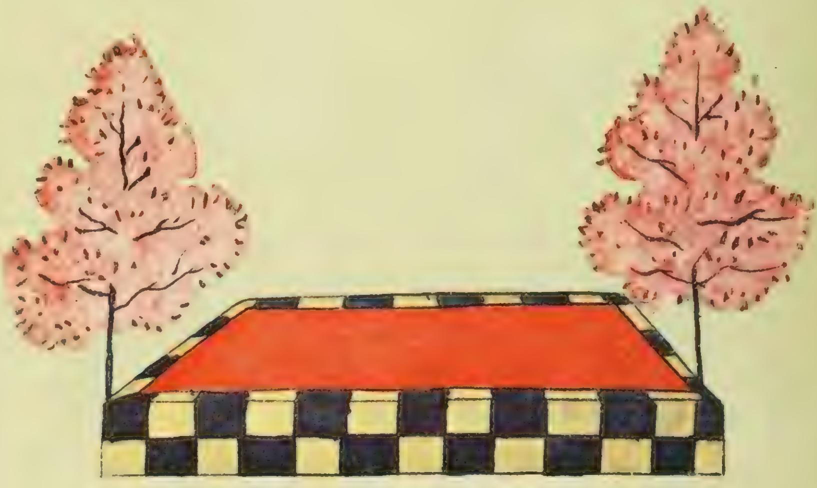
第三十一圖



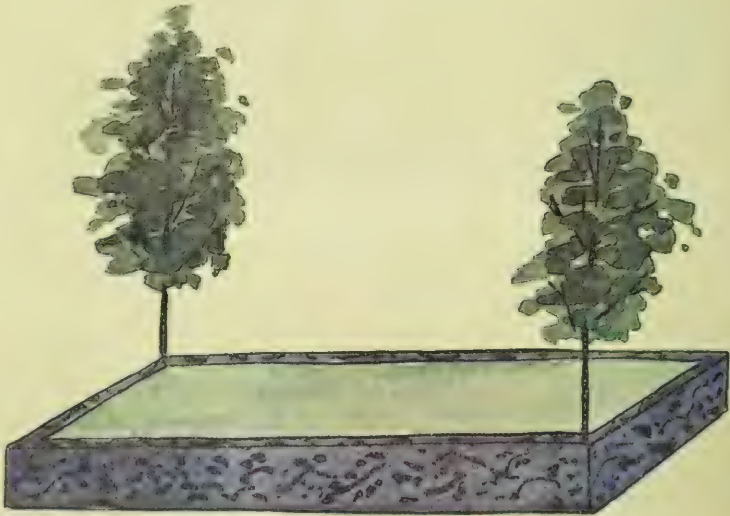
第三十二圖



第三十三圖



嵐山

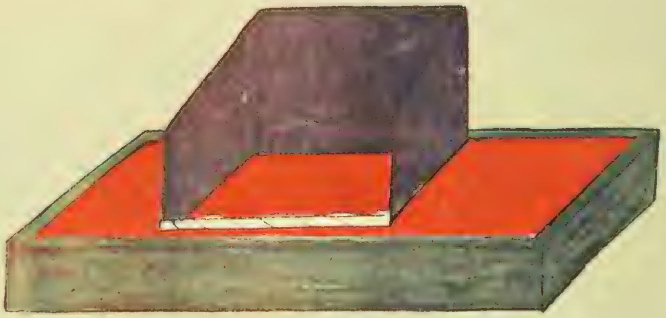


谷行

第三十四圖



紅葉狩



大會

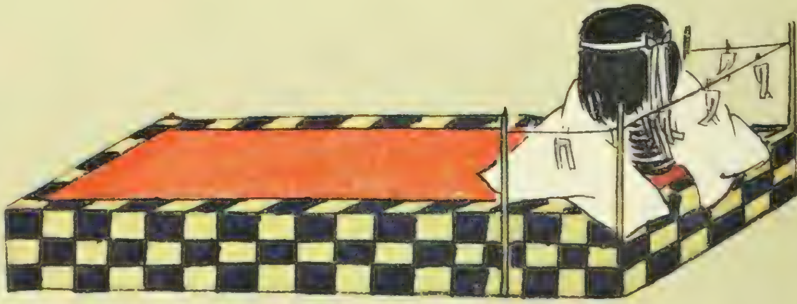


大瓶猩猩

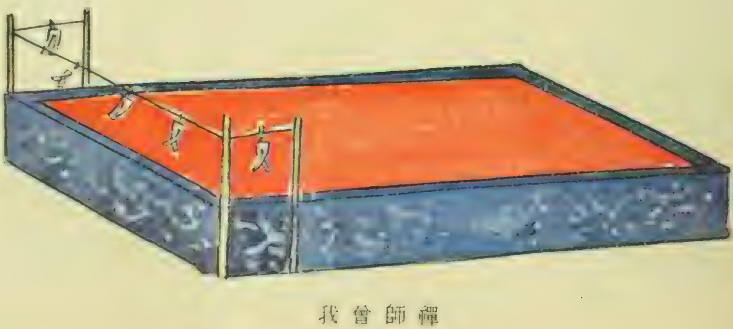
第三十五圖



小鍛冶



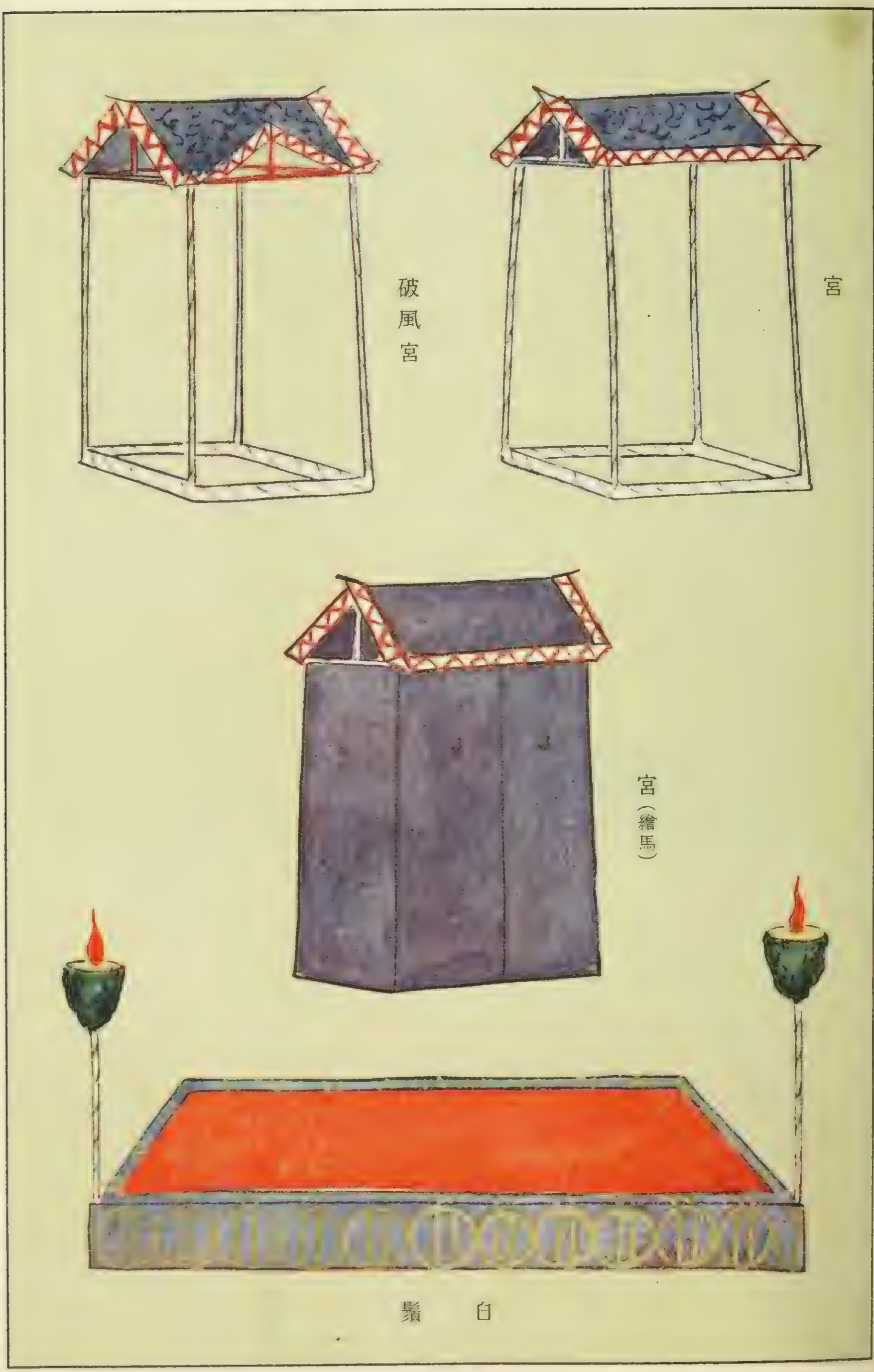
調伏曾我



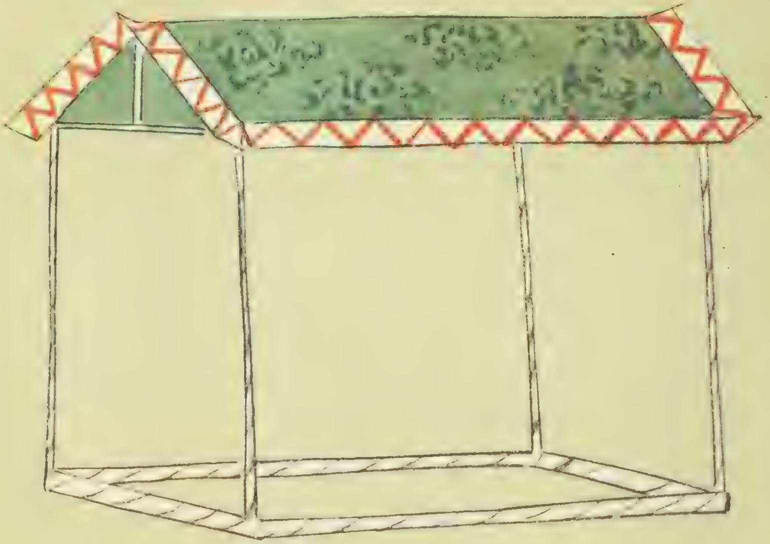
禪師曾我

能作物（宮）

第三十六圖



第三十七圖

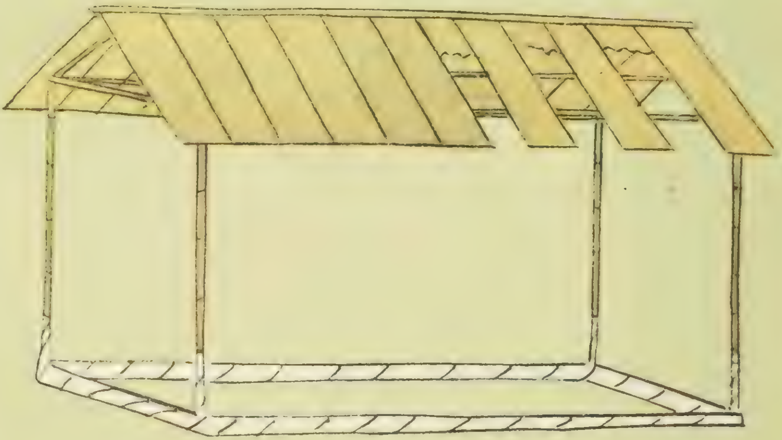


大屋臺

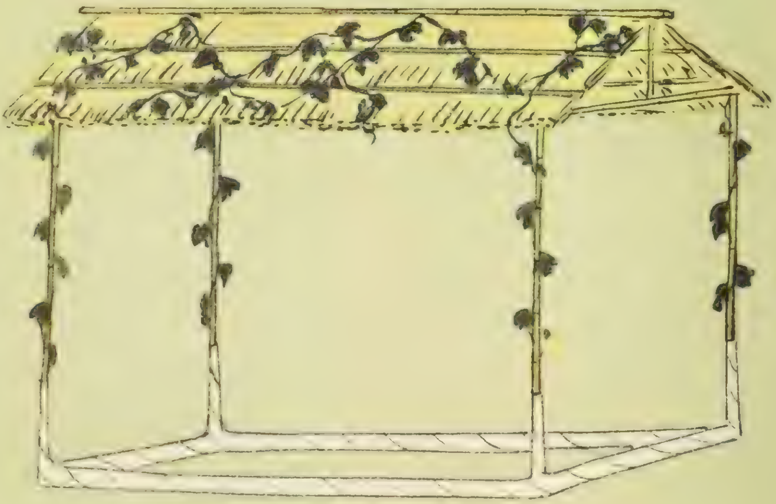


疊み屋臺

第三十八圖



雨月



大原御幸

第三十九圖



藁屋



藁屋 (景清)

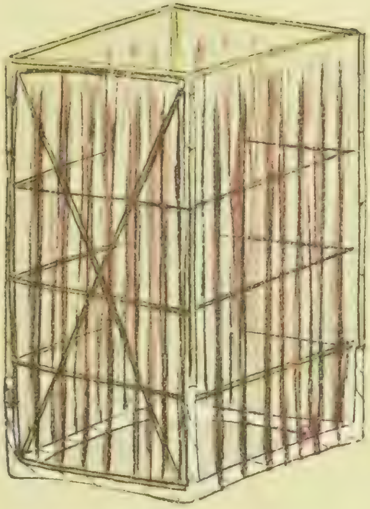


藁屋 (關寺小町)

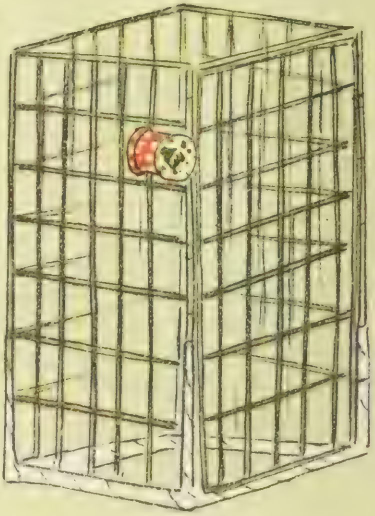


荻藁屋

第四十圖



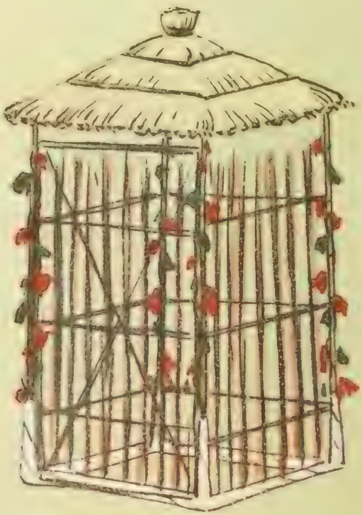
萩柴屋



籠（籠太鼓）



藁屋（檜垣）



藁屋（一角仙人）

第四十一圖



塚（隅田川）



山



巣（土蜘蛛）



石（殺生石）

第四十二圖



柳（遊行柳）



墓（定家）

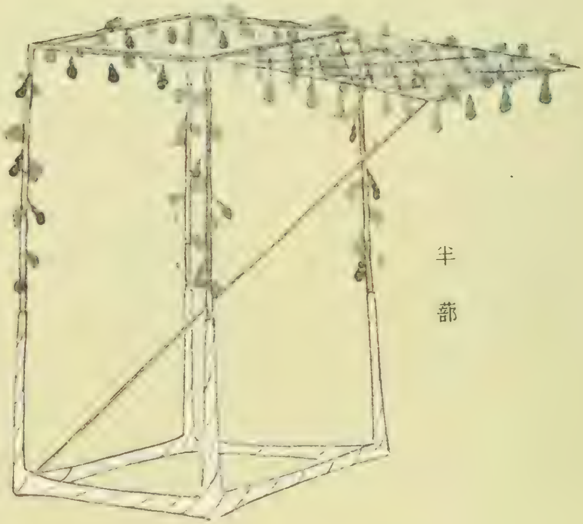


杉（三輪）



櫻（西行櫻）

第四十三圖



半蔀

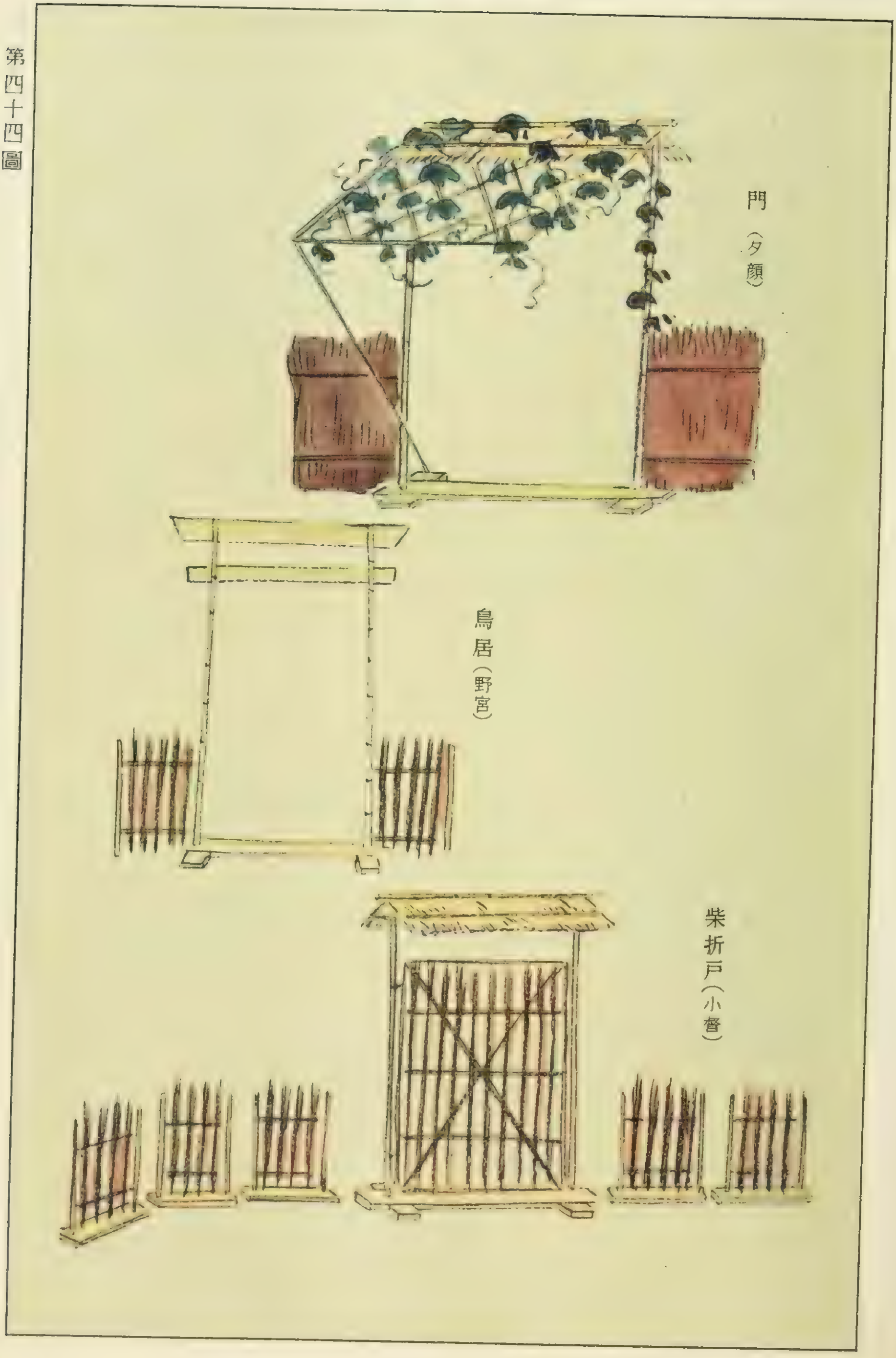


庵（三笑）

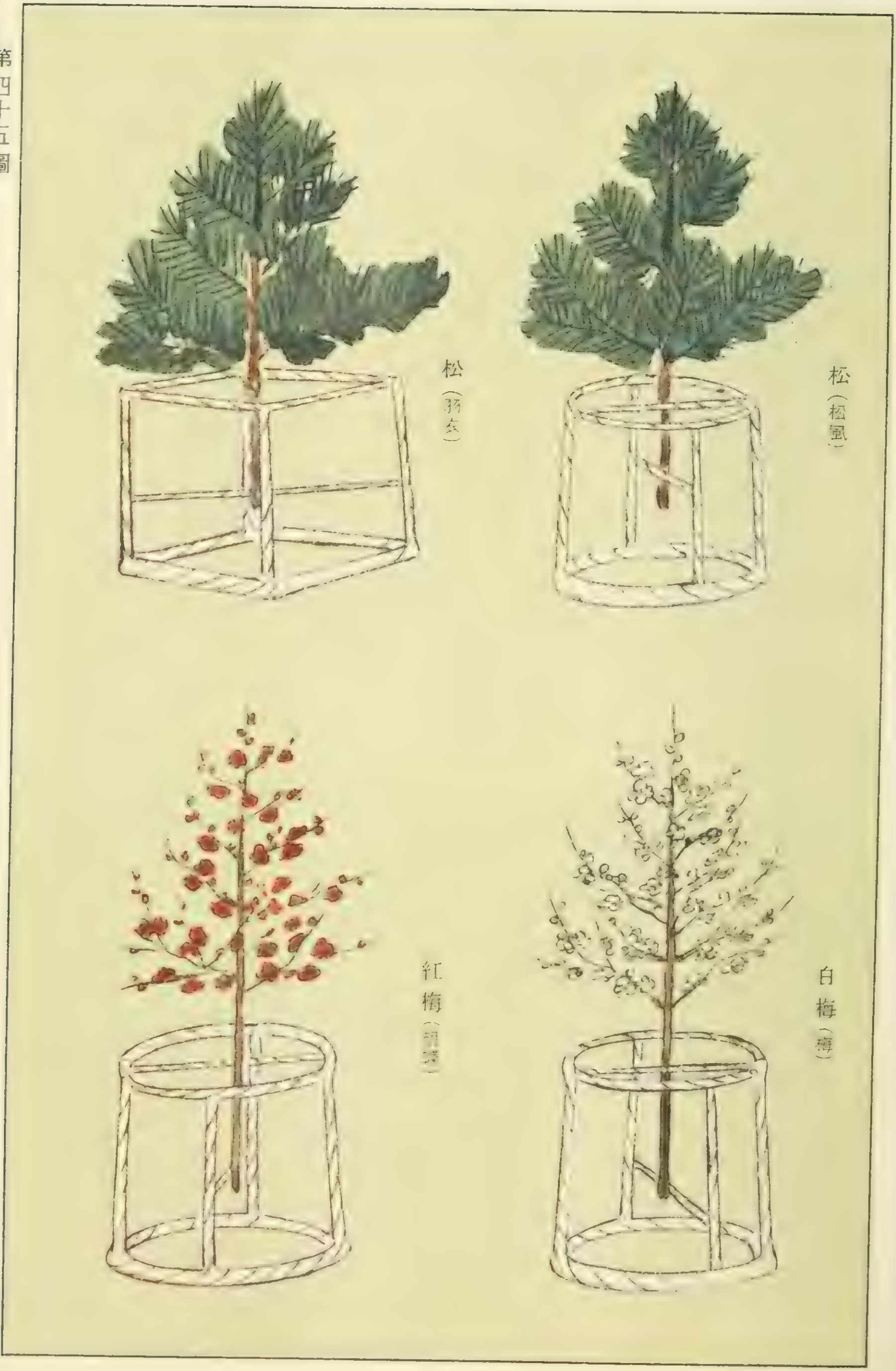


竹林（龍虎）

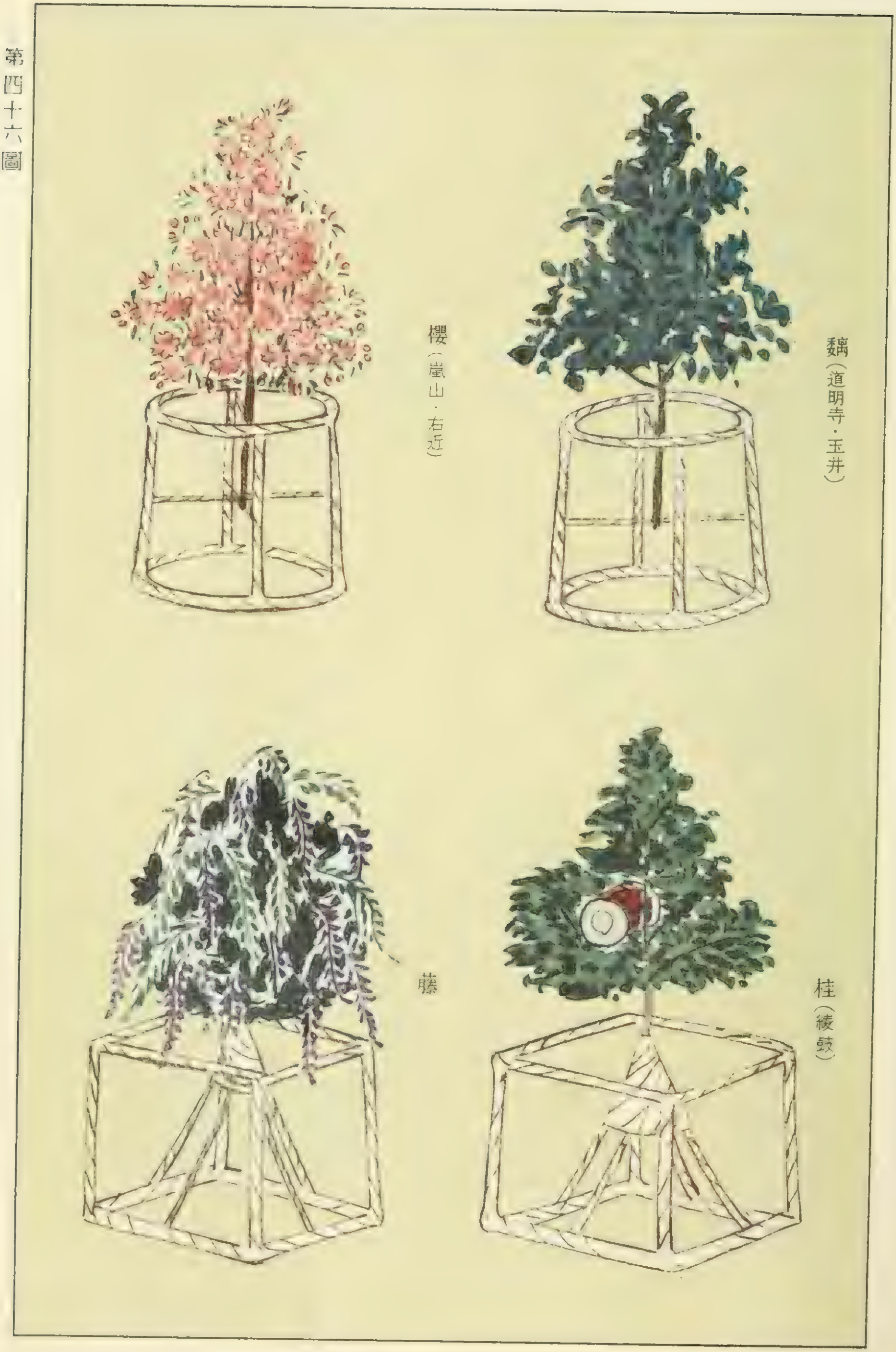
第四十四圖



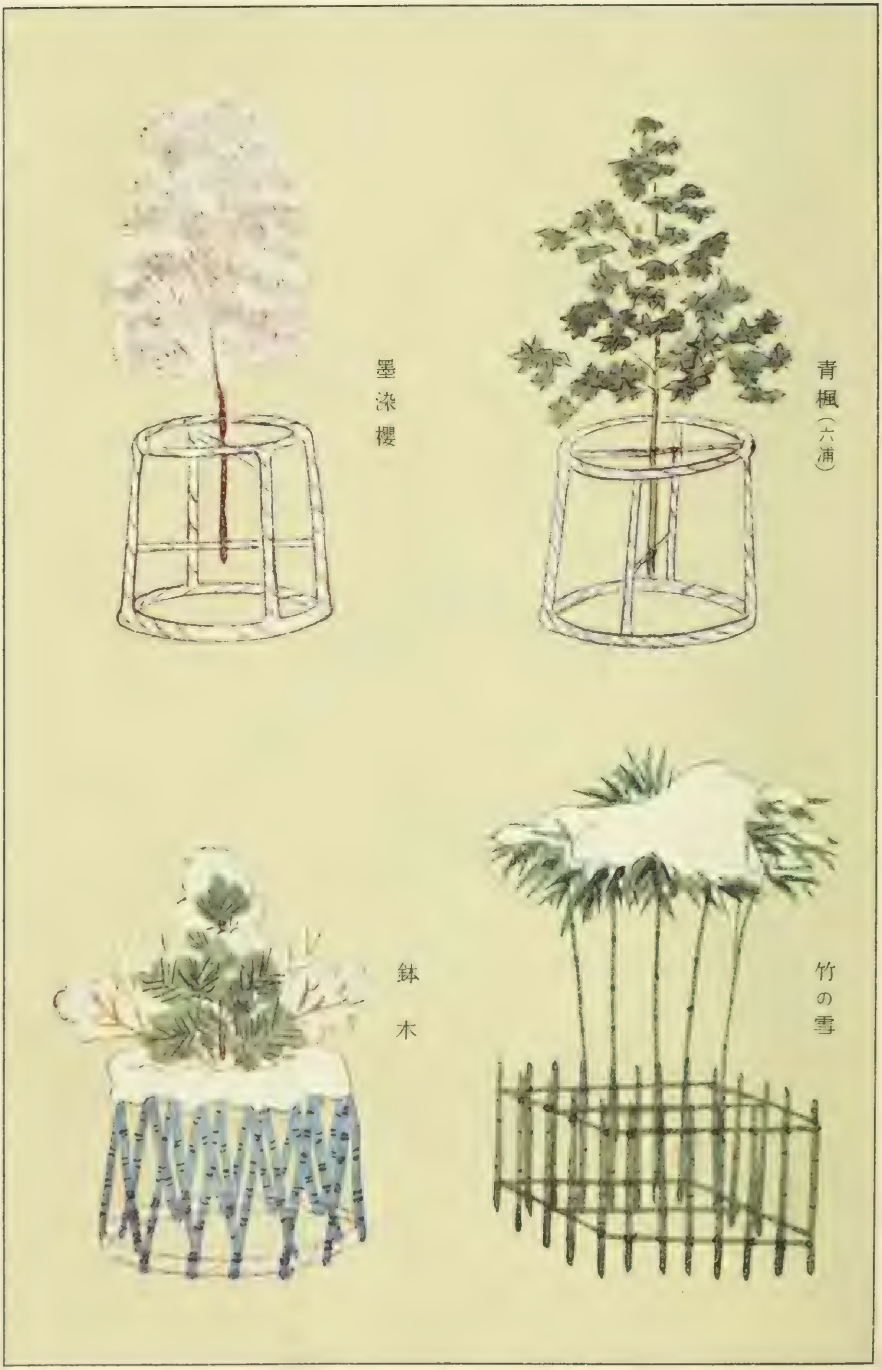
第四十五圖



第四十六圖

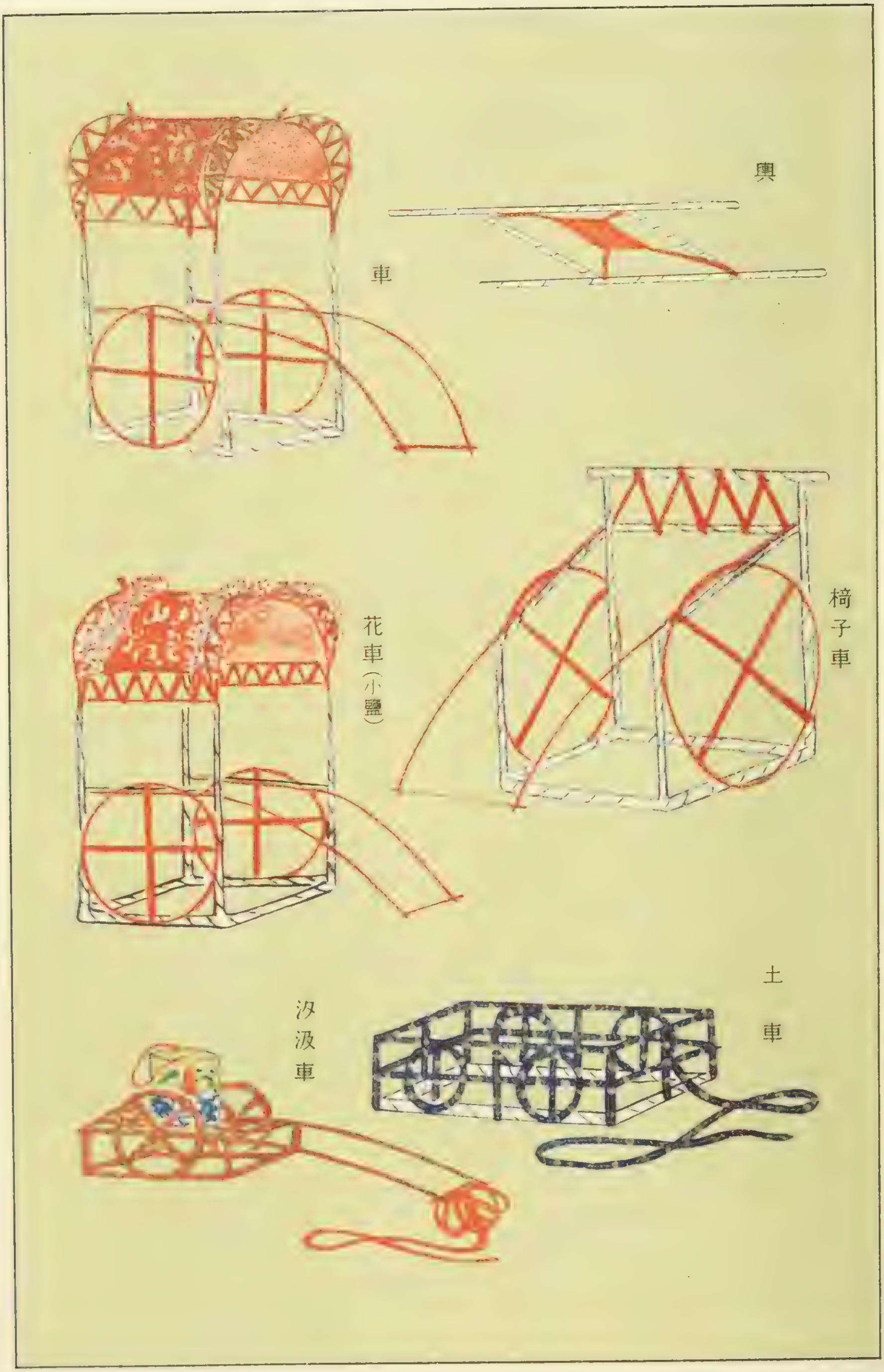


第四十七圖



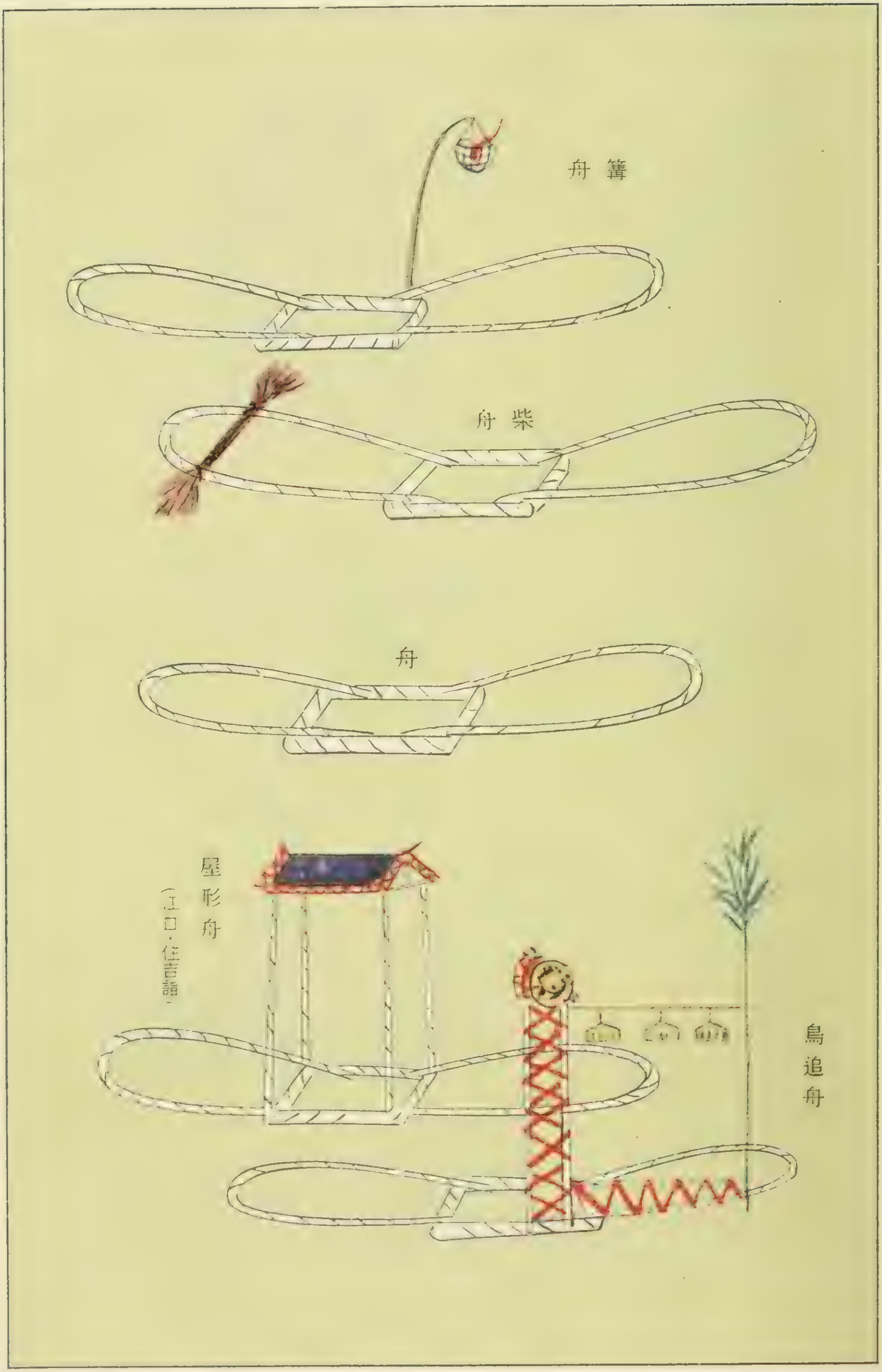
第四十八圖





第四十九圖

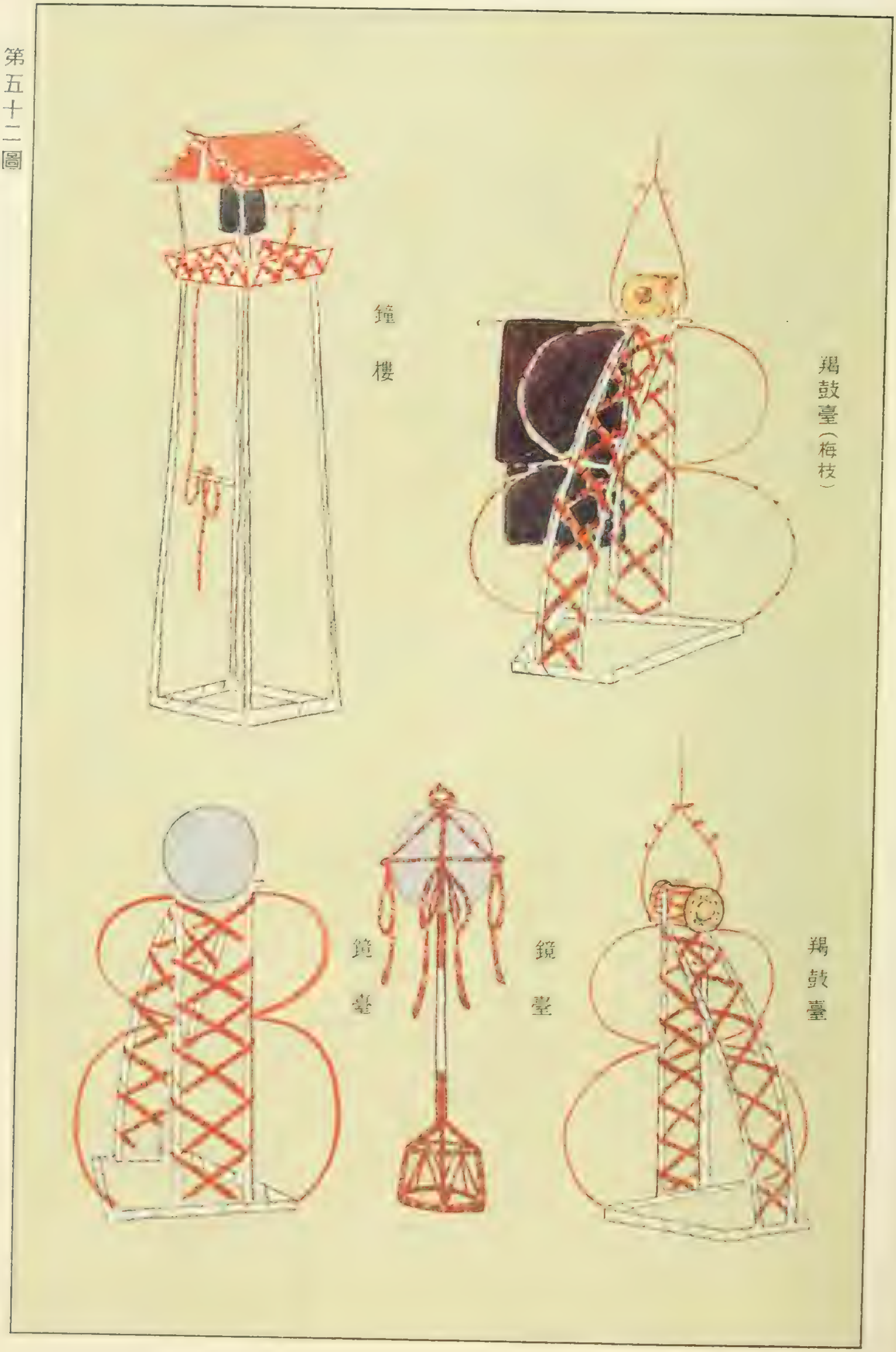
第五十圖



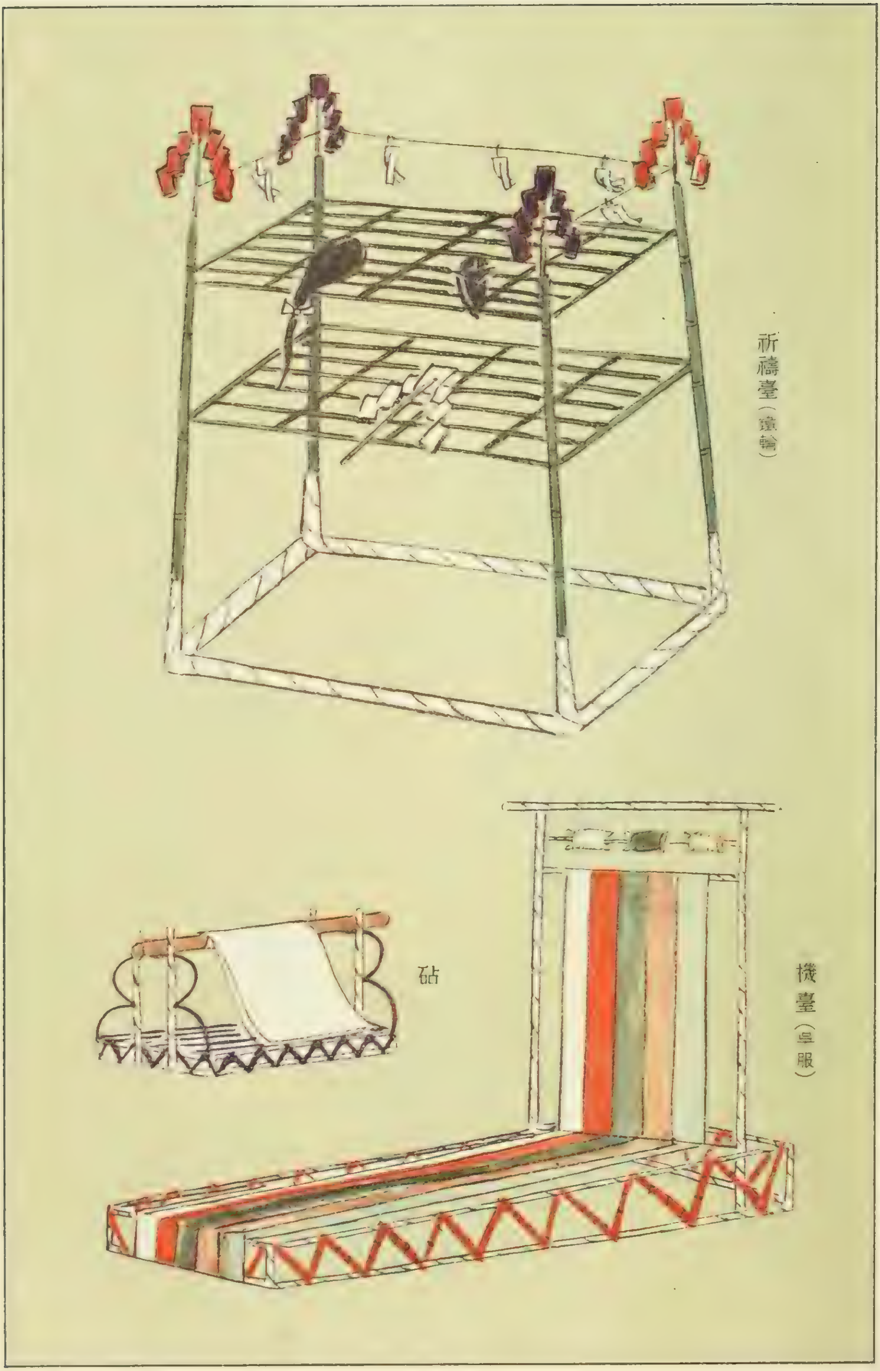
第五十一圖



第五十二圖



第五十三圖



第五十四圖



第五十五圖



狂言面

第五十六圖



第五十七圖



狂言裝束

第五十八圖



狂言上下

長上下

縞羽織

女帶

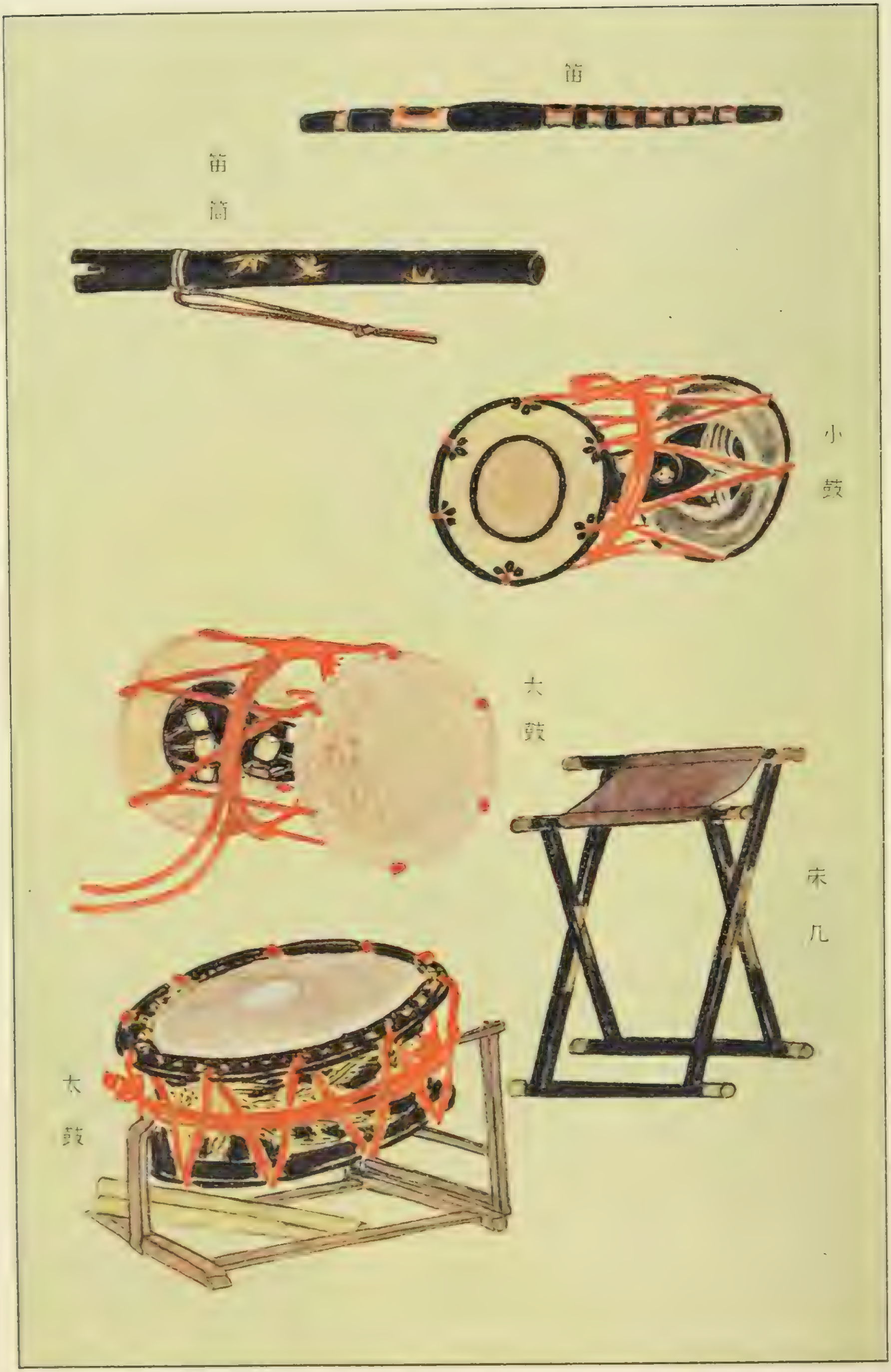
狂言装束等

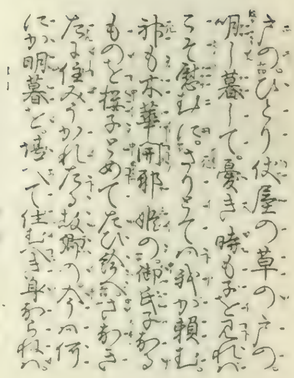
第五十九圖



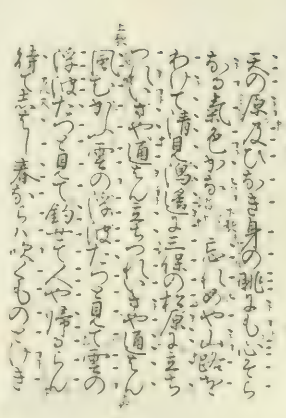
第六十圖

能樂器

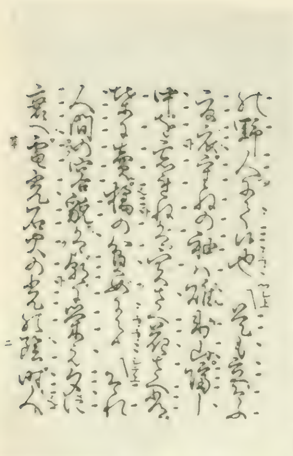




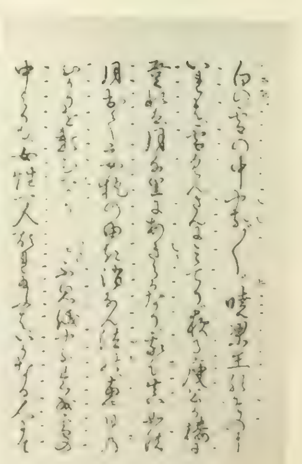
觀世流（宗家本）〔櫻川〕



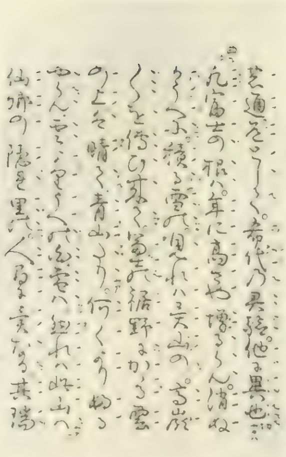
觀世流（刊行會本）〔羽衣〕



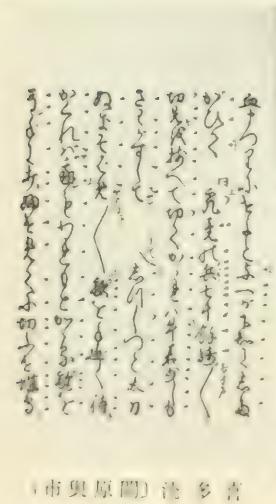
寶生流〔草紙洗〕



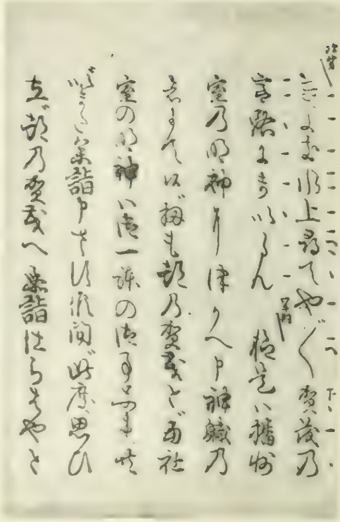
金剛流〔雪〕〔美濃取〕



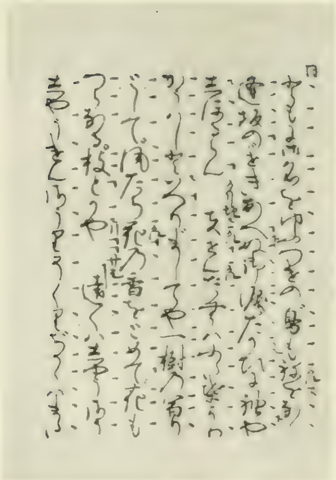
金春流〔富士山〕



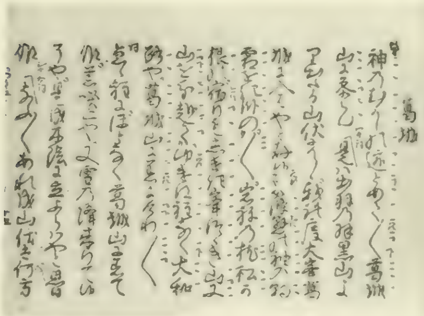
喜多流〔關原與市〕



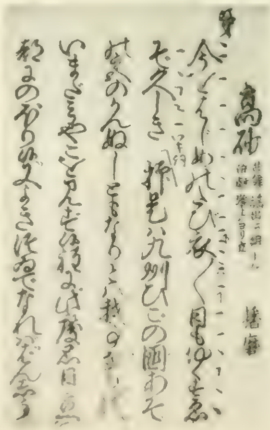
慶長光悦本（加茂）



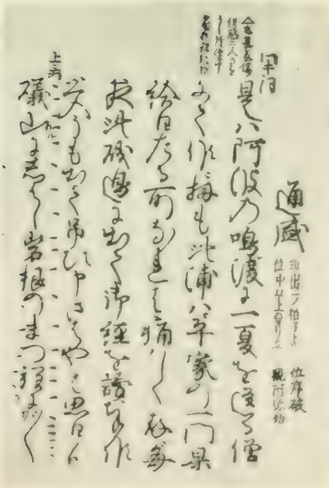
寛永卯月本（蟬丸）



元禄（八年）懐中本（葛城）



貞享（四年）小形本（高砂）



元禄岡田本（通盛）

能樂總說

第一章　能樂の生成

一、能樂の源流

能樂の名稱

能樂といふ名稱は、明治十三年の頃始めて作られたもので（能樂三ノ二、久米邦武博士談）――尤も阪元雪鳥氏は夙く九州治亂記にこの言葉が見えてゐるといはれ、野々村蘆舟氏も淺野橘園（文化文政頃の人）觀氏系譜にこの言葉が見え、且同じ人の著書に能樂餘錄といふ書目のあることを指摘して居られるが（謠曲講座十ノ六）、德川時代には普通「猿樂（申樂）の能」又は單に「能」といつてゐて、能樂といふ名稱は一般には認められてゐなかつた――古くは、散樂、散更、猿樂又は申樂と書き、「さるがく」又は「さるがう」と呼び、やがて猿樂といふ名目に統合せられ、次で猿の字を忌んで申樂と書くやうになつたのであつた（謠曲界十八ノ六摘錄參照）。

さて、この能樂――古い名を以て呼べば猿樂――は、わが國に於て始めて完成した一種の劇であつて、その大成した應永の頃（西洋紀元でいへば十五世紀の初頭）以來、實に五百年の久しきに亘つて、連綿として實演せられ、その後樣々の戲曲・音樂が現れて來たにも拘らず、現在なほ謳謠の聲は山間邊陬の地にも聞え、將來にも衰微すべき徵の全く見えないのは、誠に世界に珍しい、一の奇蹟とも稱すべきものであらう。

このやうな能樂は、その淵源を尋ぬれば、これ亦太古に溯らなければならない。

歌舞の起原

抑もわが國歌舞の起原は、最古の神話から始まつてゐて、天照大神天の岩戸隱れの御時の、天宇受賣命の

伎樂

神樂舞にその端を發し、山幸彦海幸彦の神話、火照命の俳優に史劇の祖を傳へてゐるのである。其後、海外との交通が開けるや、他の文物と共に、種々の樂舞が輸入せられたことの記錄に見えてゐるのは、日本書紀允恭天皇四十二年（一一一三）に始まるが、わが國に實際渡來したのは、なほこれよりも古いことであらう。そしてこの前後に輸入せられた樂舞には、唐・吐羅・林邑・高麗等諸種のものがあつて、それらのうち、所謂正樂に屬するものは、やがて唐樂・高麗樂の左右舞に分類整理せられて、わが國固有樂の神樂とともに永く保存せられることとなつたが、その他の雜樂に屬するものに、伎樂及び散樂があつた。この二つが、その一は形態を傳へて能樂の一樣式となり、他は内容を改善して能樂の前身となつたやうに思はれるのである。

まづ伎樂について見れば、日本書紀、推古天皇二十年（一二七二）の條に、

百濟人味摩之歸化曰、學二于吳一得二伎樂舞一、則安二置櫻井一、而集二少年一令レ習二伎樂舞一。於レ是、眞野首弟子、新漢濟文二人習之傳二其舞一

と、伎樂を學んだ樂人が大和國櫻井に歸化して、子弟に樂舞を教習した事を記し、その演態については、後の教訓抄に、

先師子舞、次吳公、次金剛、次迦樓羅、次波羅門、次崑崙、次力士、次大孤、次醉胡、次武德樂。

とあつて、各曲の内容を略説してゐるが、それは後に述べる呪師猿樂に近いものであるばかりでなく、延喜式雅樂式に、この伎樂人を東西二寺の齋會に分ち充て、その樂戸を大和國城下郡杜屋村に置くと記してをり、その杜屋村は、小中村清矩の歌舞音樂略史に記されたやうに、大和中樂圓滿井座金春の出生地であるから、後の猿樂に何等かの影響を傳へたものと想像せられるのである。

しかし、それは寧ろ原始猿樂の傍流と見るべきもので、その原流本系は散樂から出てゐるのである。この散樂は、東大寺要錄卷二、供養章第三、天平勝寶四年（一四一二）四月十九日、大佛開眼會の記事に、

唐散樂頭、近江少掾正六位上食朝臣奠人
　　　治部少錄從六位上高田朝臣家主……
唐古樂一舞　唐散樂一舞　林邑樂三舞……

續日本紀、天應二年（一四四二）七月の條に、

壬辰、勅解二郡雜色長上五十四人一、廢二雅樂・散樂戶一。

とあり、奈良朝時代にわが國に輸入せられてゐたもので、この文字を「さるがく」と呼んだのが、猿樂の名義の起原であらうと思ふのである。

然らば、この唐散樂とは本來如何なるものであつたか。周禮春官に「旄人掌レ教下舞二散樂一舞中夷樂上」とあり、その鄭注に、「散樂、野人爲レ樂之善者、今若二黃門倡者一矣、自有レ舞」と、俗樂といふ程の意に解し、唐會要三十には、

散樂歷代有レ之、其名不レ一、非二部伍之聲一、俳優歌舞雜奏、總謂二之百戲一、跳鈴擲劍、透梯戲繩、緣竿弄枕、珠大面撥レ頭窟　子、及幻伎激レ水化二魚龍一……

と、輕業手品などをも含めた百戲を總稱してゐるのであるから、前に擧げた伎樂も亦この一に數へられるのであるが、特に唐散樂といへば、劍氣褌脫・曹娘褌脫・輪鼓褌脫などがその主なるものであつたらしい（謠曲界十九ノ二拙稿）。そして、これらの褌脫は、秘苑日涉四によれば、盤涉調・角調・平調などの樂拍子に合はせて劍を持つて舞つたり、デアボロのやうな細鼓を絲の上で廻したり、或は球乘りのやうに小圓球の上で自由な舞を

滑稽伎

演じたり、畢竟色々の曲藝を演ずる戯舞のやうであるが、わが國に傳來した後は、夙くその定型が失はれて、「曲はのこりて歌は絶え」(雜談別錄)、「無レ舞」(體源抄)、「おもひ〳〵のわざをする」(體源抄)やうになつた。舞人がわが思ひ〳〵のわざをした所を見れば、その樂拍子も亦流動性の多いもので、固定的なものでなかつたであらう。卽ち散樂の名稱は傳へられたが、その內實は全く更新して行つたのであつて、この更新して行く過程が、やがて猿樂發達の遺跡となるのである。

二、新伎散樂

前掲續日本紀に、天應二年「廢散樂戸」とあり、その後の平安朝は、女性中心の文化に充滿した、花の朝も月の夕も、常に室内に靜坐して讀書・詠歌を樂しんだ時代であるから、戸外的團體的歡樂機關たる舞樂藝術の發達を望むことは出來なかつたが、奈良朝に整成した神樂及び舞樂は、引續き平安朝貴族にも愛好せられて來た。そして、その餘興として、散樂の名目の下に種々の演伎が行はれたのであつた。三代實錄に、

貞觀三年（一五二一）六月廿八日、天皇御二前庭一、觀二童相撲一……九番相撲後、有レ勅命停、左右互奏二音樂一、種々雜伎・散樂・透撞・咒擲・弄玉等之戲、如二相撲節會儀一

貞觀五年（一五二三）五月二十日、於二神泉苑一御靈會……命二雅樂寮伶人一作レ樂、以二常近侍兒童及良家稚子一爲二舞人一、大唐高麗更出而舞、新伎散樂競盡二其能一。

元慶四年（一五四〇）七月廿九日、御二仁壽殿一、覽二相撲一、左右近衛遞奏二音樂一、散樂雜伎各盡二其能一……右近衛內藏富繼・長尾米繼、伎善二散樂一、令二人大笑一、所謂烏滸人近レ之矣。

などとあり、その新伎は滑稽な、人を大笑せしめる態のものであつた。

猿樂の名目

かうして、散樂の演舞が新案滑稽のものであつたとすれば、自然この名目の下に種々雜多の技藝が包含せられ得るわけで、本朝文粹卷三に收められた應和三年（一六二三）の散樂策問及びその對策によれば、「揚ㇾ鞭騎ニ半部ニ」、「傍ㇾ柱負ニ胡簶ニ」、「憑ニ閫座ニ而放ニ月光ニ」などの新案滑稽伎の外に、相撲・傀儡などの雜伎や、新靺鞨のやうな高麗樂舞をも散樂に數へてゐたのである。

たゞに散樂の名目に廣汎な或は雜多な内容を持つてゐたばかりでなく、散樂の名目そのものについても、色々の文字が用ゐられてゐた。例へば舞樂要錄相撲節會の舞番目錄を見ても、褌脱（承平四年）、猿樂（承平六年）、雜藝（天慶六年）、散吏（寛治二年）などの文字が混用されてゐるのである。

その後、名目の方は次第に「猿樂」といふ言葉に統一せられて來たが、その用途は愈々廣くなつて、物語・日記類にも、これを滑稽といふ意の普通名詞に用ゐて、「さるがく」（宇津保物語藏開、源氏物語乙女、蜻蛉日記、枕草子）といひ、「さるがひ」「さるがふ」（枕草子）と動詞にもはたらかせるやうになつたのである。

舞樂の餘興

さて、かゝる猿樂伎の行はれる場合・場所について見ると、前掲三代實錄によれば、相撲節會に行はれるのが通例であつたらしく、やゝ下つて、中右記にも相撲の後に猿樂の演ぜられた事が散見して居り、江家次第にも七月相撲拔出の條に、西宮記にも七月相撲召出の條に、猿樂の事を記して居るのである。そして、その狀況は舞樂要錄の舞番目錄に委しく記されてゐて、これによれば、舞樂の左右舞の演ぜられるその最後の左舞として數へられてゐるのである。卽ち主として唐樂の一種として、雅樂の餘興として演ぜられたものであるから、その猿樂の内容も、そこに新奇の工夫があつたにもせよ、大體は外來樂に近いものでなかつたらうか

と想像されるのである。

神樂の餘興

しかし、猿樂はまた、わが國固有の神樂の餘興としても演ぜられたものであつて、本朝文粹の散樂對策にも、「神樂之雪夜、雖怪短男之輕身、踏歌之春天、偸恨高冠之春香」と見え、西宮記の臨時祭使事にも記され、殊に宇治拾遺物語及び十訓抄には、堀河院の御時、内侍所の御神樂の夜及び賀茂臨時祭の歸立の御神樂に、陪從の家綱とその弟行綱とが猿樂の功を爭つたことを詳述してゐるのである。尤もこの猿樂は極めて、卑俗な輕口又は猥雜な歌謠であつて、他の場合も或はこれに類したものでなからうかと疑はれるのであるが、それにしても、神樂の餘興として催されたことは、猿樂の歴史にとつて甚だ貴いことであり、この事がやがて能樂の大成者世阿彌等によつて神樂起原說を立てられる所以であり、後の學者にも亦神樂との關係を認める人の少くない所以である。

三、猿樂藝の展開

平安朝貴族は靜的で、室内遊戲をのみ好んだのであるから、戸外で行はれる群衆藝術の著しい發達を望むことは出來なかつたが、その末期、院政時代に入ると、藤原貴族の衰微して行くにつれて、これまで貴族を檀那としてゐた社寺は、新しく多數の力を借りて、維持經營して行かねばならないこととなり、從つて民間演藝が次第に發達して來た。その一は神社の祭禮などに行はれた新猿樂（しんさるがく）であり、その他は佛寺で行はれた呪師（しゆし）である。

新猿樂

新猿樂とは、藤原明衡の作と傳へられてゐる新猿樂記によつて假に名づけた名稱で、同書に、

予廿餘年以還、歴二觀東西二京一、今夜猿樂見物許之見事者、於二古今一未レ有、就レ中呪師、侏儒舞、田樂、傀儡師、唐術、品玉、輪鼓、八玉、獨相撲、獨雙六、無レ骨有レ骨延動、大領之腰支蝦、漉舍人之足仕、氷上專當之取袴、山背大御之指扇、琵琶法師之物語、千秋萬歳之酒禱、飽腹之胸骨、蟷螂舞之頸筋、福廣聖之袈裟求、妙高尼之襁褓乞、形勾當之面現、早職事之皮笛、目舞之翁體、巫遊之氣裝貌、京童之虚左禮、東人之初京上、況拍子男共之氣色事、大徳之形勢、都猿樂之態、嗚呼之詞、莫下不二斷レ腸解一レ頤者上也、……

と、稻荷祭などに行はれた猿樂の樣を詳記してゐる。これによれば、從來の雜伎雜藝一切を包含して「新猿樂」といつたもののやうであるが、その中に、慾の深い僧侶の袈裟を求める態、子を生んだ破戒尼の襁褓をこひ歩く態、浮薄な都會人の駄洒落、無知な田舍者の京見物など、滑稽物眞似の演ぜられてゐることは、甚だ注意すべき現象で、滑稽伎から次第に劇に近づいて來たことが知られるのである。しかも、その頃の著名な猿樂師には、百太・仁南・定緣・形能、又は縣井戸先生、世尊寺之堂達・坂上菊丸・還橋徳高・大原菊武・小野福丸などがあつて、その科白や所作がかなり嚴密に批評せられてゐたのである。

呪師

呪師は、もと呪禁師から出で、從つて最初から佛寺に附屬してゐたもののやうで、これが奇術を餘業としたことは、夙く平安朝時代から記録に見えてゐるが、佛寺が民間演藝を要求する度の深くなるにつれて、終に猿樂を本業とするに至つたのであらう。その演態については、中右記に、

長治二年（一七六五）正月十二日、入レ夜參二法成寺一、殿下令二參給一、公卿五六輩、丹波呪師飼手甚神妙、已及二丑刻一、

この飼手は劍舞又は劍を玩ぶ曲藝の類であらうが、玉葉に、

承安四年（一八三四）二月七日、甲子午刻參レ院、今日於二北臺一有二呪師十手散樂一、龍王丸依二御定一其者手一

建久二年（一一九一）二月十八日、初夜導師以後、呪師五手了。……龍天毘沙門鬼等如ㇾ例。

建久五年（一一九四）正月十三日……參二法成寺一、呪師十手、……走二大唐文殊手一也。

とある武者手は物眞似に近いもののやうであり、龍天毘沙門鬼事・大唐文殊手はなほ一層劇的な舞踊であつたらしい。そしてこれらの演態の出所を考へると、未だ斷言するだけの證材を見出さないが、恐らくかの伎樂の流を汲んだものでなからうか。伎樂の演舞がそのまゝ或はこれに宗教的色彩を加へて、呪師の藝能に襲用されたものでなからうかと思ふのである。

呪師についてなほ注意すべきことは、これに歌謠を作ひ、舞人とは別な唱人――能樂の地謠に當るものが謠つてゐたことであつて、同じ玉葉に、

建久二年二月二日……此日於二内裏一（南殿也）有二畫呪師事一（法成寺呪師也余召進ㇾ之）……前庭敷二長筵五枚一爲二呪師走場一、副二北屛一（件屛中間有二妻戸一以二件戸一爲二呪師參退之路一也）敷二紫端疊二枚一爲二唱人座一也、未刻事始、亥刻走了、……唱人着二綾褐袍一、或冠甲云々。

同七日……此日於二禁裏一有二畫呪師一……散樂等六人候ㇾ之（俗三人僧三人）、於二唱人一者着二縫物袍甲等一、至二于樂人一者嚴二飾一鳥頓一、依ㇾ爲二狂物一也、是先例云々。

などとあり、從來の曲藝乃至滑稽物眞似より餘程進んだものであつたことと想像せられるのである。そしてこの呪師は前掲記錄によつて察せられるやうに、殊に丹波に榮え、法成寺・法勝寺の御修正に勤めたもののやうで、世阿彌の花傳書神儀篇に、「新座、本座、法成寺」とあり、申樂談儀に「丹波の宿は、龜山の院の御前にて申樂をせし時、長者になさる。新座・本座・法勝寺の三座の長者なり」とあるのは、この末流でなからうかと思ふのである。そして申樂談儀に、

亂舞

彼（鵜飼）の鬼も觀阿彌の大臣の能の後の鬼をうつす也。彼の鬼のむきは、昔のむまの四郎の鬼なり。

とある「むまの四郎」は河内榎並郎も新座の猿樂師であるから、伎樂・呪師とともに鬼の物眞似に長じ、大和申樂も亦これを得意としたことと察せられるのである。

四、猿樂の歌舞的發達

前節に擧げた新猿樂の滑稽物眞似は、劇に近づいたものであるが、要するに後の狂言の原形と見るべきもので、世阿彌の主張してゐるやうな幽玄な物眞似ではなかつた。呪師猿樂は、舞踊に歌謠を伴つてゐたのであるから、一歩樂劇に近づいたものといひ得るが、新興猿樂の主流とはならず、伎樂と同様、その傍流となるに止まつた。滑稽物眞似の猿樂が幽玄な歌舞劇に展開して行く徑路を明らかにする爲には、二度平安貴族の謠ひ物について顧みなければならない。

平安盛期から末期へかけて、貴族に翫ばれた謠ひ物に、朗詠及び今様があつた。そしてこれを雜藝と呼んでゐたが、既に神樂や舞樂の餘興として猿樂が演ぜられた以上、やがてこの雜藝の餘興としても、猿樂の演ぜられるのが自然の成行であらう。この現象の記録に見えたのは、院政時代の初期で、古今著聞集二十に、

寛治五年（一七五一）十月六日、殿上人・所衆・瀧口小舍人、左右にわかちて小鳥合の事ありけり。……左勝ちて、殿上にとまりて、朗詠・今様・猿樂などありけり。

中右記にも、

寛治八年（一七五四）正月二日乙亥、今夜及二深更一、兩貫首以下著二殿上一、有二淵醉事一、朗詠・今様之後、已及二散樂一

とあり、しかもこれが殿上淵酔に行はれたのは注意すべきことで、公事根源に、

五節殿上の試及び殿上淵酔等に猿多多具等を廣げて亂舞す、

とあつて、この雜藝を亂舞と名づけてゐたことが知られ、稍下つた東大寺續要錄、諸會篇華嚴會、文治三年（一一八七）三月十四日の條には、

自西室衆等之中、撰二猿樂堪能之輩一六七人令レ參二尊勝院一

とあつて、猿樂自身をも亂舞といふやうになつたのである。——この名稱は中樂の異名として德川末期まで用ゐられてゐた。——しかし、以上の證材を以ては、院政時代の猿樂は、今樣・朗詠などの雜藝と共に演ぜられたといふことが知られるだけで、猿樂が今樣などと同樣のものであつたとはいへない。殊に中右記に記された猿樂などは依然たる滑稽戲の如くに解されるのである。

ところが、鎌倉時代に入ると、——丁度呪師の劇的舞踊の見えたと同じ頃——猿樂の歌舞として演ぜられた證跡が見えて來る。そして、これがやはり、貴族的遊戲を離れた民間藝術として表れてくるのである。即ち明月記正治二年（一八六〇）十二月二十二日の條に、

奈良猿樂法師原參二御前一雜遊、

とある「雜遊」は、謠ひ物の「雜藝」と同樣の意味に解せられ、同書建仁三年（一八六三）二月二十三日の條に、

次召二頭辨一爲二講師一讀二上和歌一、文讀上不レ及二雜陳一只如二猿樂一

この「只如猿樂」とは、和歌の讀上が滑稽であつたといふのではなく、猿樂の謠に類した不出來なものであ

大人猿樂師

つたといふ意味らしく思はれ、前掲東大寺續要錄建暦二年三月十四日の翌十五日の條に、

自二講寺一出二猿樂許一、舞曲之兒猿樂四人、每度入レ興二

とあるを見れば、これに「舞曲之大人猿樂」もあつた事と想像せられ、かくて、鎌倉初期には猿樂に歌舞的演伎のあつたことが推測せられるのである。

しかし、この前後の記錄を見ると、優美な歌舞を演ずるのは、大抵稚兒や舞女であつて、大人猿樂師や狂僧や官人は依然として滑稽な猿樂を演じてゐた。

建久五年（一八五四）閏八月二日…其後於二精中一興宴、遊女棹二一葉一參、猿樂小法師中太丸施レ藝、上下解レ頤云々（吾妻鏡）

正治元年（一八五九）八月六日……入二夜景一、講定了、其後聽聞衆分二兩方一、始二延年會一、兒共者盡二歌舞之曲一、大衆者催二散樂之興一（東大寺續要錄）

仁治二年（一九〇二）十月二十八日……自二延年者方一出二若干兒一令レ舞畢、……狂僧乘レ興翹二手七旬一、忘二其之眞情一（同上）

寬元元年（一九〇三）九月五日……臨二薄暮一、舞女兩三輩參入、翻二廻雪之袖一、人々及二猿樂一（吾妻鏡）

寬元二年（一九〇四）六月十一日……舞女（號光今出河殿局白拍子年二十二）施二妙曲一、大藏少輔朝廣・能登前司光村・和泉前司行方・佐渡左衛門尉基隆等答辯猿樂云々（同上）

建長二年（一九一〇）六月十五日……有二酒宴御連歌一、白拍子參上施レ藝、和泉前司行方以下及二猿樂一云々（同上）

文永二年（一九二五）十二月……當院以後有二延年一、別當坊兒一人出仕、毘沙門殿、千花殿、開口並猿樂等法師、先達中賢淸定春等答辯在レ之、其後加賀法橋讃岐得業等南寺狂僧面々出了、毘沙門殿第二番令レ舞、萬人催レ感一、……令二

開口猿楽

從ノ目叉吧ニ耳嘩（東大寺雜集錄）

これらの記録を通覧すると、その猿楽はいづれも滑稽なもので、稚兒や遊女の優美な歌舞を引立てる役まはりに過ぎなかつたやうであるが、なほこゝに猿楽の種類として、開口・答辯などの名目の出てゐることに注意しなければならない。

この開口猿楽・答辯猿楽の詞章を記したもので、且稚兒舞との關係を明らかにしたものに、やゝ後の康正年間興福寺三所權現遷宮の時の「延年舞式」（中古雜唱集所收）が残つてゐる。その時の開口は「春之事」として、

揚柳風和ニシテ梅花匂ヒ鮮カナリ、松門影寒シテ斜日纔ニ耀シ、シカ〳〵ニ云々、鸚鵡ハ三雅ノ杯ヲ讀ナ、一滴ノ抃舞ニタト、餘寒猶アリトテ御銚子ハイマタ汁州ニテ、サテハ平調ノ楽ニテ候、大食調カ傾杯楽ニテ候、シカ〳〵、萬ノ鳴物聲物カ集テ、當世ノ風俗ナレハトテ、連讚ヲ仕テミン、ス、カケウト申ス、其コソ尤興有見物ナレ、サテ執筆ハト申セバ、時雨ノ客カキクセリタト、サテ發句ハト申セハ云々

駄洒落を列べたてる前口上であつて、その次には、「亂拍子ノ聲」として、

長生殿ノ裏ニハ千年春秋ヲトヽメリ
　不老門ノ前ニハ年ハ行ケレトモ老セス
萬歳年經龜山ノ下ニハ泉ノフセケレバ
　コケムス巖ニ松ヲヒテ梢ニ鶴コソ遊ノナレ
諸法實相ト現スレハ峯ノ嵐モ法ノ聲
［萬法一如トミル時ハ谷ノ巖モ花ノ色

答辯猿樂

花ノ色ニ春開ハ岸ノ青柳窓ノ梅
　櫻山吹岩ツヽジ夏ニカヽレル藤ノ花

を謠つてゐる。答辯（當辨とも書く）は、開口よりはやゝ劇的で、

一人云松トモカ、圍碁ヲ打タト、サテ箱崎ノ松ハ、根ハハタリ手ヲ打テ候
一人云何ハタリト手ヲ打テ候、サテ勝ハト申セバ、岩代ノ松ト申候、何ニ岩代ノ松ハ勝ト申候、サテ春日山ノ松ハ圍
碁ヨウ打トテ、生ノ松原シテ候
メシニ引ケハ、物ノ數ナラズ、雲ノ上ニサク菊ハ、空ナル星ナレヤ〳〵

といふ滑稽掛合噺で、その次に「越天樂歌物」として、

梅カエニコソ、鶯ハスヲクヘニ反
カセフカハ、イカヽセン、花ニヤトル鶯ニ反
ヤラ〳〵ヨシナノ、袖ノウツリカヤニ反

といふのを謠つてゐる。この開口や答辯が大人猿樂師の役割であり、亂拍子一聲や越天樂諸物などが稚兒のなすべき役割であつたのである。

優美な歌舞は、主として舞女や稚兒が演じたのであるが、大人も全くこれを棄てゝゐたのでないことは前述の通りで、明月記寛喜二年（一八九〇）二月十六日の條の、

靜俊書状云、一昨日十四日若宮別當法印教賢於二十禪師寶前一修二八講一、童四人舞二人伶人二人、付左人猿樂四人舞人、四人之内僧[illegible]息子春儺、已上南京、其外樂人濟々、遊宴舞猿樂、山門又饗應入レ興云々。

翁舞

は猿形大人猿樂師が歌舞の猿樂を演じた證跡であらう。

しかし、優美な歌舞は、稚兒や舞女が演ずれば、彼等のほんとの技藝の外に、彼等の持つてゐる肉體の美しさをも併せ賞讃されるが、大人の歌舞にはこの肉體的興味を作ることが出來ない。從つて單純な歌舞を以ては、稚兒や舞女と競爭することが出來ない。これが、猿樂が歌舞的發達をなした後まで、なほ依然として滑稽な猿樂を演じてゐたわけであらうが、稚兒同様の歌舞を演じて、觀衆をひきつけ得る方法は、一歩進んで、全く人間離れのした翁姿となつて、艶美な問題外に於て演ずることである。かくして數多くの翁舞の作られたことが推測されるのである。しかしいづれ類型的なものが多かつたであらうから、一日にさほど數多く演じては、觀衆に飽きられる。その結果凡そ三番位に要約したのでなからうか。世阿彌が花傳書に、

其後六十六番までは、一日に勤め難しとて、その中を選んで、稻積の翁「翁面」、代經翁「三番申樂」、父助、これ三を定む。今の代の式三番是なり。

といつてゐるのは、この間の消息を語つてゐるものかと思はれるのである。この「式三番」即ち「翁」の成立事情については、「翁」の曲の解説に述べることとして、兎に角、現行能樂の最古曲である「翁」は、滑稽猿樂が歌舞として發達した時の遺跡であらうと思ふのである。

五、猿樂の戲曲的展開

前に「翁舞」の成立について考へたところは、大人猿樂師が歌舞の埒内に入らうとして失敗し、演奏曲數を局限せられる結果となつたのであるが、このやうな次第では、大人猿樂の發展を望むことが出來ない。そこ

で、再びもとの滑稽猿樂たる開口や答辯にたち返り、その滑稽味を保存して、これを喜劇的に進展して行くか、或は進んで歌謠の分量を豐富にし、これに戲曲的體裁を與へて、樂劇にまで發展させて行くか、いづれかの方法を考へなければならない。現在行はれてゐる「狂言」は前者の工夫から出たものであり、「能樂」は後者の工夫から展開して來たものなのである。



延年舞 （知恩院藏・圓光大師繪傳）

狂言の發展して來た徑路は、前掲の「新猿樂記」や「延年舞式」の開口・答辯から容易に推測され得るが、一度歌舞的發達に失敗した猿樂が、二度その勢ひを盛り返して、新しい天地を開拓して樂劇に到達する順路については、相當の資料を集めて、その跡を探究しなければならない。そして我々は後の中樂四座に最も緣故の深い興福寺の延年舞から、有力な資料を集め得るのである。

前に擧げた「延年舞式」に連事といふものがある。その詞の舞式に掲げられてゐるものを擧げると、

如意寶珠連事

夫雙林風和ニシテ松葉ノ色ヲ增シ、定水波靜ニシテ蓮葉ノ陰ヲ浮ヘ、佛法繁昌ノ勝地ナレハ、慈尊ノ法燈ヲ吾寺ニカカヤカシ、法相擁護ノ靈場ナレハ、和光利物ノ惠澤カフス、貴國[illegible]ノ砌トコソ存候ヘ、面々如何思召候ヤラム、

一人 如ㇾ仰只今ノ御寶ヲ拜見仕候ニ、誠ニ上古ニモ無ㇾ有難候、就其面々何物ノカ御覧可ㇾ有候ヤラン、一人 誠ニ眞珠玉ノ
珍寶ハサルコトニテ候ヘトモ如意寶珠ニスキタル寶ハアルマジイテ候、如何シテ如意寶珠ヲ成得可ㇾ仕候ヤラン、一人
如ㇾ仰如意寶珠ト申ハ心ノコトク所願成就ノ玉ニテ候間、何物カ可ㇾ如ㇾ候、面々心ノ一ニシテ寶珠ノ德ㇾ有様ノ日ヽ
サマレ候ヘ、定而出現アラウスルニテ候

白拍子

凡如意寶珠ト申ハ、所願圓滿ノ名珠也、サレハ五障ノ龍女ハ玉ノ捧テ成道シ、漢家ニ名ヲ得シ卞和ハ、玉ノ磨テ德ノ
タツ、是等ノ聞ニツケテモ、玉ニスキタル物ソナキ、
一人 喜見城ノ内ニハ金剛藏ニ納ツヽ、龍宮城ノ内ニハ淨瑠璃壇ニアカムトカヤ、目出度カリケル寶珠ノ德カナヤレ
〳〵、
一人詞 珠勝ニコソ存候ヘ、尙モ一拍子ヲ以テ口スサレ候ヘ、
一人下歌 捧クル所ハ寶珠ノハナノサ、
同音 薫スル所ハ至心ノ香、沈水包ノマシヱタリ、椿葉八千代ノ友モアリ、一人上 千代マテモ〳〵、子ノ日ノ小松ノ手
ニトリモチテ、五絃ノ曲ノソウスルハ、松風ヨルノ調トカヤ、聖代明時ニアヰスレハ、ホウヱノ雲モカヽミケレ、ノ
サマレリケル今ノ御代カナヤレ〳〵、
一人詞 掛ル砌ニハ管絃ニスキタルコトアルマシヰテ候、中ニモ琵琶尤勝レテ候間、絲綸ト云據ノ謂被ㇾ出、琴琵琶ノ
緒ノヨリカケラレ候ヘカシト存候、
一人 然者ヲヨツテ御覧シ候ヘ、
一人上 玉簾珠簾等ノコト琵琶方響ニ琴ノ華玉、

同音 薬玉念珠ニ至ルマテ、絲ナクシテハ如何セン、一人 弘徽殿ノ細殿ニタ、スムハタレ〳〵

同音 ユヤキアンノホソトノニタ、スムハタレノ〳〵、朧月夜ノ内侍ノカミ光源氏ノ大將ヤサ〳〵ヨシナノ袖ノウツリカヤニ返。

答辯式の雜藝と結んで、いつか眞面目な戲曲に展開して來た樣がよく知られるのである。尤もこの連事が記錄に見えたのは、前に述べた戲曲的進化の順路から推察されるとほり、開口や答辯の所見よりは遙かに後れてゐて、法隆寺寺門舊記暦應三年（一三四〇）八月十二日の條に、

於二東寺院一延年在之、開口也、 開口發句、末ノ延年秀句也、龍田川ノミナ上ヲ尋タル連詞也 連事ハ口論、風流ハ寛喜山ノ嶺ノ八仙ニアウタル事、マテ〳〵カタツツフリト云フ事、

とあるのが古い。しかしこのやうな詞の實際に行はれたのは、この記錄よりは相當古い時代からであらうし、殊に高野辰之博士の日本歌謠史に擧げて居られる天文年間住吉の風流か、この時代の風流を傳へたものとすれば、連事よりもなほ一層今の能樂に近い形にまで發達してゐたのであつた。こゝに同書に掲載せられた「小風流」（天文十三年十月、念佛興行時寶華寺寶）の「鞍馬師詣ニ清涼山一事」を見ると、

是者奧州平泉寺住僧也。若衆ニ薬師ヲ致稽古一候カ音律音樂未分明一候間十方檀上御修ナレト、同宿相具シ、ハヤト思立候程ニ江州トヤランニ到候。

一人云 愚僧者叡山ニ別所寄住寺ニ居住候カ以ニ參社ノ次ヲ大津邊徘徊シ候ニ、御邊ハ如何ナル者ニテ候ゾ。

一人云 少僧者遠キ奧方ヨリ藤岡稽古ノ望ニテ都近キ大原トヤランニ志シ候、宜ク御指南ニ預リ候ハバハヤ。

一人云 是ハ某有御修也。彼大原魚山者從ニ古藤岡ノ本寺トシテ代々時衆ノ衆徒今ニ不ニ絶候、音川ノ事マテモ目撃者

ノ響アリト申候。

一人云サテ引聲短聲ノ曲調ハ我朝ニハ誰人ノ傳來候ゾヤ。

一人云吾我山慈覺大師震旦ニ渡リ清涼山ニシテ法道和尚ニ傳受シ坐シ御歸朝ノ時音曲ノ念佛ヲ船中ニテ西ニ向ヒ唱ヘ給ヘバ、自身ノ御聲ヲ大鳥ニ成就知是ヤト示シ給ヘトコソ承リ候ヘ。

一人云是ハ誠ニ殊勝ナル御事哉。アハレ彼清涼山ニ到リ拜シ靈幅ニ傳ヘ音韻ヲ候ハヾヤ。

一人云思ヒモ寄ヌ事ノ仰候者哉、異域遙ノ境凡人トシテ容易ニ及シ、乍レ去我照法印モ彼山ニ詣シ樣々ノ奇特ヲミ候ト承候。御志ニテ候ハヾ急思立候ヘ。愚僧モ同心申候ハン。

一人云徒ヲ假初ノ參詣顯ル宿業ト覺候。サソハヾ一葉ノ舟ニ同乘シ震旦ニ趣キ候ハヾヤ。

一人云萬里ノ回海ヲ凌キ候程ニ漸清涼山ノ麓ト覺候。彼山ハ大聖文殊ノ淨土ト申候。寶殊ノ明樹甘露候ヘ。

一人云セ可拜候。

シテヲ 同音 南無ヤ文殊左聖尊我等ヲ憐ミ玉ハシマシ所願ヲ叶ヘテタマヒ候ヘ。

山ニテ笙笛音取アルベシ

重テヲナ 笙歌遙聞孤雲ノ上、是ハ聖衆ノ來迎カ□マノアタリナル奇特哉。

文殊童子 出テ二人ニ可ノ出

鷲士云是ハ大聖文殊ニテ坐ス、汝等志切ナルニ依テ靡明ノ妙曲ノ般若ノ梵管ニ藏メ忽ニ授ル處也。

一人云所願既ニ滿足シ剩ヘ大聖ノ御姿ヲ拜シ奉ル事偏ヘ我等ノ佛法繁昌シ法會可キ顯ハル靈瑞トコソ存候ヘ。

一人云誠ニ不レ斷感懷ニ候、同者此次ニ極樂歌舞ノ曲ヲ奏シテミセ坐シ候ヘ。

鷲士云大安事也サラバ舞伎ヲナシテミスベキ也。

一人云難有候。打候へ。

これが一歩進めば、能樂となるのである。

職業猿樂師

猿樂座

六、猿樂座と田樂

このやうに發達して來た猿樂を演ずる者には、素人の侍もあれば、遊僧もあつたが、特にこれを職業としてゐるものも少くなかつた。古く新猿樂記に見えてゐる百丈・仁南・定縁などがそれであり、明月記に「奈良猿樂法師」とあり、吾妻鏡に「下衆猿樂」とあるのがそれである。

この傾向は、鎌倉時代、高級な貴族的文藝が衰へて、卑近な民衆的演藝の歡迎せられる時代的風尚に應じて、愈々盛になり、各地に職業猿樂師の團體が出來て、多くはその地方々々の大きな社寺に附屬して、猿樂座を稱へてゐた。かうして、北條氏の末期、吉野朝廷時代に、猿樂を職業としてゐた主な座には、次のやうなものがあつた。

一　丹波猿樂

本座(矢田)　新座(榎並)　法成寺(宿)

二　大和猿樂

圓滿井(金春)　結崎(觀世)　外山(寶生)　坂戸(金剛)

三　近江猿樂

上三座　山階　下阪　比叡

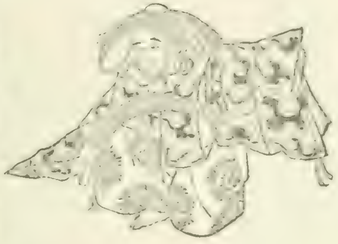
田樂

下三座 宮講 大森 坂本

四 伊勢猿樂

伊勢 主司

これらの中、一は攝津・河内等にも散在してゐたのであるが、假に丹波の名に包含せしめたのは、法勝寺の御修正及び賀茂・住吉の御神事に勤め、二は春日神社に、三は日吉神社に、四は伊勢大神宮に奉仕してゐたのである（花傳書及申樂談儀に據る）。



田樂 （七十一番職人歌合）

その中でも、最も古く榮えたのは丹波猿樂で、これは前に述べたやうに、猿樂の未だ劇的に純化せられない鎌倉初期に最も勢力を持つてゐた呪師猿樂の系統を引いたもののやうで、本座・新座を稱へて、猿樂諸座の牛耳をとつてゐたのである（今の梅若はこの系統の矢田から出たものである）。しかし、北條末期に最も勢力を振つてゐたのは、廣義猿樂の一ではあるが、その原流を異にし、從つて純猿樂とは別派をなしてゐた田樂であつた。

田樂は榮華物語御裳着の卷、上東門院の前で農夫が田植をする條に、

田樂といひて、怪しきやうなる鼓、腰にゆひつけて、笛吹きて、佐々良といふものつき、樣々の舞して、怪しの男ども、歌うたひ、心地よげにほこりて……ののしり遊びたる樣とも、いみじうをかし。

とあり、もと農民の歌舞として發達して來たもので、猿樂とは系統を異にしたものであつたが、大江匡房の洛陽田樂記に、

永長元年（一〇九六）之夏、洛陽大有二田楽事一、不レ知二其所一レ起、初自二閭里一及二於公卿一、高足・一足・腰鼓・振鼓・銅拍子・編木・殖女・舂女之類、日夜無レ絶、喧嘩之甚、能驚二人耳一

とあつて、色々の雜伎を演ずるやうになり、新猿樂記には猿樂の一種として數へられてゐるものであるが、

これが北條末期、高時に深く喜ばれて、太平記卷五に、

又其比洛中に田楽を弄ぶ事昌にして、貴賤擧つて是に著せり。相模入道此事を聞及び、新座・本座の田楽を呼下して、日夜朝暮に弄ぶ事他事なし。入興の餘りに、宗徒の大名達に田楽法師を一人づつ預けて、裝束を飾らせける間、是は誰がし殿の田楽、彼は何がし殿の田楽なんど云ひて、金銀珠玉を逞くし、綾羅錦繍を飾れり。宴に臨んで一曲を奏すれば、相模入道を始めとして、一族大名我劣らじと、直垂大口を解いで抛げ出す。是を集めて積むに、宛も山の如し。

高時の亡びた後も、足利尊氏のこれを好むことは高時と同樣で、太平記卷二十七に

今年多くの不思議打續く中に、洛陽に田楽を弄ぶ事、法に過ぎたり。大樹（尊氏）是を興ぜらるる事又類なし。されば萬人手足を空にして、朝夕是が爲に緩費す。……同年（貞和五年）六月十一日、抖擻の沙門ありけるが、四橋を渡さんとて、新座本座の田楽を合せ、老若に分ちて、能くらべをぞせさせける。……既に時刻になりしかば、輕軒香車地を爭ひ、輕裘肥馬轡に所なし。幔幕風に飛揚して、薫香天に散滿す。新本の老若、東西に幄を打つて、南方に橋懸を懸けたり。……一の簓は本座の阿古、亂拍子は新座の彦夜叉、刀玉は道一、各神變の堪能なれば、見物耳目を驚かす。かくて立合終りしかば、日吉山王の示現、利生のあらたなる猿樂を、肝に染みてぞ出しける。

田楽の盛んなことは、凡そ右のやうな有樣で、「かゝる處に、新座の樂屋より、八九歳の小童に、猿の面をきせ、御幣を差上げて、赤地の金襴の打懸に、虎の貫を蹴み開き、小拍子に懸けて、紅緑のそり橋を、斜に踏

猿樂との關係

んで出でたまひけるが、高欄に飛上り、左へ廻り右へ廻り、跳ね返つては上る」と、見物人はその面白さに夢中になつて騒いだ爲に、さしも物の五六にて打附けたる棧敷傾き立つて、あれや／＼といふ程こそあれ、上下二百四十九間、共に將棊倒しをするが如く、一度にどうと倒れ」たと記してゐるのである。

この時代の田樂は、品玉（しなだま）、刀玉など、廣義猿樂の種類として數へられてゐた曲藝・雜伎をその本藝としてゐたが、その間に、戲曲的な「田樂の能」、「日吉山王の示現、利生あらたなる猿樂」のやうな能藝を演じたのであつた。尤もこの種の能藝については、申樂談儀にこの時の田樂に「熊野の立合」のあつたこと、應安七年南都裝束賜の能に、増阿彌が「炭燒の能」を演じたことを記し、今川了俊の落書露顯に、文和中武岡部の田樂に「四條の鬼」といふ能のあつた事が見えてゐる外、委しくは分らないが、戲曲的に發達して來た猿樂の能と殆ど區別のなかつたものであるらしい。勿論嚴密にいへば、申樂談儀に、

田樂の風體、働きは働き、音曲は音曲とするなり。鼓打ちて、かく／＼と謡ふなり。いりまはりでは、鼓をもつていく／＼」と打ちて、とうはうかへりなどにて、ちやく／＼としてさと入るなり。

といつてゐるやうに、大和猿樂などとは違つた藝風があつたが、世阿彌の花傳書に、

近代に、この道の聖ときこえし本座の一忠、殊に／＼物數をつくしける中にも、鬼神の物眞似、怒れるよそほひ、漏れたる風體なかりけるとこそ承りしなり。然れば、亡父は常々一忠が事を我風體の師なりと、まさしく申しき。

とあり、この一忠は、申樂談儀に「河原の勸進棧敷崩れの時、本座の一忠、新座の花夜叉かれこれ四人づつ八人にて、態の立合せしに」といつてゐる、かの貞和五年の勸進田樂に參與した名手であるから、この記事によつても、田樂と猿樂と相似たもので、その田樂が能樂大成の先驅となつたことが知られるのである。

近江猿樂と大和猿樂

七、大和申樂四座

吉野朝廷時代に榮えた田樂の名手一忠に學んで、猿樂の新しい興隆を計つたのは、近江猿樂の犬王と大和猿樂の觀阿彌とで、世子六十以後申樂談儀に、

一忠、淸次法名觀阿、犬王法名道阿、龜阿(田樂)、是當道の先祖といふべし。彼一忠をば、觀阿はわが風體の師なりと申されけるなり。道阿又一忠が弟子なり。

といひ、能作書にも、

古風には田樂の一忠、中比當道の先士觀世、日吉の犬王、是はみな舞曲幽玄を本風として、三體相應の達人也

といつてゐる。かくの如くして、室町初期には、大和猿樂と近江猿樂とが榮えたのであるが、この兩派の藝風について、花傳書に、

凡そこの道、和州江州に於て、風體かはれり。江州には、幽玄の堺をとり立てて、物眞似を次にして風情をもとす。和州には、先づ物眞似を取立てて、物數を盡して、しかも幽玄の風體ならんとなり。

といつてゐるやうに、近江猿樂は歌舞を主にして、優雅な趣を出さうとしたのに反して、大和猿樂は物眞似卽ち劇的展開を計つて、その間に優雅な趣を表さうとしたのであつた。兩者の目ざす所にこのやうな差異があるが、一は古風の歌舞を洗煉しようとし、他は新しい擴張を企ててゐる。古に止まるものは停滯し、新しく進むものは、道の開けて行くのが當然で、犬王歿後の近江猿樂は頓に衰へて、大和猿樂がひとり榮えることとなつたのである。

中興開祖

金春

觀世・寶生

ここで、大和猿樂四座の來歷について見ると、申樂談儀に、

大和申樂に河勝より直に傳はる、近江は紀の守とてありし人の末なり。さて紀氏なり。時代よく〳〵尋ぬべし。大和、竹田の座と出あいの座、寶生の座と打入の座なり。竹田は昔本の河勝より直に傳はる也。てあいの座は先は山田申樂なり。伊賀の國服部杉の木といふ人の息子、大田の中と申す人、養子にしてありしが、京にて女性に子を儲く。その子を山田小美濃大夫といふ人養子にしてありしが、三人の子を儲く。寶生大夫・生一・觀世、三人この人の流なり。其の山田の大夫は早世せられしなり。金剛は松・竹とて、二人鎌倉より上りし者なり。名字なし。な[illegible]にて記し置くべし。

と、これによれば竹田座金春は大和猿樂の本流であつて、この事は花傳書神儀篇にも、

秦氏安より光太郎金春まで、廿九代の遠孫なり。これ大和國圓滿井の座なり。同じく氏安より相傳たる聖德太子の御作の鬼面、春日の御神影、佛舍利、是三、この家に傳る所也。

とあり、世阿彌の說に從へば、聖德太子の時大臣に在つた秦河勝を猿樂の遠祖とし、村上天皇の時散樂對策を奉つた秦氏安を中興の宗とし、金春をその直系の遠孫と認めてゐるのであるが、これは必ずしも妥當の說ではない。金春の座名竹田は大和國法隆寺附近の地名から出たもので、この邊の土地と聖德太子時代の樂舞と關係のあつたことは、第一節の伎樂に就て述べた通りであるから、その伎樂人の後として、聖德太子以後の直系であると稱へてゐたことも肯かれるのである。

これに反して、他の三座は田舍から奈良に上つて來たもので、觀世・寶生の出たでゝあいは一におあい（阿拜）とあり、即ち伊賀國綾郡の地名を座名としたもので、野々村氏が說いて居られるやうに、もとは伊賀一

金剛

宮の敢神社に奉仕してゐたものであらう（野々村氏「能樂略史」參照）。

金剛も、嘉元記貞和四年（一三〇八）八月七日の條に、

於二西室前一鎌倉猿樂云々、ハヤワサ太刀刀之上ヲフムクセ事スル物遊了。

とあるやうなものから出たのであらう。

かくして猿樂の系統からいへば、丹波猿樂が最も古く、大和申樂では金春座が最も正しいやうであるが、眞の藝術の大成には天才の出現を俟たなければならない。そして、天才の出現には家柄の高下を擇ばないが、また全くその環境を離れ去ることも出來ないもので、漸を追うて發達して來た猿樂は、家柄としては稍低い結崎座の觀世父子によつて大成せられることとなつたのである。

鎌倉時代の狀勢

第二章　能樂の大成

一、時代の風尚

能樂の大成者世阿彌が、花傳書に「抑も藝能とは、諸人の心を和らげて、上下の感をなさん事、壽福增長の基、遐齡延年の法なるべし」といひ、「この藝とは、衆人愛敬をもて、一座建立の壽福とせり」といつてゐるやうに、舞臺藝術は多勢の同好者を得て、初めて發達するものであつて、一二少數の同情者を持つてゐるだけでは繁榮するものでない。他の藝術のどれよりもその時代の風尚に適はなければならない。

それで、能樂の大成について述べるに當つて、まづその大成した室町時代の一般風尚について概觀すれば、これに先だつ鎌倉時代は、これまで地下の者として自他ともに輕侮してゐた武士が、政治の中心勢力に立ち、文化の處女地鎌倉に幕府を置いて、天下に號令した時代であるが、彼等は武力を以て天下を掌握したのであつて、從來何等の文化的教養を持つてゐなかつた。兵馬狩獵を事とし、戸外的集團的運動を好むのは、彼等の習性であつて、社會の上層に立つた後も、互に相警め相勵んで、これを續けて行つたが、靜坐讀書して藝術を味ふといふやうなことは、彼等の忌避する所であつた。しかし、これらの人々も、永らく社會の優越した地位を占めて、天下の泰平に狎れゝば、次第に生活に餘裕を生じ、藝術的鑑賞を望むやうになるのが自然の勢ひであるが、しかし又、平安朝の貴族的文藝のやうな、高い教養を積んだ後漸く解し得る、し

かも室內で靜かに味はなければならないものは、彼等の從來の嗜好からいつても、現在の敎養から見ても、不適當な不向なものであつた。そこで、多勢の者が、たとへ無學文盲の者でも、俱に樂しみ得る藝術の、謠ひ物の「宴曲」や、語り物の「平家物語」などが生まれて來たのであるが、更に眼に見て樂しむことの出來る歌舞に一層の興味を持つやうになつた。「白拍子」「一聲」などの雜藝や、「田樂」「猿樂」などの演藝は、かくして進展して來たのであつた。

室町時代

これが、室町時代に入ると、最初足利尊氏が京都の室町に幕府を置いた動機に、北條末期から急に武士的勢力を擡げて來た公家貴族を監視し威壓することにあつたにもせよ、人はその當初の目的の如何に拘らず、その環境に支配せられ、所の風習に染まり易いもので、足利一門及びその諸大名は名利を我が手に收めるとともに、公家貴族の優雅に憧れるやうになつた。

着けぬ冠、上の衣、持ちも習はぬ笏持つて、內裏交り珍しや（建武年間記）

京童に笑はれようとも、公家の眞似がしたかつたのである。しかし、彼等は鎌倉武士よりはや、勝れた修養を積んだとはいへ、なほ平安朝貴族ほどの文學的敎養や藝術的素養がない。それで、文學として、和歌に代る連歌を流行させたやうに、舞臺藝術として、舞樂に代る、華麗で典雅で、そして分り易いものを要求するやうになつた。北條末期・吉野朝廷時代に榮えた田樂は、これに近いものであつたが、室町武士としては、それよりもなほ上品な、內容の充實したものを欲するやうになつた。

足利義滿

室町時代の武士は、おしなべて公家貴族を憧憬したが、その最も甚しいのは、三代將軍義滿であつた。義滿は貴族的優雅を好むとともに、またその武士的本性が手傳つて、趣味生活といふよりも寧ろ奢侈な生活を

観阿彌

極めるやうになつた。彼は盛に土木を起して、室町に花御所を建てたり、洛東に相国寺を造つたり、東寺の大講堂や興福寺の金堂を改築したりして、建築に費を尽したことは稀有に属するほどであつた。この義満が應安七年（一三七四）今熊野の猿楽に、初めて猿楽見物をした時、海老名南阿彌陀佛の推薦によつて、觀阿彌を第一番に舞を演ずることとなつた。この時のことを申楽談儀に、

觀阿今熊野の能の時、申楽といふ事をば、將軍家鹿苑院御覧始めらるゝなり。世子十二の年なり。翁をば、昔は宿老次第に舞ひけるを、今熊野の申楽の時、將軍家鹿苑院始めて御成なれば、一番に出づべきものを御尋ねあるべきに、大夫にてなくてはと、南阿彌陀佛一言によりて、清次出仕しせられしより、是を初めとして、仍て大和申楽是を本とす。

といつてゐる。こゝに能楽大成の機縁が結ばれたのである。

二、觀阿彌の集成

觀阿彌清次は、觀世元章の二百十番謡目録には、應永十二年に歿したと記してあるが、常楽記至徳元年（一三八四）五月十九日の條に、「大和猿楽観世大夫於駿河死去」とあるから、その行年五十二才から逆算して、彼の生まれたのは元弘三年（一三三三）で、義満に認められたのは、その四十二歳の時であつた（註二、生年につい[illegible]）。

この觀阿彌は前にいつたやうに田楽師一忠の藝風に私淑した人であるが、その子世阿彌の述べてゐる所によると、

時に應じ所によりて、愚かなる眼にも、實にも思ふ樣に能をせむ事、これ壽福なり。よく〳〵この風俗を極め見るに、貴所・宮寺・田舍、遠國諸社の祭禮に至るまで、おしなべて譏りを得ざらんを、壽福達人の爲手とは申すべき哉。されば、いかなる上手なりとも、衆人愛敬かけたらん所あらんをば、壽福增長のしてとは申し難し。然るに、亡父は如何たる田舍・山里の片邊にても、その心を受けて、所の風義を一大事にかけて、藝をせしなり(花傳書)。

といふ、よく觀客の心を察して、その藝風をこれに適へることの出來る達人であつたから、忽ちにして義滿を感動せしめ、これより以來將軍家特別の保護の下に、その藝を發展させることが出來るやうになつたのである。



曲舞
(七十一番職人歌合)

觀阿彌が猿樂藝を改善した主な點は、田樂の長所を取入れることの外に、現在の謠曲に於て重要な地位を占めてゐる曲舞を取入れたことで、申樂談儀に、

申樂は小歌がかりのみにて、曲舞は格別なり。然れども觀阿、白髭の曲舞を謠ひしより、いづれをも謠ふなり。

といつてゐる。

この曲舞は、滿濟准后日記應永卅四年五月十日の條に、

於二妙法院一久世舞見物、攝津野瀨鄕聲聞云々、兒如法堪能者也、去年於二清水寺六堂一勸進久世舞沙汰ト云々、……兒ハ水干・大口・立烏帽子ニテ舞レ之、男ハ直垂・大口也、如レ此歷々ノ體也。

とあるのが古い記錄で、白拍子舞の流を汲んで、吉野朝廷時代頃に出來たものかと思はれるのであるが、そ

の形について、申樂談儀に、

　曲舞は次第にて舞ひそめて、次第にて止むる也。二段あるべし、後の段はよすべし。

といひ、「東國下り」「西國下り」「白髭」「弱法師」「由良の湊」「百萬」「山姥」の曲名を擧げ、殊に初めの二曲は玉林の作で、南阿彌陀佛又は觀阿彌の節付したものであるといつてゐるが、この二曲は名の通り、宴曲の道行に似たもので、現存のものによると、クセ・クセ上の次にまた、サシ・下諸の長篇があつて、二段になつてゐるが、次第はない。「次第にて舞ひそめて、次第にて止め」たものは、「百萬」「山姥」及び「歌占」（「地獄の曲舞」を曲舞の條に引いてある）「東岸居士」「杜若」などだけで、他はいづれも次第がなく、且二段になつてゐるのは「東國下り」「西國下り」だけで、「百萬」「山姥」なども「後段をよせて」ゐるのである。これを以て見ると、申樂に取入れたのは曲舞の全部ではないらしいが、其歌詞は「白髭」などのやうに語り物風な叙事詩風なものの多い所を見れば、曲舞は宴曲の樣な長篇謠ひ物より一歩進んだ語り物に近いものであつたやうに思はれるのである。

　このやうにして、從來謠ひ物の域を脱しなかつた猿樂に對して、曲舞といふ語り物の要素を加へたことが、觀阿彌の一功蹟であらう。そして、彼は田樂・曲舞を取入れたばかりでなく、雜多の材料を劇化することに妙を得てゐて、「何にてもあれ、音曲としかへられし事、神變也」と、世阿彌が驚歎してゐるのである。

　尤も、世阿彌の遺著に、觀阿彌の作として擧げられてゐるのは、「小町」「自然居士」「四位少將」の三曲と、外に曲舞「西國下り」を節付しただけに過ぎず、今日の謠曲に比ぶれば、遙かに古風なもので、新風の謠曲はその後世阿彌が改作又は創作したものであるが、さもあれ、その藝風は秀れて美しかつたやうで、元來大男であつたが、女能などにはいかにも細々となり、靜の舞の能、嵯峨の大念佛の女物狂の物眞似など、

殊に壯年時代の得意藝で、天下の名聲を博した。老境に入つた後でも、いつまでも若々しくて、自然居士の能に、黒髪をつけて高座に上つた様は、十二三に見えた」（花傳書及申樂談儀）と傳へられてゐるのである。

かうして、觀阿彌は最後まで美しい藝を保ち、至徳元年五月に歿したその月の四日、駿河國淺間權現で法樂能を演じた時も、「その日の申樂殊に花やかにて、見物の上下一同に褒美せ」られたのであつた（花傳書）。

三、世阿彌の大成

義滿の寵幸

將軍義滿が猿樂を特別に保護するやうになつたのは、觀阿彌の秀れた藝が賞美した爲ではあるが、なほ一つの、或は觀阿彌の藝よりもなほ深く義滿の心をひきつけたものは、觀阿彌の子藤若丸、後の世阿彌、當時十二歳の美童であつた。義滿は今熊野の觀能以來、この藤若丸を側近く侍らはせて寵幸したので、諸大名も亦爭つてこれに物を贈り、將軍の御意に叶へようとした。この樣を見て、後押小路内大臣忠嗣が後愚昧記永和四年（二〇三八）六月七日の條に、

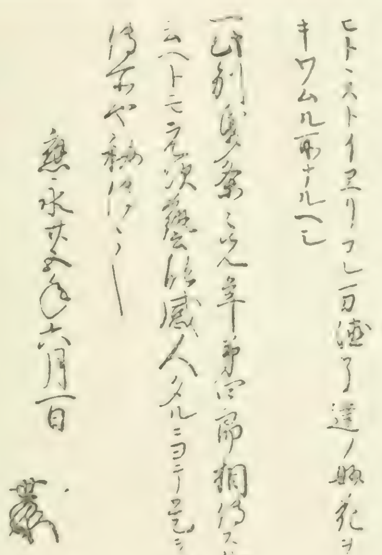
大和猿樂兒童（稱觀世之猿樂法師也）自二去頃一大樹寵二愛之一、同レ席傳レ器、如レ此散樂者、乞食所レ行也、而賞翫近仕之條、世以傾寄之由、出二兩對輩一、與二物於此兒一之人、叶二大樹之所存一、依大名等競而賞二賜之一、費及二巨萬一云々

と憤慨してゐるのを見ても、いかに寵愛の甚しかつたかが窺はれるのである。しかし、この所謂乞食風情の猿樂兒童が將軍家の寵愛を擅うして、しかもその容色に誇らず、この果報に慣れず、ひたすらその家藝に潜心精進したことが、常人の到底企て及ばない、彼の偉大な所であつた。

述作

藤若丸、長じて左衞門大夫元清と名乘つた後は、應永七年（二〇六〇）に花傳書三篇を書いて、第一篇に藝術

敎育の方法を說き、第二篇に能樂藝術修業の心得を述べ、第三篇には能樂藝術の諸問題について論じた。これまでの三篇には、文學論・藝術論などと稱すべき書は、殆ど一つもなかつたのであるが、彼は申樂した見識と緻密な經驗とを以て、こゝに初めて「能樂藝術の理論及び實際」について、詳しい論述を著したのであつた。越えて應永九年には、この續篇として、神儀・奧儀の二篇を著し、申樂の沿革とその本質とを說いた。その所說は着實であり、深遠であり、讀者をして敬服せしめる所が甚だ多い。さて、藝道の着目について、



世阿彌十六部集奥書

上宮太子、末代の爲め、神樂なりしを、神といふ字の片（偏）をのけて、旁を殘し給ふ。これ日よみの申なるが故に申樂と名づく。即ちたのしみを申すによりてなり。又は神樂をわくればなり。

といつたのは、猿を忘れた附會說に過ぎないが、これは猿樂道の向上に焦慮した結果で、藝道に携るものとして無理のない自責として、深く咎めるには當るまい。そして、このやうに道の向上に努めた彼が、應永十五年（一四〇八）三月十五日、義滿の北山の別莊で、わが藝を天覽に供へ奉ることの出來た時は、どのやうな感激に打たれたことであらう。この光景を陪觀した、時の關白經嗣は、「御遊どもありて、申樂をもめさせられて、叡覽あれば、道の者ども、こゝはと己が能のある限りを盡したるも、實に理と覺えて、ことなき見物にぞありける」と、

能作

北山殿行幸記に記してゐるのである。

彼は二十二歳の年、父観阿弥を失つたが、これまで父に教へられて来た能道を基として、田楽の喜阿、近江猿楽の犬王、その外名人南阿弥陀仏・京極道誉などの長所を採つて、独特一派を作り上げたのであつた。田楽の増阿弥が彼を評して、

おもしろさや、和光寺薬師の日の事、既に頭に天の下一なり。たゞ下にいひ表す所に大王、観阿に頼りて は喜阿、かいつくろひ／＼曲舞働きは観阿なり(申楽談儀)。

といつてゐるのを見ても、その位が察せられるであらう。

かくして、彼は應永三十一年(六十歳)に到るまで、[illegible]この期間に、花傳書別紙口傳を初め、五音曲條々・遊樂習道風見・九位・至花道書・曲附書・風曲集・拾玉得花などの、數多くの著書を出してゐるが、特にこゝに注意したいのは、能作書(三道)である。彼は「能の作者別なれば、いかなる上手も心のまゝならず、自作なれば詞も風体も心のまゝなり。[illegible]才あらば、申楽を作らん事易かるべし。これこの道の命なり」といひ、作者と役者とを一體として、この本説のもとに、「八幡」「相生」「養老」など新しい曲を作つたのであるが、その作法を示したのが、この書であつて、今はまづ、

能作書は、先づ種・作・書、三道よりなるといふ。一に能の種を知る事、二に能を作る事、三に能を書く事であり、本説の種をよく／＼案得して、序破急の三體を五段に作りなして、さて詞を集めて、節を付けて、書き連ぬるといひ、更に三種(老体・女体・軍体)の事あり。さて題目の調方、作(…)曲の見所[illegible]

細說し、進んでは老體・女體・軍體など、能柄の差異による作文上の注意にまで說き及び、最後に「此の作書の作能の數々、末代にもさのみ甲乙あらじと覺えたり」と、自賛を洩らしてゐるのであるが、これについて、「名曲の如き名文は能役者風情の作り得るものでない、役者はただ顧問をしただけで、詞章は當時の學者或る僧侶が作り與へたものである」といふ俗說も覆されてしまつたとともに、寧ろ此は世阿彌が餘りに細密な點にまで行屆いた原則を示した爲に、却つて謠曲の自由な發達を妨げ、早くも固型的なものに固定させた結果に陷つたのではなからうかと疑ふのである。

勿論、親切な注意を受けて、その爲に發達を阻害せられたといふのは、これを受け入れる者の天分技倆が小さくて、彼の注意を基として、外に擴大するだけの能力がなかつた爲であつて、世阿彌その人の罪ではない。彼は古體の能を整成し、更に戲曲的に發展させたのであつて、彼は技藝の方面に於て、多くの先輩の長所を集成したと同じやうに、材料の方面に於ても、當時のあらゆる民間藝能の精を集めようと試みたことは、能樂の演舞に羯鼓・八撥・簓などのあることによつても知られるが、彼が殊に眼をつけたのは平家物語であつて、

源平の名將の人體の本說ならば、殊に〳〵平家の物語のまゝに書くべし（能作書）

といつて、語り物であり叙事詩である平家物語の一節をそのまま採り入れようとしたのであつた。これは父觀阿が曲舞を採り入れて、小歌がかりの中に叙事詩的要素を添へたのに對し、更に數段の內容を加へたものであつて、この爲に狂言のやうに對話のみによつて事件を展開して行くといふ戲曲的條件には離れて行つたが、短い一曲に豐かな說話を含ましめ、しかも美文をもつて手際よくこれを纏めることに成功したの

であつた。

このやうにして、世阿彌は技藝に於ても、見識に於ても、聲望に於ても、學才・詩才に於ても、いづれの方面に於ても缺くる所のない天才として、一世を風靡したのであるが、その末路は悲しむべきものであつた。結局英雄とか天才とかいはれる人も、その境遇が幸福である場合にのみ、その力量を發揮し得るのであつて、境遇の變化はこれらの人々をして常人よりも更に深く哀れな末路に導くものである。世阿彌がその天分を思ふままに發揮し得たのは、義滿及び義持將軍の在世當時であつて、正長元年（一四二八）義持が薨じて、翌永享元年義教が將軍になると、彼のこれまでの幸運は一朝にして瓦解してしまつたのである。

この頃、申樂諸座の中で最も勢力のあつたのは、勿論世阿彌の率ゐてゐる觀世座であるが、この觀世座には、本家の世阿彌父子一座の外に、世阿彌の弟四郎大夫の子元重の一座があつた。元重は後に音阿彌と稱して、觀世座の三代目を相續し、天下の聲望を一身に集めたが、藝道の主張については、世阿彌とその間に可なりの距りがあつたらしい。將軍義教は申樂を愛好することに於ては、義滿に劣らなかつたが、役者としては老齡の世阿彌よりも壯年の元重を愛した。兩者の確執は次第に深刻になつて行つた。永享元年三月、世阿彌の嫡子十郎大夫元雅が南都薪能を演じた後、五月三日、世阿彌父子の一座と元重の一座、それに寶生の大夫と十二五郎とがそれぞれ加つて、立合申樂を演じた時は、兩者勝敗の分れ目であつた。その結果は元重の成功に歸したらしい。踰えて十日、世阿彌及び元雅は仙洞御所の御勘氣を蒙り、御出入を差止められた。滿濟准后日記同年五月十三日の條に、

就二仙洞申樂事一、觀世十郎並世阿彌入、不レ可レ被レ召之由、可レ申二仙洞一旨被レ仰間、一往示此次第申入候了

永享四年八月一日、元雅は伊勢國安濃津で死沒し、嫡孫は未だ幼少であつた爲に、觀世座は當然元重音阿彌の手に歸することとなり、翌五年、音阿彌は四月二十一日から三日間、糺河原で勸進猿樂を興行したに至つた。これに反して世阿彌は、嫡子を喪つた悲しみの日を送めて、永享六年五月四日、七十二歳の老齢を以て佐渡の島に配流せられることとなつたのである（金島書）。その後の消息は詳かにし難いが、やがて赦免せられて、晩年を女婿金春禪竹の許で送り、八十一歳又は八十三歳で嘉吉三年（二一〇三）又は文安二年に寂寞たる最期を遂げたのである。

元雅と禪竹

四、音阿彌の守成

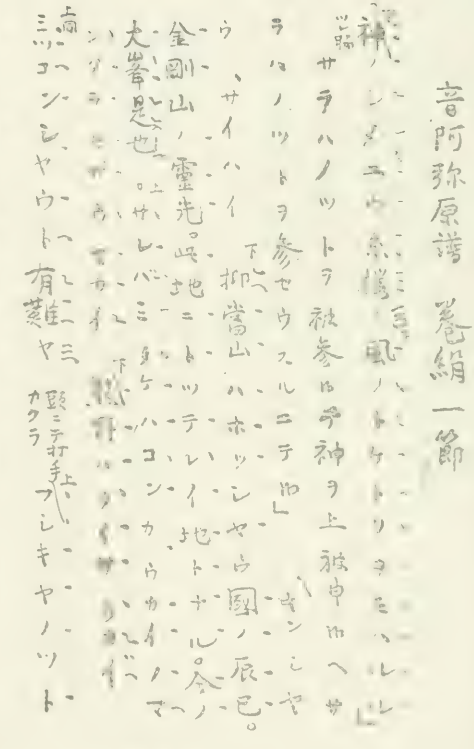
世阿彌が最も囑目してゐた十郎元雅には、父から「道の奥儀殘りなく相傳」したが、五十にも滿たないで早世してしまつた。女婿の金春禪竹に、五音次第・歌舞髓腦記・六輪一露・五音三曲集・至道要抄・明宿文正廻仁記・四座役者目録などの著書が遺り、能作も、能本作者註文によれば、「定家」以下十八番を傳へた、相當學識文才のある人であつたらしいが、一座の勢力は觀世に及ばなかつた。

音阿彌

この間にあつて、嶄然頭角を現したのが、觀世の一族である三郎大夫元重音阿彌であつた。彼には一冊の著述も一曲の能作も傳はつてゐない。尤も寛永三年刊行の「聲曲口傳」には音阿彌に聲曲記といふ著書があるやうに記して居り、野々村氏の採集せられた近衞家記の樂曲年表にも、嘉吉三年に聲曲記一卷を著したと記してゐるが、今は傳つてゐない。傳つてゐないばかりでなく、果してさういふ著書があつたか疑はしいのである。能作の方も、能本作者註文に「住吉」一曲を音阿彌の作として舉げてゐるが、これも吉田東伍博士

校訂の禪竹集に「觀世元雅は音阿彌元重にはあらず」と註してゐるやうに、曲舞の「觀世三郎」の事ではなく、ずつと後の方にあるのであつて、元重とは別人かと思はれるのである。

このやうに、音阿彌は世阿彌を父とする甥に當る者であつたが、音阿彌の方が文才で世阿彌にとつて代つて、嫡養の權力を專らにしたといふ說もある。後者に於ては、其頃の相當尊重された人であつたに違ひない。



音阿彌原譜（禪竹集に據る）

世阿彌と音阿彌とが競爭した頃は、音阿彌はまだ若輩、これは二十歳を越えたほどでの男盛りであつたから、如何なる天才を以てしても、この年齢の距りを埋めることが出來なかつたのである。その上に世阿彌の三男元雅の懇切な指導を受けた十郎元雅であつた事は勿論。それ故音阿彌にうち勝つことは出來なかつたのである。

元雅が世阿彌の人であり、禪竹も人であつたといはれるに對し、音阿彌は世阿彌に見ぞれた子ともあつたらしいことは、世阿彌流罪の裏面に彼が關係してゐたと想像せられることや、樂頭職になつた永享五年一〇

ると早速、時の細川管領に周旋して、壯大に勸進能を催して手際なところを見せ、時の將軍はひどく感心したのであ

るが、また一面資技に達してゐた人であつたことは、今日傳つてゐる音阿彌宛書の「金剛」の如き書を畫く一面的に

たつてゐるのを見ても、また蔭涼軒日錄に、「殊音阿彌爲之舞、人皆以爲觀也」とか、「音阿彌爲之舞、由因爲

欲觀者、銘銘云市也」とか「音阿妙舞之由有之御感無極也」と書き記してゐるのを見ても、察せられるであら

う。

とにかく、音阿彌は相當勝れた技藝と異常な聲望とを以て、中央を日に月に躍進して行つた。そして、

この音阿彌を引立てた將軍義教は、嘉吉元年（一四四一）六月廿四日、赤松滿祐の邸に招かれて、猿樂觀覽中に

弑せられ（嘉吉の亂）、中央には足利將軍にとつて不吉な先例を作つたのであるが、その後を繼いだ八代將軍義

政は、義滿と相通ずる性向であつたから、この不吉な先例を忘れたかのやうに、益々音阿彌を寵愛して、寛

正五年（一四六四）音阿彌六十七歳の時には、その子又三郎を大夫として、糺河原で盛大な勸進能を催させてゐ

た。今その様を蔭涼軒日錄によつて記すと、

四月五日、今度不參也、河原勸進、申樂觀世、午後渡成、舞者七番、觀者若干人、不可勝計、但日々以爲

曠、酒宴數獻、絕言果今也、河原申樂以後、道賢公細川右京大夫殿可爲出、六十一間桟敷、公家・武家・僧中、

衣裳改觀、昔日無來某觀也、

同八日　崇壽院住庵和尚、於二當軒一始御相伴被レ參也、前日天氣快晴、御快然之由被二仰出一也、大下云云之時、

必有二勸進一、只最上下和睦而相集、尤公方御成勞不レ可レ過レ之、申樂七番過、自後酒宴不レ盡、見物者不知幾

千人、其數不レ可レ量、皆一言之下觀レ之、是又異二其威一也、山名金吾命二手田一某爲奉行、後入觀者、而不二其命一且

前、皆不レ起座一、及二還御一而忽帰去、是威之所レ畏、不レ堪二感歎一也。

同十日、不参、午後河原桟敷御成、先参二于宝篋院御桟敷一拝謁、上様出御車中御見物、公方様御成、御車同御桟敷、入中改観、皆目二希有一、此観絶二古来今一也、能者十番、被レ結二三番一、尽二見物一也。

かくの如くにして、申楽能は観阿弥によつて集成し、世阿弥によつて大成し、音阿弥によつて確立したのである。

手猿楽

申楽能は観世三代によつてこそ成確立したが故に、申楽諸座のうち、この観世座及び同系統の大和申楽宝生・金春・金剛が、四座として特に愛護せられ、その他の諸座は手猿楽（てさるがく）として卑下されるやうになつた。それはともあれ、爾後申楽は連綿として命脈を保ち、室町幕府は滅びても申楽は滅びず、徳川幕府は倒れても、能楽は今日なほ盛大を極めることとなつたのである。

五、その後の申楽

将軍義政以降、音阿弥以後の申楽は、その後愈々内包的に技藝を洗錬して行つたが、外延的には何等の展開を見なかつたといふの外はない。たゞこゝに、そのやうに変化発展しない藝術が、どうして永く保存せられて来たかを一瞥して置きたいと思ふ。

室町末期

北山・東山の両将軍、鹿苑院義満・慈照院義政によつて築かれた室町文化には、建築にも絵画にも茶道にも、将又禅味にも見るべきものが多かつたが、当代の人々多数にとつて最も入り易くして、永く親まれ来たものは、申楽の能であつた。何故なれば、申楽一節の謡曲演舞は酒席の興を助けるに好適であり、数番の演能は一日

豐臣時代

の役者の勢力を一層盛大ならしめたのみでなく、その演奏にも四座特有の風を成さしめ、その時代は殆ど能楽の時代として、益々その品格を高めるの機会をも作ったのである。

かくして、申楽は幕府以下諸大名等の人々に愛好せられて、正月の謡初を始めとし、将軍の年中行事として重要な地位を占めるやうになって来たのである。そして、この時に、義政の時、義尚・義稙・義澄の時代、もはや幕府の衰退と同じい時代となって、従来の慣習も衰へ、これを一種の故実として研究するやうになってゐた。永正六年（一五〇九）九月、伊勢守貞久の著した大内問答には、凡そ二十項に亘って、申楽能に於ける作法を述べ、その他走衆故實・集奈良衆之事などには、更に細かな行儀作法まで研究して居り、これ末期、義輝の天文十五年（一五四六）十二月元服した祝賀にも、観世・金春の両座をして、二日に亘り、十余番を目出度く演ぜしめてゐるのである（光源院殿御元服記）。

足利氏の末、群雄割拠の勢を制して、天下を統一した織田信長は、申楽よりも寧ろ舞曲を好んだが、信長に次で天下の覇を握った豊臣秀吉は、申楽の熱心な支持者で、名護屋の陣中にあった時も、金春大夫を呼んで能を習ひ、それより、文禄二年（一五九三）十月、一度京都に帰った時には、十五日から三日間、禁裏に於いて禁中能を催し、秀吉自身も十番を演じてゐるのである。殊に興味の深いのは、秀吉自身をシテとした能を新作せしめてゐることで、太閤記に、

文禄三年三月十五日、大阪本丸に於て、由己法眼作の新作能吉野詣・明智討・柴田・北条、金春八郎に仰せて節付し、囃子、兼ねて振付けられ、その能を演じさせ給ひ、御作の能には自ら仰出されし

といつて居るのである。

諸本の註釋

秀吉の子秀次も亦申樂を好んで、自ら演奏してゐたが、彼は亦五山の禪僧に命じて、金春流謠本百番の註釋をなさしめた。命によつて、禪僧達が相國寺の塔頭鹿苑院に集まり、互に討究して編纂したのが、謠抄なのである（言經卿記）。

德川時代

江戸時代三百年の泰平を築いた德川家康は、もともと、秀吉にも劣らぬ申樂の好者で、彼の根據地が駿河國にあつた關係から、この地に住んでゐた観世（世阿彌の嫡子十郎大夫の後）を寵遇し、引いて観世大夫を贔屓した。時の大夫黒雪は、修業に秀でた技術と機巧とを持つてゐたので、豐氏時代一度頭を擡げた金春を再び壓して、永く四座の首位につくこととなつた。

喜多流

二代の秀忠も亦自ら演奏した申樂の好者で、この時には喜多七大夫が一流を認められて、四座の次に位することとなつた。この七太夫の素性藝系については、諸説があつて、未だ明らかにし難いが、[illegible]には、

喜多七大夫は[illegible]にあらず、慶長七年、金剛大夫[illegible]（十六代氏正）の弟子にて、その父は[illegible]に住せし扇屋なり。

といひ、喜多流[illegible]には、豐臣秀吉に仕へた[illegible]の子[illegible]女と縁組し、この流の基礎を築いたのであるといひ、[illegible]には、

[illegible]

[illegible]付。

とあつて、いづれにしても、[illegible]

役籍の分立

三代家光も亦父祖に劣らず申楽を愛したので、申楽師の地位も確立し、觀世・寶生・金春・金剛及び喜多の四座一流ともに幕府の抱へとなつて、十分の待遇を與へられてゐる。そして、徳川時代[illegible]分と世襲を重んじた結果、申楽師に於ても、ワキ方左右の囃子方・狂言方の分[illegible]となるに至つたが、織豐時代には既に分立の傾向を示してゐたワキ方も、その家柄が定まつてゐたが、更にはそれらの家柄をも定まつて、それぞれシテ方五座に分屬することとなつた。今、四代家綱の時代、延寶年間の武鑑によつて、その配屬を見ると、

觀世座——觀世大夫
ワキ——進藤、春藤、福王　ツレ——梅若　笛——春日、森田　小鼓——觀世（新九郎、新十郎）、幸
大鼓——葛野　太鼓——觀世（左吉）　狂言——鷺

保生（寶生）大夫座——保生將監
ワキ——春藤　ツレ——生田、服部　笛——中村　小鼓——幸　狂言——矢田、大藏

今春（金春）座——金春大夫
ワキ——春藤　ツレ——春日　笛——佐々井、長命、大藏　小鼓——大藏、幸　大鼓——今春
太鼓——今春　狂言——大藏

金剛大夫座——金剛又兵衛
ワキ——高安　ツレ——長命　笛——貞光、長命　大鼓——高安

北（喜多）七大夫

ツレ――岩崎

これらはいづれもそれ〴〵家元を稱して、その間に多少の消長はあつたが、互に相犯すことはなかつたのである。

五代綱吉の時代は所謂元祿文化の高潮に達した時で、申樂の能もこの勢ひに乘じ、古來の扮裝法、演出法を整美修飾したことと察せられる。この時喜多七太夫は旗本に取立てられ、丹波守直景と云ひ、その他能役者の重用せられたものが夥しく、六代家宣も亦喜多流の門下であつた間部越前守詮房などを重用し、殊に間部は家宣の遺命を受けて、七代家繼の輔佐役となり、一時他に並ぶもののない權勢を振つた。

八代吉宗は專ら綱紀の肅正に努めて、間部の出仕を止め、その外申樂師から取立てられた大多數の者を退けてしまつたが、申樂の能が幕府の式樂であるといふ地位、四座一流の能役者が幕府のお抱へであるといふ特權は確保されてゐた。九代家重を經て、十代家治の頃には、申樂師の間にもこの藝術を學問的に研究するものが出て來た。喜多流の大夫徳忘齋古能が即ちそれで、假面譜その他の著書を遺してゐるが、殊に著しいのは、觀世座の大夫元章が謠本の改正を試みたことで、彼は田安宗武の後援を受けて、賀茂眞淵・加藤枝直に詞章の添削をこひ(加藤枝直[illegible]賀茂眞淵[illegible])、從來の謠曲二百十二番及び獨吟八十五曲に亘つて改修し、且新作「梅」を加へて、明和二年(一七六五)刊行した。所謂「明和改正本」が即ちこれであるが、嚴格なる傳統精神によつて維持せられて來た藝術を俄かに改革しようとするのは、その内容の正否に拘らず成功を覺束なく、この改正本も亦元章一代で廢棄せられ、次の大夫からは古に復することとなつた。

十一代家齊、十二代家慶を經て、十三代家定、十四代家茂の頃の幕府は、内治外交ともに多難を告げたの

であるが、たゞ申楽の勢力に依頼してのみ立つて、徐々にその基盤を一人で背負つて立つた[illegible]熱心な愛護者で、徳川三百年間終始、申楽は幕府の保護を受けて来たのであつた。

江戸以外の地方に於ても、諸藩の侯伯も各々の好みに依つて、全国に配置された大小名いづれも数人の役者を抱へないものはなく、従つて申楽の勢力はわが国土の隅々にまで行き渡つたのであつた。たゞ京都では、禁中・院御所に於ける能の演能もあつたに拘らず、幕府は太夫の京都に入ることを許さなかつたので、御所直属以外の、片山（観世）、川勝（金春）、野村（金剛）、嶋田（喜多）などが別派をなして、御所に奉仕してゐたのであつた。

明治以降

明治維新、徳川幕府の滅亡は、やがてその保護によつて維持せられて来た申楽の瓦解する時で、四座五流の能役者には、旧主を慕つて静岡に赴くものもあり、地方に退転するものもあつたが、とにかく新東京には殆どその影を留めなくなつた。その間にあつて、困苦欠乏と戦ひながら、一歩も東京を退かず、一人の観客もなくとも、たゞ謡ひつゞけ舞ひつゞけてゐたのは、観世座のツレ方梅若實であつた。

ところが、一陽来復、西洋のオペラに相当するものをわが国に求めて、岩倉具視公の着眼せられたのが、わが申楽の能であつて、岩倉公はこれを国劇として大に奨励し、明治九年四月には、明治天皇親しく岩倉邸に行幸遊ばされ、「小鍛冶」[illegible]「橋弁慶」[illegible]「土蜘蛛」[illegible]等を叡覧に供へ奉るの光栄を荷つた。こゝに於て貴顕紳士のこれに親しむ者が次第に多くなり、一度退転した役者も亦東京に立帰つて旧業に復し、華族有志は相謀つて能楽社を組織して、これが奨励に努めた——この時「能楽」の名称の作られたことは、最初に述べて置いた。——

肯定說

爾來、能楽は順調の發展を遂げてゐるのであるが、殊に大正四年冬、大正天皇京都に於て御即位の御大典を擧げさせられ、東京に還幸の後、各皇族方を始め奉り、外國使節文武百官を御招きあり、能楽を御催しがあり、親しくこれを臠せられた御事は、能楽界無上の光榮とする所であつた。

大正十年七月、これまで先般來問題となりて觀世宗家と確執して居た梅若一派は、遂に梅若一派、梅若氏を宗家として一流を樹立したが、實際に從來の觀世流と變りがなく、我等の研究には別段の影響は無い。

六、元曲との關係

我々は以上を以て能楽の沿革を述べ終つたのであるが、從來能樂と元曲との關係を說く人が少くないので、その一斑を紹介すれば、その最初には德川時代の荻生徂徠。太宰春臺。新井白石などで、荻生徂徠は南留別志に「能は、元の雜劇を擬して作れるなるべし。元僧の來り敎へたるなるべし」といひ、太宰春臺は獨語に、

宋元の代より、雜劇といふことあり。即ち俳優の所作なり、院本といふことは、これらの優人役者にて、雜劇の所作勾欄と云ひ、又戯場ともいふ、これらの名目なり、雜劇の見る所を觀場とも言ふ。これらの名稱により今の猿樂もまた申樂の雜劇を擬したりと見ゆ。

といつてゐるが、兩者とも簡單な想像說に過ぎない。新井白石は俳優考に於て詳しく論じて、

猿樂ノ如キハ、室町殿ノ代ノ始ニ當リテ、雜劇ニ擬シテ作リシト云フ事ハ、元ノ時ニ當リシカハ、其代ニハ我國ノ人ノ彼ノ國ニ往キ、彼國ノ人モ我國ニ行キ通ヒシカハ、彼國ニテハ雜劇ノ盛ナル時ニテ、我國ノ人見テ之ヲ傳ヘシト、明朝ノ世ニモ、其下ニモ亦、ナホ雜劇ノ傳ハリナド云フ事ノ見エ、合セ考ヘラレシコトモアルヘシ。[illegible]

ナドヲ、歌ヒモノノ詞ニ作リナシテ、歌ヒ舞ヒケルナリ。最古ノ雜樂、散吏ノ餘風ニテ、其實ハ又一變シテ、元朝ノ傳奇雜劇ノ體ニ變ヒシ者也。

といひ、更に兩者の精別點を擧げて、

異朝ノ傳奇ト云コトハ、古ヘ有シ奇事ノ異アル謂ヲ詞ニ作リナシテ、歌ヒ舞ヒシ者也。其物ヲ作ル者ハ、其音ヲ下云アルハ、コレ、ハ雜樂ニシテ、雜劇ナト云者ニテ、カミヨミテハ場ニ上ミ始ニ必ス雜劇ヲ出ス始ニ必雜劇ナド云コトノアリタリ。彼ノ白ト云者ハ、コト、アリ詞ト云モノニ似テ、ウタヒニテ謂ト云者ハ、コ、ニサシケセナト云フコトニ似タリ。又ハテ一部ノ曲末、彼ノ雜劇ニ異ナラズ。ソノ中ニ、我朝ノ能ハ、猿樂雜劇等ノ制度ヲ以テ著共也。コレハ男トナリ、女トナリ、僧トナルニ便アランガ爲也。我國ノ田樂猿樂ト云者モ又此ノ如キナレバ、彼國ノ雜劇ニ倣ヒシハ、此田樂ニ始レルナルベシ。

と、まことに傾聽すべき說を立てゝゐるのである。

近く田邊尚雄氏はこの說に贊して、日本音樂の研究に、

能の劇的組織の形式は、支那の元代の戲曲を其の儘採つてゐる。支那に於ては、昔の散樂が唐代に、五代に至つて殆ど衰亡したが、其の中で、特殊の劇的なものは、宋代に可なり保存せられてゐた。とまれ、宋の雜劇は所謂雜戲の域を免かれない。然るに、元代に至り急に著しく戲曲が進歩し、始めて其の面目を一變するに至つた。其の戲曲の形式は、當時我が國から元へ遊學した僧侶の爲に輸入され、これが謡曲の形式の基礎となつたのである。

といはれ、七理重惠氏は「謡曲と元曲」を著して、詳しく兩者の關係を論述して居られる。氏の論は着眼百頁に亘つたもので、まづ彼我兩國の交通關係から說き起し、能樂及び元曲の演劇的要素を述べ、次で元曲

否定說

と謠曲とを比較し、終に元曲の影響を肯定せられたものであるが、その論旨を、後に尾上八郎博士の說を紹介する便宜上、博士が校註日本文學大系第二十卷、謠曲の解題に記された所に據ると、七理氏は、一、兩者共に一人劇で、歌舞劇であること、二、謠曲の二段物は宋の雜劇の二段たること、又元曲の正・旦・正末の變更したものであること、三、共に歌劇的戲曲であること、四、共に面を用ゐたと思はれること、五、共に唱・科・白から成立つてゐること、六、舞臺上の裝置及び演出法に類似點の多いこと、七、神佛物、鬼面物の多いこと、佛教趣味の豐富なこと、八、脚本に唱とコトバとの交錯してゐること、また修辭上から文體が類似してゐること、九、上場の詩があつて、ワキから開場すること、十、叙事詩から代言體に移り行つた徑路が似てゐる」と說き、「個々の曲節、舞戲等は、我が國從來のものとしても、それを打つて一丸とした力、それの組織をなすに至つた原動力は、外的の刺激即ち元曲の刺激があつたものと思はれる」といつて居られるのである。

これに反して、高野辰之博士は白石の說を駁して、日本歌謠史に、

もし此の韓僧達が教へたものとすれば、何等か此等の人の記錄に遺つてゐなければならぬ。而して大分元曲あたりの名僧輩の詩文集が公刊されたが、元の雜劇に關する記事は一向出てゐない。雜劇に關して詩を賦したのも更に見つからぬ。僧侶以外の人の日記類などにも、誰々から雜劇の話を聞いたといふ樣な記錄もまだ見出されてゐない。一體彼の土の雜劇に通曉したとすれば、第一に其の曲辭文は元曲の曲その物に類似してゐる筈。けれども何等それらしいものも鎌倉から室町の世を通じて出てゐない。これが白石の說に同じ難い一理である。次に我が國の戲曲の發生の上から見ても、白石の說には服することが出來ない。

といつて、能樂構成要素の順序を述べて、その最も根本に先行するものは唱でないといひ、構成上の要素を述べて、「元劇の要素は、唱・科・白・打の四で、其の一を缺けば元劇とはいはれない」、「唱科白の三は樂劇の要素で、國々の表は國の樂人之を其處に書いたが、打を云ふはないといひ、また田樂能の創始、我が國の能樂に之を適用したのは、古い猿樂で、能樂上の重要人を當てないといひ、又は、能樂を始合因果による分類を試みて、能樂の變化と能樂の發生、文化にわたり、能の歌舞の要素の展開に就してゐるといふも出來て、次第に能樂の如き、歌舞が出て、詞章は具合・演出等の構成から出たものであると述べてゐる。

高野博士の書と七里氏の書とは、殆ど時を同じうして、大正十か年の初に出たものゆゑ、兩者直接の論攻は見られないが、高野博士の説は、やがて七里氏の説の駁論とも見られるのである。尾上博士は前掲日本文學大系の解題に七里氏の説を評して、

能として樂劇の成立した以上は、その主たるものが一人であつて、他は補助であること、發達の前半上樂劇である事は、自然であらう。また進んで、一場のみでは足らず、二場を演ずるやうに、また自然に起ることであらう。その際、役者の一轉化して出場するのも、發達上生ずべきことである。殊に、過去の事實を現在に見せる二場にして出すことは、佛教の大旨を強調する上に自然に起つたものと思はれる。狹劇的であるのは、前出者が脇役をことしたから出來たものである。而は田樂でも旣に用ゐてゐた。寧ろ能を後に取つたとも思はれない。唱・科・白の三要素は樂劇の成立に大切なものである。何處に發生しても、必ずそれに含まれねばならぬものである。故に支那にあるから寧ろで、必ずしも彼に學んだもののみとは考へられない。特に佛物や鬼面物や佛教趣味のものは、佛家の思想を根本として、文學

藝術がそれの支配の下にあつたのみならず、おのづから、その宣傳の用をした時代であるから、この現象の起るのも當然である。故事出典を數多綴合して、絢爛の致のあるのは、綜合時代が過ぎて、補綴時代に入つたためである。上場に詩を歌ふのは、白石も云つたところで、恰もわが次第に當るのであるが、たゞそれに當るといふのみで、摸倣の眞跡は認められない。以上の如くで、兩者の類似は承認せられるのであるが、いづれも追隨摸倣の確證とはならないのである。

我々の述べたいと思ふ所は、高野・尾上兩博士の說にほゞ盡きてゐるのであるが、たゞこゝに、「能樂の術語には、わが國在來演藝の術語が夥しく襲用されてゐるのであるから、もし元曲の影響を受けたとすれば、その術語に元曲の術語が當然襲用されてゐる筈である。然るに元曲と同一のものは一つも見出さない。なほ又、世阿彌はその論文に於て、田樂・近江申樂などの長所及びその影響について、幾度も述べてゐるのであるから、もし元曲に據つた所があるならば、なほ一層詳しくこれに說き及ぶ筈であるが、一言元曲について記してゐる所がない。これを以て見れば、元曲依據說は容易に肯定することが出來ない」といふ事を附け加へて、次の問題に移つて行きたいと思ふ。

第三章　能樂の詞章

一、謠曲の題材

觀阿彌は「何にてもあれ、音曲としかへる」ことに妙を得、その子世阿彌も亦態〻その手腕を發揮し、あらゆる雜藝を集めて能樂を大成したのであるから、その演舞謠曲には、朗詠・今様・開口・風流・亂拍子・白拍子。羯鼓・八撥・簓・獅子・小歌・曲舞・平家節など、さま〴〵のものを含めてゐる。たゞに種類ばかりでなく、神樂をも眞似てゐる、舞樂の影響をも意識的に受けてゐる。これまで行はれて來たあらゆる歌舞を集めて、これを戲曲に整へたのであるから、その題材内容も亦種々様々であつて、苟も文藝として持ち得る殆どすべての種類を網羅してゐるといつても、甚しい過言ではないが、その著しい種類を擧げれば、

靈驗說話

(イ)靈驗說話

猿樂座がもと社寺に附屬してゐた關係上、神佛の靈驗緣起を說いたものが多い。その神德を述べたものに「老松」「賀茂」「弓八幡」などがあり、佛力を述べたものに「輪藏」「舍利」「九世戸」などがある。神德佛力はすべての人に惠まれるものであるが、神は殊に和歌を愛せられ、佛は殊に戒行を勸められるものであるから、神の奇特は歌人の上に、佛の奇特は高僧の上に現れることが多い。貫之の「蟻通」、西行の「雨月」などは前者に屬し、日蓮の「身延」「現在七面」、明惠の「春日龍神」などは後者に屬する。

文藝説話

(ロ)文藝説話

和歌は神の愛せられる所であり、文藝として最も貴いものであつたから、これに達した歌人の傳説は、諸曲好箇の題材であつた。「雲林院」「小鹽」の在原業平、「鸚鵡小町」「關寺小町」の小野小町、「誓願寺」「東北」の和泉式部などがそれで、一首の和歌を主材としたものにも、「六浦」「檜垣」「船橋」などがある。伊勢物語から出た「杜若」「井筒」「小鹽」は和歌傳説と見られるが、進んでは假作物語の人物をも實在人物のやうにして取扱つた。源氏物語の「夕顔」「葵上」「野宮」「浮舟」などがその著しいものである。

武人傳説

(ハ)武人傳説

申樂の觀衆は大抵武人であつたから、勢ひ武人に關する傳説を取扱つたものが多い。武人の尙ぶ所は武勇豪膽であるから、古英雄の武勇を描いた「田村」「大江山」「紅葉狩」なども少くないが、最も彼等の涙を誘つたのは平家公達の敗戰物語で、「敦盛」「忠度」「清經」など數多くの曲が作られてゐる。前代武人の中で最も愛敬せられたのは、同じく悲慘な末路に陷つた判官義經と、困苦と戰つて復讐の志を遂げた曾我兄弟とで、判官物・曾我物と稱して、その生涯が十數曲に作られてゐる。

世話巷説

(ニ)世話巷説

上に述べた曲の主人公は神・佛・英雄・佳人、いづれも著名なものであるが、名もない市井の男女を主人公とした曲も少くない。その主從關係について描いたものに「土車」「高野物狂」、夫婦關係を描いたものに「蘆刈」「砧」、父子關係を描いたものに「歌占」「花月」などあるが、殊に多いのは、子を失つた母が狂亂してわが子を求め歩き途に母子再會するもので、この種のものに「三井寺」「百萬」「櫻川」などがある。

異類說話

（ホ）異類說話

謠曲の主人公はまた天仙鬼畜乃至草木の精魂にも及んでゐる。その天人の事を主材としたものには〔羽衣〕〔吉野天人〕〔泰山府君〕、仙人の事を主材としたものには〔西王母〕〔枕慈童〕〔一角仙人〕、天狗の事を主材としたものには〔車僧〕〔大會〕などがあり、鬼物には、女が鬼に化する〔鐵輪〕、鬼が女に化けてゐる〔山姥〕〔安達原〕などがある。（ロ）に擧げた〔六浦〕〔楓〕〔杜若〕の主人公は草木が誦經の功德によつて成佛するもので、同じく草木の精魂が僧の供養を受けるものに〔遊行柳〕〔西行櫻〕などがあり、なほこの外に魚鳥を主人公としたものに〔鷺〕〔合浦〕などもある。

支那傳說

（ヘ）支那傳說

前に擧げた〔西王母〕〔枕慈童〕〔合浦〕などは支那說話であるが、これら異類に關したものばかりでなく、〔項羽〕〔張良〕〔鍾馗〕なども、わが古武士に對すると同樣の親しみを以て取扱はれてゐるのである。

二、謠曲の出典

多種多樣の題材を取扱つた謠曲は、もとより謠曲作者の構想脚色した點が少くないのであるが、その原據は大抵先進文藝から出てゐるのである。そして、その先進文藝は遠く記紀から起つて、ほゞ同時代の義經記・曾我物語に及び、その說話は太古から室町時代に至つてゐるので（新作にはなほ新しいものがある）、これらを時代順に排列すれば、一種の文藝史・傳說史が形造られるのである。今現行曲について、その主な出典を擧げれば、

記紀

古事記・日本書紀　わが國神話傳說の最古最貴のものは、いふまでもなく、記紀二書で、これから出た曲に、「逆矛」「龍田」「淡路」「繪馬」「大蛇」「源太夫」「大社」「玉井」「和布刈」「三輪」「御裳濯」「草薙」「呉服」「鵜祭」「鵜羽」「氷室」「代主」があるが、直接記紀に據つたものよりは、これを傳承した後の文藝、神皇正統記・平家物語劍巻又は神社緣起に據つたものが多い。

歌集

萬葉集　一二首の和歌を主材として一曲を創作することは甚だ困難である上、漢字のみで書いた萬葉集は當時一般に顧られなかつたのであるが、尙且、「草子洗小町」には萬葉集の撰修について說き、「三山」は巻一天智天皇の御製を、「船橋」は巻十四東歌を主材として作つてゐるのである。

古今集　謠曲作者の最も尊重したもので、その引歌は殆どすべての曲に出てゐるが、その序文を主材としたものに「高砂」「志賀」、序文の歌に據つたものに「難波」、序に擧げた六歌仙及び撰者を題材としたものに「卒都婆小町」があり、また序文の詞に暗示を得て一種の世話物を構想したものに「松蟲」「女郎花」がある。

後撰集・拾遺集　後撰集から出たものに「檜垣」、拾遺集から出たものに「蘆刈」「安達原」がある。

家集　その他、貫之集から出た「蟻通」、遍昭集から出た「墨染櫻」、山家集から出た「西行櫻」などがある。

物語

伊勢物語　一首の和歌から長篇の戲曲を作ることは困難であるが、和歌を中心とした傳說、歌物語に據つて、一曲を工夫することは、謠曲作者の最も喜ぶところで、わが國最初の歌物語、伊勢物語から材を得たものに、「雲林院」「杜若」「井筒」「小鹽」「右近」があり、「隅田川」「熊野」もこれから暗示を受けてゐる。

大和物語　伊勢物語に倣つた大和物語に據つたものに「蘆刈」「采女」「姨捨」「求塚」がある。

源氏物語　わが國最大最高の文藝であるこの物語に據つたものは甚だ多く、「夕顏」「半蔀」「葵上」「野宮」「住

詣」「須磨源氏」「玉葛」「浮舟」、その表白を題材としたものに「源氏供養」があり、「胡蝶」「空蟬」もこれから暗示されてゐる。

傳說文藝

今昔物語　傳說文藝として最も古い今昔物語から出たものに「一角仙人」「昭君」「田村」「道成寺」「絃上」「善界」「蟬丸」がある。但しこのうちには、これを繼承した後の文藝に據つたらしいものもある。

宇治拾遺・古今著聞集等　今昔物語の後を承けた宇治拾遺物語から出たものに「國栖」、同系統の古今著聞集又は十訓抄から出たものに「春日龍神」「養老」「大會」などがある。

撰集抄・袖中抄等　西行法師の事を記した、そして彼の作と傳へられてゐる撰集抄に據つたものに「雨月」「江口」「松山天狗」、色々の和歌傳說を記した袖中抄に據つたものに「木賊」「錦木」「野守」「三輪」、玉造小町壯衰書によつて發展した小町傳說を取扱つたものに「關寺小町」「卒都婆小町」などがある。

唐物語　支那傳說を國文に移したこの物語から出たらしいものに、「西王母」「昭君」「東方朔」がある。

軍記物

平家物語諸本　平家物語が能樂の大成に重大な關係を持つてゐることは第二章に述べた通りで、平家物語諸本に據つて源平武士を主人公とした曲は甚だ多い。その源氏に關するものには、「朝長」「鵺」「賴政」「木曾」「兼平」「巴」「七騎落」「箙」「藤戸」「正尊」「八島」があり、平家に關するものには、「祇王」「佛原」「俊寛」「熊野」「小督」「實盛」「經政」「俊成忠度」「忠度」「敦盛」「生田敦盛」「知章」「通盛」「清經」「碇潜」「千手」「盛久」「大原御幸」「大佛供養」「景清」がある。これらは大抵流布本平家物語に據つてゐるやうであるが、「朝長」は平治物語から出で、「七騎落」「敦盛」「經政」「通盛」「清經」などは源平盛衰記に近く、「箙」「盛久」は長門本に近く、「熊野」「生田敦盛」「大佛供養」「景清」は作者の創案した所が多い。「生田敦盛」以下三曲は、お伽草子又は幸若舞曲に

曾我・義經記

緣起

同趣のものがあるが、謠曲の典據とは斷じられない。

平家物語諸本は源平の盛衰を描くとともに、挿話として和漢の傳說を採り入れたもので、これが謠曲の題材となつた。その平家物語から出たものに「鵺」「咸陽宮」「絃上」「蟬丸」、同劍卷から出たものに「草薙」「源太夫」「鐵輪」「土蜘蛛」「羅生門」、盛衰記から出たものに「泰山府君」「阿漕」「國栖」「葛城」「高野物狂」がある。

太平記　北條時代の武士を取扱つたものは僅かに「楠露」「壇風」があるばかりで、北條時賴を取扱つた「鉢木」「藤榮」はこの時代のものであるが、太平記には緣が少い。ただ一般傳說としては、これから出たものが甚だ多く、「嵐山」「白髭」「舍利」「第六天」「雷電」「菊慈童」「枕慈童」「邯鄲」「項羽」「一角仙人」がある。

義經記　義經の事を題材とした曲には、「鞍馬天狗」「笛之卷」「關原與一」「烏帽子折」「熊坂」「橋辨慶」「八島」「正尊」「船辨慶」「吉野靜」「二人靜」「忠信」「攝待」「錦戶」があるが、前陳先進文藝に據つたものに比べると、いづれも原據との距離が遠く、殊に「笛之卷」「關原與一」の事は義經記に見えない。謠曲に近いのは幸若舞曲の判官物であるが、その創作前後は定め難い。いづれにしても謠曲作者の創案した所の多いものである。

曾我物語　曾我兄弟の事を取扱つた曲には、「調伏曾我」「元服曾我」「小袖曾我」「夜討曾我」「禪師曾我」がある。やはり謠曲作者の工夫した點が少くないが、判官物に比べれば、いづれも原據に近い。

社寺緣起　その他神社の緣起神事から出たと思はれるものに、「賀茂」「松尾」「放生川」「水無月祓」「和布刈」「鵜祭」「繪馬」「大社」「代主」「氷室」「弓八幡」「岩船」「金札」、佛寺の緣起から出たと思はれるものに、「誓願寺」「竹生島」「江島」「九世戸」「寢覺」「當麻」「道明寺」等があり、「鵜飼」「現在七面」「身延」も謠曲以前に一種の緣起傳說があつたものと思はれ、「仲光」も中山寺緣起から出てゐるらしい。

その他

出典不明　わが古傳說で出所の明かでないもの——恐らくは謠詞から出たと思はれるものに、「大江山」「紅葉狩」がある。支那傳說の「張良」は史記から、「楊貴妃」は長恨歌から出てゐるが、「白帝」「鍾馗」の出所は明かにし難い。「鵜羽」「大瓶猩猩」「合浦」「鶴龜」「龍虎」は謠曲作者の創案に出た所のもいふものである。

世話巷說　世話巷說に屬するものには、大抵出所が明かでないが、「戀重荷」「綾鼓」「弱法師」などは申樂大成以前の民間演藝に行はれてゐたもの、「百萬」「山姥」「土車」なども先進藝能である曲舞から本としたものであらう。「自然居士」「東岸居士」は實在人物の傳說に據つたものであり、「春榮」「望月」「放下僧」等も或はさういふ人物が實在してゐたものかと疑はれるが、「花筐」「班女」等は假作人物に相違なからう。「花月」「櫻川」「隅田川」「飛鳥川」などは雜藝の羯鼓、櫻の花、伊勢物語の一節、和歌等を興味の中心として、人情譚を脚色したものであらう（この一節、謠曲講座第一・二冊拙稿參照）。

三、謠曲の脚色

多種多樣の材料を捉へて、これを一篇の戲曲に脚色する方法も、亦從つて多樣であるが、主演者シテが甲人の姿を以て登場し、ワキの質問に應じて、一曲の主題となつてゐる故事來歷や物語り、一度消え失せて後その曲の主人公として昔さながらの姿で登場し、昔の樣をさながらに演出するものが最も多く、これを芳賀矢一博士は複式能と名づけて居られる（國文學史十講、國文學史概論）。今これを基準として、その主たる樣式を舉げると、

單式能

（イ）單式能

大成以前の猿樂は、開口・答辯などの地口輕口を以て、稚兒又は舞女の歌舞を引立てるに過ぎなかつたもの

複式夢幻能

で、これが次第に接近して、大人猿樂師自らが稚兒・舞女に代つて、歌舞を演ずるやうになつて來たのである。能樂の主たる演奏者シテとワキとは、この二つの、一は歌舞猿樂の、他は滑稽猿樂の展開したものと見られるのであつて、大成後の申樂に於ては、ワキも滑稽な詞を口にしないで、極めて眞面目なものとなつたが、シテの歌舞を引立てるといふ役割は永く持續して來たのである。その單純な形のものを、複式能に對して單式能と名づけ得るやうに思ふ。しかし、現存曲にはこのやうな簡單なものは殆ど見當らないのであるが、これに近い例を求めれば、「羽衣」などがそれである。「羽衣」のワキは「三保の松原に白龍と申す漁夫」で、のどかな春景色に誘はれて、浦の樣を眺めてゐると、靈香が四方に薫じ、色香妙なる美しい衣が松の枝にかかつてゐるので、取つて歸つて、家の寶にしようとする。そこへシテ天女が登場して「それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべきものにあらず、もとの如くに置き給へ」といふ。ワキは「さもあらば末世の奇特に留め置き、國の寶となすべきなり」といつて、衣を返さない。シテの天人は「羽衣なくては飛行の道も絶え、天上に歸らんことも叶ふまじ」といつて歎く。心なき漁夫も人の歎きを見てはあはれを催し、この羽衣を返して、天人の舞樂を所望する。天人は喜んで、東遊の駿河舞を舞ひ奏でて上天するといふ脚色で、この舞臺效果は全くシテの舞にあるのである。尤もこのワキはシテの引立役であるといふものの、シテに舞を舞はせるのに都合のよい、羽衣を拾つたといふよい理由を持つてゐるので、それだけ兩者の關係が劇的になつてゐるが、複式能のワキにはこれよりも單純なものが多い。――單式能に、それほど簡單なものが殘つてゐないのである。

（ロ）複式夢幻能

劇的夢幻能

形は單式で、たゞ、シテが前に僧と姿をかへるものであるが、ワキとシテとの關係は、これも全く何の緣故もない、通りがかりの出合ひに過ぎないものがある。例へば「賴政」のワキは諸國一見の僧で、洛陽の寺社殘りなく「拜み廻つて」、宇治へ來ると、シテ老人が現れて、僧を平等院に導き、頭三位賴政がこの所で自害した有樣を物語り、「われ賴政の幽靈と名のりもあへず」消え失せる。ワキ僧、「さては賴政の幽靈かりに現れ、われに言葉をかはしけるぞや」と驚き且奇特に感じて、賴政の回向をして、「夢の契り」を待つてゐると、後ジテ賴政の靈が在世當時の姿をして、修羅道から現れ出で、讀經の功力に引かれて佛果を得ることを喜び、昔の宇治合戰の樣を仕形話で語り、なほも「跡弔ひ給へ」といつて消え失せるといふのである。卽ちワキとシテ、旅僧と賴政との間には何等歷史的關係がなく、たゞ一樹の陰一河の流れを他生の緣としたものに過ぎない。このやうな、一曲の主人公がワキの夢に現れ出るものを夢幻能と名づけ、從つて本曲の如き脚色のものを複式夢幻能と呼ぶことが出來ようと思ふ。——夢幻能と見るべきもので、シテに前後の變りがなく、初めから神佛の影向・故人の亡靈・草木の精魂として現れるものがある。例へば「杜若」「經政」「松風」の如きがそれで、これらは複式を略したものと見られ、「岩船」「金札」の如きは、明かに複式能の前半を省略したものである。

八、劇的夢幻能

複式夢幻能はワキとシテとの劇的關係に考慮せず、勅使・臣下・旅僧・山伏、どの種の人物であらうとも、たゞ通りがかりの者を捉へて、一曲の主人公シテがまづ里人の姿をして、主題に關する豫備知識を授け、然る後に、昔の姿を以てその夢に現れ、一人芝居を演ずるのであるから、如何なる材料を捉へて來ても、脚色

が甚だ容易簡單であり、從つて謠曲にはこの種のものが最も多いのであるが、劇としては餘りに幼稚な感を起させないでもない。ワキを今少しシテと關係の深い人物にしたいといふ希望が出てくる。例へば〔巴〕では、ワキ僧を、巴と關係の深い、「木曾の山家より出でたる僧」としてゐるが、これも土地の關係があるだけで、劇的葛藤を起すには理由の不十分なものである。同じく僧ワキでも、「朝長の御ゆかりの者にて候程に、急ぎかの所に下り、御跡をも弔ひ申さばやと思ひ立つ」て青墓に出かける〔朝長〕の曲は、やゝ關係の深いものであり、殊に〔敦盛〕の曲になると、ワキ僧を、敦盛の首を刎ねた「熊谷の次郎直實出家し、蓮生と申す法師」だといつてゐるのであるから、敵同志の二人の廻り合ひは、劇的葛藤を起すのに十分な理由があるが、しかし、この曲のシテは、やはり生前の敦盛でなく、亡靈の敦盛であつて、その筋の運びかたが普通の複式夢幻能と同じ形であるから、敦盛の亡靈が自分を殺した敵にその有樣を語るといふ變なものになつてゐるのである。これに比べると、〔生田敦盛〕のワキは蓮生と關係の深い黒谷の僧であるが、子方敦盛の遺子を同作して行くので、シテ敦盛の亡靈がわが子に軍語をするのも無理がないと思はせるのである。

このやうに、子方又はツレをシテと對せしめて、ワキを第二位に下した曲、例へば〔海士〕(子方房前大臣、シテその母の亡靈、ワキは房前の從者)、〔善知鳥〕(ツレ妻、シテその夫の靈、ワキは夫の死を妻に告げる旅僧)、〔清經〕(ツレ妻、シテ夫清經の靈、ワキは清經の死を告げる臣)、〔俊成忠度〕(ツレ師俊成、シテ忠度の靈、ワキはシテの遺物を屆ける武士)などは、いづれも劇的關係の深いものとなつてゐるが、それはワキを除外したものであるのに對し、ワキの職能を進めて、ワキとシテと深い關係のあるものとして脚色したものに、〔砧〕〔藤戸〕などがある。〔砧〕はワキ蘆屋何某が訴訟の爲に上京して、三年の間國に歸らないのを悲しんで、シテ妻が遂に悶死す

一段劇能

る。ワキに詰問してこれを恨み、亡靈の回向をして、梓の弓にかけると、更に亡靈が現れ出るといふのである。「藤戸」のワキは佐々木盛綱で、藤戸の先陣をした恩賞に備前國兒島を賜はり、初入部して、「昔を訴訟あらんものは罷り出でよ」と觸れしめると、シテ老婆が登場して、わが子を波に沈められた恨みを述べる。この子といふのは、藤戸先陣の際、盛綱に淺瀬を教へた若者であるが、盛綱はまた他の者に教へられて功を奪はれることを恐れ、この若者を殺してしまつたのであつた。盛綱も母の嘆きを聞いて、深く憐み、その菩提を弔ひ遺族を慰めると、かの若者も今は執心晴れて、後ヂテに成佛して現れるといふ筋で、倫理劇的條件に適つてゐるのである。かういふ類色のものは、劇的夢幻能又は夢幻的劇能と呼ばれ得るであらう。

ハ、二段劇能

夢幻能に對する劇能は、普通の劇に近い、ワキの現在能が發達して、シテと同時代の直に關係ある者として取扱はれてゐるもので、この劇能には、複式能のやうに、シテの中入するものと、中入しないもの、一段のものと二段のものとがあるので、これを一段劇能と二段劇能とに分つ。

一段劇能の例を擧げれば、「安宅」の如きがそれである。判官物は（八島・熊坂を除いて）いづれも劇能であるが、多くの曲では辨慶がワキとして立ち働いてゐるのに、これではシテの地位に坐り、ワキには安宅の關守富樫何某がまはつて、ワキとシテ、富樫と辨慶とが相對して、一問一答、一張一弛、誠に緊張した舞臺效果を擧げてゐるのである。

ワキは次第に發展して、このやうな役柄にまで進んだのであるが、もと／＼シテの引立役として成立したものであるから、こゝまで發展すれば、ワキとして特殊な取扱をする必要がないと認めたのであらうか、シ

テの從屬として發生したツレにその位地を讓つてゐるものが少くない。前項に擧げた「海士」「善知鳥」などがそれであつて、一段劇能のものでは、「蘆刈」のワキがツレ女の從者であり、「千手」のワキがツレ重衡の預人であり、更に甚しくはワキの全く消失してゐるものがある。「小袖曾我」「歌占」「木曾」「三笑」などがそれである。

二段劇能

（二）二段劇能

（複式劇能）

謠曲の脚色として最も發達した形のもので　これにも、シテの形相の變る複式能に近い「葵上」「大江山」「紅葉狩」——これは複式劇能と名づけ得よう——、シテ・ワキともに前後同じ人物である「鉢木」「草子洗小町」、シテの人物の前後變る「烏帽子折」（前は烏帽子屋主人 後は熊坂長範）「舩弁慶」（前は常盤御前 後は辨慶）、ワキが前後の一段にのみ登場する「柏崎」「禪師曾我」「大佛供養」、前後ともにワキのない「夜討曾我」などがある。

しかし脚色の複雜したものが、必ずしも藝術的價値の高いものとはいへない。このことについては、なほ後に述べようと思ふ（この一節日本文學講座第二期拙稿參照）。

四、謠曲の構造

序破急五段

謠曲の脚色法に種々の様式があるのであるから、その文の構造組織も亦從つて一様でないが、その間に自ら、一定の方式があつて、能作書に、

作とは、種をばかやうに求め得て、さてなす所を定むべし。まづ序破急に五段あり。序一段、破三段、急一段なり

開口人出でて、さし聲より、次第、一歌(うたひ)まで一段。

これより破、さて爲手の出でて、一聲より一謠まで一段、
その後開口人と問答ありて、同音一謠一段、
その後また曲舞にてもあれ、只謠にてもあれ、一音曲一段。
これより急、その後舞にても、働にても、或は早曲、切拍子などにて一段。
已上五段なり。若しくは本說の體分によりて六段ある事もあるべし、又は品によりて、一段足らで四段などもある能もあるべし。まづ本風體と定むる所五段なり。この五段を作り定めて、序にいかほどの音曲あるべし、破三段に三色の音曲いかほどと、音曲の句數を定めて、一番を建立するを能作とは申すなり。

といひ、更に老女軍の三體の作法に說き及ぼし、殊に老體（脇能の懸）の項に於ては、各段の章節句數まで指示してゐるのである。これを世阿彌の作で、自ら「すぐなる體」（申樂談儀）といつてゐる「弓八幡」に充てて、表解すれば、（圏點を施したのが、能作書に指示してゐる事項）

標準的樣式

序段
ワキ次第　ワキ名乘　ワキ道行（五七五・七五と行く事七八句謠ふべし）ワキ着セリフ

破一段
シテ・ツレ一聲（五七五七五）　ツレ二句（七五七五）　シテサシ（七五々々と行く事十句ばかり）　シテ・ツレ
下歌・上歌（下げて謠ふより甲の物までの一謠・十句ばかり）

破二段
ワキ・シテ掛合（開口人と爲手との問答、言葉四五づつに過ぐべからず。老人夫婦などの事の謂れを問答でいひ聞く

開口

事あり、それもまた二三ヶ所に過ぐべからず。　地上歌（十句ばかりを二きれに謡ふべし）

破三段

ワキ謡　地クリ（上聲五句ばかり）　シテサシ（五句）　地謡（下げて收むるまで五六句ばかり）　地ク

セ（甲物十二三句ばかり）　シテ謡　地上謡

ロンギ（言葉論義に二三ヶ所づつ謡ひこれさ〳〵と止むべし）

間語

急段

ワキ待謡

後シテ謡（甲物とし聲いひながして一聲上げ）　地謡（長々たぶ〳〵と上げ流して、いひ下すべし）

〔神舞〕

ロンギ（責論義二ッ三ッ謡ひて、かゝりたる音曲にて、種々とやりかけて謡ふべし）

これを標準的樣式と見ることが出來るのである。

五、謡曲の章節

次に謡曲序破急五段を構成してゐる各章節の名目及びその意義について略述すれば、

開口（かいこう）　開口猿樂の開口から出た名目で、能作書に「開口人出てさし聲より次第」といつてゐる「さし聲」に相當するものであるが、現存謡曲には、これに相當するものは見當らない。「寶盛」「玉井」「白帝」などはワ

きやう謠ひ始まつてゐるが、此の次第になく、直ぐ開口ではない。能作書にも、祝の頃には、開口人出て、次第より一うたひ」とあつて、さし聲の事を記してゐないところを見ると、早くから其はれてゐたものであらう。後世には特別な祝言の脇能に限つて、開口の詞を附けてゐた。この場合には、次第・名乗の順を顚倒して、開口・名乗・次第・道行の順に謠ふ。現行曲の中でも、「白樂天」にはこれと同樣な順序で謠ふので、これを半開口（はんかいこう）といひ、「玉井」には次第が缺いてゐるが、これも半開口と名づけてゐる。

次第

次第（しだい）　高野辰之博士が、次第は佛家の聲明道から來た名であるといはれた通り（日本歌謠史）、謠曲の次第にも地取（ぢとり）があつて、その詞を地謠が繰り返して謠ふが、その意義は序歌の心持をもつた前奏曲とも見るべきもので、一曲の氣分を醸成しようとするものである。この故に演能の場合、演奏者が一人である時には、正面の觀衆に向つて謠はず、囃子方の方に向き、ツレと同吟の場合にはこれと向合つて謠ひ、いづれも觀衆の方には向かないのである。從つてその歌詞も、

げに治まれる四方の國國の、關の戸さゝで通はん。（岩船、老松）

夢の世なれば驚きて、捨つるや現なるらん。（敦盛、土車）

のやうに、一曲の心持を暗示するものが多い。——次第にはシテ又はツレの謠ふものもあるが、その意義には變りがない。地次第は第一章（二九頁）に述べた曲舞から出たものである。

名乗

名乗（なのり）　次第の後に（次第がなければ直に）正面に向つて自己紹介する詞で、これに、

抑もこれは何々とはわが事なり。

これは何々にて候。

道行

着セリフ

一聲

かやうに候者は何々にて候

と、三種の發表形式があつて、ワキの地位身分によつて、これを使ひわけてゐる。そのいづれにしても觀客に向つて自己紹介するものであつて、名乘の終りに必ず立拜するのは、觀客に對する禮である。

道行(みちゆき)　古く溯れば、伊勢物語の東下りに始まり、宴曲。平家物語の海道下り等によつて、形を整へて來たもので、謠曲の道行は、五文字を首とした七五調七八句から成り、緣語掛詞等によつて叙景抒情を加へながら旅程を述べるものであつて、舞臺轉換の用をなすのである。例へば、

信濃なる、淺間が嶽に立つ煙、遠近人の雨寒く、行くや眞の大井川、捨つる身になきともの里、今ぞ浮世を離れ坂、里の長の碓氷川、下す筏の夜寒や、佐野の渡に着きにけり（鉢木）

と謠つてゐる間に、舞臺は信濃から佐野に移るのである。道行は稀にシテ又はツレの謠ふこともあり、又名目は歌で、實は道行の用をしてゐるものもある。「安宅」のサシ上歌。下歌。上歌の如きは、その著しいものである。

着(つき)セリフ　道行によつて舞臺の轉換したことを一層明瞭ならしめるもので、候文の短文から成つてゐる。

一聲(いつせい)　遊學往來に「一聲。早歌。白拍子。狂言音曲。亂拍子。曲舞歌物」とあつて、一種の音曲のやうであるが、又曾我物語卷八には「今様を謠ひ給へと言ひければ……一聲を選り「十郎殿は亂拍子の上手と聞けども……君が住む龜尾が山の瀧の瀬はといふ一聲をあげて」とあり、中古雜唱集にも緣語一聲があつて、雜藝の朗吟法の意でもあつたらしい。謠曲に於ても、囃子の名目にも用ゐられてゐるが、能作書に「老人夫婦などにて、五七五七五の一聲より、七五〳〵の一句過ぎて」とあつて、詞章上の名目としても用ゐてゐる。こ

二句

サシ

れを實際について見ると、囃子の一聲は詞章の一聲又はサシ際に用ゐられ、詞章の一聲は能作書所說の句格で、序段の次第に對して、破一段の初めに用ゐられることが多い。——序段に一聲を、破一段に次第を置くこともある。——その歌詞には、緣語掛詞を用ゐ、殊に古歌を引いて、例へば、

見渡せば柳櫻をこきまぜて錦をかざる花車（右近）

月もやや出汐になりて鹽竈のうらさび渡る氣色かな（融）

海士の刈る藻に栖む蟲にあらねどもわれから濡らす袂かな（海士）

のやうに、舞臺の景趣を述べ、自己の感慨を洩らしたものが多い。

二句　ミチヅレのある場合、一聲の次に謠はれるもので、七五の二句から成り、一聲と内容の連絡したものが多い。

一聲「高砂の、松の浦風吹きくれて、尾上の鐘も響くなり。」二句「波は霞の磯がくれ、音こそ汐の滿干なれ」（高砂）

一聲「治まれる、御代の光に數ならぬ、身までも安き住居かな」二句「惠みも廣きこの君の、御影を頼むばかりなり」

（東方朔）

サシ　古くはサシ聲といひ、平曲のサシゴエから出たもので、破一段では序段の名乘と相對するものであるが、クセの前にも、後ジテの出にも、又一聲の前にも用ゐられる。能作書に「一聲の後七五の句六七反いひ流して」とあつて、

誰をかも、知る人にせん高砂の、松も昔の友ならで、過ぎ來し世々は白雪の、積り積りて老の鶴の、ねぐらに殘る有明の、春の霜夜の起居にも、松風をのみ聞き馴れて、心を友と菅筵の、思ひを述ぶるばかりなり（高砂）

歌

呼掛

のやうに七五調を本體としてゐるやうであるが、

おのづから、春の手向となりにけり、地主權現の花盛り、それ花の名どころ多しといへども、大悲の光色添ふ故か、この寺の地主の櫻に如くはなし、されば〳〵にや大慈大悲の春の光、十惡の里に香ばしく、三十三身の秋の月、五濁の水影清し（田村）

のやうに七五調の間の五文字挿入などして、七五の平坦を破つたものが少くなく、

五水漫々として碧浪天を浸し、越を辭せし范蠡が、扁舟に棹をうつすなる、五湖の煙の波の上、かくやと思ひ知られたり、あら面白の海上やな（白樂天）

のやうな、朗詠風のものもある。

歌（うた）　サシふいは七五調の正格なもので、その下音で謠ひ出すものを下歌（さげうた）といひ、上音で謠ふものを上歌（あげうた）といふ。歌は破一段にも破二段以下にもワキ待謠にも用ゐられるが、破一段のものについて見れば、道行風のものもあるが、

下歌　遠里ながら程近き、この住の江の浦傳ひ、上歌　汐風も吹くや岸野の秋の草、松も響きて沖つ波、聞えて寧く友なふ、この市人の數々に、我も行き人も行く、阿部野の原は面白や（松蟲）

下歌　憐み給へ思ひ子の、行末何となりぬらん、上歌　枯れたる木にだにも、花咲くべくは自ら、未だ若木のみどり子に、再びなどか逢はざらん（三井寺）

のやうに、その曲の人物に特有な、具體的必然的な觀察感想を述べたものが多い。

呼掛（よびかけ）　舞臺背景のない謠曲に於ては、觀客にその曲の舞臺面を想像せしめる必要上、破一段に於て、この

掛合　語　地謠　クリ

が自己の觀察感想に拘らで、舞臺の景趣を述べるのであるが、時にはこの一段を略して、シテが直ちに出てなかに、ワキに詞をかけるものがある。これを呼掛といふ。

掛合　序段及び破一段はワキ又はツレの獨白で、未だ劇を構成してゐない。シテとワキ、シテとツレなどが對話問答するのは、通例破二段以下で、この問答對話の文體には、韻文のもの、普通散文のもの、候調のもの、様々ある。

語　掛合の一部であるが、シテ又はワキが長々と一曲の主題について物語る科白を語といふ。語は普通散文である。

地謠　シテ・ツレ・ワキなど舞臺に立つ演出者以外の、數人が同吟する部分で、これを地、同音又は同吟ともいふ。一曲中最初にある地謠を初同といひ、次を二の同、その次を三の同と呼ぶ。初同は大體正格な七五調で、二の同以下にはやゝ破格のものが多い。

この地謠はもと雜藝の謠ひ物を舞人に代つて謠ふ所から始まつたもので、文章としてはシテ又はワキの科白であつて、所謂地の文ではない。中には地の文として解釋すべきものもあるが、それは語り物の影響を受けた謠曲一般の文體であつて、その意味に於ては、シテ又はワキの科白中にも地の文と見るべきものもあるのである。

クリ　クリ上げて謠ふといふ意から出た名であらう。通例、クセの前のサシの上にあつて、クセの前提をなすものである。節がかりの散文で、

それ生死輪廻の根元を尋ぬるに、有相執着の妄念より起れり（土車）

クセ　ロンギ

抑も難波津の歌は帝の御始め、また淺香山の言葉は、采女の土器とりどりなり（難波）のやうに、「それ」「抑も」「實にや」「さても」などから始めて、文段を新にしたものが多い。

クセ　曲舞節で謠ふ部分で、世阿彌の説によれば、次第に始まつて次第で終る筈であるが、この形のものは殆どなく（三〇頁）、最も普通の形は、クリ・サシ・クセ・クセ上の四節から成つてゐるもので、中にはクリ・サシのないものがあり、そのやうな短文のものを特に片クセと呼んでゐる。多くは一曲の中心的材料について述べ、從つてその内容は多種多樣であり、その演出法には舞グセと居グセとの二種あるが、中には主題とは稍々離れた挿話を物語るものがある。例へば「柏崎」に善光寺如來の事を、「花月」に清水寺緣起を述べてゐるなどが、それである。

ロンギ　僧家に行はれた一種の宗論、論義から出た名目で、從つて、

地「首に懸けたる袋には、如何なる物を入れたるぞ。シテ「今日も命は知られども、明日の飢を助けんと、粟豆の餉を、袋に入れて持ちたるよ。地「うしろに負へる袋には。シテ「垢膩の垢つける衣あり。地「肘にかけたるあじかには。シテ「白黒の慈姑あり……（卒都婆小町）

のやうな質問的對話が普通の形であるが、事實、問答の體をなしてゐるのは、初めの一二句だけで、餘はシテ地の科白又は敍事文と見るべきものが多く、中には、

地「運ぶは遠き陸奧の、その名や千賀の鹽竈、シテ「賤が鹽木を運びしは、阿漕が浦に引く汐、地「その伊勢の海の、二見の浦、二度世にも出でばや。シテ「松の村立ち霞む日に、汐路や遠く鳴海潟、地「それは鳴海潟、ここは鳴尾の松蔭に……（松風）

や、「賀茂」「熊野」のロンギのやうに連歌的興味の深いものがあり、またこの章のやうに文學的價値の高いものが多いのである。

間

間。　能の前後段の間を連續させる意の名目で、前ジテの中入して後、舞臺に出て、主題に就て通俗的説明を與へるもので、世話劇の形式に、（イ）「田村」「梅枝」「鵜飼」の如く所の者として登場し、ワキの質問に答へるものと、（ロ）「白髭」「白楽天」「賀茂」の如く末社神として出で、間語りに本曲の縁起を述べ、神德を讃へて祝言を舞ふものと、（ハ）「烏帽子折」「鉢木」「羅生門」の如く、早打として驅け出て、事件の急を報ずる形をとるものとがあり、その（イ）を語間又は居語といひ、（ロ）を末社間といひ、（ハ）を早打間といふ。なほこの外に、木葉天狗又は魚の精などとして登場するものがあり（末社間の一種である）、中には全く中入のない場合にも、「安宅」の能力・太刀持や、「邯鄲」の宿主の如く、一曲の最初又は中途に出て他の諸役と會話するものもある。この場合の狂言の職能は劇的に發達したシテヅレ又はワキヅレと變りがない。

待謠

待謠。　後ジテの出現を待つ謠といふ意で、前ジテが中入して、狂言の間語の濟んだ後、ワキの謠ふ上歌をいふ。卽ちこの前後姿を變へる夢幻能にのみ用ゐられるもので、

これにつけても弔ひの、法事をなして夜もすがら、念佛申し敦盛の、菩提をなほも弔はん（敦盛）

河瀬の石を拾ひ上げ、妙なる法の御經を、一石に一字書きつけて、波間に沈め弔はば、などかは浮まざるべき（鵜飼）

のやうに故人の靈を弔ふもの、

夜も更け行く浦風の、松が根枕そばだてて、思ひをのぶる苔筵、かさねて夢を待ちゐたり（八島）

うれしきかなやいざさらば、この松蔭に旅居して、風も嘯く寅の時、神の告をも待ちて見ん（老松）

のやうに、主人公の登場を待つ意を述べたものが多い。歌詞は通例七五調であるが、中には、

ワキ「さて石山に參りつつ……弔ふべきなり。」（待謠）とは思へどもあだし世の、夢にうつろふ紫の……（源氏供養）

一夜臥す、男鹿の角の塚の草、蔭より見えし亡魂を、弔ふ法の聲立てて、南無幽靈出離生死、頓生菩提（女郎花）

のやうに、前文に連續するもの、又は歌の中途より經文・詩句の續くものもある。

ワカ　急段、舞の後に來るもので、この名目について、高野博士が、延年舞の若音見の聲調の意であらうと說かれたのは、傾聽すべき卓見であるが、その歌章を見ると、

春の夜の闇はあやなし梅の花、色こそ見えね香やは隱るる（東北）

羽衣の曲まれにぞ返す少女子が、袖うち振れる心しるしや（楊貴妃）

のやうに、和歌又は和歌調のものが多い。

キリ　一曲の結末をなす部分で、

かくて兄弟の人々、その期にありて忽ちに、親の敵を討つことも、孝行深き故により、名を末代に留めけり（夜討曾我）

のやうに、一曲を總括した敍事文が多い。

六、謠曲の修辭

能樂は諸種の藝術を集成したものであり、その題材があらゆる先進文藝から出てゐるやうに、その詞章も亦、これまで行はれて來たあらゆる樣式と技巧とを採り入れてゐるのである。

まづその文體について見ると、謠曲はもと樂器に合はせて謠ふ謠ひ物であるから、七五調の歌詞が多い。

韻節に準據して、五字・七字・散文にはすべてこれであるが、しかし、謠曲はまた一面劇として觀客の耳に了解せしめるものであるから、その詞章はあまり俗耳に遠いものばかりであってはならない。それで、サシ・クセなどには、

サシ「あはれやげに古は、驕慢最も甚しう、翡翠の簪は嫋娜とたをやかにして、楊柳の春の風に靡くが如し――（卒都婆小町）

クセ「帝猶も歎き給ひつつ、その御かたちを甘泉殿の壁にうつし、われも畫圖に立ち並びて、明暮歎き給ひけり。されどもなかなか御思ひは勝れども、物いひかはすことなき事を、深く歎き給へば――（花筐）

のやうに、七五調を破つたものが少くないし、謠がかりでない語では、

抑も當寺清水寺と申すは、大同二年の御草創、坂上田村丸の御願なり。……（田村）

のやうな散文を用ゐ、殊にワキ名乘・シテワキ掛合などには、

ワキ「これは出羽の羽黑山より出でたる山伏にて候。われ大峯葛城山に參らばやと存じ候間に、この度和州へと急ぎ候。（野守）

ワキ「あの伏屋の森に、帚木と申す木の候か。シテ「御覽候へ梢に一本うすうすと見えたるこそ帚木にて候へ、帚草に似たる木にて候により、帚木と申しならはして候。（木賊）

のやうに、鎌倉時代の候文を用ゐてゐるのである。當代室町時代語は、謠曲が典雅を重んずる關係上、常と用ゐてゐないが、尙且、

紫雲の棚引いたるを拜まいいたまうたか

何と舟が怪しいとや（國栖）

などが散見して居り、殊に間狂言の詞には當時の俗語を多く採り入れてゐるのである。卽ち謠曲文には、

七五調の歌詞　　普通散文

候文　　　　　　室町時代口語

を適宜に混用してゐるのである。

次にその歌章の修辭法を見れば、新古今集に於て極度に發展した、わが和歌の修辭、緣語・掛詞・序詞・引歌などが、すべてこれに利用せられてゐて、例へば

緣語には、

汐汲車わづかなる浮世をめぐるはかなさよ（松風）

旅衣末はるばるの都路を、今日思ひたつうらの波、……（高砂）

掛詞には

住み果てぬ住家は宇治の橋柱、立居苦しき思ひ草、葉末の露を憂き身にて、老い行く末も白梓弓　（浮舟）

今日出て初めて又いつか、歸らんことも片絲の、寄邊なき身の行方、さなきだに世の中は、浮木の龜の年を經て……（蟬丸）

序詞には、

海士の刈る藻に栖む蟲にあらねどもわれから濡らす袂かな（海士）

風にたゞよふ浮舟の數經の御供申さずして（大佛供養）

引歌には原歌のまゝ引いたものも甚だ多いが、所謂本歌取りには、

徒らに過ぐる心は早けれど、身になす事は貞川、流れて早き月日かな（錦木、草紙、古今「徒に過ぐる月日は思ほえで花見て暮らす春ぞ少き」。古今「昨日といひ今日と暮らして飛鳥川流れて早き月日なりけり」。）
これまでなりや旅人よ。暇申して花は根に、鳥は古巣に帰る春の、鳥は古巣に帰るなり、よくよく弔ひてたび給へ（千載「崇徳院」花は根に鳥は古巣に帰るなり春のとまりを知る人ぞなき」）

これらの修辭を綜合して用ゐたものは、前に掲げた「鉢木」の道行（六九頁）の如きもので、これによつて、旅程とその景趣とが、よく感情と、叙事・叙景・抒情の三つを合に調和し得てゐるのである。

なほこの外、謠曲の修辭には、

折字

竹に生まるゝ鶯の、竹生島詣で急がん（竹生島）
雪を先立て影積む、佛の御寺尋ねん（山姥）

頭韻

たけぬなさけのなかなかに、たるるや恨みなるらん（千手）
たすけたまへやたび人よ（善知鳥）

重音

富島の濱屋長陽籠波、名には絹島といひながら（絃上）
夕汐もさすやらん、さすがに我も平家なり（景清）

接續

用語の自然

月も南の海原や、八島の浦を尋ねん（八島）

背くとならば墨にこそ、そむべき袖のあさましや、やつれ果てたる有様を（景清）

数語

月は一つ、影は二つ、みつ汐のよるの車にのせて（松風）

天下第一の、二つ銘の御劔にて、四海を治め給へば、五穀成就も（小鍛冶）

對語

行けば深山もあさぢよい、木曾路の旅に出でうよ（巴）

忘れは草の名に聞きて、忍ぶやわが身たるらん（大佛供養）

など様々の技巧が用ゐられてゐるのである。

謠曲には右のやうな様々の修辭法が用ゐられてゐるが、その間にも、人體による用語の區別に特別の注意をしてゐる。ワキ名乘の條（六四頁）に擧げた三種の用法によつて、身分の階段を示してゐる如きものがその一例で、或は又その心理變化を示すにも、

トモ「いかにこの藁屋の内へ物問はう

シテ「そも如何なる者ぞ

トモ「流され人の行方や知りてある

シテ「流され人にとりても、名字をば何と申し候ぞ

トモ「平家の侍悪七兵衛景清と申し候

シテ「げにさやうの人をば承り及びて候へども、……ところにて御尋ね候へ

のやうに、トモについては、乞食に對する尊大と、かれもの父の名を呼ぶ時の敬意を示してゐ、シテについては、昔ながらの武士的尊大から、次第に現在の境遇に思ひ當る謙抑の心持を示してゐるのである。

七、謠曲の作者

以上述べ來つた謠曲は、第一章（三三頁）に於て說き及んだやうに、世阿彌を初め多くの申樂師によつて作られたものであることは、世阿彌十六部集の發見によつて明確となつた。しかし數多い謠曲の、どの曲を誰が作つたかについては、明かでないものが少くない。今最も信憑すべき世阿彌十六部集の記事及び大永四年吉田兼將の著能本作者註文、明和年間觀世元章の著二百十番謠目錄に所傳のあるものを列擧すれば、

○印は世阿彌十六部集　◎印は能本作者註文　△印は二百十番謠目錄所傳

觀阿彌作

（謠目錄に「結崎治郎清次、本氏平、服部、稚名觀世丸、後三郎、落髮號觀阿彌宗旨、應永十三丙戌五月十九日死、五十二歲」と。歿年の誤は二八頁に正した）

たうらうの能◎　四位少將（通小町か）○　小町（關寺小町か）○　自然居士○△　白髭△　花筐△　松風△　卷絹△　百萬△　鵜飼△　松尾△　淡路△　吉野靜△　草子洗△　求塚△　錦木△　卒都婆小町△　道成寺△

世阿彌作

（謡目錄に「結崎左衛門大夫秦元清、清次嫡男、稚名藤若丸、後三郎、落髪號二世阿彌宗全」、康正元乙亥七月廿二日死、
八十一歳」とあるが、その歿年は誤つてゐる。三六頁參照）

相生◎○△（高砂）　八幡◎○△（放生川）　養老◎○△　老松◎○△（追松）　泰山府君△○　實盛△○　敦盛△○

薩摩守◎○△（忠度）　清經△○　賴政△○　松風村雨◎（改作）△（松風）　檜垣女○△（檜垣）　布留◎○△　蟻通◎○△

佐野船橋○△（改作）（船橋）　戀重荷○△（改作）　百萬△（改作）　[illegible]○改作　高野○　高野物狂△　土車◎○　鵜飼◎○

鹽釜○（融）　阿古屋松△○　弓八幡△◎　浮舟△（作曲）　盲打　西行◎　白樂天△○　黒主△○（志賀）

白主○△（葛城鴨）　難波△○　御裳濯○（御裳濯川）　金札△○　佐保山△○　吳服△○　右近△○　道明寺△◎

箙○△（箙梅）　田村○△　兼平○△　忠信△○　知章△○　經政△○　朝長△○　八島△○　采女△○　佛原△○

東北○△（軒端梅）　野々宮○△　井筒○△　二人靜○△　熊野△○　三井寺△○　櫻川△○　隅田川△○　蟬丸△○

班女△○　雲雀山△○　關寺小町△○　碪△○　三山△○　籠太鼓△○　富士太鼓△○　三輪△○　[illegible]△○　海

土△○　當麻△○　杜若△○　葛城△○　誓願寺△　鵜浮△　櫻枝△○　[illegible]　俊寛△○　葵上△○　木

賊△○　東岸居士△○　花月△○　雲林院△○　阿漕△○　善知鳥△○　通小町△○　蘆刈△○　大蛇△○　松虫△○

鵺△○　項羽△○　車僧△○　春日龍神△○　（舍利）○　擣衣△○　錦木△○　弱法師△○　龍尼○　昭君○

吉野琴○　伏見○　神在月○　逆鉾○　鶴羽○　箱崎○　七夕○　玉井○　道盛○　實任○

志賀忠度○　次信○　伏見（木）曾我○　江口○　源氏供養○　吉野靜○　飛鳥川○　花筐○　水

無月夜○　經書○　末松山○　竹雪○　卒都婆小町○　求塚○　みなせ川○　玉○　[illegible]寺○

鵜飼○　山姥○　[illegible]○　[illegible]○　錦木○　[illegible]○　[illegible]○　[illegible]○　[illegible]○　[illegible]○

逢坂物狂○　丹後物狂○　高野物狂○　敦盛○　自然居士○　女郎花○　[illegible]居士○　[illegible]

氏○　[illegible]○　[illegible]○　[illegible]○　[illegible]○　[illegible]○　[illegible]○　酒呑童子○　[illegible]○　[illegible]○

[illegible]○　昭君○　[illegible]○　[illegible]○　野守○　[illegible]○　満仲○　[illegible]○　[illegible]○　[illegible]○

西王母△　邯鄲△　[illegible]△　猩々△　富士山△　[illegible]△　[illegible]△　[illegible]△　[illegible]△

鷺△

觀世元雅作

（書目録に「結崎十郎太夫元雅、元清嫡男、長禄三己卯十月九日死、六十五歳、法名大圓」と）

角田川△　弱法師△　盛久△　石橋△

觀世小次郎作

（書目録に「觀世小次郎太夫信光、觀世音阿彌七男、法名大賓宗松、永正十三丙子七月七日死、八十歳」と）

玉井○　大蛇○　胡蝶○　遊行柳○　[illegible]○　羅生門○　皇帝○　[illegible]○　張良○　龍虎○

巴園○　[illegible]太子○　[illegible]○　[illegible]○　九世戸○　吉野天人○　[illegible]山○　三井寺[illegible]○　[illegible]○

維盛○　愛宕○　[illegible]太郎○　らうとしや○　[illegible]○　富士○　[illegible]○　[illegible]○　龜井○　[illegible]

天○　二人御子○　木船○　けうぼう女○　安宅△　巴△　紅葉狩△

觀世彌次郎作

（書目録に「觀世彌次郎奉長俊、信光嫡男、天文十辛丑年死、五十三歳、月日未詳、法名心誉」と）

輪藏△○　葛城天狗△○　大社△○　正尊△○（昌俊）　江ノ島△○（榎島）　香椎○　花軍○　滑春○　廣元○

木玉○　嚴島○　みう一本嵩○　輔義○　鐘志○　選任○　隆寬○　千手○　陵王○　しうら

う○　岡崎○　呂后○　異國退治○　長興寺○　榕塚○　老子○

音阿彌作

（觀世大夫三郎元重とは別人であるらしい」三六頁參照）

住吉○

金春禪竹作

（書目録に「金春式部大夫氏信、元清聟、若名彌三郎、後禪竹」と、三六頁參照）

矢立加茂△○（賀茂）　芭蕉△○　小鹽△○　西行櫻△○　鐘馗△○　雨月△○　小督△○　楊上△○　千手重衡△○（千手）

楊貴妃△○　龍田△○　虎送△○　定家△○　白鬚△○　西王母△○　六浦△○　竹生島△　江口△　[illegible]△

蘆刈△　山姥△　安達原△　大會△　放下僧△　照君△　谷行△　熊坂△

金春禪鳳作

（書目録に「金春八郎奉元安、法名桐林禪鳳」と、禪竹の孫である）

東方朔△○　生田△○（生田敦盛）　一角仙人△○　嵐山△○　初雪○　野守△

金春善德作

（閱歷明かでない）

青[illegible]○

外山又五郎吉廣作

[illegible]△

金剛彌五郎作

鳥追船一　生田八

宮増作

（「能本作者註文に「勝之上手云々」と。宮増はもと近江猿樂の座名[illegible]といふ。宮増は一座の何人であるかは分らない。吉田東伍博士は文明年中の觀世座に出仕する鼓打宮増[illegible]日吉[illegible]といふ）

大會一○　鞍馬天狗○　浦島○　元服曾我○　錦戸○　大木○　小袖○　春榮○　調伏曾我○

[illegible]車○　遺跡八　攝待一　大江山一　烏帽子折一

日吉安清作

（[illegible]日録に「日吉四郎次郎安清、後佐阿彌、長祿二戊寅八月四日死、七十六歳」と）

六浦一　殺生石一　六月祓△　蟬一　吉野天人一　高野物狂一　[illegible]一

近江能

（能樂大成當時近江猿樂で演じてゐた古作であらう）

安達原○　羊○　放下僧○　熊野参○

江渡左衛門作

（謠曲目錄に「號五郎」と。猿樂新座河內榎並の申樂師、應永頃の人）

柏崎◎原作　鵜飼◎原作

△　　　　△

井阿彌作

（應永頃の人）

通盛◎、丹後物狂◎　靜◎

△　　　△

河上神主作

（能本作者註文に「和州十二大夫先祖」と。實生十二五郎。申樂談儀に十二權頭康次として見ゆ）

源氏供養○　朝比奈○　文學○　小手卷○

龜阿彌作

（申樂談儀に、音曲の先祖と推賞してゐる、幼名龜夜叉、後に喜阿彌といつた田樂師）

女郎花△

横尾光久作

浮舟◎

（申樂談儀に「これは素人横尾光久と云ふ人の作、曲は世子附く」とあり、次の說は誤りである）

細川弘源寺作

（持之。永享頃の幕府管領で、勝元の父）

浮舟○

奥江元久作

（横尾光久の誤りであらう）

浮舟△

竹田法印宗盛作

（竹田姓であるから、金春座の者であらう）

善界○

小田垣能登守作

[illegible]○

内藤左衛門作

（古本作者注文には、内藤藤左衛門作、後には河内守と云、とある）

[illegible]○　俊成忠度○　木曾浮舟○　[illegible]△

三條西實隆作

（實隆が某曲を作ったことは、同公記文龜三年八月十九日の條にも、一條冬良の桃花老人申樂後記にも見ゆ）

狹衣○　常盤○

福來

（閲歴を明かにしない）

待羅物狂△

第四章　能楽の演出

二曲三體

一、能楽の種類

能楽の詞章として、謡曲の作られた數は、世阿彌以來今日までのものを合はせれば、非常な多數に上るのであるが、現在傳つてゐるのは、番外曲などは別とし、完曲で八百餘りあり、その中、觀世・寶生・金春・金剛・喜多の五流で實際演じてゐるのは二百三十五番（昭和四年初に金剛流が新に加へる旨發表した曲は、未だ行はれてゐないから、こゝに加へない。第七章現行曲目一覧表參照）である。——能楽一曲を一番といふのは、舞楽の左右舞一番を轉用したものであらう。——それほど多數に亘るのであるから、その内容脚色も亦多種多樣であること、前章に述べた通りであるが、世阿彌はこれを扮態によつて、女・老人・直面・物狂・法師・修羅・神・鬼・唐事に分類し（花傳書）、これらすべての基本を舞・歌の二曲、老・女・軍の三體とし（至花道書）、能作書には、老・女・軍の三體に遊狂を加へ、且軍體の用風砕動風を合はせて五種類とし、

八幡（放生川）　相生（高砂）　養老　老松　塩竈（融）　蟻通　如レ此老體

箱崎　鵜羽　盲打　静（吉野静カ）　松風村雨　百萬　浮舟　檜垣女　小町（關寺小町カ）　如レ此女體

通盛　薩摩守（忠度）　實盛　頼政　清經　敦盛　如レ此軍體

丹後物狂　自然居士　かうや（高野物狂）　逢坂　如レ此遊狂

五番立

重衡　佐野船橋　四位少將(通小町カ)　泰山府君　如此砕動風

を擧げて、「新作の本體」としてゐる。そして、その演能順について、

序は初めなれば、本風の姿なり。脇の申楽、序なり。直ぐなる本説、さのみに細かになく、祝言なるが、正しく降りたるかゝりなるべし。……二番目の申楽は、脇の申楽には變りたる風體の、本説正しく、強々としたらんが、しとやかならん風體なるべし。……三番目よりは破なり。これは序の本風のすぐに正しき體を細かなる方へ寫し現す體なり。……(覺習條々)

といひ、一日の演能曲數についても、

申楽の番數の事、昔は四五番には過ぎず。今も神事勸進等には、信の能の申楽三番、狂言二番、已上五番なり。近年貴所樣にて仕る事は、殊の外に番數を盡して、七八番、十番など、貴命にて仕る事、私ならず。然れば、能の序破急の事、脇能は序なり、二番三番四番は破にて、事を盡して、五番目は急にてはてゝ、序破急納まりて、道樂成就の一會なるに、思はざるに、番數重なれば、序破急また改まりて、曲道も前後する風體なり(習道書)

といつてゐる。この主張によつて、脇能から二番目・三番目・四番目・尾能といふやうな演能順が定められるやうになつた。尤もこの五番立の確立したのは、徳川以後のことで、且略脇能・略三番目などといつて、彼此融通するものの少くない、甚だ粗雜な分類であるが、これを神・男・女・狂・鬼といつてゐる大體の標準についていへば、

脇能

(イ)脇能　〔翁〕の脇能といふ意の名稱で、〔翁〕は別曲として、普通能の最初に演ずるものとして、めでたい祝言の意に叶つたものを擇び、これを一に神事物ともいつて、神社の縁起や和歌を材料として、これに關係

二番目

三番目

四番目

尾能

ある神靈が影向せられ、神舞・樂などを舞はれるといふやうに脚色してゐるもの。（例〔高砂〕〔弓八幡〕〔養老〕）

（ロ）二番目　一名を修羅物といつて、戰爭に討死して修羅道に墮ちた武士の亡靈が現れ出で、旅僧に戰爭の有様を物語り、その回向を乞ふといふ筋のもので、材料としては、平家物語などの軍記物から採り、その主人公が舞臺でカケリ・働などといふ戰ひの凄じい形を演じて見せるもの。（例〔田村〕〔八島〕〔忠度〕〔兼平〕）

（ハ）三番目　鬘物といひ、女性を主人公としたもので、こゝに現れる女性は、いづれも平安朝時代の、或は平安朝風の優雅な人達で、伊勢物語・源氏物語などから材料を擇び、その主人公に序舞・中舞などの優美な舞を舞はせるもの。（例〔井筒〕〔采女〕〔夕顏〕〔松風〕）

（ニ）四番目　現在物といひ、これまで擧げて來たものは、皆歷史的人物の幽靈や神佛の影向であるのに對し、この主人公は故人の亡靈ではなく、現在生きてゐる人物として現れるのであつて、普通の劇と同じ形のものである。從つてこれには時代物と世話物との二種類があり、時代物では多くは源平時代の武士を主人公とし、義經記・曾我物語などに書かれてゐる判官傳說・曾我傳說、又は修羅物と同樣な平家物語等を材料としたもので、多くは男舞を舞ひ（例〔小袖曾我〕〔安宅〕〔盛久〕）、世話物の方は名の如く當時の世相を材料としたものであるが、最も多いのは、わが子の行方を失つた母親の悲しみを主題としたもので、これを狂女物といひ、所謂物狂を演ずるもの。（例〔三井寺〕〔櫻川〕〔百萬〕）

（ホ）五番目・尾能　鬼畜物といひ、色々の傳說文藝から材料をとつてゐるが、この能の主人となる鬼畜には、性質の善良なもの（例〔猩々〕〔鞍馬天狗〕〔合浦〕）と、兇惡なもの（例〔紅葉狩〕〔大江山〕〔一角仙人〕）とがあり、その兇惡なものは勇士に退治せられ、善良なものは人間に福德を授けて、結局その曲の主人公が善惡いづれ

であるにもせよ、めでたい結末となるのであつて、かくの如くにして、一日の演能は首尾相應し、めでたく終ることとなつてゐるのである。

二、能舞臺

生成期の舞場

能樂の演ぜられる場所は、これを能舞臺といつて、特殊な建築で出來てゐるが、古い生成期には野外の平地で演ぜられたものと見え、華嚴堂縁起の猿樂古圖（九一頁）では茣蓙の上で舞つて居り、古式を傳へた春日神社の能では、今でも平地をそのまゝ、舞場として、若宮御能初日（十一月二十七日）には影向の松を舞場の目じるしとし、同二日目御旅所の能には土壇を築いて演舞の區劃とし、薪能（二月七日から晴天七日間）には兩々に篝火を焚いて舞場の區劃としてゐるのである。しかし、これは古い時代、特殊な場合だけのことであつて、能藝が發達して來て、見物人が多く集まるやうになれば、觀覽の便宜上、高い舞臺を要求するやうになるのは自然の數で、かの貞和五年の勸進田樂にも、既に立派な舞臺や棧敷が作られてゐたのである。

舞臺の發達

この舞臺は、申樂座がもと神社に附屬してゐた關係上、神社の拜殿、神樂殿を借用したことゝ、容易に想像せられるのであるが、それは假設臨時の舞臺であつて、能舞臺としては、申樂がもと田樂と併行した關係上、殊に田樂の民衆化として發展して來た關係上、田樂舞臺の樣式を採ることとなつた。今日の能舞臺に、正面前方に三級の階段のあるのも、その一證左であらう。――舞臺といふ名稱も舞樂のものを轉用したのである。

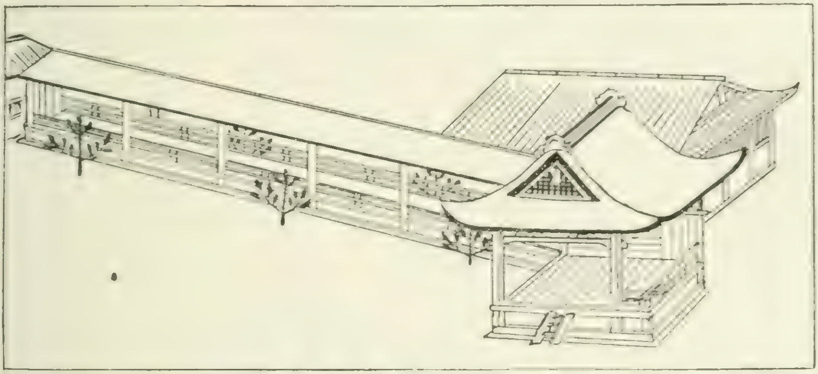
能舞臺は舞樂舞臺の樣式を採つたのであるから、役者の出入する道、――橋懸（はしがかり）も、その始めはやはり舞臺の後方にあつたらしいが、田樂も申樂も古くから立合といふことをして、さういふ場合には役者の通路を東

西の両側に置いた。前掲太平記にも「新本の老若、東西に幄を打つて、両方に橋懸を懸けたり」と記してゐるのである。これが本となつて、立合でない場合にも、橋懸を横側につけることを考案したらしい。夙く申楽談儀に、

勧進の桟敷數、凡そ六十二三間なり。間の廣きこと五尺なり。……橋は幕屋口を高く拵え、低く直に架くべし。中高に反るは悪きなり。橋の當は舞臺の日かくしの柱の中手よりは、側へよせて、片面の柱半間ばかり置きて架くべし。舞臺は前後左右へもよらず、桟敷の中程なるべし。

といつてゐるのを見ると、世阿彌は既に橋懸を横斜につけるものとしてゐたらしいのである。尤もこの橋懸を横斜につけた明證は、天正十三年(二二四五)七月、豐臣秀吉が参内した時の能舞臺に初めて現れるのであるが、その後の記録にはいづれも横斜に架けてあつて、徳川時代、何事にも規矩の重ぜられるやうになつてからは、能舞臺の寸法もすべての部分が一律に規定せられるやうになつた。今その標準と見るべき江戸城内本丸表能舞臺について見ると、

舞臺の寸法はすべて京間即ち六尺五寸一間で、
本舞臺の大きさが三間四方
後座の奥行は一間半
地謡座の幅は半間
舞臺床板面まで高さ二尺六寸四分、床板面から天井裏化粧棰まで高さ一丈七尺餘
舞臺の屋根形は入母屋千鳥破風



舞臺圖

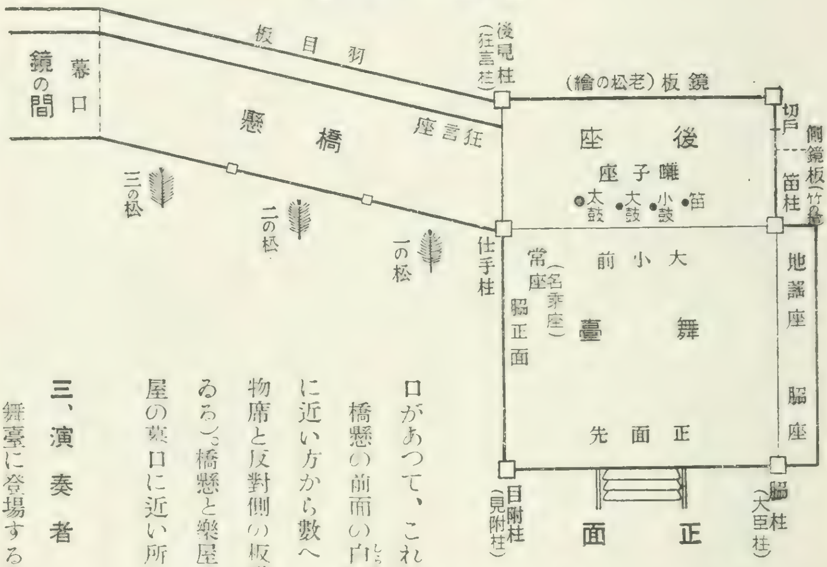
橋懸の角度は前勾欄から柱と脇座間との引通し、その長さは柱間が五間で總長實寸八間四尺五寸、幅は七尺三寸五分、橋懸の柱頭構造は大斗肘木組、左右兩側に勾欄附し

卽ち、能舞臺はその主要部である三間四方の舞臺（本舞臺）と、その後方約一間半の後座と、舞臺に向つて右方に約半間ばかり延びた部分の地謠座（その前方を脇座といふ）と、後座と演者が仕度を整へる樂屋とを聯絡した廊下めいた部分の橋懸と、大體四つの部分から成立つてゐるのである。

なほ序にその細部につけられた名稱を擧げると、舞臺の前方を正面といひ、向つて左側卽ち地謠座の反對側を脇正面又は横正面といひ、脇正面の後方はワキが名乘を述べ又シテが常に演奏の基點とする所であるから、これを名乘座又は常座といふ。地謠座及び脇座は地謠又はワキが着座する所であり、後座の前方、舞臺に接した所は囃子方の着坐する所で、これを囃子座といひ、更にこれを分つて向つて右より順次笛座、鼓座、太鼓座といひ、その前方を囃子座前、分つて笛座前、大小前、太鼓座前といふ。後座の左後方の隅は後見役の坐る所で後見座といひ、橋懸の後見座に隣

演奏者の名稱

舞臺平面圖



接した所は間狂言の坐る所で狂言座といふ。

舞臺の四隅の角柱の中、常座に近い即ち橋懸と舞臺との間にあるものを仕手柱といひ、その前方のものを見附柱又は目附柱といひ、脇座に近いものを脇柱、笛座に近いものを笛柱といひ、後座と橋懸との間にあるものを後見柱又は狂言柱といふ。後座の後方の羽目板には老松の繪を描いてこれを鏡板といひ、後座の右側面には片引戸の出入口があつて、これを切戸口といひ、ここにも若竹の繪を描く。

橋懸の前面の白洲には橋懸に沿つて三本の若松を植ゑ、これを舞臺に近い方から數へて一の松・二の松・三の松といふ（古くは見所――見物席と反對側の板附の側にも二本の若松を植ゑたが、今は大抵省いてゐる）。橋懸と樂屋との間を幕口といひ、五色の揚幕を垂れてゐる。樂屋の幕口に近い所には姿見の大鏡を置いて、これを鏡の間といふ。

三、演奏者

舞臺に登場する役々のうち、一曲の主演者をシテ（爲手又は仕手）

地謠

といひ、シテの相手となるものをワキ（脇）といひ、シテ又はワキに附隨する者をシテヅレ（單にツレともいふ）又はワキヅレといひ、子供をして演奏せしめるものを子方といふ。以上の役々は一曲の中途で装束を出入することがあり、この場合前役又は後役に登場するものをそれ〴〵前ジテ、後ジテ、前ヅレ、後ヅレ等といふ。シテヅレ又はワキヅレで單純な從者の役をなすものをトモ又は太刀持といひ、多人數で連れ立つて出るものを立衆といひ、謠の一部分地を多人數で同吟するものを地謠といひ、シテが中入した後再び登場するまでの間語を勤めるものを狂言又はヲカシといひ、笛・小鼓・大鼓・太鼓の役を囃子方と呼んでゐる。なほこの外に、舞臺の後方にゐて演出者の装束その他に手落のないやうに注意し、又作物の出し入れをするものを後見といふ。これらのうち、狂言・囃子方は早くから分業制度になつてゐて、狂言には世阿彌の頃に槌大夫といふ上手があり、囃子方にはそれよりも古く名生といふ上手もあつたが、シテ・ツレ・ワキ・地謠はその曲毎に配役せられたもので、分業になつてゐなかつたが、室町末期にまづワキを勤める特別の家柄が出來てワキ方を稱へ、徳川時代になると、ツレ方の家柄も定まるやうになつたことは前に述べた通りである。

さて、これらのうち、シテ・ワキ・ツレの發達については、前章に述べたから、こゝには地謠及び囃子方について見ると、地謠はもとシテの歌聲を助ける趣旨から發展したもので、能樂の先進である連事や風流にも「同音」といふ名で行はれてゐたが、更に古く溯ると、呪師にもこの種のものがあつて、前に擧げた玉葉の建久二年二月七日の記事（八頁）にある、唱人は地謠、唱人座は地謠座と解せられるのである。そしてこの唱人の着る半臂袍とは、舞樂の装束に常装束・半臂装束・裲襠装束の三種類あるその一種で、舞樂の流れを汲んだものと察せられるのである。

囃子方の方も、同書に樂人とあるのが、これに相當するものかと思はれるが、この樂器もやはり舞樂に直似て、笙・篳篥・笛・鼓を用ゐてゐたことは、藥師堂緣起猿樂古圖の囃子によつて證せられるのである。しかし、これらの樂器のうち、笙・篳篥などの吹奏樂は細かなリズムを表して、謠ひ物の伴奏とするには適してゐるが、間拍子をとつて同吟しながら、舞を舞ふ能樂のやうなものには、鼓などの打樂器の方が適してゐる。それで、舞樂で用ゐてゐた吹奏樂器のうち、笛だけを殘して笙・篳篥を廢し、その代りに打樂器の方を改良して、大小鼓・太鼓を用ゐるやうになつたのではなからうかと思ふ。



猿樂古圖（歌舞音樂略史に據る）

なほ裝束の方も、古い時代には舞樂裝束を用ゐたが、能樂の發達するにつれて、主演者たるシテ・ツレ等の裝束については、綿密な考慮を廻らすとともに、伴奏者たる囃子方や地謠については、寧ろ主演者を引立たせる爲に、その裝束を簡略にし、世阿彌が習道書に「烏帽子・素襖の私姿に」同音

扮裝と面

を謳ふ」といつてゐるやうな、時代服裝となり、下つて徳川時代には上下となり、たゞ「翁」には古風を遺して烏帽子・素襖の裝束を用ゐる、重習物には長上下を用ゐ、繪給裝束に跡をも留めなくなつたのである。

四、能　面

舞樂に於て、管方の裝束はどの曲についても一様であるが、舞人の裝束は曲の種類によつて異つたものを用ゐるやうに、能樂に於ても、囃子方・地謠の裝束は常に同じであるが、演舞者であるシテ・ツレ・ワキ等の裝束は、それ〴〵その曲柄にふさはしい扮裝をする。

まづ顔面扮飾の沿革を見ると、古く隼人舞の起原を記した神代紀の一書に、

於レ是兄著二犢鼻一、以レ赭塗レ掌塗レ面、告二其弟一曰、吾汚レ身如レ此、永爲二汝俳優者一

とあつて、顔に色どりを施してその人物を表したもののやうであり、後世の歌舞伎も亦隈取りによつて、その人物の性格を示してゐて、わが國固有の歌舞演藝には面をつけないやうで、田樂の方でも、陰涼軒日錄寛正六年十月五日の條に、

田樂永阿彌勤二女能一、殊不レ著レ面、爲レ可レ笑也、田樂元來於二南都一不レ著レ面、仍爲二素面一可レ被二笑嘆一

といつて居る。尤も太平記にも勸進田樂の時、鬼面をつけてゐたことを記して居り、全く面を用ゐないではなかつたが、女性に扮する場合などには面をつけないのを本旨としてゐたらしいのである。

然るに、能樂ではワキと子方とが直面(ひためん)である外、シテとツレとは大抵の場合に面をつけて登場するのである。このやうに面を用ゐることは、唐樂・高麗樂・伎樂など外來樂の常例で、能面はこの外來樂の影響を受

尉面

男面

けたものに相違ないが、そのいづれの樂に據つたものであるかについては異論が多い。中にも伎樂面に據つたものであるといふ高野博士の說は有力なもので、博士の指摘せられた通り、異相面の癋見・獅子口・惡尉などは形も大きく、伎樂面に近似してゐるが、一般に伎樂面は形が極めて老大であるのに反して、能面は大抵小柄であつて、この點は寧ろ舞樂面に近い。――異相面の釣眼などは明らかに舞樂面拔頭を模したものである。――恐らくは二三の異相面を除いては、伎樂面よりも寧ろ舞樂面に暗示を得て、能面として新しく創作したものでなからうかと思ふ。

さて、能面は神・男・女・狂・鬼、その能柄に適ふやうに、多くの種類を持つてゐるのであるが、その主なものを擧げれば、

尉面

白式尉　黑式尉　小牛尉　石王尉　朝倉尉　三光尉　皺尉　惡尉　鼻瘤惡尉　茗荷惡尉

尉

これらの中、白式尉は翁に、黑式尉は三番叟に限つて用ゐ、他の面は彼此融通して用ゐるが、小牛尉が品のよいものゆゑ〔高砂〕〔難波〕等脇能の前ジテに用ゐ、石王尉は〔老松〕〔羅生門〕などのシテに用ゐ、朝倉尉は用途の多いものゆゑ〔融〕〔阿漕〕〔兼平〕などの前ジテに用ゐ、三光尉もこれに似て〔八島〕〔忠度〕などの前ジテに用ゐ、皺尉は〔老松〕の後ジテ〔西行櫻〕のシテ等に用ゐる。惡尉物は寧ろ異相面と見るべきもので、惡尉は〔白髭〕〔張良〕等の後ジテに、鼻瘤惡尉は〔玉井〕〔大社〕等の後ジテに、茗荷惡尉は〔張良〕〔寢覺〕の後ジテ等に用ゐる。

男面

邯鄲男　中將　今若　十六　童子　慈童　平太　若男　淡男　蛙　瘦男　三日月
喝食　俊寛　頼政　景清　弱法師

これらのうち、邯鄲男は氣品の高いもので「高砂」「弓八幡」の後ジテなど神體に用ゐ、中將は貴族的な男性である「通盛」「清經」「雲林院」の後ジテなどに用ゐる、十六も大體中將に似たそれよりも稍年若な感じを與へるもので、「敦盛」「經正」「知章」の後ジテなどに用ゐる、童子・慈童はずつと年若な「田村」「小鍛冶」などの前ジテ・「石橋」のシテなどに用ゐる、平太は中將に似て稍武張つた「兼平」「田村」「八島」などの後ジテに用ゐる、若男・今若は通俗的な男性「藤戸」のシテ「女郎花」の後ジテなどに用ゐる、淡男・蛙・瘦男は凄味のある「阿漕」「善知鳥」「藤戸」の後ジテなどに用ゐる、喝食は名の通りに「自然居士」「花月」などの喝食僧に用ゐる、その外、「俊寛」「頼政」「景清」「弱法師」などにはその曲特定の面を用ゐる。

姥面

姥　老女　山姥

姥は「高砂」「雨月」の前ツレ「[illegible]待」のツレなど普通の老女に用ゐる、老女は「卒都婆小町」「檜垣」「姨捨」のシテなど特殊な老女に用ゐる、「山姥」には特定の面を用ゐる

女面

増　深井　小面　若女　曲見　瘦女　泥眼　連面

増は氣品のあるもので「羽衣」「吉野天人」「龍田」のシテなどに用ゐる、深井は増に似て「櫻川」「三井寺」のシテなどを主として無色の女物に用ゐる、小面・若女は普通の三番目物や、年若の女性に用ゐる、曲見は「芭蕉」「柏崎」などや

異形面

狂言面

中年頃の女性に用ゐ、痩女は痩男に對立したもので凄味のあるもので「定家」「砧」の後ジテなどに用ゐ、泥眼は一層凄味のあるもので「鐵輪」「葵上」の前ジテなどに用ゐ、その外女ツレの時は大體常品の輕い連面を用ゐる。

異形面

天神（てんじん）　釣眼（つりまなこ）　大飛出（おほとびで）　小飛出（ことびで）　大癋見（べしみ）　小癋見　顰（しかみ）　獅子口（ししくち）　獅子（しし）　般若（はんにゃ）　鬼女（きぢょ）

眞蛇（しんぢゃ）　一角仙人（いつかくせんにん）　熊坂（くまさか）

前に擧げた尉面・男面・姥面・女面は、實人間の顔よりは稍〻小さい、しかもその人體を極めて和らかに表現した、能面として特色のあるものであるが、こゝに擧げた面には形が大きくて、その表現も甚だ誇張したものが多い。そのうち、天神は普通の男面に近く「養老」「藍染川」の後ジテなどに用ゐる、釣眼は舞樂面拔頭を摸したもので「賀茂」「嵐山」の後ジテなど神佛に用ゐ、大飛出もこれに似て「國栖」「氷室」の後ジテなどに用ゐる、小飛出は「殺生石」「小鍛冶」の後ジテなどに用ゐる、大癋見は「鞍馬天狗」「大會」の後ジテなど天狗に用ゐ、小癋見は「鵜飼」「昭君」の後ジテなどに用ゐ、顰は「大江山」「土蜘蛛」の後ジテなどに用ゐ、獅子口・獅子は「石橋」「紅葉狩」の後ジテ等に用ゐ、般若・鬼女・眞蛇には二本の角があつて「葵上」「道成寺」の後ジテなど女性の鬼女となつたものに用ゐ、「一角仙人」「熊坂」などには特定の面を用ゐる。

狂言面

登髭（のぼりひげ）　見徳（けんとく）　鼻引（はなひき）

本狂言には登髭、見徳を、間狂言には鼻引を用ゐる。間狂言の面はあまり種類がないが、普通の狂言には、祖父、乙、武惡、白藏主、狐、神の面、惠比須などがある。

冠り物

五、能裝束

次に能裝束について見ると、蒲涜准后日記正長二年（二〇八九）五月三日の條に、

於二室町殿御所笠懸馬場一、觀世大夫兩座一手、寶生大夫十二五郎一手にて出合申樂在レ之、如二多武峯嚴重一、致二其沙汰一了、乘馬甲冑等悉實馬實甲冑了、驚二耳目一了。

親元日記寛正六年（二一二五）九月二十五日の條にも、

於二御所一猿樂、四座立合、多武峯樣能在レ之、馬鎧用云々

とあつて、その裝束も甚だ寫實的のものであつたらしいが、それは特殊な多武峯樣の能に試みただけで、一般にはずつと象徴的な、しかし唐織・縫箔などの絢爛華麗なものを用ゐたこと、その大體を記すと、

冠り物

烏帽子　これに黑の立烏帽子で「翁」や「蟻通」に用ゐる翁烏帽子、その少し小い小立烏帽子、立烏帽子の上を横に折つた風折烏帽子、立烏帽子の一種で白拍子の用とする靜烏帽子、立烏帽子と同じ形で柔かに拵へた、武將の用とする梨打烏帽子、三角形の折烏帽子で武士に用ゐる侍烏帽子などがある。

冠　垂纓又は卷纓の普通の冠を初冠といひ、その外、纓の代りに巾子を立てた透冠、これに似た唐冠、舞樂に用ゐると同じ鳥甲、金の瓔珞の垂れた金屬製の天冠、これに似て瓔珞のない輪冠などがあり、天冠・輪冠には花や龍・鳥又は狐・龍・虎などを立てて、その物の精を象徴することが多い。

頭巾　僧形の被る角帽子・沙門帽子、山伏のつける兜巾、大黑頭巾の後に垂の下つてゐるやうな長範頭巾・頼政頭巾などがあり、狂言女には白布を頭に巻きつけて、その端を前に長く垂れた美男鬘をつける。

頭髪　着附　上衣

頭髪

頭（かしら）　幽霊・化現・怪物を表す場合などに用ゐる。毛の長い頭髪で、その色によつて、赤頭（あかがしら）、黒頭（くろがしら）、白頭（しろがしら）などといふ。

垂（たれ）　頭よりは毛の短いもので、その黒垂（くろたれ）は天女、白垂（しろたれ）は老體などに用ゐる。

鬘（かつら）　眞中から分け後頭で結んだもので、常に女性に用ゐる、これには必ず鬘帯（かづらおび）をつけてゐる。その鬘の長く垂れたものを長鬘（ながかづら）といふ。

髪（かみ）　老翁のつけるチョン髷形に結んだ白髪を尉髪（じょうがみ）といひ、白毛交りの髪を姥髪（うばがみ）といふ。

着附（きつけ）（下着の上に襲ねて着る小袖類の總稱）

厚板（あついた）　唐織に似たものであるが、殆ど上着には用ゐないで、主として男體の着附として用ゐる。

箔（はく）　金銀の形を置いた摺箔（すりはく）と、刺繍を施した縫箔（ぬひはく）とがあつて、いづれも女體の着附にする。

白練（しろねり）　純白のもので、氣品の高い男體に用ゐる。

白綾（しろあや）　男體の白練に對し、氣品の高い女體に用ゐる。

熨斗目（のしめ）　段（だん）と無地（むぢ）と縞（しま）との三種類あつて、主として水衣又は素袍を着る男體に用ゐる、間狂言が特殊なものを除いた外は皆これを着る。

小袖（こそで）　狂言女に用ゐる縫箔を單に小袖と呼んでゐる。

上衣

狩衣（かりぎぬ）　普通のものと大差ないが、袖の括り紐がすべて二筋で、單（ひとへ）と袷（あはせ）とがある。これに對する狩袴は用ゐないで、大抵大口をはく。主として大臣ワキに用ゐるが、神體の後ジテなども着る。

袴

長絹　長絹直垂の變化したもので、袖括りの緒や菊綴はなく、たゞ胸に紐、袖先に露をつけてあり、優美な武者にも用ゐるが、主として女體に用ゐるもので、殊に舞を舞ふ時には大抵これを着る。

舞衣　長絹に似たものであるが、長絹は腋下が離れてゐるのに反し、これは腋下を縫つて居り、長絹は露を出してゐるが、これは露でたらげる。〔富士太鼓〕〔當麻〕などの女體にのみ用ゐる。

水衣　大袖の衣で、ワキが着る時は僧衣の意味をなし、シテが着る時は漁夫樵夫などの庶衣として取扱ふことが多い。これに絓と縷との區別がある。

法被　武装に用ゐる半臂から出たのであらう。半臂の袖を廣くしたやうなもので、鎧の意味を表し、主として武將に用ゐることが多い。

側次　袖無しの法被で、粗末な鎧といふ意味で軍兵に用ゐることが多い。

唐織　女體の上着として用ゐる小袖で、能裝束中最も圖案を凝らしたものが多い。

袴

大口　もと下袴であつたのであるが、能楽に下袴として用ゐるのは赤大口で、普通の大口は上袴として用ゐる。袴の後を平たく強く張つてゐる。白地も色地もあり、男體にも女體にも廣く用ゐる。

半切　大口と同じ形で、金襴などの模様のあるもの。多くは法被の下として用ゐ、狩衣にも穿く。

指貫　能楽では高貴の人の穿くものとし、「大原御幸」の法皇や「頼政」などに用ゐ、この下には赤大口を穿く。

腰巻　縫箔を着附の上に腰から下に卷いて兩袖を後へ垂れるもので、女體にのみ用ゐ、上には大抵長絹又は水衣を着る。

上下

附属物

上下

直垂　普通の直垂で、梨打烏帽子又は侍烏帽子を被り、「藤戸」「盛久」のワキなどの武人に用ゐる。

素袍　これも普通の素袍と違はないが、「鉢木」「望月」の前ジテ、「蘆刈」のワキ、「隅田川」のワキヅレのやうな身分の低い男子に着る。「翁」の囃子方・地謡が着ることは前に述べた。

上下　これは勿論徳川時代のものである。古い時代には囃子方・地謡も直垂を、その次には素袍を着たのであらうが、徳川期以降囃子方・地謡の常衣となつたが、主演者は着ない。尤も間狂言の多くは狂言上下といつてこの模様のあるもの、又は長上下を着る。

附属物

腰帯　上帯に倣つたもので、腰に結んで前に垂れて置く上帯、その垂れた所は短冊を二つ並べたやうになつてゐる。主な演者にはすべてこれを用ゐ、能柄によつてその地質模様を區別してゐる。

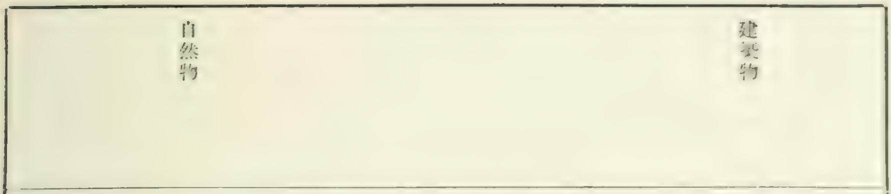
掛絡　袈裟であるが、普通のワキ僧は掛けず、特に高徳なワキ僧、又は道心あるシテがかけることとなつてゐる。

篠懸　山伏のかける、細長い帯形の袈裟で、鞍頭のやうな飾りがついてゐる。

腰蓑　腰につける藁で作つた蓑で、漁夫や舟夫の表章として用ゐることが多い。獵師の時には蓑の代りに羽で作つた羽蓑を、天狗の時には木葉をつけた葉蓑を用ゐることがある。

六、能作物・能小道具

能楽は象徴的な楽劇で、神・男・女・狂・鬼いづれの曲柄に於ても、鏡板に一本の老松を描いてあるだけ



で、外には何等の舞臺背景を施さない。從つて舞臺裝置といふべきものは殆どないが、曲柄によつては極めて簡單な暗示的な裝置を試みることがあり、これを作物と呼んでゐる。その主なるものを擧げれば、

建築物

一疊臺（いつでふだい）　一疊の廣さの臺で、家・家の一室・祭壇・家の上座・谷間・丘など色々の意味に用ゐられる。

宮（みや）　一疊臺の上に宮殿を象つた枠を載せ、屋根枠を美しい帛で卷き、壯觀な感じを與へるもの「竹生島」「嵐山」などに出す。

屋臺（やたい）　家を象つたものであるが、屋根板のあるのは「[illegible]」などだけで、普通は枠を以て屋根の意味を表してゐる。

庵（いほり）　これには屋根の形もないが、柱に蔦草などを卷きつけて、草庵の心持を表すことはある。「安達原」などに出す。

藁屋（わらや）　庵に似てゐるが、屋根だけ寫實的な藁葺にしたもの。「蟬丸」「景清」などに出す。

半蔀（はじとみ）　これも庵に似てゐるが、蔀を上へ押しあげるやうにしてゐる。「夕顏」「半蔀」に出す。

鐘樓（しゆろう）　細長い丈の高い枠の上に小さな鐘を釣り、撞木を添へ、長い美しい綱をつけたもので、「三井寺」に用ゐる。

鳥居（とりゐ）　簡單な鳥居で、「野宮」に出す。

片折戸（かたをりど）　扉も柵垣もあり、小さいながら寫實的なもので、「小督」に出す。

自然物

塚（つか）　竹で圓筒形のものを作り、色布で外を蔽ひ、上に柳・紅葉などをつけて、塚又は山の意を表し、「隅田川」「紅葉狩」「遊行柳」などに出す。

石（いし）　塚に似た形であるが、二つに割れるやうになつて居り、「殺生石」「一角仙人」などに出す。

舟車
その他
能小道具

立木（たちき）　二三尺の圓形又は方形の枠の中に、松・櫻などの枝を立てたもので、「羽衣」「紅葉狩」「嵐山」などに出す。

巣（す）　前にいつた庵に似たものに巣の形をした紙をはりつけたもの。蜘蛛の巣の意で、「土蜘蛛」に用ゐる。

舟車

舟（ふね）　これも枠だけで船の形をしたもので、「船辨慶」などに用ゐるが、「國栖」の船には引廻しを纏ひ、「江口」には屋形をつけ、「唐船」には帆柱と帆をつけてゐる。

車（くるま）　牛車に擬へたもので、屋形も簾も車輪も作つて居り、「熊野」「右近」などに用ゐる、「車僧」の椅子車もこれに似てゐるが、屋形はない。いづれもその中に一人入れるが、「松風」の汐汲車は極めて小さいもので、これは曳く紐だけ「三井寺」の鐘樓の紐のやうに長くしてゐる。

その他

この外、「道成寺」には大きな鐘を、「晃服」には美しい機を出し、「天鼓」「富士太鼓」などには楽太鼓に擬へた、臺の上に羯鼓をのせた羯鼓臺を、「皇帝」「昭君」などには鏡臺を、「賀茂」には矢臺を出すなど、全體として象徴的で、或部分を誇張した作物を出すことが少くない。

能小道具

作物の外、主演者が手に持つ小道具としては、殆どすべてが扇又は團扇を持ち、僧侶・山伏は數珠・刺高數珠を持ち、老人・盲人は杖を持ち、漁夫は釣竿を、舟夫は竹棹を持ち、鬼などは打杖を持つて出ることが多い。その外曲柄によつて、御幣を持つもの、草花を持つもの、えぶり（雪搔）さらへ（松葉搔）を持つものなどがある。

七、能樂の演奏

さて、以上述べ來た能樂を演奏するには、また一定の作法がある。その一般的なものに就ていへば、一曲演奏の最初に、囃子方は幕口より、地謡は切戸より出て、地謡は定規の座に二列に坐し、囃子方は笛・小鼓・大鼓・太鼓（太鼓は曲によつて出ないことがある）の順で、笛・太鼓は坐し、大小鼓は床几にかゝる。次に、作物のある時には、後見がこれを規定の場所に出し、その後、囃子方の演奏に從つて、シテが幕を上げさせて登場し、以下各曲それ〴〵の特色に從つて演出するのである。

能の型

しかも、この各曲の演出について、「能の型」といつて、進退所作の細部に渡つて嚴密な約束が定められてゐる。この型はその曲の制作當初から大綱規定されてゐたもののやうで、永い間には自然多少の變遷を生じたことは疑ひないが、現在殘つてゐる元祿頃手寫の型附書を見るに、現行のものと著しい相違を見出さないのである。但しその後にも新しい演出法を工夫したものがあり、これを從來の型を常の型といふのに對し、變の型といつてゐる。

型の名稱

型の名稱

能の型は極めて些細な點まで規定せられてゐて、從つてその一擧手一投足について、それぞれ特別の名稱がつけられてゐる。その主なものを擧げれば、

舞の手　物を指し示す所やうに扇又は手をさし出すのをさすといひ、後に引くのをひくといひ、扇を胸に卷き込むやうにしてさすのを胸ざしといひ、晴れやかな心持を示して扇を胸の所より上にあげるのをいうけん扇といひ、扇で招く形をするのを招き扇といふ。

面つかひ　顔を左右に廻して物を見ることを面をつかふといひ、下に向き悲しい心持を示すのを面を伏す又は面を曇らすといひ、手又は扇を顔に近づけて泣く形をするのをしをるといふ。

足つかひ　二足前に出るのをつめる（詰足）といひ、三足後に下るのをひらくといひ、片膝を立てて坐るのを下に居るといひ、踵を爪立てて坐るのを居立つといひ、膝を組んであぐらに坐るのを安坐といひ、立つたまゝ腰を曲げないで後に倒れるのを仏倒れといひ、左右の膝をかはるがはる立てて進むのをかつしといひ、音を表す為に、又は喜び或は驚きの心を示す為などに板を強く踏んで音を立てるのを足拍子といひ、足拍子のうち、一曲の終りに二つ踏むのを留拍子といふ。

舞の名目

能楽演技の中心的興味とされてゐる舞も亦型の定まつたもので、その種類に凡そ次のやうなものがある。

序舞　静かな品位のあるシテの舞で、笛大小鼓で囃す。太鼓の入ることもある。

中舞　普通、女シテの舞ふ、序舞よりはやゝ早いもので、太鼓の入ることも入らないこともある。

破舞　序舞又は中舞の後、少し謡があつて、また舞ふもので、中舞よりも位取りが早く、舞も短い。

天女舞　ほゞ中舞に似た、天女の舞ふもので、囃子には太鼓が入る。

早舞　位取りは早いが典雅な、いはばシテが興に乗じて舞ひ遊ぶといふ心持のもの、太鼓が入る。但し黄鐘早舞には太鼓がない。

急舞　位の極めて早い舞で、「道成寺」「紅葉狩」にある。

男舞　現在物直面の男シテの舞ふ曲で、位は中舞より早い。太鼓はない。

囃子の名目

神舞　[illegible]舞より品位のある舞で、位は男舞に等しく、太鼓が入る。

神楽　神子神楽に擬へたもので、神女・天女・巫女などの舞ふ、囃子には太鼓が入る。

楽　舞楽を舞ふ心のもので、位はやゝ静かであるが、拍子のノリのよい舞である。シテが人間以外で、太鼓は有無両様される。

羯鼓　シテが羯鼓である場合にこれを舞ふもので、羯鼓を胸につけて、撥でこれを打ちながら舞ふ、中の舞より軽快な曲である。太鼓は入らない。

舞働　龍神・鬼神などのする豪壮な動作で、囃子には太鼓が入る。

イロヘ　主として鬘物のシテの舞ふ、静かな簡単な曲。

カケリ　イロヘのやうに短いものであるが、修羅物や狂物のシテの演ずる、狂乱に近い苦悩な所作。

働　カケリに似たもの。

立廻り　イロヘとカケリとの中間に位するもの。

切組　カケリの一種で、斬り合ひの様を演ずるもの。

祈　シテが鬼女である場合、僧又は山伏がこれを祈り伏せようとして互に争ふ所作。太鼓が入る。

獅子舞　獅子の戯れる様に擬へた舞で、太鼓が入る。

乱　「猩々」と「田々」に舞ふ舞で、足取が乱拍子になつてゐる心持のもの。

乱拍子　道成寺の舞で、これは小鼓一調で囃す。

能樂演出の伴奏を勤める囃子も亦その曲柄・章節に應じて、樂器の種類、音の高低強弱・間拍子等が定まつてゐて、その主なものに次の如き種目がある。

次第（しだい）　謠の次第を謠ひ出す時の囃子で、大小鼓を主とし、笛をあしらふ。

名乘笛（なのりぶえ）　ワキに次第がなくて、直に名乘の詞を述べる曲にあしらふ笛。大小鼓は打たない。

一聲（いつせい）　主としてシテの出に、時としてはワキの出にも用ゐる囃子で、大小鼓を打ち、笛をあしらふ。

アシラヒ（會釋）　ワキの名乘笛に對し、シテの出に用ゐるもので、大小鼓を打ち、笛は吹かない。

來序（らいじよ）　帝王又は神體などの出入に用ゐる莊重な囃子で、大小鼓太鼓に笛をあしらふ。末社間の登場に用ゐるものを末社來序（まつしやらいじよ）又は亂序（らんじよ）といふ。

早鼓（はやつゞみ）　前ジテが勇壯に中入し、又早打間の登場する時の大小鼓の囃子。

出端（では）　神體などの後ジテ又は後ヅレの出る前に奏するもので、大小鼓笛の外に太鼓を伴ふ。

下端（さがりは）　出端に似てゐるが、笛が地となり、且出端の後の謠は拍子に合はないが、この後の謠は拍子に合ふ。

早笛（はやぶえ）　龍神鬼神などの後ジテ又は後ヅレの出る前に奏するもので、笛が地となり、大小鼓太鼓がこれに伴ふ。

大癋（おほべし）　天狗などの後ジテの出に先立つ囃子で、早笛よりはやゝ靜かなもの。

祝詞（のつと）　神佛に祈禱する謠のかゝりに用ゐるもので、太鼓の入る時も入らない時もある。

夢幻能の全圖

第五章　能楽の價値

一、複式夢幻能の意義

能の劇色展開の順路からいへば、一段・二段の劇能が進歩した形であるが、これを純演劇の立場から觀れば、やはり簡素な原始的なものに過ぎない。能楽が大成以來今日まで五百年のながきにわたつて永い生命を保つてゐるのは、能楽の大多數を占めてゐる、從つて能楽の特色といふべき複式夢幻能に特殊な藝術的價値を持つてゐるからであつて、簡素な原始的な劇能が進歩した演劇の間にあつて、特殊な地位が保たれてゐるのも、本複式夢幻能の性分を多量に含んでゐるからであらうと思ふ。即ち複式夢幻能の意義を考へることが、やがて能楽全體の價値を定める基準となるであらうと思ふのである。

今、この一般的劇色法を解剖して見ると、

◇第一場景――叙劇の構成、主題の說明、夢幻界への誘引

第一齣　情景氣分の構成

(一)ワキの獨白による主題の提示（次第・名乘・道行）

(二)シテの獨白による抒情情景の描出（一聲・サシ・歌）

第二齣　叙情の構成

(一)第一次的展開——對話的葛藤による主題の説明（ワキシテ掛合。初同）

(二)第二次的展開——連吟的敍事詩による主題の説明（クセ）

(三)第三次的展開——糺問的對話詩による主人公眞性の發表、夢幻劇の暗示（ロンギ）

◇中間場景——舞臺氣分の轉向

第三齣　主題の通俗的説明による夢幻界への誘引（間語）

◇第二場景——夢幻界の釀成、夢幻劇の演出

第四齣　夢幻界の釀成

(一)ワキの獨白による夢幻界の凝視（待謠）

(二)後ジテの獨白による夢幻界の現出（シテ謠）

(三)連吟的敍事詩による夢幻界情景の描出（シテ謠・地謠）

第五齣　夢幻劇の演出

(一)對話的葛藤による科白劇的演出（ワキシテ掛合）

(二)連吟的敍事詩による舞踊的演出（クセなど）

(三)舞踊演出（序舞又は中舞など）

第六齣　劇の解決——敍事詩による作意の發表（キリ）

凡そ右のやうな企圖を以て作られてゐると思ふ。即ち第一齣の(一)は世阿彌の所謂序段で、ワキ名乘によつてその身分及び企圖を語ることが、やがて主題の提示となり、道行によつて旅行の到着點を語ることゝ、やが

て舞臺の指示となる。(二)は所謂第二段で、シテの一聲・サシ・歌によつて舞臺の情景を描出するもので、背景のない能舞臺に於て、觀衆にその情景を想像させる爲に必要な部分であるが、舞臺にその情景を想察し得る場合には、その一部又は全部の省略されることが少くない。――ワキは最初に身分を告白するが、シテは一般的情景を述べ又は感慨を洩らすだけで、自分の身分については明かには語らない。

第二節の(一)は所謂第三段で、無知識者のワキがシテに色々の事を質問し、シテがこれに應答することによつて主題を說明して行くもので、シテとワキとが劇的に對立する最初の、むしろ唯一の部分である。多くは上歌を歸結として一段の葛藤に終つてゐるが、「田村」「實盛」の如く二段をなしてゐるものもある。しかし、この部分も他に比べて劇的であるといふだけで、シテとワキとの對話は對等的でなく、教示的說明的である。その(二)は所謂第四段で、多くはクセとして、シテと地謠との連吟によつて、主題を說明して行くものであるが、文意から見れば、シテ一人の獨白と解せられるものが多い。

曲柄の說明は、この(一)(二)の形式で大體了解されるものとして、(三)はロンギによつて、シテの人物糺問に移る。ロンギの地謠はワキの代辯であつて、シテはワキの不審に對してその眞人物本性を告白し、これによつて第二場景の夢幻劇を暗示するのである。

中間場景の間語は、第二節の律語的說明だけでは、主題が十分に了解し得られないものとして、前シテと同樣な土著の者が、更に詳しく通俗的に說明するもので、かくして、主人物の眞性を十二分に會得したワキは、昔物語に異常の興味を感じ、われ知れず追想の夢に耽けるのである。

かくて、第二場景所謂急段となり、夢幻界が展開して來るのであつて、まづワキが待謠に昔の世界を凝視

してゐると、昔の英雄佳人が髣髴として眼前に現れ出で、次で後ジテと地謡との連吟的叙事詩によつて、その情景が鮮かに描き出されゝば、こゝに後ジテが昔の光景をさながらに演出して見せるのである。

この第五齣の夢幻劇演出の様式は、曲によつて異同が多く、観衆の興味も亦從つて甚だ深いわけである。

さて、このやうな脚色から、観衆の受ける效果感銘は、

(一) ワキの獨白から、主題に對する注意力を喚起する。

(二) シテの獨白から、舞臺の背景を想像するが、シテの人物告白がないので、その本性に對し、或不審を起し、求知の誘惑を感じる。

(三) ワキの質問は、一般観衆の求知慾の代表として表れ、シテの應答によつて、主題に關する知識慾を滿足させる。

(四) 然しながら、シテの教示的態度は、氣分の壓迫を感ぜしめ、心の動搖を來さしめる。

(五) 知識の充滿と氣分の不安とは、何等かの誘惑に陷り易くする。

(六) シテがその本性を發表することによつて、観衆の誘惑感の方向は過古の世界、夢幻界に向ふ。

(七) ワキの夢幻界凝視は、催眠術者靈媒者的暗示となつて、観衆すべてを夢幻界に誘導して行く。

(八) 後ジテの出現、夢幻界情景の描出は、観衆をして完全に夢幻界中の人たらしめる。

観衆の観能心理が凡そ右のやうに動くものとすれば、劇的地位の低い、前に「シテ」の引立役に過ぎないしといつたワキも、観衆を夢幻界に誘導する爲に、重大な職責を持つものとなり、又ワキが旅僧などといふ平凡人であることも、却つて観衆を親和せしめ、從つて能作者の期待する心理狀態に導き入れる爲に、有意義な作用をなすのである。そして、詞章全體、説明的な叙事詩の多いことも亦、観衆をして主題に關する知識

を豐富ならしめ、從つて夢幻境に誘導するのに、甚だ都合のよい效果を齎すのである（[illegible]）

二、能樂の藝術美

伎藝の幽玄

また多數の能樂の企圖する所は、主題に就き詳しい意圖を加へた後、夢幻劇を演出することである。能樂の藝術美はこの夢幻的情趣を味ふ所にあるのである。然らばこの藝術美。夢幻的情趣とは如何なる種類のものであるか。これを世阿彌の所說について、檢討して見る。

世阿彌は前にいつたやうに、猿樂を集成劇化したもので、「遊樂の道は一切物眞似なり」（申樂談儀）といつてゐるが、この物眞似藝術の表現法については、覺習條々に、

何の物眞似に品をかへてたりとも、幽玄をば離るべからず。例へば、上臈、下臈、男女、僧俗、田夫、野人、乞食、非人に至るまで、花の枝一房づつかざしたらんを、おしなめて見るおことし。その人の品々は變るとも、美しの花ぞと見んことは、皆同じ花なるべし。この花は人體なり。姿をよく見するは心なり。心といふは、この理をよくよく分けて、言葉の幽玄ならん爲には、歌道を習ひ、姿の幽玄ならんためには、尋常なるしたての風體をならひ、一切悉く物眞似は變るとも、美しく見ゆる一かゝりを持つ事、幽玄の種と知るべし。

と、物眞似を幽玄にして、初めて美しい藝術の花が咲くのであるといひ、「諸道諸事に於て、幽玄なるを以て上果とせり。殊更當藝に於て、幽玄の風體第一とせり」といつて、能樂の藝術美は幽玄にあると主張してゐるのである。この幽玄といふ語は、平安末期の歌人、殊に俊成卿の主唱したもので、もの淋しい閑寂な詩美を指してゐるのであるが、世阿彌の所謂幽玄とは如何なるものであるか、彼はその内容を說明して、

閑寂の幽玄

抑も幽玄のさかひとは、誠には如何なる所にてあるべきやらん。まづ世上の有様をもて、人の品々を見るに、公家の御たゝずまひの、位高く人望世にかはれる御有様、これ幽玄なる位と申すべきやらん。

と、公家貴族の風習作法が幽玄に適つたものであるといひ、これを能樂の演出に引當てて、

唯美しく柔和なる體、幽玄の本體なり。人體のどかなる粧ひ、人體の幽玄なり。又言葉優しくして、貴人・上人の御ならはしの言葉遣ひをよく／＼習ひ窺ひて、假初なりとも、口より出さんする言葉の優しからん、これ言葉の幽玄なるべし。又音曲に於て、節かゝり美しく下りて、なび／＼と聞えたらんには、これ音曲の幽玄なるべし。舞はよく／＼習ひて、人體のかゝり美しくて、靜かなる粧ひにて、見所面白くは、これ舞の幽玄にてあるべし。

即ち、柔和なる、のどかなる、優しく、美しく、なび／＼としたる、靜かにして面白いのが幽玄であるとしてゐるのである。換言すれば、世阿彌は藝術美として、幽玄即ち貴族的な典雅・優麗・靜閑を求めてゐるのである。

これを以て觀れば、能樂の夢幻的情趣は、尚古的な平安貴族的な典雅優麗な情趣を指してゐるやうで、歌道の幽玄とは甚だ距りがあるが、これがやがて室町時代の一般風尚に適つたものであつたのだらうと思はれるのである。しかし世阿彌が藝術美の極致としてゐる所は、更にこれよりも遠い所にあつた。彼は出來榮えのよい能を、「見より出で來る能」「聞より出で來る能」「心より出で來る能」の三段に分けて、當曲體を、

見より出で來る能と申すは、さしよりから、やがて座敷も色めいて、舞歌面白くて、見物の上下感嘆を出して、はつはつとしく見えたる當座、これ見より出て來る能なり。

と、第一段の能は、花やかな面白い演出で、從つて萬人の感興を催すものである。しかし、「餘りに能出で來

て、何とすれも面白き時分に、見手の心浮立つ時にて、諸人の目心隙なくなされて、能がし勝るる用あり」「これる能の出來過る時とす」といひ、第二段の能については、

「聞より出で來る能と申すは、さしよりしみぐ\として、されて音曲すに合ひて、しとやかに面白きなり。これまで音曲のなす態なり。無上の上手の得手に入る當體なり。されども斗に出で來る味なれば、田舎目利などは、さほどとも思はぬなり。」

これは、しみぐ\として、しとやかに面白いのである。即ち華麗より一歩進んで閑寂味を加へたものである。このやうな演出は、無上の上手であつて始めてなし得るのであるが、田舎目利などには、さほどに思はれない。こゝに多數の觀衆を對象とする俳優藝術の歎きがあつた。歌道の幽玄に立入れ難い理由がこゝにあつたのである。

「心より出で來る能とは、無上の上手の申樂に、物數の後、二曲も物眞似も、きりも、さしたる事なきの、さびぐ\としたる中に、何とやらん感心のある所なり。これを冷えたる曲とも申すなり。この位、よきほどの目利も見知らぬなり。まして田舎目利などは思ひも寄るまじきなり。これは無上の上手の得たる瑞風かと覺えたり。これを心より出で來る能ともいふ。無心の能とも申すなり。」

第三段の能は、よきほどの目利でも分らない、勝れた鑑賞家の始めて味ひ得るもの、藝術の極致を現したものなのである。この最上の藝術美は如何なるものであるか、「さびぐ\としたる中に、何とやらん感心のある」もの、即ち閑寂の中にいひ知れぬ情趣をたゝへたものなのである。世阿彌はこゝに至つて始めて、幽玄を歌道の幽玄、閑寂の情趣と一致せしめてゐるのである。この趣を「さびぐ\としたる」「冷えたる」といつ

統合の光

てゐるが、なほ又別の詞で「しほれたる」ともいつてゐる。しかし、彼はこの事について多くの說明を加へてゐない。藝術美の極致は、その道に達した後に感得すべきものと見て、

常の批判にも、しほれたると申す事あり、如何やうなる所ぞや。これ殊に記すに及ばず。その風情現れまじ。さりながらまさしくしほれたる風體はあるものなり。……古歌に云はく、

うす霧の籬の花の朝しめり、秋はゆふべと誰かいひけむ

かやうなる風體にやあるべき。心中に當てて公案すべし（花傳書）。

といふに留めてゐるのである。

今これを能樂の實際について觀察して見る。

能樂の觀衆たる室町武士は、前に述べたやうに、武士でありながら貴族的生活を望み、艷麗華奢を求めたが、また一面、武士本來の面目たる質實素樸を離れきることが出來なかつたのである。

能作者はこのやうな觀衆の感興を催す爲に、貴族的典雅優麗を旨としなければならなかつたが、また一面、藝術美の極致として閑雅靜寂を求めて止まなかつたのである。

觀衆にも二つの相反した希望と本性とがあり、能役者にも二つの相距つた必要と憧憬とがあつた。いづれの方面から見ても、相反した二面を持ちながら、これを斟酌し調和して、閑寂の境地に入らうとするのが、能樂の動きであつたのである。

この故に、謠曲の文章は花やかな美辭麗句の集團であるが、その描く所は、修羅道地獄道の亡靈の姿であつた。役者の裝束は錦繡の眩いものであるが、舞臺の背景は鏡板に描かれた一本の老松に過ぎない。その科

道德的意識

白には曲節のある詞文であり、地謡の同吟をも加へてゐるが、その音色は明朗的なものであり、嚴肅な性格を調である。いづれの方面から見ても、相反した二面を具へてゐるものが、能樂であるといひ得よう。

この矛盾した不調和な藝術を調節按配して行くのが、この藝術家の働きであつた。或時は觀衆の要求に應じて艶麗に流れたこともあらう。また或時は演者の自信に從つて寧ろ嚴肅に失したこともあらう。だが、目ざして行く藝術の世界は、幽玄であり、閑寂の境地であつた。花やかなもの、艶やかなもの、美しいもの、一切をいぶしにかけて、さびとした時に、この藝術の落ちついた味ひが出て來たのである。現れた結果は、さびくとした、冷えたものであるが、その中に豐かな美しさを藏めてゐるのが、この藝術のいひ知れぬ深みである。複雑した矛盾した數多の要素を一擧にして、幽玄閑寂といふことに單純化した時に、能樂は一つの立派な藝術美を完成したのである。

歌道の幽玄にはあきらめの影があらうが、能樂の幽玄には統合の光がある。それが能樂の特色となつてゐる(五、文獻寫眞ノ二、挿繪參照)。

三、謠曲の思想

翻つて能樂の内容、謠曲の思想について觀察して見る。

諺にも「芝居は早學問」といふやうに、徳川時代に於ける歌舞伎狂言は、町人にとつて知識の寶庫であり、道德の淵源であつた。これに對して、武士の早學問は能樂であつたのである。徳川時代の武士にとつて早學問の道であつた能樂は、いふまでもなく室町時代の武士にとつて、最も大切な知識の寶庫であり、道德

尊皇愛國

の淵源であつた筈である。能樂が多種多樣の題材を捉へ、あらゆる先進文藝を採り入れたことに、既に第三章に述べて置いた。能樂が知識の寳庫であつたことは、既に明かになつてゐるから、こゝにその道德思想について考察すれば、一體わが國民が、人間の行爲の規範を知識的に考へるやうになつたのは、鎌倉時代の十訓抄あたりから始まるのであるが、その頃の道德觀念は、實は、如何にすれば世を安全に過し得るかといふ功利的な處世法の研究に過ぎなかつた。それが、その後漸を追うて、殊に謠曲に於て、格段の發展をして、功利を離れた倫理的な思想的な立場から、道德を重んずるやうになつて來たのである。

　この道德的意識が、實に德川時代の武士道、明治時代の國民道德の基礎をなすものであつて、その德目の主なるものは、尊皇愛國を第一として、君臣關係を强調すること、親子の情愛を讃美すること、及び男女の戀愛を否定することであつた。

　能樂の大成に最も力のあつた足利義滿が外國に臣事するが如き振舞を敢てしたことは、史家の非難を蒙つて居る事實であり、歷代足利將軍が皆不遜であつたことも、世人に廣く知られて居るところであるが、その保護の下に發達して來た能樂は、不思議にも、尊皇愛國の思想に充滿してゐて、一言將軍を謳歌した文句は見當らないのである。

　能樂を五種類に分けて、その第一に位する脇能は、所謂祝言能。神事物で、皇室尊崇と國土讃美とを主題にしたものばかりである。この種の能に登場するワキは、勅使か神官かで、朝臣に扮することは決してない。勅使に扮し、「當今に仕へ申す臣下」として登場するものは、天皇に代つて神德佛德を享けるのである。神官として登場するのは、わが國の神國であることを顯評するものである。

神と君との道すぐに、都の春に行くべくは、それぞ還城樂の舞、さて萬歳の、小忌衣、さすかひなには惡魔を拂ひ、をさむる手には壽福を抱き、千秋樂は民を撫で、萬歳樂には命をのぶ、相生の松風、颯々の聲ぞ樂しむ」（高砂）

凡そこの類で、常に君徳を讃へ國家の安穩を祝つてゐるのである。この考は、一歩進めば、海外諸國がわが國に朝貢することとなり、「岩船」には、

長居もめでたき住吉の岸に、寶の御船を着け納め、數も數萬の捧げ物、運び出だすや心の如く、金銀珠玉は降り滿ちて、山の如くに津守の浦に、君を守りの神は千代まで、榮うる御代とぞなりにける。

といつて居る。國土の讃美が寧ろ極端に走つて、排外思想にまで及んでゐるのがある。「春日龍神」は、明恵上人が佛道修行の爲に支那天竺に渡らうとするのを、「日本を去り、入唐渡天し給はん事、いかで神慮に叶ふべき、唯思し召しとまり給へ」と引留めて居り、日本の智慧を計らんとして、わが國に渡つて來た「白樂天」は、漁翁と詩歌を競詠してうち負かされ、

住吉の神の力のあらん程は、よも日本をば從へさせ給はじ。速かに浦の波、立ち歸り給へ樂天。

といはれ、「手風神風に吹きもどされて」、すごすごと支那に歸つて行くのである。

日本は神國であり、從つて佛法擁護の國であるが、外道魔性のものが、時にこれを妨げようとする。「誠や日本は粟散邊地の小國なれども神國として、佛法今に盛んなる由承り及び候間、急ぎ日本に渡り、佛法をも妨げばや」と思ひ、「善界」などいふ大天狗が襲うて來るが、忽ちにして國威に壓せられて、

明王諸天はさて置きぬ、山王權現、南は男山、西に松の尾、北野や賀茂の、山風神風吹き拂へば、さしもの飛行の翅も地に落ち、力も撓弓の八洲の波の、立ち去ると見えしが、又飛び來り、さるにてもかほどに妙なる佛力神力、今よ

忠君友愛

り後は來るまじ。

と恐れをなして虛空に消え去るのである。かくして、わが國を、

少女は幾度君が代を、撫でし巖も盡きせぬや、春の花の梢に舞ひ遊び、袖も上り飛び下る、げにも上なき君が惠み、
治まる國の天つ風、雲の通ひ路吹きとぢるや、少女の姿とどまる春の、霞も棚引く三吉野の、吉野の山櫻、うつろふ
と見えしが、又咲く花の雲（吉野天人）

と、永への春の國として讃美してゐるのである。

一般的祝言としては、天皇の御代を壽ぎ、國土を讃美して、一言幕府を謳歌したものがないのであるが、といつて、勿論小さな主從關係を輕んじたのではない。武士時代の社會制度から見ても、この德目は當然重んぜらるべき傾向をもつてゐるのである。謠曲は更にこれを強調したもので、「橋辨慶」「朝長」などに「主從は三世」といひ、「春榮」「仲光」などにも「三世の主君」といつて、主從關係は過現未の三世を通じて離れ難いものだと說いてゐるのである。この考をもつて、わが身を殺して主君に盡した例は、鎌倉文藝にも數多く見えてゐるが、謠曲では、「親子よりも主從は深き契りの中なれば」（攝待）といふ考を強め、主君の爲にはわが子をも犧牲にすることを奬勵して、「仲光」などには、主君の若君が父命に背いて殺されようとするのを救はんが爲に、わが子を身代りに殺す苦衷を描いてゐるのである。

主從の義は重んずべきものであるが、兄弟子友の情も亦棄て難いものである。增尾太郎種直は敵に捕はれた弟春榮の身代りにならうと思つて、その預り人の許へ來る。しかし春榮は兄の心を察して兄弟と名乘りをせず、家人と稱して、

親子愛

春榮いかに汝は二世の上しみの思ひ、是まで連れ來りたる志、返す返すもやさしけれどもながら、汝は故郷に歸り
何事に申すべきぞならば、春榮こそ討たれ候へ、過ぎまなる御弔ひにこそ頼み候ふべけれと、よくよく申し候へ

といつて返さうとするが、兄は飽くまで弟に代らうとして、

種直いやとにかく命を捨つるまで、種直これにて腹切らん。や、刀は參らせじ。弟が志に刀を奪はれ候ひて
春榮さりながら暫く、こはいかに、命を助け申さんとてこそ、客人とは申しつれ、思ひ不忠にならば、許させ給

（兄種直）春榮

と、兄弟互にわが命を捨てて助け合はうとしてゐるのである。

親子の愛情は自然のもので、道徳的意識を離れて、太古から存在してゐた。記紀にもこの愛情を描いてゐる。萬葉集には親を慕ひ子を愛した歌が少くない。しかしながら、東西古今の文藝を通じて、謠曲ほど親子愛を高調したものはあるまい。

親子が一家庭に團欒和樂してゐる間は、平坦な常事として、文藝の材料に捉へ難いかも知れないが、別離に當つて自然湧出する情熱に至つては、親子愛其者の好題目である。この例を求むれば、母子の別れを惜しむものに「小袖曾我」「大佛供養」があり、父子將に相別れんとする悲しみを描いたものに「唐船」があり、永く別れてゐたものが、大事起つて、その情の俄かに切なるものに「熊野」がある。永い間行方を尋ねて、漸くに再會し得た喜びを描く趣向は謠曲親子物の大部分を占めてゐる。その中、子が親を尋ねるものに「景清」「木賊」「藍染川」「歌占」「土車」等があり、父が子を尋ねるものに「花月」「雲雀山」「弱法師」等があり、母が子を尋ねるものに「三井寺」「柏崎」「櫻川」「百萬」「隅田川」等がある。殊に母性のあはれさは、

謠曲得意の題目であつて、「いとほしかなしと育てつる子の行方を白絲の、亂れ心」になつた母が、「亂れ髪の遠近人に面をさらすも、もしやわが子に廻りや逢ふ」と、到る所で面白い物狂を演じる、所謂狂女物は大抵この趣向を凝らしたもので、「三井寺」は鐘の縁により、「柏崎」は烏帽子。狩衣をかけて、「櫻川」は花に擬へて面白く狂ふ。そしてその見物人の中からわが子を見出し、「ものに狂ふも別れ故、逢ふ時は何しに狂ふべき」と、茲に母子の再會を遂げて、「親子の契り盡きせずも富貴の家となる」（三井寺）のである。強い母性愛は子の爲にすべてのものを犧牲にする。「わが子の爲に捨てん命露ほど惜しからじ」と、「海士」は「千尋の繩を腰につけ」、身を海底に投じて、房前を大臣にしてゐる。

戀愛否定

母がわが子の爲に命を棄てるが如く、子はまた親の爲に身を顧みないのが孝行の道である。「谷行」の松若は、「身は難行の道に出で、母の現世を祈らん」と、峯入りに加つて途に病を得、大法によつて谷行に處せられたが、伎樂鬼神は「善哉々々、孝子切なる心に感ずるぞ」と飛び來つて、これを蘇生せしめてゐるし、かうふうは「親に孝なるによつて」、「猩々」から「汲めども盡きず飲めども變らぬ」酒を貰つて、次第に富貴の家となつた。と、かういつてゐるのである。

前に擧げた「藍染川」は、母子相伴つてその父であり夫である人を尋ねるのであるが、その妻は夫に會はないで無殘の最期を遂げ、たゞ子だけが父に再會してゐるのである。

古今東西を問はず、文藝の最も一般的な主題は戀愛であるのに、謠曲作者は親子の情愛を讃美する一方、男女の戀愛を極めて排斥してゐるのである。その見解に從へば、女は何の用にも立たない（景清）、心のはかない（女郎花）、思ひの深い（梅枝）、五障三從の罪業深い（佛原・夕顏・誓願寺等）ものである。嫉妬の一念に

は、此の刹那をして、「戀の身の浮かむ事なき賀茂川に、沈みしは水の青き鬼、われは貴船の川瀬の螢火、頭に戴く鐵輪の足の、炎の赤き鬼となつて、臥したる男の枕により、恐つて行くらかゝ鐵輪、」あさましい女の業因である。謠曲二番目鬘物の描く所は、多くは「よしなき戀路に使されて、長く惡道に墮ちた」種である。このやうな責め苦は主として女の受ける所であるが、男と雖も戀に迷つた者は同じ苦しみを免れることが出來ない。「小野頼風は女の後を慕つて入水したので、邪婬の惡鬼は身を責めて、その念力の、道も嶮しき劒の山の、上に戀しき人は見えたり、嬉しやとて行き登れば、劍は身を徹し、磐石は骨を碎く、こはそもいかに恐ろしや、劍の枝の撓むまで、如何なる罪のなれる果ぞや」（女郎花）と、後悔しても甲斐のない罪業に責められると說いてゐるのである。

謠曲作者の取扱ふ女性は、多くは地獄の責め苦に遭つてゐるが、たゞ文學技藝の達人だけは地獄に墮ちないで、佛菩薩となつてゐる。

和歌の名人であつた和泉式部は「詠み置く歌舞の菩薩となり」（東北）、「さながらここそ極樂世界に生まれ」（誓願寺）、紫式部は石山の「觀世音、假にこの世に現れて、かかる源氏の物語」を作つた（源氏供養）のであり、「江口」の遊女すら、歌舞に心を入れたが故に、「普賢菩薩とあらはれ」てゐるのである。まして文學に勝れた男性の崇敬せられたことは異常のもので、假作の人物光源氏も、「かりに人間と現じ」たもので、「今は都率の天に住み給へば、月宮の影に天下り、この海に影向」するのだ（須磨源氏）といひ、殊に和歌の聖といはれた在原業平の如きは、「花に詠じて衆生濟度の姿現し」たもの（小鹽）で、業平は極樂の歌舞の化現なれば、詠み置く和歌の言の葉までも、普法身說法の妙文なれば、草木までも露の惠みの、

宗教思想

佛果の緣を弔ふなり（杜若）

と、一度彼が詠歌の題材となれば、その題材となつた草木までが佛果を得ると見てゐるのである。敢て業平に限らず、歌人の吟詠を受ければ、櫻の精（西行櫻）も楓の精（六浦）も現れ出て舞を舞つてゐる。草木ばかりでなく、住吉明神も西行の詠歌を聞かん爲に出現せられ（雨月）、蟻通明神も貫之の詠歌によつて、怒りを和らげて神樂を奏して居られるのである。

和歌と相竝んで平安貴族の尙んだ音樂は、また謠曲作者の深く尊重するところで、花陽夫人は琴の祕曲を奏して、刺客秦舞陽。荊軻の危害から始皇帝を救ひ（咸陽宮）、師長の琵琶に對する執心に感じては、八大龍王も村上天皇に從つて海上に浮かび出て、管絃の役々を勤め、祕曲を授けてゐるのである（絃上）。

古典趣味と相俟つて、謠曲に著しい色彩を與へてゐるのは、宗教思想である。謠曲作者は文學技藝の達人を佛菩薩の化現と觀てゐるばかりでなく、複式能のシテはすべて誦經回向によつて成佛するものと脚色してゐるのである。精魂物の謠曲は大抵、「草木國土悉皆成佛」の說から出たものであり、邪婬戒を犯して地獄に墮ちた女性が、僧侶の回向によつて成佛するのは、當然のこととしても、源平の勇士までが名もない諸國一見の旅僧の回向によつて、修羅の苦患から救はれてゐるのは、後代の我々から見れば、殆ど微苦笑を禁じ得ないのであるが、謠曲に現れた英雄豪傑は、このやうな旅僧の回向に滿足して、

讀誦の聲を聞く時は、惡鬼心を和らげ、忍辱慈悲の姿にて、菩提もここに來迎す、成佛得脫の身となり行くぞありがたき（通盛）

といつてゐるのである。

このやうに、謠曲には佛教思想が充滿してゐて、殆ど宗教宣傳の爲に作られたかの如き觀があるが、その佛教思想は鎌倉時代のやうに深みのある無常觀の根本義に觸れたものは少い。平安朝のやうに、なほそれ以上に、現世祈禱の方便として信じられたもので、觀世音を信じたが故に鬼神を亡ぼすことが出來(田村)、阿彌陀如來を信じたが故に親子再會することが出來た(柏崎)といふやうな、所願成就の爲の宗教に外ならなかつたのである。そして、これは本地垂跡、神佛混淆の信仰によつて、甚だ容易に受け入れられたのである。

四、狂言との對比

謠曲の說く尊皇愛國、道德思想、古典趣味、佛教思想は、室町時代の人士にとつて最も望ましいものであつたが、しかし、當時の社會が必ずしもこれに從つて行つたのではなかつた。時代の世相には寧ろこれに正反對なものがあつたのである。卽ち謠曲は理想派の文藝であつて、社會の實相を直寫したものではなかつた。それで、謠曲を正しく解する爲には、これとは反對な、社會の裏面を描寫した、自然派の狂言と對比して見なければならない。

狂言——これを後の歌舞伎狂言と區別して、能狂言ともいふ——は、もと第一章に述べた新猿樂・散樂猿樂などの滑稽猿樂の系統を引いたもので、能樂と源流を一つにして左右に分れ、一は優雅典麗な樂劇となり、これは洒落滑稽な喜劇となつたもので、しかも、常に併行して進み、彼此相對照して、愈〻その眞價を發揮して來たのである。

謠曲と狂言とは同じ舞臺で演ぜられるが、兩者の作意は全く別箇の立場にあり、謠曲の觀衆に訴へる所は

自利我慾

戀愛肯定

尙古的な理想の主張であつたが、狂言の見物に示す所は矛盾した現實の暴露であつた。

謠曲が第一に主張したのは、前節に述べたやうに、皇室の尊崇と國土の讃美とであつたが、狂言はこれに反して、自利我慾の世相を描き出してゐるのである。狂言にも祝言物はあるが、多くは「福渡」「連歌毘沙門」「蛭子大黑天」のやうに社參する平民自身に福德を授かるのであつて、他の者の爲に祝ふ場合にも、「三人百姓」「餅酒」「松ゆづり葉」の如く、直接の主人領主の爲を計るだけで、國家を眼目としたものは見當らない。

否、かくの如く直接の主人にもせよ、他人の爲に福德を願ふのは、狂言としては極めて稀な例であつて、これに現れる大名は皆無智無力の愚物で、他の嘲笑を買つてゐるのである。例へば「萩大名」は太郎冠者に教へられた和歌を忘れて恥を掻き、「今參」「秀句大名」「文相撲」「鼻取相撲」などは新參者に大名の權威を示さうとして失敗して居る。從つて、その家來も亦放埒で、「附子」「樋の酒」「棒縛」「二人片輪」などの冠者は、主人の留守に預り物を勝手に飮食して居り、たとひ眞面目な家來でも皆主人に似た愚物で、「末廣がり」「目近大名」「張蛸」「寶の笠」などの冠者は、主人の命で買物に行き、スツパに欺かれてゐるのである。

由來、文藝作者は必ずある理想を持つてゐるものであるから、社會の裏面を描く狂言作者も、さすがに主從關係の顚倒を露骨に描くことは愼んで、直接冠者をして大名を翻弄せしめるものは少く、側面からその愚を暴露してゐるのであるが、親子・夫婦の對比に至つては、憚る所なく夫婦愛の方に勝を與へてゐる。「水論聟」「船頭聟」など、聟と舅との爭ひに、女は父を陥れて夫を助けて居り、たとへ夫に愛想をつかして一度實家に歸つて來ても、夫が迎へに來れば、「貰聟」「石神」「法師物狂」のやうに、夫の許に舞ひ戻つて行くの

古典趣味否定

宗教冷笑

である。

古典趣味についても亦同様で、謡曲があらゆる先進文藝を採り入れてゐるのに反し、これは題材を世間俗說に採つて古典に據らないばかりでなく、「ふねふな」などには文字穿鑿の愚を嘲り、「酢薑」などには家系を重んじる貴族かぶれを冷笑してゐるのである。

最も甚しいのは、謡曲ではあれほど深く信じてゐる佛教の效驗を、狂言では全く否定して、「布施ない」「魚說法」「小傘」「泣尼」などに出てくる出家は、說教をごま化して布施を取らうとして失敗し、「裏山伏」「蟹山伏」などは祈禱の效驗を顯さうとして失敗し、「柿山伏」「盆山」などは、あさましい小泥坊をして見つけられ、犬や猿の眞似をしてゐるのである。

これを形式的な方面に見ても、謡曲は典雅な平安朝言葉と簡潔な鎌倉言葉とを交へたものであるが、狂言は全く通俗な室町時代言葉を用ゐてゐる。謡曲の人物は「急ぎ候程に」目的地に着くが、狂言の冠者は「そろり〳〵と參る」のである。そしてその結末も、謡曲の方は修羅道・地獄道に苦しんでゐるものが、ワキ僧の回向によつてめでたく成佛するのであるが、狂言の方は始め詭計に成功したものが破綻に終つて「やるまいぞ〳〵」と追ひ込みになつてゐる。理想派の謡曲は悲劇に始まつて喜劇に終り、自然派の狂言は喜劇に始まつて悲劇に終つてゐるのである。

かうして全く相反した狂言と交〻演奏することによつて、謡曲は一段の光輝を加へてゐるのである。

五、謡曲の影響

幸若舞曲

謠曲はあらゆる先進文藝を採り入れて大成したやうに、またあらゆる後生文藝に影響を殘した。わが國の文藝史は謠曲を中軸として前後に連續展開するのである。

謠曲の影響はまづ同時代の文藝から始まる。幸若舞曲はその著しい一であらう。幸若舞曲と謠曲と題材を同じくしてゐるものには、（前に擧げたのが幸若、後に記したのが謠曲）

大職冠―〔海士〕、　信田―〔信田〕、　滿仲―〔仲光〕、　鎌田―〔鎌田〕、　木曾願書―〔木曾〕、　九穴貝―〔九穴〕、　硫黃島―〔俊寛〕、　敦盛―〔經盛〕、　景清―〔大佛供養〕〔景清〕、　笛之卷―〔笛之卷〕、　未來記―〔鞍馬天狗〕、　鞍馬出―〔關原與一〕、　烏帽子折―〔烏帽子折〕〔熊坂〕、　堀河夜討―〔正尊〕、　四國落―〔船辨慶〕、　靜―〔鶴岡〕、　富樫、笈さがし―〔安宅〕、　八島―〔攝待〕、　泉が城―〔錦戶〕、　淸重―〔淸重〕、　切兼曾我―〔切兼曾我〕、　元服曾我―〔元服曾我〕、　和田酒盛―〔和田酒盛〕、　小袖曾我―〔小袖曾我〕、　夜討曾我―〔夜討曾我〕〔伏木曾我〕、　十番斬―〔十番斬〕、　新曲―〔武文〕、　張良―〔張良〕

殆どすべての幸若が謠曲と關係してゐるのである。尤もそのすべてが謠曲から出てゐるとはいへない。中には謠曲の方が幸若から出たと信じられるものもあり、容易にその制作の前後を定めることは出來ないが、少くとも互に影響され合つた、そして終に謠曲の方が壓倒的勢力を占めて行つたとはいひ得るのである。

室町小歌

次に室町時代の俗謠小歌に及ぼした影響も見逃すことが出來ない。謠曲はもと小歌の影響を受けてゐるのであるが、その大成後はまた小歌に大きな影響を與へたことと信じられるのである。永正十五年（二一七八）の頃に出來た閑吟集に收めてゐる、例へば、

面白の花の都や、筆に書くとも及ばじ、東には祇園清水、落ちくる瀧の音羽の嵐に、地主の櫻は散り散り、西は法輪嵯峨の御寺、廻らば廻れ水車の輪の、臨川堰の川波、——（放下僧に見ゆ）

木の芽春雨降るとても、／＼、なほ消え難きこの野邊の、雪の下なる若菜をば、今幾日ありて摘ままし、春立つといふばかりにや三吉野の、山も霞みて白雪の、消えし跡こそ路となれ（二人靜に見ゆ）

の前者はもと小歌に謠はれてゐたものを修正して謠曲文とし、後者は初めから謠曲文として作り、それら、いづれをも後の小歌に謠ひつづけたものであらう。

淨瑠璃

室町時代の文藝については、謠曲そのものに制作時代の分らないものが少くないので、從つて兩者の制作前後影響の有無を明かにし難いものが多いが、徳川時代の文藝に至つては、勿論容易にこの影響を知ることが出來る。

その著しい一は淨瑠璃である。尤も淨瑠璃は最初から謠曲の影響を受けたのではなく、初期の古淨瑠璃は幸若の詞章をそのまゝ或は多少改修して語つたものが多いのであるが、それでも、上方淨瑠璃を開いた、

山本土佐掾の語り物　角田川　三條小鍛冶　阿漕平次　王昭君

井上播磨掾の語り物　天鼓　[illegible]　[illegible]　田村將軍初觀音　頼朝七騎落　日向景清　佐々木先陣

宇治加賀掾の語り物　融大臣　三井寺狂女　大佛供養　弱法師　葵の上　大江山　藍染川

などの題名を見ても、既に如何に多くの影響を受けてゐるかが察せられ、殊に加賀掾は謠曲の上手で、その曲節を謠曲に近づけたといはれてゐるのであるが、最も甚しいのは、竹本義太夫をして淨瑠璃を大成せしめた近松門左衛門の作品で、彼が淨瑠璃に謠曲を採り入れた樣は、宛ら謠曲に於ける和歌のやうな勢ひで、とこ

歌舞伎

の曲にも謠曲文の數節を採つてゐないものはないといつても差支ない程であるが、殊にその時代物に於ては、謠曲の殆ど一曲をそのまゝ襲用してゐるものも少くないのである。その顯著なものを擧ければ、（括弧内が謠曲）

凱陣八島（安宅、攝待）　天鼓（天鼓）　出世景清（景清、大佛供養）　佐々木大鑑（藤戸）　十二段（熊坂）
松風村雨束帶鑑（松風）　百日曾我（安宅）　源氏烏帽子折（烏帽子折）　蟬丸（蟬丸、鐵輪）　賀古敎信七墓廻（鐵輪）　最明寺殿百人上﨟（鉢木）　義經將棊經（錦戸）　酒呑童子枕言葉（大江山）　絶狩劒本地（紅葉狩）
嫗山姥（山姥）　孕常盤（鞍馬天狗）　大職冠（海士）　孅靜胎內捃（安宅）　平家女護島（俊寛）　雙生隅田川（隅田川）

歌舞伎はもとお國などの女歌舞伎から起り、能狂言の影響を受けて劇的に展開したもので、その「[illegible]曲三番叟」「式三番叟」は能樂に於ける「翁」と同樣の地位を占めることとなつたが、劇となつた當初、題材に擇んだものは、「酒呑童子」「曾我十番斬」など、淨瑠璃と同樣、幸若から出たもので、直接謠曲から得たものではないやうであるが、元祿十四年江戸中村座で演じた「高館辨慶狀」は能樂の方から來てゐるものと思はれ、同じ頃京都で坂田藤十郎の演じた「松風」は明かに謠曲の影響を受けてゐるのである。

その後江戸では團十郎の荒事、京都では藤十郎の和事の流れを汲んで、複雜した曾我狂言や淨瑠璃の世話物が流行して、謠曲の材料を素直に採り入れたものは比較的少いが、江戸の瀨川菊之丞は謠曲から出た「道成寺」「石橋」の所作事に名聲を博し、尾上菊五郎は「鉢木」を得意としたと傳へられ、その他狂言の題目によれば、「隅田川」「羽衣」「東北」「俊寛」「藤戸」「安宅」などを採り入れてゐることが知られるのである。

本行物

俳諧

その他、劇場音樂である長唄・常磐津・清元などの類にも、謠曲の詞章を採り入れたものが少くないが、殊に著しいのは、明治以降、歌舞伎・三絃樂・箏歌、いづれも内容改善の聲の高まつた爲に、本行物と稱して、謠曲を題材とする傾向の甚しくなつたことである。

眼を轉じて俳諧の方を觀ると、これ亦謠曲に教へられた所が多く、俳人第一の學問は謠曲であつたとさへいはれてゐるのである。その最も甚しいのは西山宗因で、松尾芭蕉はこれを利用することに妙を得たものといひ得る。今その一二を擧げれば、

行く年を翁媼の惜しむらん――
こん春にせよ高砂の能　貞　德
日切の茶や邯鄲の粟の飯　立　圃
天も花に醉るか雪の亂れ足（田村）　同
花なしとの一見せばやと存じ候　宗　因
里人の渡り候か橋の霜　同
時鳥いかに鬼神もたしかに聞け（田村）　同
秋やくるなう〳〵それなる一葉舟　同
目をさませ後しらぬ世の紅葉狩　鬼　貫
あら何ともなや昨日は過ぎて河豚汁　芭　蕉
面白うてやがて悲しき鵜舟かな　同

花の蔭謠に似たる旅寢かな　　同

謠にて淺間になりぬふしの雪（富士太鼓）　　其角

角出して鐘に這ひけり蝸牛（道成寺）　　也有

洗ふ手に泥は流れて根芹かな（實盛）　　同

川柳

雜俳から出て、皮肉と諷刺とを以て風俗を描くことに妙を得た川柳は、亦よく能樂謠曲の短所を看破して、

脇僧の煙草盆でもほしく見え

能の笛忘れたやうな勤め方

失せにけり幽靈未だ橋がかり

天人に舞へとは堅いゆすりやう（羽衣）

最明寺何のかのとており込み（鉢木）

草子

謠曲の草子類に及ぼした影響も亦夥しいもので、彼等の學問は俳人と同樣謠曲を第一としてゐたらしい。草子作者の第一人者井原西鶴は流石にその引用利用が巧みで、あらはに謠曲を題名とし又ま材としたものは見當らないが、その前後には、これを題としたものが少くない。古く假名草子に「松風村雨」、「道成寺物語」、「鵜飼寺物語」などがあり、その後、「道成寺」を題としたものに、浮世草子の「道成寺岐柳」（其笑・瑞笑）、黄表紙の「人眞似道成寺」（鳴瀧山人）、「道成寺現在鱗」（春馬）、讀本の「繪本道成寺鐘魔記」（絳山）など、「隅田川」を題としたものに、黄表紙の「隅田川梅若物語」（清經畫）、合卷の「隅田系圖梅若話」（可山）、「隅田春梅若話」（京傳）、「隅田川梅若緣起」（二世春町）など、「羽衣」から出たものに、浮世草子の「天羽衣」

謡本（古本）

「羽衣」、讀本の「天津羽衣譚」（雪沖子）、合巻の「天人羽衣松」（南山）など、「邯鄲」から出たものに、洒落本の「枕邯鄲栄花夢」（南畝子）、黄表紙の「邯鄲枕」（通笑）など、「安宅」から出たものに、黄表紙の「通情安宅関」（春町）、「内講話助忠帳」（恋川）など、「安達原」から出たものに、讀本の「絵本復讐安達原」（南山）、合巻の「安達原氷姿見」（京傳）、「安達原男一つ家」（東里山人）、「安達原笛操」（三馬）、黄表紙の「敵討安達太郎由」（三馬）など、「鉢木」から出たものに、合巻の「化物世継鉢木」（可笑）、「龍宮たまてを鉢木」（京傳）、黄表紙の「敵討娘鉢木」（市三子）、「積思雪鉢木」（京山）などがあり、謡曲の名を冠したものに、浮世草子の「謡曲百番姫」（千歩園）、讀本の「謡曲春栄物語」（鬼卵）などがある。

この外、和歌俳文狂文等に與へた謡曲の影響を數へ擧ぐれば、殆ど際涯がないから、たゞ其上一斑を述べただけに止める。

附、謡本　参考書

一、謡本（古本類）

謡本の原書は、世阿彌自筆のものが、觀世宗家に「松浦の能」と「阿古耶松」の二篇、京都片山家に「布留の能」一篇が傳はつて居り、その後のものは可なり多く現存して居る。傳寫は夙くから行はれてゐたものに相違なく、天文年間に鳥養道晰の筆寫したものは百篇以上に及んだことが、その日記によつて知られ、現に伊達伯爵家には觀世小次郎信光自筆の謡本百冊を所藏して居られるが、刊行せられたのは、慶長年間角倉素庵の版行したのが最も古く、爾來毎年のやうに、中には一年に數種刊行されて、現存のものだけでも、約六百種

に上つてゐる。その主なものを擧げると、

光悦本　慶長年間角倉素庵の販行したもので、本阿彌光悦が本文を書いたといふ說によつて、世に光悦本と呼ばれてゐる。百番百册としたもののやうであるが、數種の異版がある。近時、日本古典全集に圖書寮本百番を、謠曲文庫に齋藤氏藏本五十番を復寫して出した。

卯月本　元和六年卯月、觀世左近太夫暮閑の奥書を以て販行したもので、一番綴百册のものと、五番綴廿册のものとがある。

寬永六年卯月にも同樣のものを出した。

明曆外百番　明曆三年野田彌兵衞尉の販行したもので、奥書に「百番之外百番」で、觀世暮閑の章句によつたとある。

萬治山本本　萬治二年山本長兵衞の販行したもので、每曲辭句の解釋を附けてゐる。觀世流内百番の本をなしたもの。

貞享二百番之外百番　貞享三年林和泉椽の販行したもので、奥附に「此百番者世間流布之板行二百番之外百番也」とある、小形廿册本。國民文庫の謠曲全集下卷に收む。

元祿三百番之外百番　元祿二年林和泉椽が貞享三年本の續篇として販行したもの。國民文庫の謠曲全集下卷に收む。

元祿四百番之外百番　元祿十一年江戸田方屋伊右衞門の販行したもの。前項番外後百番の續篇と見るべきものである。國書刊行會から謠曲末百番として刊行してゐる。

明和改正本　明和二年観世大夫元章が當文本の詞章及び節附を改訂して、江戸出雲寺和泉掾に版行せしめたもので、内外二百番習謡十番計二百十冊及び闌曲九冊外二冊合せて計二百廿一冊。

天保山本本　天保十一年山本長兵衛の版行したもの、内百十番外六十二番別能二十八番あり、現行観世流謡本の底本である。

謡曲新百番　英人チャムブレンが佐佐木信綱博士に譲つた寫本を、明治四十五年博文館から刊行したもので、従來流布してゐないものが大部分を占めてゐる。

謡本（現行本）

謡本（現行本）

各流現行謡本も亦種類が少くないが、その中で最も標準とすべきもの（本書の底本としたもの）を擧げれば、

大正改版観世流謡本　観世元滋訂正、大正九年檜常之助發行。内百十番・外六十二番・別能二十八番・番外五番及び闌曲。梗概及び裝束附を附す。（本書で檜本又は家元本と呼ぶ。）

観世流改訂謡本　観世清之節附、丸岡桂訂正、内百十番・外六十二番・別能廿八番・番外八番及び闌曲、併せて四十五冊を大正十三・四年同書刊行會から發行したもので、解題・謡ひ方梗概・節附・裝束附がついてゐる。殊にその解題は謡曲研究者に參考となるものが多い。（本書で刊行會本と呼ぶ。）

大正改版寶生流謡本　寶生重英改訂、内百番・外八十番及び翁・闌曲、併せて三十七冊、大正十二年わんや書店發行。梗概及び裝束附を附す。

大正改版金春流謡本　金春光太郎著、百五十番三十冊、大正十四年わんや書店發行、梗概及び裝束附を附す。

金剛流謡本　金剛右京訂正、内百番・外百番、合四十冊、明治三十一年檜常之助發行。

註釋書（明治以前）

金剛流謠曲正本　從來の曲目を增減して、百八十番及び番外二十番、合せて四十冊とし、昭和四年三月から逐次出版してゐる。金剛右京訂正、檜常之助發行。

大正改版喜多流謠本　喜多六平太著、內百五十番・外五十三番、合四十一卷、大正十二年わんや書店發行、梗概・裝束附を附す。

喜多流謠本（昭和改訂版）　從來の曲目から二十三番を廢し、且內外の別を廢して、曲舞とも三十七卷とし、昭和三年十一月から逐次出版してゐる。喜多六平太著、同書刊行會發行。

註釋書（明治以前）

謠抄　豐臣秀次が五山の禪僧に命じて金春流謠本百番を註釋せしめたもので、文祿四年成る。註釋書中最古のもので、この書に關する筧五十里氏の委しい考證が「國語と國文學」第五十六號に出てゐる。十冊本又は二十冊本として版行されてゐる。

諷增抄　加藤盤齋が謠十五番を註釋したもの。寬文元年序。

法音抄　東山僧惠空が謠曲中の佛語を解說したもの。五卷。正德四年開版。

謠曲拾葉抄　俳人犬井貞恕が四十年に亘つて研究、觀世流百一番を詳解し、門弟忍鎧が增補して明和九年版行した。二十卷。註釋書中最も詳しいもの。國學院大學國文註釋全書に飜刻、丸岡桂校訂謠曲叢書にも曲名を五十音順に排列して飜刻した。

謠言粗志　寶生流謠曲二百番を金澤藩の藩儒が註釋した、拾葉抄と竝んで註釋書中の詳しいものである。二十卷、昭和三年、和田萬吉博士が校訂、謠曲文庫でその一部を飜刻した。

その他一番を詳しく註釈したものに、高評増々抄（元文元年）、山元名抄（寛政四年）、江口諸説考（享保六年）などがある。

註釈書・叢書（明治以降）

謡曲新評　増田于信氏評註。曲数は少い。二巻、明治二十四年東京三河屋より出版。

謡曲通釈　大和田建樹氏註、明治になつて出た最初の詳しい要領を得た註釈。曲数も甚だ多い。明治二十五年博文館より発行。全八巻。

謡曲評釈　大和田建樹氏が謡曲通解を増補し、曲名をいろは順に排列したもの。明治四十年博文館より発行。全九冊。註釈書中の有力なものである。

観世流改訂謡本詳解　丸岡桂氏註。前項に挙げた謡本の前附であるが、大和田氏の説を修訂した有力な註釈である。

この外、数十番の謡曲を註釈した書には、長連恒氏の「謡曲選釈」、鈴木暢幸氏の「謡曲講義」、豊田八十代氏の「謡曲新釈」などがある。

謡曲全集　国民文庫本。古谷知新氏校訂。古本謡本の項に挙げた観世流謡曲、内外二百番、番外前後二百番を上下二巻に収めたもの。校訂の厳密な良書である。

校註謡曲叢書　博文館発行。芳賀矢一、佐佐木信綱両博士の校註で、五百数十番、現存謡曲の殆どすべてを集めて、簡単な頭註を加へたもの。全三巻。謡曲研究者にとつて便利な書である。

謡曲集　有朋堂文庫本。野村八良氏校註。観世流二百番に簡単な頭註を加へたもの。二巻。

校註日本文學大系、謠曲　同叢書第廿・廿一の二卷に五流現行曲及び廢曲五十番を收めて、簡單な頭註を施した。尾上八郎博士の詳しい解題がある。

謠曲三百五十番集　日本名著全集本。野々村戒三氏校訂。これにも詳しい解題がある。

四流對照謠曲二百番　芳賀矢一博士が觀世・寶生・喜多・金剛の謠本を對照比較せられたもの。當時金春流謠本を得難く、これを缺かれたのは惜しいことであつた。三卷。明治四十一年金港堂發行。

解題・辭典

古今謠曲解題　丸岡桂氏遺著。古今の謠曲を網羅してこれを類別し、梗概・作者・演能記錄等を掲げた、謠曲解題隨一のものである。大正八年觀世流改訂謠本刊行會刊。

能樂大辭典　正田章次郎・雨谷幹一兩氏共著。本文一卷、附圖一冊。便利な書である。明治四十一年吉川弘文館發行。

謠曲辭典　蜂谷時順氏編。謠曲の語句を五十音順に排列して、註解したもの。大正十三年立川文明堂刊。

能樂參考書

能樂古典 世阿彌十六部集　吉田東伍博士校註。明治四十一年、安田善之助氏の買入れた能樂古書から發見せられた、世阿彌の遺著、花傳書・花傳書別紙口傳・五音條々・覺習條々・九位次第・遊樂習道見風書・至花道書・二曲三體繪圖・能作書・曲附書・風曲集・習道書・世子六十以後申樂談儀・夢跡一紙・却來華・金島集を飜刻したもので、能樂研究第一の根本資料である。明治四十二年能樂會より發行。原書は先年の大震火災に燒失した。

野々村戒三氏がこれに世阿彌の著音曲聲出口傳を加へて、頭註を施し、校註世阿彌十六部集と題し、大正十五年春

世に出されや、またこれを意譯したものに、「世阿彌十六部集意譯能樂の根源」があり、池内信嘉氏著、大正十五年能樂會發行。

能樂古典禪竹集　吉田東伍博士校註。金春禪竹の著八部、その孫禪鳳の著四部及び能本作者註文等を合せて、大正四年能樂會より發行。世阿彌十六部集に次で大切な研究資料である。

音曲玉淵集　寛保三年頃の編纂で、實演に關する詳しい書。明治三十二年大和田建樹氏校訂して、江島某から出版した。又丸岡桂氏校訂の謡曲叢書にも轉刻されてある。

能樂蘊奥集　木下敬賢氏著。裝束・作物等實演に關することを記した便利な書。六冊。明治二十三年刊。

能のしをり　大和田建樹氏著。能の觀方を平易に要領よく說いたもの。六冊。明治三十七年博文館發行。

謡曲物語　和田萬吉博士著。これは各曲の眞意を捉へるを主眼として、各曲を詳しく解說せられたもので、參考すべき良書である。明治四十五年富山房發行。

謡曲の研究　瀬尾武次郎氏著。謡曲を文學的に研究批評したもの。大正三年内藤金櫻堂發行。

謡曲と佛教　英雲外氏著。題名通りの書。大正六年丙午出版社發行。

能の見方謡の聞き方　池内信嘉氏著。名曲七十一番について說いた。大正六年磯部甲陽堂發行。

能樂全史　横井春野氏著。能樂の起原から現代に至るまでの歴史を詳述したもの。大正六年刊。

能樂盛衰記　池内信嘉氏著。上巻には徳川時代の、下巻には明治時代の能樂を詳述したもの。大正十四年能樂會より發行。

この外、演能曲文を批評したものに、「奈良土産」（貞享四年版、明治三十五年京都檜書店翻刻）及びその反駁「奈

雜誌・講座

外人の研究

良上産返答」（三十六年同所飜刻）、「舞正語磨」（萬治元年版、大正七年珍書保存會飜刻）などがあり、能樂の起原等を說いた古書に、「猿樂傳記」（燕石十種）、「申樂聞書」（續群書類從）、「猿樂沿革考」（燕石十種）などがある。

雜誌・講座

專門雜誌も亦數種あるが、中にも、「能樂」（明治三十五年七月創刊、目下休刊）、「謠曲界」（大正三年七月創刊）、「能樂畫報」（明治四十三年三月創刊）、「大觀世」（大正十二年一月創刊）には注意すべき記事が多い。

なほ謠曲講習會から發行した「謠曲講座」（大正十五年六月創刊）正續廿七冊には能樂各方面に亘つて專門の諸家の執筆せられた有益な記事が多い。

外人の研究

B. H. Chamberlain: The Classical Poetry of the Japanese, 1880.

M. Stopes: Plays of Old Japan, 1913.

E. Fenollosa and Ezra Pound: Noh or Accomplishment, 1916.

A. Waley: The No Plays of Japan, 1921.

K. Florenz: Geschichte d. Japanischen Literatur, 1906.

N. Péri: Etude sur le drame lyrique Japonais, 1909-1913.

中にも Waley 氏のものが比較的新しくもあり、內容も豐富で且研究的である。

なほ、明治以降に出版せられた能樂關係書目については、謠曲界第三十一卷第一號以降連載の、横山樹人

「明治以來出版能樂書目」、諸雜誌に掲載せられた論文については、謠曲界第十四卷第一號、丁々曲樓主人「非専門の雜誌に載つた能樂記事」を參照するとよい。この外上掲記事以後大正十年、非専門の雜誌・講座に掲載せられたものには、

謠曲の研究　野々村戒三氏（日本文學講座）
謠曲の鑑賞　能勢朝次氏（日本文學講座）
謠曲　市川寛、能勢朝次二氏（國語國文の研究、創刊號以降）
能樂史　拙稿（日本風俗史講座）
謠曲・狂言の本質　拙稿（國語と國文學第三十六號）
謠曲文の戲曲的解釋　拙稿（國文教育第六卷四號）
謠曲の研究法　拙稿（國語と國文學第六十二號）

などがある。

第六章　術語略解

これまで述べて來たところを以て、能樂・謠曲に關する大體を考察し終つたのであるが、由來能樂・謠曲に關する術語には、特殊な難解なものが少くないので、再び章を改めて、これを五十音順に排列して、その意義を略述し、これによつて、一には本書各卷に出てくる術語の了解を便宜にし、また一には能書の解説及び索引をも兼ねたいと思ふのである。

あ

【赤頭（あかがしら）】赤色の長い毛髪で、主として鬼畜類のシテに用ゐる（第十六圖）。

【惡尉（あくじよう）】常人でない老體、「白髭」の後ジテ白髭明神、「張良」の後ジテ黄石公などに用ゐる能面で、大（おほ）惡尉、鼻瘤（はなこぶ）惡尉、茗荷（みやうが）惡尉などの種類がある（第三圖）。

【上歌（あげうた）】上音で謠ふ五七調の歌詞。

【朝倉尉（あさくらじよう）】修羅物の前ジテなど老翁に用ゐる能面（第三圖）。

【足拍子（あしびやうし）】板を強く踏んで喜び又は驚きの心などを示す型。

【アシラヒ】（會釋）　シテの登場に用ゐる大小鼓の囃子。森田流以外笛は吹かない。

【厚板（あついた）】唐織に似た裝束で、主として男體の着附に用ゐる。紅色の模樣のあるものを色入（いろいり）厚板、紅色の入らない模樣のものを色無（いろなし）厚板といひ（第十七圖）、格子縞のものを、その柄の大小によつて大格子（おほがうし）、小格子（こがうし）といふ（第十八圖）。

い

【アト】狂言のシテ役に對するワキ役をいふ。アトは「あともふ」（伴ひ誘ふ意）といふ古語から出た語。

【後座】本舞臺の後方、囃子方、後見の着席する所。後に鏡板がある（第一圖）。

【瘦男】痩男とも書く。「藤戸」「藤榮」の後ジテ等男體の亡靈などに用ゐる能面。

【間】前ジテが中入した後、後ジテが登場するまでの間に、その曲に就て通俗的な説明をする詞章。又はこれを述べる狂言方。

【間狂言】間に同じ。

【扇】末廣と中啓との二種あり、末廣は素袍を着る庶民に用ゐる、中啓はその他の者に用ゐる。そしてこれには曲柄によつて、翁扇、神扇、修羅扇、鬘扇などの別がある（第二十四圖及び口繪圖）。

【網】網に擬へた小道具で、「櫻川」に用ゐる小さな抄ひ網と、「阿漕」に用ゐるやゝ大きな置網と、二種ある（第三十圖）。

【網の段】「櫻川」の「あたら櫻の」から「わが櫻子ぞ戀しき」までの小謠・仕舞。

【怪士】鬼畜類又は亡靈に用ゐる能面（第九圖）。

【安坐】膝を組んであぐらに坐る型。

【イウケン扇】扇を胸のあたりから上へ上げて、晴々した心持を表す舞の手。

【雷】雷神に用ゐる能面。

【石】石に擬した作物。形は塚に似てゐて、中から二に割れるやうに作る（第四十一圖）。

【椅子車】車の一種で、中に床几を置いて腰をかける。「車僧」に用ゐる（第四十九圖）。

【一段劇能】一幕物の劇のやうに、シテとワキとの關係の密接な、シテ中入のない現在物の謠曲。

【一疊臺】・疊一疊の大きさの臺で、家、家の一室、家の土壇、丘など、色々の意味に用ゐる作物。臺の上にかけたきれを臺掛といふ（第三十一圖乃至三十七圖）。

【一の松】能舞臺橋懸の前面に植ゑてある三本の松のうち、仕手柱に最も近い松（第一圖）。

【一角仙人】額に一本の角の生えた一角仙人に用ゐる能面（第十二圖）。

【一管】他の樂器を合はせず、たゞ笛だけで、吹く囃子。

【一聲】（イ）主としてシテの最初に謠ふ五七五七五の歌詞。（ロ）登場して一聲又はサシ謠を謠ふシテの出などに囃す大小鼓を主とした囃子。

【一調】大小鼓、太鼓、いづれかの一だけ、謠に合はせて打つ囃子。

【和泉流】狂言方の流名。

【絲車】〔安達原〕の枠（桛輪）に擬へた小道具（第五十五圖）。

【絲の段】〔安達原〕の「さてこそも五條あたりにて」から「音をのみひとり鳴き明かす」までの小謠。

【祈】（イ）山伏などが惡魔を祈り伏せる所作。（ロ）右のやうな場合の謠。（ハ）右のやうな場合に用ゐる四拍子の囃子。

【イブリ】柄振に同じ。

【家元】シテ方・ワキ方・囃子方等、それぞれ一流をなすものの藝系を相傳する家柄。

【庵】草庵に擬へた四角形枠形の作物。藁屋に似てゐるが、屋根がない。柴屋ともいふ（第四十圖）。

【今若】 平家、源平などの武將に用ゐる能面。

【苛高數珠】 山伏の用ゐる、算盤玉のやうに角のある數珠（第二十四圖）。

【色入】 唐織・摺箔・鬘帶などの模樣に紅色のあるもの（第十六・十七・二十圖）。

【色無】 右のやうなものに、紅色の入らないもの。又無色ともいふ（右同圖）。

【イロヘ】 「イロエ」 女體の舞ふ、短い靜かな舞。

う

【ウソブキ】 異類の狂言に用ゐる面。

【歌】 七五調の歌詞で、シテ歌も地歌もある。低音で謠ふものを下歌、高音で謠ふものを上歌といふ。

【謠】 古くは謳・諷・唄等とも書いた。能樂に用ゐる歌詞。

【打杖】 小道具の一。撞木のやうな形で、鬼などが用ゐる（第二十七圖）。

【團扇】 唐人、天狗等の用ゐるもので、唐團扇、羽團扇、葉團扇、魔王團扇などの種類がある（第二十四圖）。

【鵜の段】 「鵜飼」の「鵜籠を開き取り出だし」から「名殘惜しさをいかにせん」までの小謠・仕舞。

【姥面】 普通の老婆に用ゐる能面（第八圖）。

【姥鬘】 老女に用ゐる、白毛交りの鬘（第十六圖）。

【初冠】 垂纓又は卷纓の普通の冠。追懸をつけることも、日蔭鬘や挿頭をつけることもある（第十三圖）。

【梅若流】 シテ方の流名。近頃觀世流から分離したものである。

え

【柄振】 雪搔に擬へた小道具。「氷室」などに用ゐる（第二十九圖）。

【延命冠者】 「翁」の變式、「父尉延命冠者」のツレのつける能面（第二圖）。

【翁烏帽子】 翁のかぶる黒色の立烏帽子（第十三圖）。
【鬼頭巾】・鬼の狂言にかぶる頭巾（第五十九圖）。
【鬼能】 鬼を主人公とした能。「紅葉狩」「羅生門」など。
【負柴】 小道具の一。萩を集めて作つた、背に負ふ柴。「志賀」の前ジテなどに用ゐる（第二十四圖）。
【大喝食】 自然居士など著名な喝食僧に用ゐる能面（第五圖）。
【大口】 後部を平たく強く張つた袴。用途が廣く、男體にも女體にも用ゐる。地色も色々あつて、白大口・緋大口・色大口などと區別す（第二十一圖）。
【大藏流】 狂言方の流名。
【大鼓】 能樂器の一。膝の上にのせて打つ。「おほかは」ともいふ（第六十圖）。
【大兜巾】 天狗の額にあてるもの（第十五圖）。
【大飛出】 「嵐山」「江島」の後ジテなど、神佛異形に用ゐる能面（第九圖）。
【大癋】 天狗などが登場する際に用ゐる、笛を主とした囃子。
【大癋見】 「鞍馬天狗」「善界」など天狗のかぶる能面（第十圖）。
【オモ】（重） 狂言のシテ役をいふ。アトに對す。
【重荷】 「戀重荷」に用ゐる重荷に擬へた小道具（第五十五圖）。
【笈】 「安宅」の狂言など、強力が背に負ふ箱（第二十九圖）。
【置網】 「阿漕」に用ゐる大網に擬へた小道具（第三十圖）。

か

【面】（おもて）　能面。シテ・ツレなどがつける。ワキ・子方は常につけない。面をつけないことを直面といふ。

【開口】（かいこう）　ワキが次第謠の前に、最初に謠ふサシ謠。但し現在は行はれてゐない。

【櫂棹】（かいざを）　舟を漕ぐ爲の意に用ゐる竹棹（第二十九圖）。

【鏡】（かゞみ）　鏡の形に作つた小道具。〔野守〕〔昭君〕などに用ゐる（第三十圖）。

【鏡板】（かゞみいた）　能舞臺後座（あとざ）背面の羽目板。老松を描く（第一圖）。

【鏡臺】（かゞみだい）　鏡をのせる臺の形に作つた作物。〔皇帝〕〔昭君〕などに用ゐる（第五十一圖）。

【鏡間】（かゞみのま）　樂屋から橋懸へ出る間の所で、大姿見鏡を置く。

【篝舟】（かゞりぶね）　舟の作物に篝火をつけたもの。〔通盛〕に用ゐる（第五十圖）。

【樂】（がく）　（イ）雅樂に擬へた舞。（ロ）樂の舞に奏する四拍子の囃子。

【樂屋】（がくや）　能役者が裝束着など出演の準備をする室。

【神樂】（かぐら）　（イ）神子神樂に擬へた舞。（ロ）この舞に奏する四拍子の囃子。

【掛合】（かけあひ）　謠曲の、シテとワキ、シテとツレなどが對話問答する部分。

【景清】（かげきよ）　景清の役につける能面（第六圖）。

【掛素袍】（かけすはう）　素袍上下の上衣だけ着る時にいふ名稱（第二十二圖）。

【掛直垂】（かけひたたれ）　直垂上下の上衣だけ着る時にいふ名稱（第二十二圖）。

【カケリ】（翔）　修羅物・狂女物などの位取りの早い短い舞。

【笠】（かさ）　長途の旅をする役に用ゐる黑塗の笠。男笠（をとこ）と女笠（をんな）との別がある（第十九圖）。

【笠の段】〔蘆刈〕の「あれ御覧ぜよあの浦に」から「つれづれもなき心面白や」までの小謠・仕舞。

【風折烏帽子】立烏帽子の上を横に折つたもの。その金色のものを金風折烏帽子といふ（第十三圖）。

【頭】毛髮を長く垂れたかつら。その毛髮の色によつて、黑頭、赤頭、白頭の別がある（第十六圖）。

【鹿背杖】〔山姥〕などに用ゐる撞木形をした杖（第二十九圖）。

【型】（形）能樂に演ずる仕科、舞踊の一定した樣式。

【片クセ】クセの前にクリ・サシのない、クセとして完全な要素を具備してゐないもの。

【型附】（形付）能樂演奏の樣式を指示したもの。

【刀】小道具の一。普通のものと變りがない。〔小鍛冶〕に用ゐる（第二十七圖）。

【語】シテ又はワキが一人で長々と物語る詞章。

【語間】間狂言がワキの所望により、名所舊蹟などについて語るもの。居語ともいふ。

【片折戸】〔小督〕に用ゐる片折戸に擬へた作物で、扉、袖垣がある。柴折戸ともいふ（第四十四圖）。

【勝修羅物】修羅物の主人公は皆敗將であるが、〔田村〕〔八島〕〔箙〕には戰勝の樣を描いてゐるので、特に勝修羅物といふ。

【鞨鼓】（イ）小道具、腰につける一種の小鼓（第五十四圖）（ロ）鞨鼓をつけて舞ふ舞。（ハ）鞨鼓の舞に奏する囃子。

【鞨鼓臺】樂太鼓に擬へた、鞨鼓を臺に載せた作物。〔天鼓〕〔富士太鼓〕などに用ゐる（第五十一圖）。

【ガツシ】左右の膝をかはるがはる立てて進む型。

【喝食】 喝食僧に用ゐる能面。大喝食、小喝食、などある（第十五圖）。

【喝食鬘】 喝食僧に用ゐる鬘。普通の鬘よりは後を少し長くして結ぶ（第十六圖）。

【合掌】 両手を合はせて拜する型。片手でするのを片合掌といふ。

【鬘】（鬘） 女性に扮する場合にかぶる鬘（第十六圖）。鬘の末を長く垂れたものを長鬘といふ。

【鬘帶】 鬘のまわりをしめて、後に垂れる細帶。その役柄によつて、色入鬘帶、色無鬘帶、金紋鬘帶などの別がある（第十六圖）。

【鬘物】 女性を主人公とした謠曲の總稱。普通三番目に演ずる。「井筒」「野宮」など。

【葛桶】 腰掛に用ゐる桶。床几とも腰桶ともいふ（第五十四圖）。

【鐵輪】 「鐵輪」のシテの頭に戴くもので、五徳の足に火をともした形のもの（第十四圖）。

【鉦】 手に持つてたゝく鉦。「隅田川」に用ゐる（第三十圖）。

【鐘】 釣鐘の形に擬へた作物。「道成寺」に用ゐる（第五十一圖）。

【鐘の段】 「三井寺」の「かほどの聖人なりしだに」から「眺め居りて明かさん」までの小段・仕舞。

【蛙】 「阿漕」「善知鳥」のシテ男の幽靈などに用ゐる能面（第十一圖）。

【變の型】 能樂の演奏に常の型とは變つた様式で演ずるもの。

【鎌】 小道具の一。「海士」に用ゐる（第三十圖）。

【上懸】（上掛） 觀世流と寶生流とのシテ方二流をいふ。

【神樂】 「翁」の翁舞をいふ。

き

【上下】普通の上下で、囃子方、地謠などが着る。狂言の着るものは、別に狂言上下といふ（第五十八圖）。

【神能】神體を主人公とした謠曲の總稱。〔高砂〕〔弓八幡〕など。

【神舞】神體の舞ふ品位のある舞。

【唐織】女體の上衣に用ゐる小袖。その模樣に紅色のあるのを色入唐織、紅色の入らないのを色無唐織といふ（第二十圖）。

【傘】小道具の一。柄の長いのを長柄傘といふ（第二十九圖）。

【狩衣】普通の狩衣と略同じもの。袷狩衣・單狩衣・縷狩衣・翁狩衣の種類がある（第十九圖）。

【邯鄲男】〔高砂〕の後ジテ神體などに用ゐる氣品のある能面（第四圖）。

【冠】普通の冠を初冠といひ、この外に透冠・唐冠などの種類がある（第十三圖）。

【起請文】三讀物の一。〔正尊〕の「敬つて白す」から「正尊と讀み上げたり」までの小謠。

【祈禱臺】〔鐵輪〕に用ゐる作物。供物棚ともいふ（第五十三圖）。

【喜多流】シテ方五流の一。

【鬼畜物】鬼又は動物を主人公とした謠曲の總稱。〔土蜘蛛〕〔石橋〕など。

【着附】下着の上に襲ねて着る小袖類の總稱。箔・厚板・熨斗目などがある（第十七・十八圖）。

【着流】シテ・ツレ・ワキ等の裝束に袴をつけないこと。

【砧】砧の形に作り白水衣を卷いた作物（第五十三圖）。

【急舞】位の極めて早い舞で、〔紅葉狩〕などに舞ふ。

【經卷】經文に擬へた卷物（第二十四圖）。

【狂言】シテ方・ワキ方等に對立して、間狂言等を勤める役者。「アヒ」又は「ヲカシ」ともいふ。

【狂言上下】狂言方の着る模樣のある上下（第五十八圖）。

【狂言座】橋懸の後方、舞臺に近い所で、狂言の控へてゐる席。

【狂言柱】橋懸と後座との堺にある後見柱の別稱。

【經臺】經卷をのせる臺（第五十五圖）。

【狂女物】狂女を主人公とした謠曲の總稱。「三井寺」「櫻川」など。

【キリ】（切）一番の謠の最後、結びとして謠ふ部分。

【切組】斬り合ひの樣を示す所作。

【切戸】後座の右側面、後見等の出入する所。切戸口ともいふ。

【尾能】一日の演能の最後に演ずる曲。

【金札】金札に擬へた小道具（第三十圖）。

【括袴】狂言のはく袴の一種（第五十七圖）。

【草】草や竹に挾んだ小道具。「蘆刈」には蘆、「木賊」には木賊を挾み、「雲雀山」「項羽」などには花を交へる（第二十五圖）。

【草刈籠】小道具の一（第二十六圖）。

【藥袋】「寢覺」に用ゐる小道具。（第三十圖）。

【クセ】（曲）　委しくは「曲舞」といふ。謠曲の主要部をなすもので、普通クリ・サシ・クセ・クセ上げの四部から成る。その演奏に、坐つたまゝ謠ふものを居クセ、立つて舞ふものを舞クセといふ。

【沓】（靴）　「張良」に用ゐる小道具（第五十四圖）。

【クツロク】（寛）　演能の中途、シテ等が後見座に行つて暫く休息すること。

【クドキ】（口說）　述懷の意を述べる謠ひ方の一種。

【供物棚】　「鐵輪」に用ゐる作物。祈禱臺ともいふ（第五十三圖）。

【クモル】（曇）　面を伏せて憂ひの心持を示す仕科。

【クリ】　くり上げて謠ふ歌詞で、通例クセの前のサシの上にあり、クセの前提をなす。

【車】　牛車に擬へたもので、両輪・屋根・轅を具備してゐる（第四十九圖）。

【車の段】　「百萬」シテ謠の初めの「南無阿彌陀佛」から「賴めや賴め南無阿彌陀佛」までの小謠・仕舞。

【黑頭】　黑色の長い毛髮で、神靈又は亡靈などに用ゐる（第十六圖）。

【黑垂】　黑色の垂らし髮。天女又は武將などに用ゐる（第十六圖）。

【黑髭】　龍神に用ゐる能面（第十一圖）。

【鍬形】　「船辨慶」のシテ、「羅生門」のワキなどに黑頭の上につける（第三十圖）。

【掛絡】　袈裟。色入と色無との別がある（第二十三圖）。

【願書】　三讀物の一。「木曾願書」の「何々歸命頂禮」から「皆禮拜を參らする」までの小謠。

【勸進帳】　三讀物の一。「安宅」の「もとより勸進帳の」から「天も響けと讀み上げたり」までの小謠。

【觀世流】シテ方の流名。

【官人頭巾】官人に扮する狂言のかぶる頭巾（第五十九圖）。

け

【劇能】シテが亡靈としてでなく現在人物として登場する、ワキとの關係の密接な、普通の劇と同樣な脚色の謠曲。現在物が即ちそれである。

【袈裟頭巾】廣い袈裟で頭をつゝむ形の頭巾（第十五圖）。

【劇的夢幻能】シテとワキとの關係の劇的な、しかしシテが亡靈である、夢幻能と劇能との中間にあるもの。

【劍】〔鐘馗〕〔咸陽宮〕などに用ゐる（第二十八圖）。

【現在物】シテが亡靈でなく現在人物として登場する曲。〔盛久〕〔安宅〕など。

【劍先烏帽子】立烏帽子の頂の三角形に尖つたもの（第十三圖）。

【見所】能舞臺の見物人の席。

【見德】末社神に扮する狂言に用ゐる面（第五十六圖）。

こ

【後見】シテなどの裝束を直したり、作物を出し入れしたりする役。

【後見座】後座の後方、橋懸に近い、後見の控へてゐる所。

【後見柱】後座と橋懸との間にある柱。狂言柱に同じ。

【小牛尉】脇能の前ジテ老翁などに用ゐる能面（第二圖）。

【小謠】一番の謠曲中、その一節を拔いて謠ふもの。

【小面】年若い女性に用ゐる能面（第七圖）。觀世以外ではツレ女にも用ゐる。

【小書】變の型に同じ。曲名の肩にその型の名稱を附けるから小書といふ。

【子方】シテ・ツレなどのうち、子供が演ずる役柄のもの。

【小喝食】〔花月〕など普通の喝食僧に用ゐる能面（第五圖）。

【黑式尉】〔翁〕の三番叟がつける面（第二圖）。

【輿】輿に擬へた作物。但し上に乘るのでなく、頭の上に傘のやうにさしかけるのである（第四十九圖）。

【腰帶】腰に結び前に垂らす上帶。縫紋、縫箔、緞子などの種類がある（第二十三圖）。

【腰卷】女體の裝束に、腰から下に纏ふ表着（第十八圖）。

【腰蓑】麻で作つた、腰につける蓑。漁夫等に用ゐる（第二十三圖）。

【小袖】着附類はみな小袖仕立であるが、特に狂言女の着附を單に小袖といふ。普通赤地の縫箔。

【小道具】能役者の手に持つもの、又は舞臺に置く小さな道具（第二十四乃至三十圖、第五十四・五十五圖）。

【小立烏帽子】翁烏帽子の少し低いもの（第十三圖）。

【小鼓】四拍子の一。右の肩にあげて打つ（第六十圖）。

【琴の段】〔咸陽宮〕の「さらば祕曲を奏すべし」から終りまでの小謠。

【詞】謠曲の、節をつけない部分。

【小飛出】〔小鍛冶〕〔鵺〕などの異類の用ゐる能面（第九圖）。

【木葉】〔三輪〕〔采女〕などに用ゐる、小さな木の枝。

【五番立】一日の演能番組を神・男・女・狂・鬼の五種目で組織すること。

さ

【九番目物】　九番立の番組の最後に演ずる曲で、鬼畜物を主とする。

【小癋見】　「皇帝」「昭君」の後ジテなど鬼神又はそれに近いものに用ゐる能面（第十圖）。

【氷】　木を平たくして作り、銀紙を張つて氷に擬へたもの。「氷室」に用ゐる（第三十圖）。

【駒の段】　「小督」の「あら面白の折からやな」から「想夫戀なるぞ嬉しき」までの小謠。

【小舞】　間狂言の舞。

【込大口】　指貫又は長直垂の下にはく大口。

【小結烏帽子】　子方のつける侍烏帽子（第十三圖）。

【五流】　觀世・寶生・金春・金剛・喜多のシテ方五派。

【金剛流】　シテ方の流名。

【金春流】　シテ方の流名。

【祭壇】　一疊臺を主にして、祭壇に擬へた作物（第三十五圖）。

【草子】　綴本の形にして萬葉集に擬へたもの、「草子洗小町」に用ゐる（第五十五圖）。

【榊　枝】　折枝の一種で、榊の枝に幣又は麻をつけたもの（第二十五圖）。

【酒壺】　上に覆ひのある壺、「猩々」に用ゐる。亂置壺に同じ（第五十五圖）。

【下端】　後ジテ登場などの時に奏する囃子。出端に似てゐる。

【鷺流】　狂言方の流名。

【下歌】　低音で謠ふ七五調の歌詞。

【笹】狂女が手に持つ竹の枝。持笹、狂笹、狂女笹ともいふ（第二十五・六圖）。

【笹の段】「百萬」の「げにや世々毎の」から「わが子に逢はんためなり」までの小謠・仕舞。

【簓の段】「自然居士」の「それ簓の起りを尋ぬるに」から終りまでの小謠・仕舞。

【サシ】シテ一聲の後、クセの前などに謠ふ歌詞で、大體七五調から成る。

【指貫】高貴の人に扮する場合に用ゐる。地色には紫・緋を用ゐる（第二十一圖）。

【サス】扇又は手を前にさし出す舞の手。

【侍烏帽子】三角形の折烏帽子、武士に用ゐる（第十三圖）。

【サラヘ】松葉掻に擬へた小道具。「高砂」に用ゐる（第二十九圖）。

【猿】猿の狂言に用ゐる面（第五十六圖）。

【猿飛出】「鵺」の後ジテなど畜類に用ゐる能面（第十一圖）。

【棹】（竿）竹で作る。舟を漕ぐ意に用ゐるものを櫂棹、釣に用ゐる意のものを釣竿といふ（第二十九圖）。

【三光尉】修羅物の前ジテ老翁などに用ゐる能面（第三圖）。

【三段舞】狂言の小舞。別に天女舞などで三段（普通は五段）に舞ふものがある。

【三の松】橋懸の前方に植ゑた三本の松のうち、最も舞臺に遠いもの。

【三番叟】「翁」の能に狂言の演ずるもの。

【三番立】五番立を略して、一日の演能種目を三番とすることで普通脇能と三・四番目物の一を略す。

【三番目物】五番立の演能に第三番目に演ずる謠曲。主として鬘物を用ゐる。

し

【三返かへし】　重い脇能の次第に、ワキが一度、地が一度謡つて、更にまたワキがなほ一度謡ふもの。

【顰】　「大江山」「土蜘蛛」の後ジテなど鬼畜類に用ゐる能面（第九圖）。

【絓水衣】　絓絹の水衣。縷よりは重いものとす。略して單に水衣ともいふ（第二十圖）。

【獅子】　「石橋」「紅葉狩」の後ジテなど、異類に用ゐる能面（第十圖）。

【獅子頭】　赤頭に屑をつけて、獅子に擬へたもの。「望月」などに用ゐる（第十六圖）。

【獅子舞】　獅子の戯れる様に擬へた所作。

【次第】　（イ）主としてワキが最初に謡ふ七五七四の歌詞。（ロ）次第を謡ふ時の囃子。

【下に居る】　シテ・ツレ・ワキ等の坐る時の常の姿勢で、左膝を立てて坐ること。

【下袴】　狂言に用ゐる装束（第五十七圖）。

【靜烏帽子】　白拍子に用ゐる立烏帽子（第十三圖）。

【シテ】（仕手・爲手）　能樂の主役を呼ぶ名稱。

【四手】　紙で作つた幣（第二十七圖）。

【仕手柱】　橋懸と本舞臺との間の、卽ち舞臺に向つて左側後方の柱。

【慈童】　童子に似た能面。「菊慈童」などに用ゐる。

【柴】　萩で作つた小道具。手に持つ持柴と、背に負ふ負柴とがある（第二十四圖）。

【柴舟】　柴積み舟に擬へた作物（第五十圖）。

【柴屋】　藁屋と同じ形であるが、屋根がない（第四十圖）。

【柴折戸】 片折戸に同じ。「小督」に用ゐる（第四十四圖）。

【四拍子】 笛・大鼓・小鼓・太鼓の囃子をいふ。

【十六】 「敦盛」「朝長」など年若い公達に用ゐる能面（第四圖）。

【汐汲車】 水桶を載せる小さな車の作物。細長い紐をつける。「松風」に用ゐる（第四十九圖）。

【潮干珠】 「玉井」に用ゐる（第三十圖）。

【潮滿珠】 「玉井」に用ゐる（第三十圖）。

【仕舞】 謠曲の一節を謠のみに合はせて舞ふもの。

【下懸】（下掛） 金春・金剛・喜多のシテ方三流を總稱す。

【蛇】 蛇體に用ゐる能面（第十二圖）。

【正】 舞臺の前面の方をいふ。正面に同じ。

【床几】 シテ・ワキ等に用ゐる葛桶（第五十四圖）と、囃子方に用ゐる×字形の脚があつて折り疊みの出來るもの（第六十圖）とある。

【常座】 仕手柱の少し前方、シテの所作の基點となる所。

【猩々】 猩々に用ゐる能面（第五圖）。

【裝束】 能役者の頭から足まで身につける一切の服裝をいふ。

【上頭掛】（調度掛） 大臣烏帽子・折烏帽子などの附紐で、頸で結ぶ（第十三圖）。

【釋迦】 佛體に用ゐる能面（第十一圖）。

【笏】(しやく) 小道具の一（第二十四圖）。

【錫杖】(しやくぢやう) 僧の持つ小道具（第二十八圖）。

【曲見】(しやくみ) 「百萬」など中年増の女體に用ゐる能面（第七圖）。

【シャギリ】 間狂言が一人宛で千鳥をとんで入るもの。早打間など。

【沙門帽子】(しやもんばうし) 角帽子の後の垂を二つ折にして後で結んだもの。高僧に用ゐる（第十五圖）。

【舍利】(しやり) 舍利殿に擬へたもの（第五十四圖）。

【數珠】(じゆず) 普通のワキ僧等には木製のもの、高僧等には水晶數珠、山伏には刺高數珠を用ゐる（第二十四圖）。

【鐘木】(しゆもく) 鉦をたゝく木（第三十圖）。

【修羅物】(しゆらもの) 討死した武士を主人公とした謠曲。「兼平」「賴政」など。

【鐘樓】(しゆろう) 鐘撞堂に擬へた作物。「三井寺」に用ゐる（第五十二圖）。

【俊寛】(しゆんくわん) 「俊寛」のシテに用ゐる能面（第六圖）。

【春藤流】(しゆんどうりう) ワキ方の流名。

【尉髪】(じようがみ) 老翁の髪。白髪をちよん髷に結ぶ（第十六圖）。

【初同】(しよどう) 一番の謠曲中、最初の地謠の部分をいふ。

【序舞】(じよのまひ) 靜かな品位のある舞。

【序破急】(じよはきふ) 謠曲の詞章・能樂の演奏に、その全體又は一部の緩急を示す語。世阿彌は一番の謠曲は序一段、破三段、急一段を通則としてゐる。

す

【柱杖】〔殺生石〕のワキ、〔放下僧〕のシテなどの用ゐる小道具（第二十八圖）。

【白綾】純白、綾絹の小袖で、氣品の高い女體に用ゐる。

【白頭】白色の長い毛髪。天狗鬼畜などの老體に用ゐる（第十六圖）。

【白垂】白色の垂らし髪。老體の後ジテ等に用ゐる（第十六圖）。

【白練】純白、練絹の小袖、氣品の高い男體に用ゐる（第十八圖）。

【白鉢卷】武士の戰ひなどに用ゐる（第十六圖）。

【シヲル】泣く仕科。面より少し離れた所に手を當てて泣く形をする。

【神歌】〔翁〕の歌詞をいふ。

【神事物】神體を後ジテとした謠曲。神能に同じ。

【眞一聲】一聲の囃子のうちで、特に位の重いもの。

【眞次第】次第の囃子のうちで、特に位の重いもの。

【巣】（イ）蜘蛛の巣に擬へた、塚の作物に巣の形を紙で切りつけたもの（第四十一圖）。（ロ）蜘蛛の絲に擬へて、紙を細長く切つたもの。

【素謠】謠曲を囃子なしに謠ふこと。

【透冠】神體に用ゐる冠（第十三圖）。

【杉箒】柄の先に杉葉をつけた箒。〔高砂〕の前ヅレなどに用ゐる（第二十九圖）。

【抄ひ網】〔櫻川〕に用ゐる小さな網（第三十圖）。

【篠懸】細長い輪形の袈裟。山伏に用ゐる（第二十三圖）。

【素袍】正しくは素襖と書くべきもので、身分の高くない役柄に用ゐる（第二十二圖）。

【角】能舞臺の目附柱の方をいふ。

【角帽子】普通のワキ僧に用ゐるもので、先の三角形に尖つた、後の長く垂れたもの（第十五圖）。

【摺箔】金銀の箔で形を置いた小袖。主として女體の着附に用ゐる。單に箔ともいふ（第十七圖）。

せ

【石王尉】脇能の前ジテ老翁などに用ゐる能面（第三圖）。

【蟬丸】蟬丸に用ゐる能面（第六圖）。

【仙人杖】〔石橋〕の間狂言に用ゐる（第五十九圖）。

そ

【增】〔羽衣〕〔龍田〕など氣品のある女體に用ゐる能面（第七圖）。

【側次】法被の袖のないもの。粗末な鎧の意などに用ゐる（第二十圖）。

た

【太鼓】囃子方四拍子の一（第六十圖）。

【太鼓柱】後座と橋懸との間にある柱。後見柱に同じ。

【大臣柱】本舞臺の前方、向つて右側の柱。脇柱に同じ。

【大臣ワキ】當今の臣下、勅使などのワキをいふ。

【大臣烏帽子】大臣ワキ（勅使又は臣下）のかぶる折烏帽子（第十三圖）。

【大小前】小鼓座と大鼓座との中間のすぐ前方をいふ。

【太夫】シテをいふ。

【松明】松明に擬へた小道具。柄は萩で作り、先には麻又は緋熊の毛を赤く染めてつける（第二十七圖）。
【唐團扇】唐人に扮する時に用ゐる（第二十四圖）。
【唐冠】唐人に扮する場合に用ゐる（第十三圖）。
【唐帽子】大黒頭巾の後を垂れたやうな、唐人に扮する場合に用ゐるもの（第十五圖）。
【高安流】ワキ方の流名。
【田子】水桶に長い紐をつけ、棒で荷ふやうにしたもの（第三十圖）。
【襷】狂言に用ゐる（第五十七圖）。
【太刀】腰につける時も、手に持つ時もある（第二十八圖）。
【立木】松・梅・櫻・桂・藤等の枝を一本枠に入れ、又は一疊臺に立てるもの（第四十五乃至四十七圖）。
【立曲舞】クセ謠にシテが立つて舞ふもの。舞クセに同じ。
【立廻】カケリに似た舞。
【立拜】（達拜）ワキが名乘の終りに正面に向つて兩手を合はせるやうにして敬禮の意を示すこと。
【立物】天冠、輪冠の頂に戴く、龍・虎・狐・鶴・龜・鷺・胡蝶・梅・藤等に擬へた造り物。これによつてその扮する仁體の、鳥獸又は草木の精魂であることを示す（第十四圖）。
【立烏帽子】細長い直立した烏帽子（第十三圖）。
【玉の段】〔海士〕の「その時人々力を添へ」から「海上に浮かみ出でたり」までの小謠・仕舞。
【玉の井】〔玉井〕に用ゐる作物（第四十八圖）。

ち

【短冊】 奉書で作り、又本物をも用ゐる。

【短冊の段】「熊野」のイロヘ、短冊に歌を認める仕科。

【單式能】 ワキとシテとの關係の薄い、シテの中入しない謠曲。

【地】 地謠に同じ。

【中將】「中將」「朝長」「清經」など貴族的な武將又は「融」「經正」など貴人に用ゐる（第四圖）。

【地謠】 シテ・ツレ・ワキ・ワキツレ等舞臺に立つ役者以外の、數人が同吟して謠ふ歌詞。又はこれを謠ふ役者。

【地謠座】 地謠を謠ふ役者の坐る場所。舞臺の向つて右側、脇座の奥。

【中舞】 序舞よりやゝ早い舞。

【地裏】 地謠座の背後にある見所。

【竹林】「龍虎」に用ゐる作物（第四十三圖）。

【稚兒袴】 子方の着る長袴（第二十一圖）。

【地次第】 地謠の謠ふ次第。又は地取をいふ。

【父之尉】「翁」の變型「父之尉延命冠者」に用ゐる能面（第二圖）。

【地取】 ワキ又はシテの謠ふ次第を、地謠が低音で繰返して謠ふもの。「地かへし」ともいふ。

【茅輪】「六月祓」に用ゐる小道具（第二十六圖）。

【小刀】 腰にさす短刀（第二十八圖）。

【長絹】 長絹直垂の變化したもので、主として女體の上衣に用ゐる（第十九圖）。

つ

【長範頭巾】大黒頭巾の後の垂の下つてゐるやうなもの。「熊坂」などに用ゐる（第十五圖）。

【長靈癋見】「熊坂」「第六天」などで恐ろしい仁體に用ゐる能面（第十圖）。

【陣羽織】狂言に用ゐる（第五十七圖）。

【塚】塚又は山に擬へた作物。竹で圓筒形の枠を作り、色布で外を掩ふ（第四十一圖）。

【着ぜりフ】主としてワキが道行の後、目的地に着いた意を述べる詞。

【作物】舞臺に持ち出して据ゑて置くもの。一疊臺・庵・立木等（第三十一乃至五十五圖）。

【槌】「小鍛冶」に用ゐる小道具（第二十七圖）。

【土車】土車に擬へた小さい車の作物。索くやうに細長い紐をつける（第四十九圖）。

【綱】「夜討曾我」の捕繩、「唐船」の手綱などに用ゐる細引と、「俊寛」の纜に用ゐる太綱とがある。

【壺折】（坪折）唐織などの上衣を帶のところで折り入れて着つけること。

【詰足】一足前に進む舞の型。

【ツメル】詰足に同じ。

【壺】藥壺と置壺（酒壺）とある（第五十五圖、第三十圖）。

【釣竿】細い竹に白紐をつける。漁夫に用ゐる（第二十九圖）。

【釣針】「玉井」に用ゐる（第三十圖）。

【釣眼】「賀茂」「嵐山」の後ジテ等に用ゐる能面。

【弦桶】狂言に用ゐる小道具（第五十九圖）。

て

と

【ツレ】（連）　シテに連れ添ふ意で、シテに附隨して登場する役。時にシテと對立的な地位に發展したものもある。ワキのツレをワキヅレ（脇連）といふ。

【連面】女體のツレに用ゐる能面（第七圖）。

【杖】普通の竹杖の外に、撞木杖・鹿背杖・金剛杖・打杖・龍虎竹杖などがある（第二十六・二十七・二十九圖）。

【泥眼】「葵上」「鐵輪」など凄味のある女體に用ゐる能面（第八圖）。

【手猿樂】現在のシテ方五流以外の猿樂座。今はない。

【出端】（出羽）　神體などの後ジテ又は後ヅレの登場する際奏する囃子。

【天冠】輪冠に似て金の瓔珞を垂れる。曲柄によつて、鳳凰、胡蝶、藤、梅などの立物を戴く（第十四圖）。

【天神】天神・山神などに用ゐる能面（第九圖）。

【天女舞】天女の舞ふ、中舞に似た舞。

【同】同音の略、地に同じ。

【同音】數人が一同に聲を揃へて謠ふ意で、地謠に同じ。

【童子】「田村」「小鍛冶」の前ジテなど、年若い男體に用ゐる能面（第五圖）。

【燈明皿】「九世戸」などに用ゐる（第三十圖）。

【燈籠】燈籠に擬へた小道具。「蟻通」に用ゐる（第二十九圖）。

【兜巾】山伏の額につける小さな頭巾（第十五圖）。

【鳶】狂言の鳥類に用ゐる面（第五十六圖）。

な

【留拍子】演能一番の終りに、二つ足拍子を踏むこと。

【鳥甲】舞樂の鳥甲と同樣のもの。〔富士太鼓〕などに用ゐる（第十五圖）。

【鳥蓑】羽蓑に同じ（第二十三圖）。

【鳥居】扁平な形で鳥居に擬へた作物。〔野宮〕に用ゐる（第四十四圖）。

【中入】シテ又はツレ等が一曲の中途で一度幕に入り扮裝を替へること。

【長髢】髢の髪を長く垂れたもの。

【長上下】長袴の上下。狂言に用ゐる（第五十八圖）。重い能には地謠や囃子方も用ゐる。

【長直垂】長袴の直垂。地位の高い武士に用ゐる（第二十二圖）。

【長刀】〔舟辨慶〕〔巴〕〔熊坂〕などに用ゐる（第二十八圖）。

【梨打烏帽子】立烏帽子と同じ形で、柔かに萎へたもの。武士に用ゐる（第十三圖）。

【名乘】ワキなどが自己紹介の意で述べる詞。

【名乘座】仕手柱の少し前方。常座に同じ。ワキが立つて名乘を述べる所であるから、かういふ。

【名乘笛】次第謠がなくて直に名乘を述べるワキの登場に吹く笛の囃子。

【苗】〔飛鳥川〕に用ゐる（第二十六圖）。

【苗籠】同じく〔飛鳥川〕に用ゐる（第二十六圖）。

【生成】〔鐵輪〕など女の怨靈に用ゐる能面（第十二圖）。

【鳴子】鳥追舟につける（第五十圖）。

に　ぬ　の　は

【錦木】紅絹を巻いて美しく色どりした木の枝（第二十六圖）。

【二段劇能】二幕物の劇のやうに、シテの中入する現在物の謡曲。〔鉢木〕〔烏帽子折〕など。

【二句】一聲の次に謡ふ七五調二句から成る歌詞。

【二の松】橋懸の前面に植ゑた三本の松の中央にあるもの。

【二番目物】五番立の演能の、第二番目に演ずる謡曲。主として古の武士を主人公とした修羅物。

【幣】榊枝に幣をかけたもの（第二十五圖）。

【縫箔】刺繡を施した箔。主として女體の着附とする（第十七圖）。

【熨斗目】小袖の一種。無地と段と縞との別がある（第十八圖）。

【祝詞】（イ）神佛に祈請する謡。（ロ）その初めに奏する囃子。

【登髭】末社神に扮する狂言の用ゐる面（第五十六圖）。

【箒】柄の先に杉葉をつけた杉箒と、萩の枯枝を束ねた萩箒とがある（第二十九圖）。

【寶生流】シテ方五流の一。

【寶珠】小道具の一。〔竹生島〕〔岩船〕などに用ゐる（第三十圖）。

【羽團扇】羽で作つた團扇。天狗が持つ（第二十四圖）。

【羽織】狂言の上衣に用ゐる（第五十七・五十八圖）。

【墓】塚と同じもので、〔定家〕に用ゐる（第四十二圖）。

【萩箒】萩の枯枝で作つた箒。〔田村〕に用ゐる（第二十九圖）。

【箔】　小袖の一種。摺箔、縫箔、鱗箔などあり、主として女體の着附に用ゐる（第十七圖）。

【白式】　〔翁〕の翁に用ゐる尉面（第二圖）。

【橋懸】（橋掛）　舞臺と鏡間との間の、廊下の如き通路、前面に三本の松を植ゑる（第一圖）。

【半蔀】　扉を押し上げるやうに作つた庵の作物。夕顔をつける（第四十三圖）。

【橋姫】　〔鐵輪〕など女の怨靈に用ゐる能面（第十二圖）。

【旗】　長方形のもので、〔鱗形〕に用ゐる（第二十八圖）。

【機臺】　織機に擬へた作物で、竹で作り絲の代に紅絨をかける（第五十三圖）。

【働】　カケリに似た舞。

【法被】　半臂の訛つた語で、武將の上衣として鎧の意に用ゐることが多い。單と袷とがある（第十九圖）。

【花】　桃、櫻などの造花の枝で、持花ともいふ（第二十五・二十六圖）。

【花籠】　竹で作る。〔花筐〕〔通小町〕などに用ゐる（第二十六圖）。

【花車】　牛車に擬へた車の作物で、屋根に花を飾る。〔小鹽〕に用ゐる（第四十九圖）。

【鼻瘤悪尉】　〔玉井〕〔大社〕の後ジテ神體などに用ゐる（第三圖）。

【鼻引】　異類に扮する狂言に用ゐる面。

【花帽子】　白布で頭を包み肩のあたりまで垂れるもので、〔大原御幸〕のシテ・ツレなどに用ゐる（第十五圖）。

【破舞】　中舞よりやゝ早い、比較的短い舞。

【羽蓑】　麻の代りに羽をつけた腰蓑で、獵師に用ゐる（第二十三圖）。

【葉蓑】　蓑の代りに木葉を付けた腰蓑で、天狗に用ゐる（第二十三圖）。

【早打間】　事の急を觸れる間狂言。「羅生門」「鉢木」などに出る。

【囃子】　能樂演奏に用ひる音樂で、笛・大鼓・小鼓の三拍子又は太鼓との四拍子を用ゐる。

【囃子方】　囃子を演奏する役者。

【囃子座】　能舞臺の後座の前部、囃子方の着席する所（第一圖）。

【早鼓】　早急の意を示す鼓の打ち方。勇壯な前ジテの中入、早打間の登場に用ゐる。

【早笛】　龍神・鬼神の後ジテの走り出る時などに用ゐる、急な調子で笛を吹くもの。

【早舞】　位取りの早い典雅な舞。

【番】　能樂諸曲の曲數を數へる名稱。舞樂の左右舞一番から出た名。

【番謠】　一番の謠を通して謠ふもの。小謠に對す。

【半開口】　「白樂天」の如く、ワキがサシ謠・次第・道行の順に謠ふもの。

【半切】　大口袴で、金襴の模様のあるもの。法被と對にして着ることが多い（第二十一圖）。

【番組】　一日の演能の種目、順位を定めること。能樂では番附とはいはない。

【半着】　道行文の「……に着きにけり」と終らないもの。即ち旅の中途まで述べたもの「蟻通」「景清」などの道行がその例である。

【般若】　「葵上」「道成寺」など女の怨靈に用ゐる能面（第十二圖）。

【半能】　一番の能の前半、シテ一聲以下シテ中入までを略するもの。

【番囃子】一番の謠を演奏なしに、笛・大鼓・小鼓又は太鼓で囃すもの。

ひ

【光】笛に擬へた小道具の一。〔賀茂〕に用ゐる（第三十圖）。

【ヒク】（イ）前にさし出した扇又は手を後へ引く舞の手。（ロ）役者の舞臺から退くこと。

【髭】〔養老〕の狂言などに用ゐる（第五十九圖）。

【直垂】普通の直垂で、武士に用ゐる。袴の長いものを長直垂といふ（第二十二圖）。

【直面】能面をつけないこと。ワキ・ワキヅレ・子方は常に直面であり、現在物男體のシテ・ツレ、脇能の前ツレ男も直面で出る。（女體には必ず面をつける）。

【美男鬘】（美難）女體の狂言に、頭に卷きつけて前に垂れる白布。「ゆばうし」ともいふ（第五十九圖）。

【琵琶】琵琶に擬へた作物。〔絃上〕などに用ゐる（第五十四圖）。

【ヒラク】（開）左右左と三足下ること。

ふ

【武悪】狂言の恐ろしい仁體に用ゐる面（第五十六圖）。

【笛】能樂の囃子に用ゐる横笛。常に笛筒に入れて出る（第六十圖）。

【笛座】後座の向つて右の方、笛方の坐する所（第一圖）。

【笛柱】舞臺の後方、仕手柱と相對し、笛方の坐る近くにある柱。

【深井】〔櫻川〕〔三井寺〕など年増の女體に用ゐる能面（第七圖）。

【複式劇能】一段劇能の一種で、シテの形相の前後變るもの。〔葵上〕〔紅葉狩〕など。

【複式能】シテの中入する能に對し芳賀博士の名づけられた名稱。但し著者はその中、現在物の如き劇能に

ついては、別に二段劇能の名稱を與へた。

【複式夢幻能】ワキの夢に、神體又は古の英雄佳人などが後ジテとして現れる樣式に脚色した謠曲。

【節】(イ)謠曲中、曲節をつけて謠ふ部分。(ロ)その符號。

【舞臺】能樂を演ずる特定の建物、その主要部、三間四方の板敷の所を特に本舞臺ともいふ(第一圖)。

【不動】「調伏曾我」の不動尊に用ゐる能面(第十圖)。

【舟】普通の舟には枠だけでその形を示し、「唐船」「國栖」には引廻しをまとひ、「江口」は屋形舟とし、「鳥追舟」には鳴子をつける(第五十・五十一圖)。

【文】一枚の奉書を折りたゝんで用ゐる。

へ

【文の段】「熊野」の「甘泉殿の春の夜の夢」から「涙ながらに書き留む」までの小段。

【文臺】短冊をのせて置く臺。「草子洗小町」に用ゐる(第五十五圖)。

【幣】神職、神體などの持つ御幣(第二十七圖)。

【幣臺】幣をのせて置く臺(第五十五圖)。

【變型】變の型に同じ。

ほ

【鉾】「淡路」「逆鉾」などに用ゐる(第二十八圖)。

【佛倒】切組に、相手に斬られて死に倒れる型で、眞直に立つた體をそのまゝ、曲げずに後へどうと倒れる。

【洞烏帽子】ワキのかぶる立烏帽子(第十三圖)。

【本着】道行文の「……に着きにけり」で終るもの。半着に對する語。

ま

【巻絹】竹に白水衣を挿む（第二十七圖）。

【巻物】巻軸で、「安宅」「張良」に用ゐる。

【幕】鏡間と橋懸との間にかけた五色の帳で、シテ・ツレ・ワキ等の出入には揚げ、囃子方・後見は垂れたまゝ幕の片隅から出入し、狂言は兩様の場合がある（第一圖）。

【枕】「邯鄲」「菊慈童」に用ゐる（第五十五圖）。

【待謠】前ジテ中入の後、ワキの謠ふ上歌。シテの登場を待ち受ける意の名稱。

【末社間】間狂言の末社の神として出るもの。

【末社頭巾】末社間のかぶる頭巾（第五十九圖）。

【末社來序】末社間の登場する時に奏する囃子。

【招き扇】シテ又はツレを呼び迎へる意などを示す形。

【舞】謠の文句はなくて、囃子に囃されて舞ふもの。序舞・中舞・破舞などがある。

【舞衣】長絹に似た上衣で、これは脇下を縫ひ綴ぢて置く（第十九圖）。

【舞働】龍神・鬼神などの演ずる豪壮な舞。

【前折烏帽子】立烏帽子の前を折りくぼめたもの（第十三圖）。

【守】守札を入れた袋。「柏崎」「夜討曾我」などに用ゐる（第二十四圖）。

【萬葉集】萬葉集に擬へた綴本。草子ともいふ（第五十五圖）。

み

【三日月】神體などに用ゐる能面（第四圖）。

【[illegible]】[illegible]る心持の舞。〔猩々〕〔鷺〕に演ずる。

【[illegible]】〔猩々〕に用ゐる酒壺（第五十五圖）。

【道行】旅行する山河の景色などを述べた歌詞。七五調六七句から成り、「……に着きにけり」で文を結ぶ。

【見附柱】仕手柱の前方、即ち舞臺の前方向って左側の柱。目附柱ともいふ。

【水衣】用途の廣い上衣で、絓水衣・縷水衣・縞水衣の別がある（第二十圖）。

【水桶】〔松風〕の汐汲桶には金地に絵を描き（第三十圖）、〔俊寛〕などには素地の杉桶を用ゐる。

【宮】社殿に擬へた作物（第三十六圖）。

【海松藻】〔海士〕に用ゐる（第二十六圖）。

む

【夢幻能】シテの扮した神靈又は古の英雄佳人などの夢に現れる様式に脚色した謠曲。劇能に對する。

【夢幻的劇能】シテとワキとの關係の劇的な、しかし後ジテは現在人物でない曲。〔砧〕など。

【無色】唐織・厚板・腰帯などの模様に紅色を入れないもの。色無に同じ（第十六・十七・二十圖）。

【胸サシ】扇を胸に巻き込むやうにしてさす舞の手。

【鞭】竹で作る。〔小督〕に用ゐる（第二十八圖）。

め

【目附柱】舞臺の前方、向って左側の柱。シテが常座から見當をつける意の名稱。見附柱ともいふ（第一圖）。

【面箱】〔翁〕に白式、黒式の尉面を入れて持ち出す箱（第五十五圖）。

も

【モギドウ】着附に袴類をつけるだけで、狩衣・長絹等の上衣を着ないこと。

【持花】シテが手に持つ造花の枝（第二十五・二十六圖）。

【物着】シテ又はツレが樂屋に中入しないで、舞臺にゐたまゝで裝束の一部をつけかへること。
【物狂】狂亂の心で舞ふ舞。又は狂人。
【桃實】〔西王母〕に用ゐる小道具（第三十圖）。
【門】門の形に拵へた作物。〔夕顏〕に用ゐる（第四十四圖）。

や

【矢】小さな竹に白紙の羽をつける（第二十七圖）。
【野干】〔殺生石〕の後ジテ等に用ゐる能面（第十一圖）。
【瘦男】〔善知鳥〕〔通小町〕など、男體の亡靈に用ゐる能面（第五圖）。
【瘦女】〔定家〕〔砧〕など、女體の亡靈に用ゐる能面（第八圖）。
【屋臺】家に拵へた作物で、屋根を立てる。大屋臺、櫓の屋臺などある（第三十七・三十八圖）。
【矢立】矢を立てて置く臺。矢臺ともいふ。〔賀茂〕に用ゐる（第四十八圖）。
【山】塚ともいふ。藁屋の形をした作物に引廻をかける。上に柴をさす〔野守〕〔氷室〕、柳をさす〔遊行柳〕〔隅田川〕、紅葉をさす〔紅葉狩〕などある。（第四十一・四十二圖）。
【山姥】山姥に用ゐる能面（第八圖）。
【雪搔】柄振ともいふ（第二十九圖）。

ゆ

【ゆぼうし】（湯帽子）女狂言の頭に用ゐる。美男鬘に同じ（第五十九圖）。
【木綿襷】裝束の附屬品（第二十三圖）。
【弓】竹で作る。〔弓八幡〕の弓は錦の袋に入れる（第二十七・二十八圖）。

よ

【横正面】 舞臺の向つて左側、脇正面をいふ。

【四番目物】 五番立の演能の第四番目に演ずる曲柄。主として現在物。

【呼掛】 シテがワキに詞をいひかけながら登場するもの。

【讀物】 「木曾」の願書、「正尊」の起請文、「安宅」の勸進帳をいふ。

【頼政】 〔頼政〕に用ゐる能面（第六圖）。

【頼政頭巾】 〔頼政〕に用ゐる（第十五圖）。

【縒水衣】（寄水衣） 縒絲で織つた水衣。前ツレ・ワキヅレなど位の低いものに用ゐる（第二十圖）。

【弱法師】 〔弱法師〕に用ゐる能面（第六圖）。

ら

【來序】 帝王・神體・大天狗など重々しい仕體の出入に用ゐる囃子。

【老女】 重い老女に用ゐる能面（第八圖）。

【老女髪】 姥髪の髪の純白なもの（第十六圖）。

【老女物】 「卒都婆小町」「檜垣」の如き老女をシテとしたもので、重い取扱をしてゐる曲をいふ。

【蘭曲】 多くの謠曲のクセのうち、特に美しく朗吟せられ得るもの幾種かを擇び出して特定したもの〻名稱。〔玉取〕〔近江八景〕〔和國〕などある。

【亂序】 末社間の登場する時奏する囃子。末社來序に同じ。

【亂拍子】 「道成寺」に奏する一種の舞。小鼓一調で笛があしらふ。

り

【立花】 「半蔀」に用ゐる（第四十八圖）。

れ　ろ　わ

【龍立】輪冠に龍の造物を戴くもの。龍神に用ゐる（第十四圖）。

【輪冠】金屬性の冠。曲柄によつて上に花鳥などの造物（立物）を立てる（第十四圖）。

【輪藏】輪藏に擬へた作物（第五十四圖）。

【蓮華臺】輪冠に蓮花を立てたもの。不動尊に用ゐるので、不動輪冠ともいふ（第十四圖）。

【籠屋】（牢屋）　牢屋に擬へた作物。「籠太鼓」に用ゐる（第四十圖）。

【ロンギ】（論議）　シテ・ツレ・ワキ・地等の掛合の歌詞。主として前ジテの素性を打明ける時に用ゐる。

【ワカ】　主として舞の後にシテの謠ふ歌詞で、大抵和歌又は和歌調のものである。

【若男】「女郎花」など、普通の男體に用ゐる能面。

【若女】「熊野」「松風」など、普通の女體に用ゐる能面。

【ワキ】（脇・佐）　シテの相手役。

【脇座】舞臺の向つて右、前面のワキの着席する所（第一圖）。

【脇正面】舞臺の向つて左側、仕手柱と目附柱との間をいふ。横正面ともいふ。

【ワキヅレ】（脇連・屬）　ワキに從屬する役。

【脇能】五番立の演能の初番に演ずる曲柄。主として神事物。「翁」の脇といふ意の名であらう。

【脇柱】舞臺の前面、向つて右側、ワキの着席する所にある柱。大臣柱ともいふ。

【枠】（枠桛輪）　「安達原」に用ゐる絲引車（第五十五圖）。

【笑尉】前ジテの老翁に用ゐる能面。

【藁屋】草庵に擬へた作物で、上に藁屋根をつけたもの（第三十九・四十圖）。

ゐ

【居語】間狂言が坐つたまゝで語るもの。語間ともいふ。

【居ッセ】ッセの間、シテが下に居、又は床几に腰かけてゐて、立つて仕科を演じないもの。居曲舞ともいふ。舞ッセに對す。

【居立つ】跟を爪立てて坐ること。

【井筒】井筒に擬へた作物。隅に薄を立てる（第四十八圖）。

ゑ

【烏帽子】冠り物の一種で、立烏帽子、折烏帽子など種々ある（第十三圖）。

【繪馬】繪馬に擬へたもの（第三十圖）。

を

【ヲカシ】間狂言の別名。

【男笠】男體に用ゐる菅笠（第十五圖）。

【男舞】直面の男の舞ふ、中舞よりやゝ早い舞。

【斧】小道具の一つ。〔谷行〕に用ゐる（第二十七圖）。

【折枝】造花の木の枝。〔西王母〕には桃、〔三山〕には櫻及び桂の折枝を用ゐる（第二十五・二十六圖）。

【折烏帽子】侍烏帽子に同じ形のもの（第十三圖）。

【女帯】女の狂言に用ゐる帯（第五十八圖）。

【女笠】女體に用ゐる塗笠（第十五圖）。

第七章　能楽現行曲一覧表

（最近発表した番組、喜多二流の廃曲、新加入曲をも併記して参考とした。）

あ

曲名	観世	寶生	金春	金剛	喜多	順位	脚色	前シテ	後シテ	ツレ	子方	ワキ	ワキツレ・トモ	狂言	所	時	作者	曲名の始めて見える記録
翁	番外	外17	番外	番外	1	—	—	翁		千歳				三番叟　面箱持	不定	（無季）		正安三（継塵記）
鸚鵡小町	内11	内11		35	35	三	一劇	小野小町				陽成院勅使行家			近江關寺	陽成御宇（三月）		
阿漕	内6	内6	27	阿古木22	20	四	複夢	漁翁	阿漕			日向男		所の者	伊勢阿漕浦	秋（九月）	世阿	大永四（能本）
蘆刈	内22	内16	23	19	27	四	一劇	日下左衛門		同妻		妻の従者	同従者	所の者	攝津難波浦	（三月）	世阿（能）　禅竹（二）	康正二（歌舞）
飛鳥川				15	29	四	一劇	友若の母		田植女2	友若	都の男			大和飛鳥川	五月	世阿（能）	寛正七（蔭尾）
安宅	内18	内18	14	21	28	四	一劇	辨慶		同行山伏9	義經	富樫		強力・富樫臣	加賀安宅	文治三年二月	小次郎（二）	寛正六（親元）
愛宕空也					慶	五	複劇	老翁	龍神			空也上人		愛宕権現に仕へる者	山城愛宕	平安中期（無季）	小次郎（二）	大永四（能本）
安達原	内9	内9黒塚	13黒塚	28黒塚	31黒塚	五	複劇	老嫗	鬼女			東光坊祐慶	同行山伏2	能力	岩代安達原	秋（八月）	禅竹（二）	寛正六（親元）
敦盛	内22	内13	27	7	19	二	劇夢	草刈男	敦盛	草刈男3		蓮生法師		所の者	攝津一の谷	鎌倉初期（八月）	世阿	應永三十（能作）
淡路	別1		11	1番外		脇	複夢	老翁	伊弉諾神	男		當今臣下	従者2	所の者	淡路二宮	春（三月）	観阿（二）	長禄四（[illegible]）
葵上	内22	内5	23	28	29	四	複劇	六條御息所	同鬼形	照日神子		横川小聖	朱雀臣下	左大臣の臣	京都左大臣邸	朱雀院朝（無季）	禅竹	應永卅（能作）

い　　う

曲名	観世	宝生	金春	金剛	喜多	番目	曲趣	前シテ	後シテ	ツレ	子方	ワキ	ワキツレ	間狂言	所	時	作者	初見記録
海士	内12	内12	15	30	25	五	劇夢	海士	龍女		房前	房前臣	従士2	所の者	讃岐志度浦	奈良朝（二月）	世阿	永享二（談儀）
綾鼓		外12		32		四	複劇	御庭掃老人	同怨霊	女御		天智臣下		従者	筑前桂池	天智帝（八月）	世阿（能）	大永四（能本）
嵐山	外8	内9	14	3	16	脇	複夢	老翁	蔵王権現	姥・木守・勝手		當今勅使	従者2	末社神	山城嵐山	春（三月）	禅鳳	永正三（[illegible]）
蟻通	内8	内4	26	17	9	四	一劇	老人（宮守）				紀貫之	従者2		和泉蟻通社	平安中期（四月）	世阿	應永卅（能作書）
藍染川	外8		30			四・五	夢劇	女	天満天神		梅千代	宰府神主	左近・太夫・小者	神主後妻	筑前太宰府	（無季）		大永四（能本）
碇潜	別2			1（番外）		二	複夢	漁翁	平知盛	二位尼・大納言局		旅僧		所の者	長門早鞆浦	（無季）		大永四（能本）
生田敦盛	外10	外10	13	7		二	一夢		平敦盛		敦盛遺子	法然上人従者			山城賀茂糺河原・摂津生田	秋（七月）	禅鳳（二）	
一角仙人	別3		30	寛	21	五	一劇	一角仙人		旋陀夫人・龍神2		官人	輿丁2		印度波羅奈国	（九月）	禅鳳	大永四（能本）
岩船	外11	外10	15	2	8	脇	単夢		龍神			當今勅使	従者2		摂津住吉浦	（九月）		寛正七（飯尾）
鵜飼	内1	内1	10	29	5	五	劇夢	鵜使	閻魔王			僧	従僧	所の者	甲斐石和	（五月）	世阿改作	永享二（談儀）
浮舟	内10		18	10	寛	四	複夢	里女	浮舟			旅僧		所の者	山城宇治・同小野	（無季）	横尾光久	應永卅（能作）
雨月	別5	外12	22	13	24	四	夢劇	老翁	住吉社人	姥		西行法師		門守神	摂津住吉	鎌倉初期秋（八月）	禅竹	大永四（能本）
右近	内17	内17		4（新）		脇	複夢	女	桜葉明神	侍女2		鹿島神職	従者2	所の者	京都北野	春（三月）	世阿	天文[illegible]（[illegible]）
歌占	別4	内5	28	17	17	四・五	一劇	度会何某		里人	幸菊丸				加賀白山麓	（四月）	世阿（能）	永享二（談儀）

え　お

曲名														
内外詣				18		脇	二劇	大神宮神主	大神宮神子	當今勅使従者2	伊勢大神宮	（三月）	金剛長頼	
善知鳥	内19	内13	17	22	4 烏頭	四	劇夢	猟師霊	同 猟師妻 千代童	旅僧 外の濱の者	越中立山 外の濱	（四月）	世阿	寛正六（観元）
釆女	内5	内5	21	8	15	三	複夢	里女 采女		旅僧 従僧2 所の者	大和春日	三月	世阿	永正十一（[illegible]）
鵜祭			19			脇	複夢	海士 女 気多明神	海士女 八幸殿 鵜	當今勅使従者2 末社神	能登一宮	十一月		
梅	番外					三	複夢	里女 梅の精		藤原何某従者2 所の者	摂津難波	二月	元章明作	
梅枝	内7	内7	26	16	12	四	複夢	里女 富士の妻		身延僧 従僧2 所の者	摂津住吉	九月	世阿	大永四（能本）
鱗形				（新番外）	20	脇	劇夢	女 辯才天		北條時政従者2 末社神	相模江島	鎌倉初期（無季）		
雲林院	内13	内18		13	2	三・四	複夢	老翁 在原業平		公光従者2 北山の者	京都雲林院	二月	世阿	永享二（[illegible]）
江口	内1	内14	10	9	32	三	複夢	里女 江口君	遊女2	旅僧 従僧 所の者	摂津江口	（九月）	世阿（能作書二）	康正二（[illegible]）
江島	外1					脇	複夢	漁翁 五頭龍王	漁夫 天女 童子2	欽明勅使従者2 鵜の精	相模江島	欽明御宇（無季）	[illegible]次郎	大永四（能本）
箙	外2	外1	4	5	25	二	複夢	里男 梶原景季		西国僧 従僧2 所の者	摂津生田	春（二月）	世阿（能）	大永四（能本）
老松	内3	内3	3	2	13	脇	複夢	老翁 老松神霊	男	梅津何某従者2 所の者	筑前安楽寺	冬（正月）	世阿	應永卅（能作書）
落葉				（新番外）	寶	三	複夢	里女 雲井[illegible]		北国僧従僧2 所の者	京都小野	（七月）		
大原御幸	内7	内7		34 八家本	6 八家本	三	二劇	建禮門院	同 後白河院 大納言局	萬里小路臣下 中納言典侍2 従者	山城大原	文治二年四月	世阿（二十）	康正二（[illegible]）
大江山	外11	外15		25	18	五	複劇	酒呑童子 鬼神	童女2	源頼光 独武者 頼光臣 強力	丹波大江山	平安初期 秋（七月）	宮増二	大永四（能本）

か

曲名	觀世	寶生	金春	金剛	喜多	番位	類	前シテ	後シテ	ツレ	子方	ワキ	ワキツレ	間狂言	所	時	作者	備考
大社	外8			6	10	脇	複夢	老社人	作之大神	天女・龍神		當今臣下	從者2	[illegible]	出雲 大社	十月	[illegible]	大永四
項羽	外4	外3	26	23	15	五	複夢	老舟人	項羽	虞氏		草刈男	同2	烏江渡守	支那 烏江	秋(九月)	[illegible]	永享二
高野物狂	番外	内17		33(新)	24	四	二場	高師四郎			春満丸	高野山僧	從僧2	[illegible]	紀伊 高野山	(無季)	[illegible]	[illegible]
杜若	内9	内9	5	11	5	三	單夢	里女(杜若の精)				旅僧			三河 八橋	夏(四月)	[illegible]	[illegible]
景清	内9	内9	28	21	21	四	一場	景清		人丸		里人	人丸從者		日向 宮崎	秋(無季)	[illegible]	寛正七
柏崎	内6	内4	22	33	23	四	二場	柏崎妻	同 狂女		花若	柏崎臣小太郎	善光寺僧		[illegible]	(十月)	[illegible] 世阿彌改作	永享二(談儀)
春日龍神	内14	内14	14	26	3	五	複夢	春日宮守	龍神			明惠上人	從僧2	[illegible]人	大和 春日	(二月)	[illegible]	寛正六(親元)
合浦	外10					五	複夢	童子	[illegible]人			合浦里人		合浦漁夫 / [illegible]の精	支那 合浦	(無季)		永享四(石橋)
葛城	内11	外7	17	12	23	三	複夢	里女	葛城神			羽黑山伏	同行山伏2	山下の者	大和 葛城山	冬(十一月)	世阿彌	寛正六(親元)
葛城天狗					廢	五	二場	天狗眷屬	大天狗	役行者	役樂童子2	山伏	同行4	木葉天狗	大和 葛城山	(四月)	[illegible]	大永四(能本)
要石					廢	脇	複夢	男海士	建御雷神	天女・海士女		當今勅使	從者2		常陸 鹿島			
鐵輪	外5	外11		28	22	四	複劇	京女	同鬼女			晴明		下京男 / 貴船社人	山城 貴船 / 京 晴明邸	(九月)	世阿彌(二)	長享二(親長)
兼平	内2	内2	3	5	3	二	複夢	老船頭	今井兼平			木曾僧		矢橋渡守	近江 矢橋―粟津	(四月)	世阿彌	永享二 / 天文四(能本)
賀茂	内10	内10	5	4	7	脇	複夢	里女	別雷神	天女・里女		室神職	從者2	末社神	山城 賀茂	六月	禪竹	永正十一(談儀)

賀茂物狂		外15		15（新）	6	四	一劇	妻			都の男	從者2		山城賀茂	四月		大永四（能本）
通小町	内5	内16	9	22	10	四	複夢	深草少將	小野小町（マ 里女）		僧			山城八瀬 同市原野	（九月）	觀阿改作	永享二（談儀）
邯鄲	内、20	内20	13	17	18	四	一劇	盧生		夢中の舞人	夢中の勅使	夢中の大臣2	女宿主	支那邯鄲	（無季）	世阿（二）	康正二（歌舞）
咸陽宮	内12	外6		36	21	四・五	一劇	秦始皇	花陽夫人 侍女2		荊軻	秦舞陽 大臣3	官人	支那咸陽宮	秦代（十月）		大永四（能本）
鬼界島	〔俊寛〕を見よ																
菊慈童	番外	外14（枕慈童）		16（枕慈童）	9（枕慈童）	四	一劇	慈童			魏文帝勅使	從者2		支那酈縣山	魏文帝 秋（九月）		大永四（能本）
木曾	番外					四	一劇	覺明	木曾義仲 池田次郎 從兵5					越中埴生	壽永二年 五月		大永四 能本
砧	外12	外3		32	19	四	夢劇	蘆屋妻 同 靈	侍女夕霧		蘆屋何某	同太刀持	蘆屋の臣	筑前蘆屋	秋（九月）	世阿（能）	永享二（談儀）
清經	内5	内5	8	7	21	二	劇夢	平清經靈	清經の妻		淡津三郎			京都清經館	壽永二年（九月）	世阿	應永卅 能作
切兼曾我				廢		四	二劇	曾我祐信 同	曾我母	箱王 一萬	梶原景季	景季從者 太刀取 畠山使者	祐信從者	相模曾我 同 鎌倉	鎌倉初期（無季）		
祇王		外14		3 番外	二人祇王 廢	三	二劇	佛御前 同	祇王		瀬尾太郎		瀬尾從者	京都清盛館	平家時代（三月）		大永四（能本）
金札	外11	外8	16	3	14	祝言	單夢	天津太玉神			桓武勅使	從者2		山城伏見	桓武御宇（正月）	世阿	享德四 [illegible]
草薙		外4				四	複夢	花賣男 日本武尊	花賣女 橘姫（マ ノ）		慧心僧都		熱田社人	尾張熱田	平安盛期 五月		
國栖	別5	外1	23	26	15	五	夢劇	老翁 藏王權現	老嫗 天女（マ ノ）	天武天皇	供奉官人	臣下2 輿舁2	追手武士2	大和吉野	弘文御宇 春（三月）	世阿（二）	大文[illegible]
楠露	番外					四	一劇	恩地滿一 楠正成		楠正行		正成從者		攝津兵庫	延元元年 五月		明治

け

項目 曲名	五流の本 観世	宝生	金春	金剛	喜多	能柄 位	色	役 前シテ	後シテ	ツレ	子方	ワキ	狂言	所	時	作者	[illegible]
九世戸	外1					脇	複夢漁	翁	龍神	天女		當今臣下 従者2	門守神	丹後 九世戸	六月	小次郎 (信光)	大永四 (能本)
熊坂	外4	外2	21	23	9	五	複夢信		熊坂長範			僧	所の者	美濃 赤坂	(九月)	禅竹	永正十一 ([illegible])
鞍馬天狗	内12	内12	4	27	2	五	複現山	伏	大天狗		牛若丸 (平家公達)	鞍馬僧 同従僧	能力 木葉天狗	山城 鞍馬山	平家時代 春三月	宮増	寛正五 ([illegible]本記)
車僧	外6	外5	8	27	12	五	複現山	伏	大天狗			車僧	溝越天狗	山城 嵯峨野	冬十二月	世	永正十一 ([illegible])
呉服	内11	内11	18	4	19	鬘	複夢里	女	呉服	[illegible]甲 女		當今臣下 従者2	所の者	摂津 呉服里	七月	世	大永四 (能本)
黒塚	「安達原」を見よ																
皇帝	内15	外16		4 番外	15	五	複現霊	鬼霊	同	病	楊貴妃	玄宗 大臣2	官人	支那 宮殿	唐玄宗 三月	小次郎	大永四 (能本)
花月	外3	外3	24	20	16	四	一現花	花月				僧 (花月父)	門前の者	京都 清水	春三月	世阿	世阿弥 (能作書)
月宮殿	「鶴亀」を見よ																
現在七面	別6			4 番外		四・五	複現里	女	龍女			日蓮上人 従僧2	能力	甲斐 身延	鎌倉中期 (無季)		
現在忠度				19 (新)		二	一現	藤原俊成		平忠度				京都 俊成邸	平家時代		
現在巴				廃		四	一現	巴		木曾義仲		恩田八郎 立衆		近江 粟津	平家時代		
現在鵺				36 (新)	廃	五	一現	鵺				源頼政 近衛帝 早太	頼政の臣	京都 御所	近衛御宇 (四月)		禅鳳習道
源氏供養	内14	内14	4	10	4	三	複夢里	女	紫式部			安居院法印 従僧2	門前の者	近江 石山	春 (三月) 鎌倉初期	世阿 能 禅竹 (二)	寛正五 (糺河原)

曲名								前シテ	後シテ	ツレ	子方	ワキ	ワキツレ	アイ	場所	季節	作者	出典
こ																		
絃上	外13	外12	25	30	19	五	劇夢	老翁	村上天皇	藤原師長、老嫗、龍神		師長從者	同 2		攝津須磨	鎌倉初期 八月	金剛(二)	天文元 吉
源太夫	—	—	10		廢	脇	複夢	老翁	源太夫神	老嫗、橘姫		當今勅使	從者2	末社神	尾張熱田	(六月)	禪竹(能)	大永四(能本)
元服曾我				廢	16	四	二劇	曾我十郎	同	團三郎	箱王丸	箱根別當		能力	相摸箱根 伊豆	建久元年 九月	宮増(能)	曾我元服宅(永享四[illegible]) 長享二[illegible]
小督	外4	外11	22	19	33	四	二劇	源仲國	同	小督		勅使	小督侍女	宿主	京 仲國邸 嵯峨小督宅	高倉御宇 八月	禪竹	大永四(能本)
小鍛冶	外9	外2	3	26	23	五	二劇	童子	稻荷明神			三條宗近	橘道成	山下の者	京都 宗近宅	一條御宇(十一月)		
小袖曾我	内5	外2	30	19	18	四	一劇	曾我十郎		曾我五郎・團三郎・鬼王・母				乳母 春日局	相摸 曾我館	建久四年 五月		大永四(能本)
胡蝶	別3	外9		11		三	複夢	里女	胡蝶精			吉野僧	從僧2	都の者	京都 一條大宮	春(二月)	小次郎	大永四(能本)
戀重荷	外12					四	複劇	山科莊司	同	靈女御		白河臣下		同從者	京都 御所	白河御宇(九月)	世阿改作	應永卅(能作)
さ																		
西行櫻	内10	内10	11	13	3	三・四	劇夢	老櫻の精		花見の人3		西行		能力	京都 西行庵	鎌倉初期 春(三月)	禪竹	康正二(歌舞)
草子洗小町	外10	外6 草子洗	27	31 草子洗	25	三	二劇	小野小町	同	紀貫之・躬恒・忠岑・官女2	天子	大伴黒主		黒主從者	京 小町邸 同 御所	平安初期 四月	世阿(能) 觀阿(二)	大永四(能本)
逆矛	外1					脇	複夢	老翁	瀧祭神	ノマ 天男 女		當今臣下	從者2	山下の者	大和 龍田	九月	世阿(能) 宮増(二)	永享四(石開)
鷺	外12	外8		18	36	四	一劇		鷺		天子	藏人	臣下3 輿舁2	官人	京都 神泉苑	醍醐御宇 夏(六月)	世阿(二)	大永四(能本)
櫻川	内15	内11	1	18	36	四	二劇	櫻子母	同(狂女)		櫻子	常陸僧	人商人・從僧2・里人		日向櫻馬場 常陸櫻川	春(三月)	世阿	永享二([illegible])
櫻井				外2 櫻井驛(新)	廢	四	一劇	楠正成			楠正行	恩地滿一	太刀持		攝津 櫻井	南北朝(四月)		明治
實盛	内4	内4	6	6	7	二	複夢	老翁	齋藤實盛			遊行僧	從僧2	所の者	加賀 篠原	室町初期(八月)	世阿	應永卅(能作)

曲名	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	前シテ	後シテ	ツレ	子方	ワキ	ワキツレ	アイ	所	時	作者	[illegible]
佐保山			24			[illegible]	複夢	女	佐保[illegible]	女		藤原俊家	從者	[illegible]の者	大和 佐保山	平安末[illegible] [illegible]月	[illegible]	康正二 [illegible]
三笑	別4	外15		32西	11	四	一[illegible]	慧[illegible]禪師		陶淵明 陸修靜				門前の者	支那 [illegible]山	支那古代 十一月		文祿四 [illegible]
志賀	內7	內7		1番外	[illegible]	[illegible]	複夢	老翁	大[illegible]	[illegible]		當今臣下	從者	山下の者	近江 志賀	[illegible] 三月	世阿	[illegible]
重盛					[illegible]	四	一劇	平重盛		主馬盛國		平清盛	[illegible]		京都 六波羅	平家時代	飯田[illegible]	明治三十四
七騎落	外13	外12	17	21	30	四	二劇	土肥實平	同	源賴朝 外岡崎義實 [illegible]等	土肥遠平	和田義盛		舟人	相摸 海岸	治承四年 八月		文明十五（視元）
自然居士	內17	內20	15	20	34	四	一劇	自然居士			女兒	人商人	同	門前の者	京 雲居寺 近江 大津	鎌倉時代（無季）	觀阿改作	應永廿五（日傳）
猩々	內18	內12	2	30	34	五	一劇	猩々				かうふう			支那 潯陽江	秋（九月）	世阿	寬正七（飯尾）
正尊	外3	外15		24	12	四・五	二劇	正尊	同	義經 義經臣 2 姉和	靜	辨慶	正尊臣 3	義經侍女	京都 義經館	文治元年 九月	彌次郎	大永四（能本）
石橋	外9	外6	5	18	36	五	複夢	童子	獅子			寂昭法師		文殊從者	支那 清涼山	平安盛期（四月）	世阿（能二）元[illegible]二	（獅子）永享二 寬正六（義僧）（視元）
舍利	外9	外13	26	29	14	五	複劇	里人	足疾鬼	韋駄天		出雲僧		能力	京 泉涌寺 天上界	（無季）	世阿	寬正五（蔭）
春榮	外8	外3	25	19	20	四	一劇	增尾種直			增尾春榮	高橋權頭	小太郎 早打	高橋從者	伊豆 三島	（八月）	世阿（能）	大永四（能本）
俊寛	內10	內10	29	21	31	四	一劇	俊寛		平康賴 藤原成經		赦免使		舟夫	薩摩 鬼界島	治承二年 九月	世阿	康正二（歌舞）
俊成忠度	外11	外6		7	26	二	劇夢	平忠度靈		藤原俊成		岡部六彌太	俊成從者		京都 俊成邸	壽永三年（三月）	內藤藤左衛門（能）	大永四（能本）
鐘馗	外3	外10	21	26	10	五	複夢	鐘馗靈	同			旅人		山下の者	支那 終南山邊	九月	禪竹	五音曲

す

白鬚	内19		9	廢	29	脇	複夢	漁翁 白鬚明神	漁夫・天女・龍神		當今勅使	從者2	末社神	近江白鬚	春（三月）	禪竹（能）觀阿（二）	五音曲
代主	外1					脇	複夢	老社人 事代主神	社人		賀茂神職	從者2	所の者	大和葛城	四月	世阿	大永四（能本）
須磨源氏	別3	外4		4番外	廢	五	複夢	老樵夫 光源氏			藤原興範	從者2	所の者	攝津須磨浦	三月	世阿（能）	大永四（能本）
墨染櫻				3番外		三	複夢	里女 墨染櫻の精			上野峯雄		所の者	山城深草	文德御宇 三月		大永四（能本）
隅田川	内13	内13	21	33	2	四	一劇	梅若の母		梅若丸靈	渡守	都の男		武藏隅田川岸	三月	世阿（能）元雅（二）	永享二（談儀）
住吉詣	外6			31	9	三・四	一劇	明石上	光源氏・惟光・[illegible]・明石上侍女	隨身3	住吉神主		神主從者	攝津住吉	九月		

せ

誓願寺	内7	内10	24	12	27	三	劇夢	里女 和泉式部			一遍上人	從僧2	小川表の者	京都誓願寺	鎌倉中期（三月）	世阿	寛正五（糺河原）
西王母	外2	外7	21	4	27	脇	複劇	女 西王母	侍女		支那帝王	臣下2	穆王の臣	支那宮殿	（三月）	禪竹（能）	大永四（能本）
昭君	別6	外13	18	26	22	五	夢劇	白桃 單于靈	王母	昭君靈	里人		所の者	支那からほ	前漢（十月）	世阿（能）	永享二（談儀）
善界	内16	内16是界	24是界	27是界	29是界	五	複劇	善界坊 同	太郎坊		比叡山僧	從僧2	能力	山城愛宕山 同比叡麓	（無季）	竹田法印	大永四（能本）
關寺小町	内17	内17	19	35	35	三	一劇	小野小町		關寺稚兒	關寺僧	從僧3		近江關寺	平安初期 七月	世阿	應永廿六（[illegible]出）
關原與市					29	四	一劇	源牛若	牛若從者		關原與市	太刀持 從兵4	早打	美濃山中	平家時代 春（三月）		文安三（田樂）
殺生石	内20	内20	16	29	33	四・五	複劇	里女 石魂（野干姿）			玄翁		能力	下野那須野	室町初期（九月）	安清（二）	大永四（能本）
攝待	別5	外10		34	14	四	一劇	佐藤繼信母	源義經・[illegible]房・鷲尾外同行山伏8	鶴若	辨慶		鶴若從者	岩代佐藤館	鎌倉初期（三月）	宮增（二）	文明十五（親元）
蟬丸	内18	内12	27	14	7	四	一劇	逆髮宮	蟬丸宮		勅使清貫	輿舁2	博雅三位	近江逢坂山	延喜御宇（八月）	世阿	[illegible]（[illegible]）

曲名	觀世	寶生	金春	金剛	喜多	位	曲色	前シテ	後シテ	ツレ	子方	ワキ	ワキツレ	狂言	所	時	作者
禪師曾我	外6	外16		廢	31	四	二劇	久上禪師		團三郎 曾我兄弟 鬼王		伊東祐宗	兵士 祐宗從者	能力	越後國上	建久四年(七月)	[illegible]
千手	內2	內2	11	9	17千壽	三	一鬘	千手前		平重衡		狩野介宗茂			鎌倉宗茂館	元暦元年(三月)	禪竹
卒都婆小町	內2	內2	23	35	35	三	一鬘	小野小町				高野僧	從僧		京都郊外	平安初期(九月)	觀阿改作 永享二(談儀)
泰山府君				4番外		四	劇夢天	女	泰山府君	天女		櫻町中納言		花守	京都櫻町	平家時代 春(三月)	世阿 應永卅(能作)
大佛供養	外7	外5	12	24	22	四	二劇景	景清	同	景清母		源頼朝	頼朝臣 同3	能力	奈良大佛 景清母宅	建久六年(九月)	大永四(能本)
大瓶猩々	外7					五	複劇童	子猩々	猩々	猩々4		かうふう		水神	支那金山潯陽江	秋(九月)	
第六天	外9					五	劇夢里	女	第六天魔王	素盞嗚尊 里女		解脫上人	從僧2	末社神	伊勢大神宮	鎌倉初期(三月)	
大會	內17	外9	11	27	27	五	複劇山	山伏	大天狗	帝釋天		比叡山僧		木葉天狗	近江比叡山	(無季)	禪竹(二) 五音曲條々 永享二(談儀)
道成寺	內21	內19	6	18	36	四	複劇	白拍子	同蛇體			道成寺僧	從僧2	能力2	紀伊道成寺	三月	觀阿二 天文廿三
唐船	內20	內19	29	16	23	四	一劇	祖慶官人		唐子2 日本子2		箱崎何某		箱崎從者 舟夫	筑前箱崎	(無季)	吉廣 大永四(能本)
道明寺	外2			1番外	33	脇	複夢老	翁	白太夫神	天女		尊性	從僧2	末社神	河內道明寺	九月	世阿 大永四(能本)
當麻	內11	內9	7	34	26	四・五	複夢化	化尼	中將姫	化女		念佛僧	從僧2	所の者	大和當麻寺	二月	世阿 文明十五(視元)
高砂	內1	內1	1	1	1	脇	複夢劇	尉(住吉松の精)	住吉明神	姥(高砂松の精)		阿蘇神主	從者2	高砂浦人	播磨高砂 攝津住吉	春(正月)	世阿 相生 應永卅(能作)
竹雪		外8		廢	34	四・五	二劇	月若の母	同	月若姉	月若	直井左衛門		直井後妻 直井從者	越後	冬(十二月)	世阿(能) 大永四(能本)

ち　つ

忠信	外7	外8				四	二劇	佐藤忠信	同	源義經		伊勢三郎	太刀持 討手 僧兵ミ		大和吉野山	文治元年 十一月	世阿	大永四（能本）
忠度	内8	内8	7忠則	7	4	二	複夢	老樵夫	平忠度	—	—	僧（俊成臣）	從僧2	所の者	攝津須磨	鎌倉初期 春（三月）	世阿	應永卅（能作）
龍田	内13	内13	10	12	22	三・四	複夢	巫女	龍田姫神	—	—	旅僧	從僧2	所の者	大和龍田	十一月	禪竹	大永四（能本）
谷行	外6	外14	19	36	24	四・五	二劇	松若母	伎樂鬼神		松若	帥阿闍梨	小先達 同行山伏2		京都松若宅 大和葛城山	十月	禪竹二	大永四（能本）
玉葛	内4	内4	25	10	32	四	複夢	女舟人	玉葛	—	—	旅僧		門前の者	大和初瀬	秋（九月）	禪竹	[illegible] 大永四（能本）
玉井	内9			1番外	17	脇	二劇	豐玉姫	海神	玉依姫 天女2		彥火々出見尊		文蛤、蛤、海草精5	海の都	神代（無季）	小次郎	大永四（能本）
田村	内1	内1	1	5	1	二	複夢	童子	坂上田村丸			東國僧	從僧2	門前の者	京都清水寺	三月	世阿	長享四（[illegible]）
湛海				廢		四	二劇	湛海	同		沙那王	鬼一法眼	從者	湛海の臣	京湛海宿 同五條大橋	平家時代（無季）		
檀風		外13		36	廢	四・五	二劇		熊野權現	壬生資朝	梅若	帥阿闍梨	本間三郎 太刀持 船頭 早打		佐渡	元弘二年（六月）	世阿	寛正六（[illegible]）
竹生島	内6	内6	4	2	4	脇	複夢	漁翁	龍神	女（辯才天）		醍醐臣下	從者2	竹生島社人	近江竹生島	醍醐御宇 三月	禪竹二	大永四（能本）
張良	外5	外15	2	27	20	五	二劇	黃石公	同	龍神		張良		張良從者	支那下邳	前漢高祖（九月）	小次郎	大永四（能本）
土蜘蛛	外9	外14	22	25	6	五	複劇	僧形（土蜘蛛）	土蜘蛛	頼光 胡蝶		獨武者	頼光從者 從兵4	獨武者從者	京都頼光館 土蜘蛛塚	平安盛期（七月）		
土車	別5		—		18	四	一劇	傳小次郎			深草少將の子	僧（深草少將）		善光寺堂守	信濃善光寺	（無季）	世阿	永享二（[illegible]）
綱	「羅生門」を見よ																	
經政	外2	外9	9	6	32	二	單夢	平經政靈				行慶			山城仁和寺	平家時代 秋（九月）	世阿	長享二（[illegible]）

て　と

曲名	観世	寳生	金春	金剛	喜多	位	曲色	前シテ	後シテ	ツレ	子方	ワキ	ワキツレ	間狂言	所	時	作者	[illegible]
妻戸	（雷電）を見よ																	
鶴亀	外8	内4	23	1	25	脇	一場	皇帝		鶴亀		大臣	從臣2	官人	支那 皇居	正月		
定家	内12	内12	15	32	34	三	複夢	里女	式子内親王			北國僧	從僧2	所の者	京都 千本	十月	禪竹能 世阿二	永正十
調伏曾我		外11		17	26	五	二場	工藤祐經	不動明王	團三郎 從者7	箱王	箱根別當	從僧8	能力	相模 箱根	鎌倉初期（無季）	宮増 能	
天鼓	内3	内16	24	16	30	四	夢場	天鼓の父	天鼓			後漢帝勅使		勅使の從者	呂河 宮	後漢 七月	世阿	寛正六（親元）
藤榮		外16	19	2番外	12	四	一場	蘆屋藤榮		鳴尾何某 月若		北條時頼	月若家人 鳴尾從者	太刀持	攝津 蘆屋	鎌倉中期 三月		永享二（談儀）
東岸居士	内12	内11		20	5	四	一場	東岸居士				旅人		門前の者	京都 清水寺	鎌倉時代（三月）春	世阿	應永卅（能作書）
東方朔	外8		17	廢	廢	脇	複場	老翁	東方朔	西王母（男）		帝	侍臣2	官人 仙人	支那 承華殿	漢武帝 七月	禪鳳	大永四（能本）
東北	内18	内18	1	8	13	三	複夢	里女	和泉式部			東國僧	從僧2	門前の者	京都 東北院	正月	世阿	大永四（禪鳳）
木賊	内22	内8		33	36	四	一場	老翁		里人3	松若	都の僧	從僧2		信濃 園原	秋（八月）	世阿	大永四（能本）
融	内4	内4	6	30	30	五	複夢	汐汲翁	源融			東國僧		所の者	京都 河原院	秋（八月）	世阿 觀阿 能（二）	應永廿六
知章	外11		11	6	廢	二	複夢	里人	平知章			西國僧		所の者	攝津 須磨	二月	世阿	大永四（禪鳳）
朝長	内6	内6	5	6	14	二	夢場	長者	源朝長	靑墓長者侍女		僧（朝長傅）	長者從者 從僧	所の者	美濃 靑墓	平家時代（正月）	世阿	康正二（歌舞）
巴	外2	外11	14	5	2	二	複夢	里女	巴			木曾僧		所の者	近江 粟津原	（正月）	小次郎（二）	大永四（能本）

な　に　ぬ　ね　の　は

鳥追舟	別4 外9 鳥追	28	3 番外	8	四	二劇	日暮妻 同	花若	日暮何某左近尉	日暮従者	薩摩 日暮	秋（九月）	金剛（二）	大永四（能本）
仲光	番外 外10 蒲仲		2 番外蒲仲	9 蒲仲	四	二劇	藤原仲光	多田満仲 美女丸 幸寿丸	慧心僧都	満仲従者	摂津 多田館	平安盛期（無季）	世阿（能）	大永四（能本）
難波	内2 内2	6	1	2	脇	複夢	老翁 王仁	男 木華開耶姫	當今臣下 従者2	梅の精	摂津 難波	正月	世阿	永正十五（二水）
奈良詣	「大佛供養」を見よ													
錦木	内20 内18	19	23	8	四	複夢	男 男の霊	女 女の霊	旅僧 従僧2	所の者	陸奥 狭布里	（九月）	世阿	永享二（談儀）
錦戸	別1 外7		廃		四	二劇	泉三郎 同	泉の妻	錦戸太郎 藤原泰衡 錦戸従兵		陸中 泉館	鎌倉初期（四月）	宮増（能）	大永四（能本）
鵺	内7 内7	12	29	16	四・五	複夢	舟人 鵺		旅僧	所の者	摂津 蘆屋	（四月）	世阿（能） 観阿（二）	寛正六（親元）
寝覚	外1				一脇	複夢	老翁 三歸翁	里人 天女2 龍神2	醍醐帝勅使 従者2	山の神	信濃 寝覚里	醍醐御宇 三月		
野宮	内20 内20	7	8	10	三	複夢	里女 六條御息所		旅僧	所の者	山城 野宮	九月	世	寛正六（親元）
野守	外4 外5	1	29	13	五	複夢	野守翁 鬼神		羽黒山伏	野守	大和 春日	春（正月）	世阿（能） 禅鳳（二）	永正十一（[illegible]田日）
放下僧	別1 外7	18	20	10	四	二劇	牧野小次郎兄 同	牧野小次郎	利根信俊	信俊従者	下野 武蔵 三島	（九月）	近江（能） 禅竹（二）	寛正五（糺河原）
放生川	別3 外1	12	1 番外	廃	脇	複夢	老翁 武内神	男	鹿島神職 従者2	所の者	山城 男山	八月	世	[illegible]
白樂天	内4	7	2	6	脇	劇夢	漁翁 住吉明神	漁夫	白樂天 従者2	住吉末社	肥前 松浦潟	平安初期（無季）	世阿	寛正五（糺河原）
羽衣	内21 内3	3	11	1	三	一劇	天女		漁夫白龍 漁夫2		駿河 三保	春（三月）	世阿	大永四（能本）
半蔀	外6 内13	13	10	21	三	複夢	里女 夕顔		雲林院僧	北山の者 同	京 雲林院 五條	九月	内藤藤左衛門	大永四（能本）

項目 曲名	五流名本 觀世	寶生	金春	金剛	喜多	能柄 順位	曲色	役 前シテ	後シテ	ツレ	子方	ワキ	ワキツレ	割 狂言	所	時	作者	
橋辨慶	外4	外7	20	24	11	四	二劇	辨慶	同		牛若丸		辨慶從者	都の者2	京都 西塔・五條	平家時代 秋(九月)	安清(二)	大永四(能本)
芭蕉	内16	内16	2	34	22	三	複夢	女	芭蕉の精			楚國僧		楚國の者	支那 楚小水	八月	禪竹	大永四(能本)
鉢木	内21	内5	5	20	1	四	二現	佐野常世	同	常世妻		北條時頼	二階堂	早打、太刀持	上野 佐野	鎌倉中期 冬(十二月)	世阿彌(能)	大永四(能本)
初雪			18			三・四	夢劇	神主姫	鷄の精	上﨟2				侍女夕霧	出雲 大社	(無季)	禪鳳(能)	大永四(能本)
花軍				廢		四	複夢	里人	女郎花の精	草花精		都の者	同行者	花の精	山城 伏見	(九月)	彌次郎(能)	大永四(能本)
花筐	内14	内14	28	14 (花形)	33	四	二劇	照日前	同(狂女)	侍女	繼體天皇	供奉官人	勅使・[illegible]2		越前 味眞野、大和 玉穗	繼體御宇 九月	世阿彌(能)、觀阿彌(二)	永享二(談儀)
班女	内1	内1	30	14	18	四	二劇	花子	同(狂女)			吉田少將	從者	宿の長者	美濃 野上宿、京都 [illegible]	秋(七月)	世阿彌	五音曲條々、永享(談儀)
ひ																		
飛雲	別2	外12		28	32	五	複劇	老樵夫	鬼神			熊野山伏	同行山伏2	熊野末社神	信濃 木曾	秋(九月)		
檜垣	内15	内15		35	35	三	複夢	老女	檜垣女			肥後僧		所の者	肥後 岩戸	(無季)	世阿彌	應永卅(能作)
雲雀山	外5	外16	29	14	28	四	二劇	乳母侍從	同(狂女)		中將姫	横佩右大臣	大臣の從者2	[illegible]	大和 雲雀山	奈良時代 夏(四月)	世阿彌	大永四(能本)
氷室	内16	内19	20	3	28	脇	複夢	氷室守翁	氷室神	天女		龜山院臣下	從者2	氷室の神職2	丹波 氷室山	龜山御宇 三月	宮増	大永四(能本)
百萬	内16	内20	20	15	3	四	一劇		百萬		百萬の子	吉野の者		門前の者	山城 嵯峨	(三月)	世阿彌改作	應永卅(能作)
ふ																		
笛之卷	番外					四	二劇	常磐御前	辨慶		牛若丸	羽田秋長		都の者2	京都 常磐、五條	平家時代 秋(九月)		
富士山			13	4		脇	複夢	海士女	富士山神	天女、海士女2		昭明王の臣下	從者2	淺間末社	駿河 富士山	六月	世阿彌(二)、次郎(能)	永享二(談儀)

富士太鼓	内14	内15	20	16	31	四	一劇	富士の妻		富士の女	花園帝臣		帝臣の従者	京都	花園御宇（九月）	世阿	大永四（能本）
（二人祇王）	〔祇王〕を見よ																
二人靜	内9		6	31	26	三	劇夢	女	靜御前	菜摘女	勝手神職			大和 菜摘川 勝手社	正月	世阿	寛正五（糺河原）
藤	別4	外1		11（新）		三	複夢	里女	藤の精		都僧		所の者	越中 多祜浦	（四月）	安清（二）	
藤戸	内8	内8	8	22	13	四	夢劇	漁夫の母	漁夫の靈		佐々木盛綱	従者2	従者	備前 藤戸	鎌倉初期 春（三月）	世阿	永正十一（談儀）
船橋	内14	内14	25	23	28	四	複夢	男	男の靈	女（女の靈）	熊野山伏	同行山伏2	所の者	上野 佐野	春（三月）	世阿改作	應永卅（能作）
船辨慶	内16	内2	9	28	1	五	二劇	靜御前	知盛亡靈	源義經	辨慶	義經の従者3	船頭	攝津 大物浦	文治元年（十一月）	小次郎	大永四（能本）
佛原	内19			8	廢	三	複夢	里女	佛御前		都僧	従僧2	所の者	加賀 佛原	秋（九月）	世阿	寶德四（春日）
卷絹	外3	外14		12	11	四	一劇	神子		都の男	當今勅使		勅使の従者	紀伊 熊野	十二月	觀阿（二）	
枕慈童	別2	（寶生下懸は〔菊慈童〕を見よ）				四	一劇	慈童			漢帝勅使	従者2		支那 酈縣山	漢代 秋（九月）		
正行				廢		四	一劇	楠正行			吉野僧兵	同僧兵 正行従者	正行従者	大和 吉野	南北朝（三月）		
松風	内10	内10	9	9	8	三	單夢	松風		村雨	旅僧		所の者	攝津 須磨浦	秋（九月）	世阿改作	應永卅（能作）
松尾		外7				脇	複夢	老翁	松尾明神	男	當今臣下	従者2	所の者	山城 松尾	九月	世阿（能） 觀阿（二）	文明十五（視元）
松蟲	別3	外6	29	23	23	四	複夢	男	男の靈	男3	阿倍野の市人		天王寺の者	攝津 阿倍野	九月	世阿	永正十一（談儀）
松山鏡	外10			36	17	五	劇夢	倶生神	母の靈	姫	越後の者			越後 松の山家	無季		大永四（能本）

み　む　め　も

曲名	観世	宝生	金春	金剛	喜多	位	番組	前シテ	後シテ	ツレ	子方	ワキ	ワキツレ	狂言	所	時	作者	
松山天狗				番外4		五	劇夢老	翁	崇徳上皇	相模坊 小天狗2		西行法師		木葉天狗	讃岐 松山	春三月 鎌倉初期		
満仲	〔仲光〕を見よ																	
通盛	内15	内15	10	番外2	6	二	複夢漁	翁	平通盛	小宰相 海士女		僧	従僧	所の者	阿波 鳴門	夏七月	井阿彌	[illegible]
三山		外8		番外32		四	複夢里	女	桂子	櫻子		良忍上人		所の者	大和 耳成山	春三月	世阿彌	寛正六 糺元
水無瀬					33	四	劇夢	爲世妻の霊			爲世の女 同弟	僧(爲世)			摂津 水無瀬	秋九月 鎌倉中期		
水無月祓	別4					四	一劇	室君(狂女)				下京の男		所の者	山城 賀茂	六月	世阿彌 安清(二能)	五音曲條
身延	別2					三	劇夢	女の霊				日蓮上人			甲斐 身延山	秋九月 鎌倉中期		
御裳濯			27		廢	脇	複夢老	翁	興玉神	男		當今臣下	従者2	所の者	伊勢 石の鏡	五月	世阿彌	大永四(能本)
三輪	内18	内18	4	12	32	四	複夢里	女	三輪明神			玄賓僧都		所の者	大和 三輪	秋九月	世阿彌	寛正六 糺元
三井寺	内3	内6	3	15	19	四	二劇母		同(狂女)		千満	三井寺僧	従僧2	能力	京都清水寺 近江三井寺	八月	世阿彌	康正二 [illegible]
六浦	外10	外5	14	11	廢	三	複夢里	女	楓の精			都の僧	従僧2	所の者	相模 六浦	秋九月	禅竹 安清(二能)	大永四(能本)
室君	別2		22			四	劇夢		韋提希夫人	室君3		室神職		従者	播磨 室	二月		
和布刈	外8	外2		2	12	脇	複夢漁	翁	龍神	天女 海士女		早鞆神職	従者2	海草の精	長門 早鞆	十二月		大永四(能本)
望月	外12	内17	17	18	36	四五	二劇	小澤友房	同	安田友治妻	花若	望月秋長		望月従者	近江 守山	(正月)		

や																	
求塚		内19		32(新)	25	四	複夢	里女	處女の靈	里女2	西國僧	從僧2	所の者	攝津 生田	後堀河御宇 春(二月)	世阿(能) 観阿(二)	永享二(談儀)
紅葉狩	内2	内7	20	25	8	五	複劇	貴女	鬼女	侍女3	平維茂	同從者	侍女 男山八幡末社神	信濃 戸隠山	平安朝 九月	小次郎(二)	天文十四(言)
盛久	内19	内19	16	21	15	四	一劇	平盛久			土屋三郎	輿舁2 太刀取	土屋の從者	相模 鎌倉	鎌倉初期 春(三月)	世阿(能) 元雅(二)	永正十一(談儀)
楊貴妃	内4	内8	12	31	7	三	一劇	楊貴妃			方士		所の者	常世國 蓬萊宮	唐玄宗 (八月)	禪竹	長享二(親長)
養老	内5	内5	8	1	5	脇	夢劇	孝子の父	養老山神	孝子樵夫	雄略勅使	從者2	本巣郡の者	美濃 養老瀧	雄略御宇 (四月)	世阿	應永卅(能作)
八島	内11	内11	2	5	13	二	複夢	漁翁	源義經	漁夫	都僧	從僧2	所の者	讃岐 八島	春(三月)	世阿	永享二(談儀)
山姥	内15	内15	12	17	9	五	複劇	里女	山姥	遊女山姥	遊女從者	從者3	境川の者	越後 上路山	(無季)	世阿(能) 禪竹(二)	應永卅(能作)
山姫					廢	三	單夢	山姫			里人			山(所不定)	(三月)		明治卅五
ゆ																	
雪				34		三	單夢	雪の精(女)			旅僧			攝津 野田渡	冬(十二月)		
遊行柳	内8	内5	28	13	11	三	複夢	老翁	柳の精		遊行上人	從僧2	所の者	岩代 白河邊	秋(九月)	小次郎	大永四(能本)
夕顔	内13			10	30	三	複夢	里女	夕顔上		豐後僧	從僧2	所の者	京都 五條	秋(九月)	世阿(能)	寛正六(親元)
弓八幡	内21	外9	2	1	3	脇	複夢	老翁	高良の神	男	後宇多臣下	從者2	山下の者	山城 男山	後宇多御宇 二月	世阿	永享二(談儀)
熊野	内8	内1	8	9	16 湯谷	三	一劇	熊野		朝顔	平宗盛	從者		京都 宗盛邸 清水寺	平家時代 春(三月)	世阿	康正二(歌舞)
よ																	
夜討曾我	内13	外4	29	24	5	四	二劇	曾我五郎	同	曾我十郎、團三郎、鬼王ノ五郎丸		軍兵3	大藤内 狩場の者	駿河 富士裾野	建久四年 五月		寛正六 打入曾我(蔭)
吉野靜	別1	外2	26	9	廢	三	一劇	靜御前			佐藤忠信		吉野衆徒2	大和 吉野山	鎌倉初期 (三月)	世阿(能) 観阿(二)	[illegible]九(花[illegible])

	曲名	觀世	寶生	金春	金剛	喜多	類	位	色	前シテ	後シテ	ツレ	子方	ワキ	ワキツレ	狂言	所	時	作者	[illegible]
	吉野天人	外7					三	複	夢	女	天人			都の者	同2	里人	大和吉野山	春（三月）	[illegible]	大永四（能本）
	頼政	内3	内3	15	6	17	二	複	夢	老翁	源頼政			旅僧		所の者	山城宇治	五月	世阿弥	[illegible]（能作）
	弱法師	外13	外4	30	33	26	四	一	劇	俊徳丸				高安通俊		高安従者	摂津天王寺	二月	世阿弥	永享二（談儀）
ら	雷電	別5	外16 来殿		30 妻戸	7	五	複	劇	菅公	雷神			法性坊		法性坊従者	比叡山 御所	平安初期（八月）		
	羅生門（二名綱）	外5	外4		25	4	九	二	劇		鬼神			渡辺綱	[illegible]	綱従者	京羅生門	平安盛期 春（二月）	小次郎	大永四（能本）
り	龍虎	内21				11	九	複	夢	翁	虎	[illegible]		入唐僧	従僧2	仙人	支那	無季	小次郎	大永四（能本）
	輪蔵	内22				寶	脇	複	夢		傅大士	[illegible]		太宰府僧	従僧2	門前の者 末社神	京北野	無季	弥次郎	大永四（能本）
ろ	籠祇王					寶	四	一	劇	祇王		祇王父		瀬河某	祇王従者	瀬河従者	紀伊瀬河	春（三月）		
	籠太鼓	別1	外1	7	14	24	四	一	劇	関清次妻				松浦某		松浦従者	肥前松浦	無季	世阿弥	寛正七（飯尾）
ゐ	井筒	内3	内3	16	8	20	三	複	夢	里女	紀有常女			旅僧		櫟本の者	大和在原寺	秋（九月）	世阿弥	永享二（談儀）
ゑ	烏帽子折	外7	外15		24	28	四五	二	劇	烏帽子屋	熊坂長範	烏帽子屋妻 熊坂手下	牛若丸	三条吉次	吉六	[illegible]	近江 [illegible]	平家時代（九月）	宮増	[illegible]
	絵馬	別6	外11		3	34	脇	複	夢	老翁	天照大神	姥 天鈿女 手力雄命		当今勅使	従者2	蓬莱の鬼2	伊勢斎宮	節分		
を	小塩	内19	内15	25	13	14	三四	複	夢	老翁	在原業平			下京の男	同2	所の者	山城大原野	春（三月）	禅竹	寛正六（[illegible]）
	姨捨	内6	内6		35 伯母棄	35 伯母捨	三	複	夢	里女	老女			都の男	同2	山下の者	信濃姨捨山	八月	世阿弥	永正十一（談儀）

女郎花	内17	内17	16	22	24	四	複夢	老翁 小野頼風	頼風ノ妻	松浦僧	山下の者	山城 男山	秋（八月）	世阿彌（能）（一）（二）（粟田口） 永正二
大蛇		外13		25	31	四五	二劇	手摩乳 八岐大蛇	脚摩乳 稲田姫	素盞嗚尊 従者2 輿舁2	木葉の精	出雲 手摩乳家 の川上	神代（無季）	小次郎 寛正六（[illegible]）

略符號解

〔能柄〕

脇……脇能

單夢……單式夢幻能

一劇……一段劇能

複劇……複式劇能

二……二番目。（以下これに倣ふ）

複夢……複式夢幻能

二劇……二段劇能

劇夢（夢劇）……劇的夢幻能（夢幻的劇能）

〔役割〕

マ……前ヅレ

ノ……後ヅレ（ツレの無符號は前ヅレ又は前後とも）

2・3……ツレ・ワキヅレ等の人數を示す。

〔時〕

括弧は演能上約束の季節を示す。

〔作者〕

（能）……能本作者註文

（一）……二百十番謠目錄

無符號は世阿彌の書により作者の疑ひなきもの、又は前記二書所說一致したるもの。

〔記錄〕

粟田口……粟田口猿樂記

飯尾……飯尾宅御成記

異本紀……異本紀河原勸進猿樂記

蔭……蔭凉軒日錄

春日……春日拜殿方諸日記
口傳……花傳書別紙口傳
看聞……看聞御記
言經……言經卿記
五音三曲……五音三曲集
拾玉……拾玉得花
糺河原……糺河原勸進猿樂記
親長……親長卿記
田樂……文安三年田樂記
能作……能作書

歌舞……歌舞髓腦記
花傳……花傳書
言……言繼卿記
五音曲……五音曲條々
聲出……音曲聲出口傳
禪鳳習道……禪鳳習道目錄
談儀……世子六十以後申樂談儀
親元……親元日記
二水……二水記
能本……能本作者註文

謠曲細說

研究材料の統一

諸流及び古謡本の異同

謡曲文構成要素の研究

一、研究の對象

謡曲文の構成樣式及びその各章節の名目については、總說第三章の第四・第五節に於て略述したのであるが、なほこれら構成要素を更に綿密に解剖して、その形式内容を檢討類別することは、類型的な謡曲の、各曲に於ける微妙な異同を辨別する上にも、從つてそれぞれの曲の特質を理解する上にも、興味の多い問題であらうと思はれるから、以下その主なるものについて考察して見たいと思ふ。

さて、各要素を統計的に類別しようとするに就ては、その統計材料が大體同一條件の下にあるものでなければならないのであるが、五流の間に於ける詞章の異同は、主としてシテ・ワキの掛合など、比較的重要でない部分で行はれてゐるとはいふものの、次第・道行などの著しい要素についても、多少の出入があり、例へば、

次第〔敦盛〕ワキ

（觀・喜）夢の世なれば驚きて、捨つるや現なるらん

（寶）　旅泪に憂きは入相の、鐘こそとまりなりけれ

（金・剛）ナシ

次第〔砧〕ツレ

（觀・寶・剛）ナシ

（古）旅の衣の遙々と、蘆屋の里に急がん

道行〔老松〕ワキ

（觀・寶）何事も、心に叶ふこの時の、ためしも今は日の本の、國豐かなる秋津洲の、波も音せぬ四つの海、高麗唐土も殘りなき、御調の道の末ここに、安樂寺にも着きにけり

（下懸）上野に通ふ春風の、[illegible]浦傳ひ、明石の[illegible]、げに定めなき旅の空、[illegible]室の友君きぬぎぬの、朝妻船やしらぬひの、筑紫の地にも着きにけり

ロンギ〔蘆刈〕（第八節）

（觀・寶）ナシ

（下懸）地 げにや妹背の中だちの、言の葉草の末かけて、[illegible]シテ 思ひ[illegible]の、蘆に亂るる玉櫛、隔れぬべき住居かな、縁もよしや逢ふまでと、心をくだく紫の。シテ「露の盃。地 とりとりに、[illegible]さす盃や[illegible]、色香も匂ひも深き袂かな

待謠〔浮舟〕ワキ

（觀）かくて小野には來れども、いづくを宿と定むべき。（上歌）所の名さへ小野なれば、草の枕は理や、今宵はここに經を讀み、かの御跡を弔ふとかや

（春・剛）今もその、世を宇治山の道出でて、うつろふ迷ひあだ波の、小野の草村露分けて、あはれをかけて弔はん

かうした相異は、勿論現行本と古謠本との間にも認められるのであつて、例へば、

道行〔阿漕〕ワキ

（現行本）日に向ふ、國の浦舟漕ぎ出でて、八重の潮路を遥々と、分けこし波の淡路潟、通ふ千鳥の聲聞きて、旅の寢覺を須磨の浦、關の戸ともに明け暮れて、阿漕が浦に着きにけり

（光悦本）船出する八重の潮路の遥々と、難波の浦に着きしかば、暫し都の月影も、雲居の跡にうつり來て、伊勢や日向も隔てなき、阿漕が浦に着きにけり（春はこれに同じ）

クセ〔草薙〕（第四節）

（現行本）ナシ

（貞享本）既に進發の日、熱田の源太夫、宮つかまつるのよていにて、一夜假寢の草筵、袖しく夜半のつれづれに、宿の少女の名を聞けば……

これらの異同は、第一卷以下每曲の「考異」に於て一々指摘して置いたが、今これらを總括的に考察する場合、流派の主張の異なるものを同列に取扱ふことは、統計の誤差を甚しくする因となるばかりでなく、觀世以外の四流諸本では、その形態から見て、例へば上歌などと認められるものでも、これを明示してゐないものが少くないのである。これも第一卷以下の本文では、往々括弧を施して指示して置いたが、こゝにこれらを諸本に明示してゐるものと同列に取扱ふことは、やはり愼まなければならない。

それで、本研究に於ては、觀世現行曲に限り、且、〔翁〕の如き特殊なもの、〔梅〕〔楠露〕などの新曲を加へてゐる番外曲を除き、ほゞ德川期以前の作で、同一流に永く傳へられて來た内外別の二百番を研究對象として、なるべく對象の統一を期し、必要に應じて、他の諸流及び古諸本を參照したいと思ふ。

次第の名義

二、次第

謠曲の構造を部分的に考察しようとして、最初に出會ふのが、「次第」である。次第に就ては嘗て能樂誌上で池内如水氏と久米邦武博士との論爭があつた。まづ池内氏が同誌第三巻第四號で、次第を「わけがら」の意であると解かれたのに對して、久米博士が第四巻第四號「謠曲の次第と昔の曲舞」に「曲舞の結構は初めに次第を謠ふのが通則ならん」といつて、池内氏の說を駁されたのに始まり、池内氏は同五號で、

> 次第が二つあらうが三つあらうが、それは少しも妨げないことで、其の顯れ出でし人物、其の目的或は行爲、又は場合模様等の大意わけがらをうたふて居るのが、次第である。

と自說を固持し、久米博士はまた同七號で、

> 次第は歌にしても、段にしても、曲にしても、是を始むる時の順序に謠ひ出す歌調なるを以て、次第順序として先づ謠ふ歌といふ意味を撮つて次第といひ來りたるを序歌と塡補したるに妥當の文字なり。

と主張せられた。この兩說は、一はその意義内容の上から論じ、他は位置形式の方を觀られたもので、兩說とも實際に卽して說を立てられたところに、それぞれの價値が認められるのであるが、この名目の歷史から觀れば、世阿彌が申樂談儀に、

> 曲舞は次第に舞ひそめて、次第にて止むる也。

といつて居る曲舞の次第から出たもので、更にこれを溯れば、高野辰之博士が日本歌謠史に、

> 佛家の聲明道から出た名で、聲明では、佛を勸請するに際して、導師が南無歸命頂禮云々と謳へば、つぎ隨ふ者は、少し後れて南無歸命云々と謳ひ出す。さうして一句の終迄には追ひついて、導師と共に謳ひ終

次第の數

るやうにし、之を稱して次第音といつてゐる。能の次第は此の次第音の略である。といつて居られるのに從ふべきであらう。

さて謠曲の次第は、謠曲文構成の著しい要素ではあるが、必須の形式ではない。今内外別の二百番を調べて見ると、

〔鵜飼〕　〔賴政〕　〔實盛〕　〔玉葛〕　〔藤〕　〔玉井〕　〔二人靜〕
〔松風〕　〔浮舟〕　〔鸚鵡小町〕　〔鞍馬天狗〕　〔咸陽宮〕　〔夕顔〕　〔皇帝〕
〔通盛〕　〔女郎花〕　〔自然居士〕　〔大會〕　〔猩々〕　〔善知鳥〕　〔唐船〕
〔西王母〕　〔經政〕　〔正尊〕　〔鐘馗〕　〔春榮〕　〔小督〕　〔張良〕
〔住吉詣〕　〔谷行〕　〔半蔀〕　〔忠信〕　〔大瓶猩々〕　〔鶴龜〕　〔東方朔〕
〔舍利〕　〔小鍛冶〕　〔石橋〕　〔合浦〕　〔生田敦盛〕　〔松山鏡〕　〔大江山〕
〔俊成忠度〕　〔鷺〕　〔弱法師〕　〔吉野靜〕　〔籠太鼓〕　〔錦戸〕　〔室君〕
〔一角仙人〕　〔三笑〕　〔水無月祓〕　〔國栖〕　〔雷電〕　〔昭君〕

の五十五番、即ち全體の凡そ三割には次第がないのである。

かう見てくると、次第は謠曲の重要條件といふことを差控へなければならないやうであるが、一體謠曲は類型的な作品であるといはれてゐるものの、隨分思ひ切つた破格の作品もあるのであつて、例へば能の破格の根本的要素であるところのシテ・ワキのワキのないものさへ少くないのであるから、前記の事實は寧ろ類型破格の作法として研究すべき問題であらうと思はれる。

さてまた、謡曲に次第のあるものに就て見ると、多くはワキが謡ふのであるが、シテの場合も、ツレの場合も、地次第の時もある。これを二百番に就て統計すれば、

ワキの謡ふもの……一〇三
シテの謡ふもの……三二
ツレの（シテと同吟でなく）謡ふもの……一一
地次第……一六

このうち、同一曲で二様の次第のあるものは、

ワキ次第とシテ次第……〔卒都婆小町〕〔錦木〕〔敦盛〕〔箙〕〔土車〕
ワキ次第とツレ次第……〔望月〕
ワキ次第と地次第……〔三井寺〕〔楊貴妃〕〔安達原〕〔海士〕〔櫻川〕〔山姥〕〔百萬〕
シテ次第と地次第……〔檜垣〕
ツレ次第と地次第……〔草子洗小町〕〔歌占〕
シテの二度謡ふもの……〔道成寺〕

などである。

これらの次第に就て、まづその一曲に於ける位置を觀るに、〔大原御幸〕〔白樂天〕のワキ、〔葵上〕〔土車〕のシテ、〔草子洗小町〕の一同に、次第の前に多少の詞又は歌のある外は、いづれもその人物の最初の發聲に謡つてゐるのであつて、形の上から見れば、久米博士のやうに序歌ともいひ得るのである。たゞ地次第だけは地謡の最初に現れたいが、〔天鼓〕〔羽衣〕〔安達原〕〔歌占〕など、大抵々々その前に出てゐるのであつて、これ

は、「くせ舞は次第にて舞ひそめ」る形式を踏襲したものであるから、地次第といふよりも、クセ次第と見れば解決がつくのである。尤も地次第はクセの先行であるには限らず、〔草子洗小町〕〔砧〕などには地次第はあるがクセはなく〔三井寺〕にはクセはあるが、地次第とは甚しく距たつてゐるのである。しかしこれは曲舞文の變遷を考へる好箇の材料であつて、次第の職能からいへば、クセ破格の爲に常例の埒外に出たものといふべきであらう。

次に、次第の形式を見ると、七五・七五・七四の形を成してゐるものが最も多く、これに就ても、たゞ

八重の潮路の浦の波、八重の潮路の浦波、九重にいざや歸らん（清經）

衣に落つる松の聲、衣に落ちて松の聲、夜寒を風や知らすらん（砧）

と、〔清經〕では第二句が第一句と一字違つて居り、〔砧〕では二字違つてゐる外は、いづれも第二句は第一句と全く同文なのである。卽ち次第の第二句は諷誦の爲の繰り返しであつて、われ／＼の立場からこれを見る時は、單に七五・七四の二句として考へて差支がなく、且その方が便利でもあると思はれる。以下この方法に從ふこととする。

次第の形は七五・七四を原則と見られるのであるが、これにも破格はかなり多く、第二句の四文字を一字增した七五・七五が二十五ばかりある。

曉ごとの、閼伽の水、月もこころや、澄ますらん（井筒）

秋も半ばの、暮待ちて、月にこころや、いそぐらん（三井寺）

などがそれである。第二句の七文字に一字を加へた、七五・八四のものも十ばかりある。

[illegible]の[illegible]、踊て来て、ここかしこに、急ぎけん（田村）
雲路を違へ、旅の空、いかなる日のおとや、尋ねん（[illegible]）

これとは反對に七文字の一字少い、七五・六四のものもある。

和歌の心を、道として、たまつしまに、参らん（蟻通）

なく、四十ばかりの異例はあるが、原則は七五・七四と見なければならない。更にこれを細く、七字の割り方に就て見ると、

三四、五、四三、四……………………三十二章

宮路、正しき。春日野の、寺にも、いざや、参らん（采女）

三四、五、三四、四……………………五章

清き、水上。尋ねてや。賀茂の、宮居に。参らん（賀茂）

四三、五、四三、四……………………三十五章

夢路も、深ひて。吉野に。帰るや、現。たるらん（柏崎）

四三、五、三四、四……………………九章

始めて、旅を。信濃路や。木曾の、行方を。尋ねん（兼平）

四三、五、二五、四……………………一章

御法の、船の。水馴棹。みな、彼の岸に。到らん（東岸居士）

三四、五、二五、四……………………二章

今を、始めの。旅衣。日も、行く末ぞ。久しき（高砂）

五二、五、四三、四……………三章

大和にも、織る。唐錦。龍田の、神に。參らん　（逆矛）

五二、五、三四、四…………一章

雲の上、なほ。遙かなる。富士の、行方を。尋ねん　（富士太鼓）

二五、五、四三、四…………十章

頃、待ち得たる。櫻狩。山路の、春に。急がん　（櫻川）

二五、五、三四、四…………二章

わが、また知らぬ。東雲の。道を、いづくと。尋ねん　（楊貴妃）

なほこの外に

月の名近き、秋なれや、姨捨山を、尋ねん　（姨捨）

などのやうに、七文字を分ち難いものがあり、又、

神を硫黄が、島なれば、願ひも三つの、山ならん　（俊寛）

身は浮草を、誘ふ水、なきこそ悲し、かりけれ　（卒都婆小町）

などのやうに、文法上から見れば、七五七四とは分ち難いものもあるのである。

しかし、この大凡以上の概算によつて知られることは、三四又は四三の分ち方が多くて、五二又は二五の分ち方の甚だ少いことである。これは既に今様に於ても著しく現れてゐるわが歌謠の大きな傾向で、細かいリズムを以て歌調を和らげようとした苦心の跡が認められるのである。それから、四三と三四との按配を見ると第一句では兩者殆ど同數であるが、第二句では、三四は僅か十餘りで、四三が八十餘もあるのである。これ

以下の三字を句末の四文字と離れて、七文字の調を保たしめようと努めた結果であらう。

次で、次第の修辭法に就て見れば、二十二字の中に、掛詞、縁語、對語、折字、種々の技巧が企てられて居るのである。

掛詞を用ゐたものには、

今をしかりの隠れ里、富士の裾野を狩らうよ（小袖曾我）

花にうつろふ峯の雲、かかるや心たるらん（小鹽）

縁語を用ゐたものには、

衣も同じ苔の道、石山寺に參らん（源氏供養）

身は捨小舟うらみても、かひなきや浮世なるらん（七騎落）

對語には、

八重の潮路の浦の波、九重にいざや歸らん（清經）

行けば深山もあさもよい、木曾路の旅に出でうよ（巴）

折字には、

竹に生まるる鶯の、竹生島詣で急がん（竹生島）

これらの修辭法を二種以上合はせ用ゐた例は、

藤咲く松も紫の、雲の林を尋ねん（雲林院）

歸るぞ名殘富士のねの、ゆきて都に語らん（班女）

來る年の矢の生田川、流れて早き月日かな（箙）

文章の内容に入つて考へると、勿論類型的のものが少くなく、甚しきは同文のものも見出されるのである。例へば、

旅の衣は篠懸の、露けき袖やしをるらん（安達原、安宅、攝待）
げに治まれる四方の國、關の戸さゝで通はん（老松、岩船）
頃待ち得たる櫻狩、山路の春に急がん（西行櫻、櫻川）
夢の世なれば驚きて、捨つるや現なるらん（敦盛、土車）
春を心のしるべにて、憂からぬ旅に出でうよ（箙、知章）

しかし、精しく檢討して見ると、僅か二十三字の中にも、各種各樣の作意を持つてゐるのであつて、これらを分類すれば、(甲)羇旅を語るもの、(乙)風景を叙するもの、(丙)心情を抒べるもの、この三に大別することが出來よう。尤も、羇旅を語るに就ては風景を叙するものが多く、羇旅といひ風景といつても、純粹な客觀的記述ではなく、多くはこれに關聯した心情を洩らして居り、また心情を主とするものといつても、大抵は風景にこれを託してゐるのである。だから、截然と分類することは困難であるが、たゞ概觀してその變化を眺めて見たいと思ふ。

羇旅に關するものの多いのは、もと次第は多くはワキ謠であり、ワキは多くは旅僧か、でなくても大抵旅行者であるから、その最初の詞として、旅が問題となるのであらう。

旅に關するもの(甲)の中でも、その目的地を明言して居るもの(一)が多い。

時雨を急ぐ紅葉狩、深き山路を尋ねん（紅葉狩）

作りし罪も消えぬべし、鐘の供養に參らん（道成寺）

これらは、併せて旅行の理由をも語つて居る例（イ）である。これに對して、旅行に就ての心構を述べて居るもの（ロ）には、

和漢の心を道として、玉津島に參らん（蟻通）

心の花を手向として、大神宮に參らん（第六天）

旅の經過を報告してゐるもの（ハ）には、

霞の谷路隔て來て、九重の春に急がん（田村）

分け行く露もふかみ草、大原の御幸急がん（大原御幸）

山又山を遙々と、越路の旅に出でうよ（藤）

目的地の景情を叙したもの（ニ）には、

誓ひ數多の神祭り、出雲の國を尋ねん（大社）

月も南の海原や、八島の浦を尋ねん（八島）

よそは稍の秋深き、雪の白山尋ねん（佛原）

旅の目的をいはないで、旅そのものの感想を叙べてゐるもの（ト）がある。そしてその感想には、樂しいもの（ホ）と、悲しいもの（ヘ）との別がある。

今を始めの旅衣、日も行く末ぞ久しき（高砂）

春を心のしるべにて、憂からぬ旅に出でうよ（箙）

春立つ空の旅衣、日ものどかなる山路かな（胡蝶）

は前者の例である。

思ひやるさへ遥かなる、東の旅に出でうよ（六浦）

世を捨人の旅の空、來し方いづくなるらん（鵺）

浮世の旅に迷ひ來て、夢路をいつと定めん（邯鄲）

これは果敢ない感想である。

羇旅の次第に、目的地の景情を叙したものの多いことは前に述べた。これが、旅の心を離れた時に、風景の次第（乙）が生まれるのである。

琴の音添へて音づるる、これや東屋なるらん（千手）

花に馴れ來し野の宮の、秋より後は如何ならん（野宮）

傾く嶺の雲雀山、上るや雲路なるらん（雲雀山）

これらは、旅の心を離れた、目的地、特定の場の叙景（ト）である。特定の場所をも離れ得た時に、季の叙景が生まれる。春の歌（チ）には、

山も霞みて浦の春、波風靜かなりけり（難波）

ながめ暮らして花にまた、宿かる草を尋ねん（項羽）

夢の間惜しき春なれや、咲く頃花を尋ねん（熊野）

春ののどけさは、やがて風物の和樂（リ）となる。

道ある御代の花見月、都の山ぞのどけき（志賀）

四方の山風のどかなる、雲居の春ぞ久しき（右近）

八洲も同じ大君の、御影の春ぞのどけき（氷室）

春に對して、秋の歎(ヌ)には、

心づくしの秋風に、木の間の月ぞすくなき（阿漕）

もとの秋をも松蟲の、音にもや友を忍ぶらん（松蟲）

草刈笛の聲添へて、吹くこそ野風なりけれ（敦盛）

秋の閑寂はやがて人生の悲哀(ル)となる。

月は昔の友ならば、世の外いづくならまし（江口）

影白河の水汲めば、月も袂や濡らすらん（檜垣）

春ののどけさが風物の和樂となり、秋の閑寂が人生の悲哀となる。この心持が大方景物を離れて、心のままに謡はれるのが、心情吐瀉の次第(ヲ)である。國土讃美の次第(ワ)は、祝言能の多いのにつれて、従って多い。

げに治まれる四方の國、關の戸ささで通はん（岩船）

道の道たる時とてや、國々豐かなるらん（呉服）

御影を仰ぐこの君の、四方こそ静かなりけれ（放生川）

國土の泰平にも拘らず、われには解き難き煩悶の次第(カ)がある。

消えぬ便りも風なれば、露の身如何になりぬらん（景清）

眞麻苧の絲を繰り返し、昔を今になさばや（安達原）

波の浮鳥住むほども、下安からぬ心かな（望月）

煩悶の末、一つの人生觀を得たもの（カ）には、

捨ててもめぐる世の中は、心の隔てなりけり　（梅枝）

定めなき世のなかなかに、憂き事や頼みなるらん　（蟬丸）

夢の世なれば驚きて、捨つるや現なるらん　（敦盛）

煩悶を棄てて、最後の悟道に入つたもの（ヨ）には、

東に殘る法の道、迷はぬ敎へ頼まん　（輪藏）

敎へ嬉しき法の門、開くる道に出でうよ　（當麻）

敎への道も一聲の、御法を四方に弘めん　（誓願寺）

二十三字の次第が示す意義は、結局謡曲全體の志す所に歸着するのである。

三、道　行

道行の變遷

「次第」に續いて一通り觀察したいのは、「道行」である。道行文は古くは伊勢物語の「東下り」に溯り、近くは宴曲・平語の「海道下り」を著名な先進文藝として、謡曲に於てこれを一つの約束せられた形式に整へ、淨瑠璃がその後を承けて異常な發達を遂げしめたのである。尤も謡曲には、「兼平」「盛久」「熊野」「柏崎」「蟬丸」などの如く、掛合・上歌・ロンギなどを包含した一種の道行文もあるが、こゝには謡曲文構成要素の名目として「道行」と指示してゐる部分に就て考へて見たいと思ふのである。

道行の數

道行は普通謡曲序段の後の部分を占め、ワキ次第・名乗の次に位してゐるのであるが、謡曲成分としての

必須程度は、次第よりも稍輕いものであるらしく、二百番に就てこれを檢すると、

ワキ次第・道行ともあるもの……七十五
ワキ次第はなきも、道行のあるもの……九
シテ次第・道行のあるもの……三
ツレ次第・道行のあるもの……四

計　九十一

ワキ次第はあるも、道行のなきもの……二十八
シテ次第等はあるも、道行のなきもの……二十九
次第・道行ともになきもの……五十二

計　百〇九

道行の形式

即ち道行は全體の五割弱しかないのである。さもあれ、これら道行の形式は、第一句五七五、第二句以下七五の數句から成り、第一句と末句との七五は繰返してあるのである。そして、その句數は（返し句は別にして）四句乃至九句で、

四句のもの……四
五句のもの……十八
六句のもの……三十四
七句のもの……二十九
八句のもの……五

道行の内容

九句のもの……………………………………………一

といふ形をなして居る。今その最も多いものと、最も少いものとの例を擧げれば、九句のものは、

旅衣今日九重を立ち出でて、末は音羽の山櫻、花の瀧川これぞこの、行くも歸るも逢坂の、杉の木の間に波寄する、湖向ふ鏡山、やうやう行けば鈴鹿路や、多氣の都の程もなく、度會の宮に着きにけり（第六天）

短い方の例には、

夕々の假枕、宿は數多に變れども、同じ憂き寢の美濃尾張、三河の國に着きにけり（杜若）

これには第一句の五文字もないのである。

五文字のないものには、なほこの外に、〔船橋〕〔道成寺〕〔花月〕〔鐘馗〕〔張良〕〔禪師曾我〕〔繪馬〕などあるが、七五字の字餘、字不足には、

生まれぬ先の身を知れば、あはれむべき親もなし、親のなければわがために、心を留むる子もなし、千里を行くも遠からず、野に臥し山にとまる身の、これぞ眞の住家なる（花月）

終南山を立ち出でて、野草の露を分け行けば、遠村に煙滿ち、人屋しるき眺望の、海路遙かに過ぐれば、釣の小舟も歸る波、よる程もなき眺めかな（鐘馗）

などを著しい例として、この外には殆ど見當らない。

規模に於て、道行は次第に數倍してゐるが、形式に於ては次第ほどの破格はなく、内容に於いても亦次第よりも一層類型的なのである。次第には「出でうよ」「參らん」「急がん」などと出發の意を表してゐるものが多いが、それでも、他の意味を表したものの少くないことは既に述べた通りであるが、道行の方は殆どすべ

道行文が「[illegible]」のやうな「[illegible]」の一元描寫になると、全く詩趣のないものになつてしまふ。これに對して、叙景や抒情の一元描寫も、僅かながらある。

百千鳥囀る春は物毎に、あらたまり行く日數經て、頃も彌生の空なれや、やよ留まりて花の友、知るも知らぬも諸共に、誰も花なる心かな（西行櫻）

地名さへ見えない春の歌である。

名にし負ふ[illegible]の國つ神、青海原にさしおろす、天の瓊矛の露なれや、秋津洲根の朝日うけ、そなたもしるく浮かむ日の、神の御國にこれかとよ（[illegible]）

これは國土讃美の歌である。前に破格の例に擧げた「花月」の道行は行人の人生觀を洩らしたものである。

これらはそれ自體としては興味のある文章ではあるが、旅程を叙述すべき道行文としては全くその本義を離れて居るのである。作者から見れば表現が容易であり、讀者から見れば興味が深いに拘らず、この種の破格の少いのは、謡曲作者が飽くまで道行の本義を離れることを恐れた爲であらう。

序段の構成

四、序段の歌

謡曲の一般的構造について、世阿彌は能作書に、「開口人出て、さし聲より、次第、一歌まで一段、自是破」といつて、即ち、序一段はワキのサシ聲から次第一謡までであると定めて居るのである。ところが、ワキのサシで始まる曲は至つて少くない。二百番の中からこれを索めると、

〔實盛〕　〔玉井〕　〔皇帝〕　〔大會〕　〔西王母〕　〔東方朔〕　〔身延〕

序段の數

〔三　笑〕　〔雷　電〕　〔現在七面〕

などに過ぎないのである。そして、これらにはいづれも次第がない。從つて「さし聲より次第」といふ規則はどの曲にもあてはまらないのである。然し、同じ能作書の、老女軍三體の事を細叙した項に、

先、祝言の風體、開口人出て、次第より一うたひ一段に、音曲、五七五、七五ノヽと行事、七八句うたふべし、七五を一句と定、只歌一首を貳句と可得心。

とあるのを見れば、ワキのサシ謠から始まるのは、むしろ古い或は特殊な形式で——現に半開口の式にその根跡を留めてゐる——世阿彌の頃でも、普通の曲はワキ次第から始まつてゐたものであらう。

さうすれば、前節に述べた、ワキ次第。道行ともに具備してゐるものは、この規則にあてはまるもので、まづワキ次第で登場の目的又は氣分を述べ、名乘で自身の身分境遇を明かにし、道行で旅行の出發から目的地へ到着するまでの經過を報告してゐるのであつて、その道行の句格が五七五。七五の七八句から成り立つてゐることも既述の通りである。從つて「一うたひ一段」とは、道行を指してゐることは確かであるが、しかし道行のみと限ることは出來ない。

ワキ次第があつて、道行のない曲を調べて見ると、多くは「歌」がある。そしてその歌には、

降り暮る空は小倉の峯の雪、散るや嵯峨野の嵐山、瀧の響も聲添へて、重なる雲の大井河、夜の床のうき枕、かたしく袖も白妙の、空も程なく廻る日の、西山本に着きにけり（車僧）

の如く句格職能ともに、道行と全く同一のものもあり、

袖波立つ汐越の、安宅の松の夕煙、消えぬ憂き身の罪を斬る、彌陀の劍の礪波山、雲路うながす三越路の、國の末な

る里問へば、いとど都は遠ざかる、逢川にも着きにけり（山姥）

の如く、五文字落ちの道行と見るべきものがあり、また

下歌 足弱車の忍路を、雲居のよそに廻らして、上歌 東雲の空も名殘の都路を、今日出でそめて又いつか、歸らんことも

かた糸の、寄る邊なき身の行方、さなきだに世の中は、浮木の龜の年を經て、盲龜の闇路たどり行く、迷ひの雲も

立ちのぼる、逢坂山に着きにけり（蟬丸）

の如く、七五の二句が前附になつて、その以下が全く道行と同一なものもある。

かくして、歌には道行と同格又はその變型と見るべきものが多いのである。否、たとへその職能が道行と同等でなくとも、句格が五七五・七五〈であれば、所謂一うたひとして、序拔の正格成分として考へられるのである。そこで、道行について、序拔の歌について、一通り觀察して見たいと思ふ。

さて、序拔の歌には、下歌と上歌との二種ある。この區別は音吟の方から名づけられたもので、我々の考察範圍外のもののやうであるが、句格の上からも明かに別種なものとして作られてゐるから、やはり一應區別を立てて見ると、

下歌、上歌ともにあるもの……〔忠度〕〔海士〕〔雲林院〕〔善知鳥〕〔蟬丸〕〔羽衣〕〔項羽〕〔鵺〕〔皇帝〕〔國栖〕

上歌だけのもの……〔安達原〕〔關寺小町〕〔羅生門〕〔車僧〕〔金札〕〔岩船〕〔葵上〕〔攝待〕〔實盛〕〔采女〕〔玉井〕〔夕顔〕〔通盛〕〔芭蕉〕〔一角仙人〕〔卒都婆小町〕〔山姥〕〔小鹽〕〔和布刈〕〔鵜飼〕〔大會〕〔雷電〕

下歌だけのもの……〔井筒〕〔野宮〕〔源氏供養〕

下歌の内容

即ち〔井筒〕〔野宮〕など一二の例外を除いて、歌は必ず上歌であつて、往々下歌が前附に置かれてゐるものといひ得るのである。

まづこれらの句格を見ると、下歌は、七五の二句――〔忠度〕〔船辨慶〕〔蟬丸〕〔國栖〕〔皇帝〕〔項羽〕と、七五の三句――〔海士〕〔融〕〔羽衣〕及び〔源氏供養〕（融・羽衣及び源氏供養の第一句は五七五）であつて、四句のものは〔雲林院〕及び上歌を伴はない〔井筒〕〔野宮〕だけである。且返し句も、第一句にあるものは一もなく、〔忠度〕〔船辨慶〕〔蟬丸〕〔國栖〕〔皇帝〕〔海士〕には末句の返しもない。

上歌の方は、道行と同様に、第一句及び末句に返しがあつて、その句數も下歌よりは遙かに多く、四句乃至八句から成り立つてゐる。たゞ道行とやゝ異なるのは、道行には第一句五文字落ちのものが極めて少いのに、これは寧ろ五文字落ちの七五のものの多いことである。

内容に入つて見ると、下歌は旅景又は旅情の一部分を描いて、直に上歌につゞいてゐる。

下歌「思ひ立つ心ぞしるべ雲を分け、船路を渡り山を越え、千里も同じ一足に。上歌「夕を重ね朝毎の、宿の名殘も重なりて、都に早く着きにけり（融）

下歌「月も宿かる昆陽の池、水底清く澄みなして。上歌「蘆の葉分の風の音、聞かじとするに憂き事の、捨つる身までも有馬山、隱れかねたる世の中の、憂きに心はあだ夢の、覺むる枕に鐘遠き、難波は跡に鳴尾潟、沖波遠き小舟かな（忠度）

の如きものと、下歌だけで一完章をなして居る、

下歌「習はぬ旅に奈良坂や、かへりみかさの山隱す、春の霞ぞ恨めしき。上歌「三笠山今ぞ榮えん……（海士）

上歌の内容

下歌 上り下るも雲衣の、定め定めなき習ひかなや、上歌 世の中の人は何とも石清水（蝉丸）

とがある。——下歌だけの「井筒」「野宮」「源氏供養」は當然この後者に屬する。

上歌の方に、下歌のみで一完章をなしてゐるもの、及び下歌のないものに例證、下歌からの文意の引續いてゐるものでも、上歌だけで一成文と見做し得るものばかりである。例へば、

下歌 野遊は鷄の小萱原、刈萱まじる烏江野に、上歌 草刈るをのこ心なく、花を刈るとや思ひ草、實つとなれば色々の、草花の數を刈り持ちて、歸れば跡は夕暮れて、枯野にすだく蟲の音も、花を惜しむな心あれ（項羽）

このやうな上歌は、前述の如く、形式内容ともに道行に近似したもので、「鵜飼」「融」「采女」「玉井」「安達原」「雲林院」「山姥」「船辨慶」「蝉丸」「車僧」など道行と何等の差異をも認め難いのであるが、たゞ道行は殆どすべてが旅行の經過を述べてゐるものばかりで、一般的叙景文は抒情文が稀であるのに反して、上歌にはむしろこの種のものが多い。

子に臥し寅に起き馴れて、雲居の月を峯の雪、その松島に歸らんと、車路さして急ぎけり（攝待）

夕の容もほのぼのと、月になり行く山陰の、寂寞とある柴の戸に、この御經を讀誦する（芭蕉）

風向ふ雲の浮波立つと見て、釣せで人や歸るらん、待て暫し春ならば、吹くものどけき朝風の、松は常磐の聲ぞかし、波は音なき朝なぎに、釣人多き小舟かな（羽衣）

獨りなほ佛の御名を尋ねみん、おのおの歸る法の場、知るも知らぬも心引く、誓ひの綱に漏るべきや、知る人も知らぬ人をも渡さばや、彼の國へ行く法の船、浮かむもやすき道とかや（實盛）

かく、道行と歌とには多少の相違があり、歌の方が形式にも内容にも變化が多いのであるが、その序段中に

於ける地位に就ては、道行のある時には歌がなく、歌のある時には道行がなく、全く同一の職能を勤めてゐるものと認められるのである。――「源氏供養」に次第・道行・歌（下歌）ともに倶存してゐるのは、他に類のない例外であらう。

序段の一ゝたびは道行と歌とで、いづれもワキの謠ふものであるが、なほやゝ特殊な例として、地歌の中にも、この中に數へるべきものがある。

　殊に又かの青山といふ琵琶を、亡者の爲に手向けつつ、同じく絲竹の、聲も佛事をなし添へて、日々夜々の法の門、貴賤の道も普しや（經政）

はその例で、「西王母」「東方朔」「現在七面」などもこれと同じく「身延」などはその下歌上歌ともに存してゐるものである。

かくの如く地謠のものまでをワキ歌と同列に觀るのは、甚だ亂雜な取扱ひ方のやうではあるが、少し歴史を溯つて考へて見ると、「身延」は現在は地上歌であるが、正德時代にはワキ歌であり、これに反して「羅生門」「雷電」は現在はワキ歌であるが、正德時代には地歌であつたので、時代によつて多少取扱に差異が生じただけのことである、――「一角仙人」のワキ歌も正德本には道行と記して居り、現に「紅葉狩」のワキ上歌の如き（その位置は、シテの破一段と逆になつてゐて、序段ではないが）、素謠ではワキが謠ふに拘らず、演能には便宜上、ワキヅレ又は地謠が謠ふこととなつてゐる――から、その位置から觀察して、必ずしも地・ワキ等の指定に拘泥することが出來ないのである。

一聲の名義

五、一聲

一聲とはもと如何なるものであつたか、玄惠法師の作と傳へられてゐる（恐らくその時代のものと首肯される）遊學往來に、

「一聲・早歌・白拍子・狂言・音曲・亂拍子・曲舞・讃歎、催酒宴之一興」

と見えてゐるから、もと早歌・白拍子などと相對した、一箇の獨立した歌謠であつたらしく思はれるのであるが、曾我物語卷八に、

今樣を謠ひ給へと言ひければ、二人の君、扇拍子を打ちながら、

蓬萊山には千年經る、千秋萬歳重なれり、松の枝には鶴巢くひ、巖の上には龜遊ぶ

といふ一せいを返し、三遍まで謠ひけれ。……

十郎殿は亂拍子の上手と聞けども未だ見ず、一番舞ひ給へ……早々と責めければ、大鼓打ち立てたりける。時宗、手組に及ばずして、持つたる扇をさつと開きて、

君が住む、龜尾が山の瀧つ瀬は

といふ一聲を擧げて暫し舞ひけるが……

とあり、又中古雜唱集にも、

糸綸。一聲。

糸ヲ綸ヲモヨルト云フ、日ノ暮ヲモヨルト云フ、クル／＼敷モナエカセン、クルヨソ待コソ久シケレ

と記してゐるのを見れば、一聲は今樣にも亂拍子にも又糸綸にも用ゐられたもの、畢竟一聲は、種々の小歌の特定の音吟法を意味したものと考へられるのである。

能樂の方でも、一聲は囃子の一名目として用ゐられてゐるのであるが、それが謡曲詞章中の特定の位置を占め、又約束せられた形式の詞章に限つて奏せられるものならば、やはり一應の考察を經なければならないのである。

現行觀世流で、一聲の奏せられる場合に於ける謡曲詞章を通觀すると、その形態には五七五・七五の二句(或はその變格)のものと、七五調(又はその變格)數句のものと、凡そ二種類ある。今便宜上前者を二句一聲と名づけ、後者を多句一聲と呼んで、これらの位置職能を見ると、

一、兩者ともに主としてシテ・ワキ(又は後ジテ・後ワキ)等の最初の謡に用ゐられる。

二、序段に於ては大抵二句一聲である。

三、破一段に於てはみな二句一聲である。多句一聲と重出することはあるが、多句一聲だけのものは見當らない。

四、破二三段に於て二句一聲の存することがあるが、極めて稀である。

五、急段に於ては二句一聲と多句一聲と兩様あり、又兩者重出してゐることもあるが、多句一聲の方が多い。

六、後ジテの二句一聲は、所謂劇能で、中入後で序破急を構成してゐるもの、即ち後の破一段といふべき所に位してゐるものが多い。

七、二句一聲の形式に比して、多句一聲の方は勿論變化が多い。隨つて詞章上の形式を限定し難い程度にある。——詞章を離れた囃子の名目に用ゐられてゐる爲であらう。

凡そ右のやうな差別がある上は、同じく一聲が奏せられるにしても、詞章の上からは兩者を判然と區別し得

一聲の位置

られようと思ふ。その上、能作書に、

　白髭破一段、老人云ふなどにて、五七〳〵五七〳〵の一謠より、七五〳〵の二句過ぎて。

とあるのを見れば、破一段の一聲は前述二句一聲、五七五・七五を特定の句格としてゐることが知られるのである。——第一卷以下の本文に於ては、この種のものに限つて「一聲」を冠した。諸本に於ても、この種のものには「一セイ」と記し、他のものには「一聲」と記して、兩者を區別してゐるやうである。——以下この二句一聲を正則の一聲と見做して、この考察を進めて行かうと思ふ。

一聲の位置は、前に述べた如く、多くは破一段の、主としてシテの出の謠として用ゐられ、シテの出が次第に始まつてゐる時には、一聲は見えない。——一聲があつて、その後に次第のあるものには、「大原御幸」「葵上」など二三ある——それから、序段に於ては、主として次第から始まつてゐるのであるが、次第のない時には、次第の代りの如くに、次第と同じ位置に一聲の置かれてゐる事がある。「大江山」「羽衣」「通盛」「國栖」などは卽ちその例である。殊にワキの出とシテの出とが前後してゐる、卽ち序段と破一段とが入れ替りになつてゐる〔紅葉狩〕などの場合には、序段にあるシテの出が次第、破一段にあるワキの出が一聲から始まつてゐる。なほこの外、ツレの働きの大きい、破一段の位置をツレが占めてゐる〔二人靜〕〔住吉詣〕〔三笑〕などでは、ツレ一聲で始まつてゐる。

かくして、次第と一聲との職能は、序段の道行と歌との關係の如くに、極めて近似してゐることが知られるのである。たゞ一聲と次第と異なる點は、次第に於ては、〔大原御幸〕〔白樂天〕〔葵上〕〔土車〕〔草子洗小町〕など數曲の外は、次第の前に詞又は歌のある例がないのであるが、一聲の方では、この正則のものの上

に、多句一聲（サシ謠）の重ねられてゐるものの少くないことである。「忠度」「鵺」「當麻」「右近」「蘆刈」「項羽」「水無月祓」などがそれである。

一聲の句格を見ると、最初から所謂多句一聲を除いてゐるのであるから、當然五七五・七五のものばかりであるべき筈であるが、この變格と見るべきものも少くない。例へば、

鵜舟に灯す篝火の、後の闇路をいかにせん（鵜飼）

柴積み舟の寄る波も、猶たづきなき憂き身かな（浮舟）

の如く、五文字落ちの、七五・七五、――第一句に返しがあれば、次第と變りのないもの――が少くない。「忠度」「春日龍神」「通盛」「白髭」「葵上」「須磨源氏」などがそれである。

形は五七五・七五ではあるが、第一句だけをシテが謠つて、第二句は地謠になつてゐるものがある。

シテ「秋毎に野分を船の追風にて。地「荻の穂かくる露の玉（項羽）

シテ「難波なる見つとはいはじかかる身に。地「われただに知らぬ爾忘れ（蘆刈）

「水無月祓」「俊寛」「鵺」「盛久」もこの類で、これらには大抵多句一聲がついてゐる。

この外、甚だ特異な例ではあるが、

身は一人われは誰をか逢坂や、四の宮河原四の辻、いつ又六つの巷ならん（關寺小町）

の如く五七五・七五・七五と三句から成り立つてゐるもの、

桃李もの言はず、下おのづから市をなし、貴賤交はり隙もなし（西王母）

の如く三五・七五・七五の形をなしてゐるものも、一種の變格として數へられよう。

一聲はすべてそれ自體で一完章をなしてゐるのであるが、稀には下の詞章と連絡してゐるものがある。

シテ「後の世を待たで鹿背山寺と、まなる身の果の悲しさより」（二聲を通にて入りにけり　（[illegible]）

或はこれなどは「鸚鵡小町」と同様な三句の一聲と見ることも出來よう。

次に一聲の修辭法について見ると、次第と同様、緣語・掛詞なども甚だ多いのであるが、殊に眼につくのは引歌の多いことで、

見渡せば柳櫻をこきまぜて、錦を飾る花車　（右近）

は、古今集素性法師の「見渡せば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」を殆どそのまゝ採つたものであり、

月もはや出汐になりて鹽竈の、うらさび渡る氣色かな　（融）

は、古今集紀貫之の「君まさで煙絶えにし鹽竈のうらさびしくも見え渡るかな」に據つたものであり、

信濃路や木曾の御坂の春風に、行くへも知らぬ花ぞ散る　（寢覺）

は、續古今集鴨長明の「吹きのぼる木曾の御坂の谷風に梢も知らぬ花を見るかな」から出てゐるのである。前に擧げた「西王母」の「桃李もの言はず下おのづから市をなし」云々の一聲は、たまたま朗詠の「桃李不言、下自成蹊」に據つたために、十分に七五調に熟させることが出來なかつたものであらう。

一聲の修辭法に於て、なほ一つの注意すべきことは、脇能の眞一聲などに於ては、シテ・ツレの同吟する五七五・七五の一聲について、ツレの謠ふ七五・七五の二句があつて、この二者が常に對偶をなしてゐることである。

一聲の内容

一聲 梅の花笠春もきて、縫ふてふ鳥の有かな。二句 松の葉色も時めきて、十廻り深き緑かな（老松）

一聲 君が代の長柄の橋も造るなり、難波の春も幾久し。二句 雪にも梅の冬籠り、今は春べの氣色かな（難波）

一聲・二句ともにシテだけが謠ふものもあるが、やはり、

一聲 三つの車に法の道、火宅の門をや出でぬらん。二句 夕顔の宿の破れ車、やる方なきこそ悲しけれ（葵上）

のやうに對偶をなしてゐるのである。

更に一聲の内容に入つて見ると、次第の大部分を占めてゐる「出でうよ」「急がん」などといふ旅行の出發を敍したものは、

御手洗や淸き心にすむ水の、賀茂の河原に出づるなり（賀茂）

浦風も涼しさ添へて追手とや、波路遙かに出づるなり（九世戸）

などを珍しい例として、他には殆どない。一般的な羇旅の感情を抒べたものも少い。

唐土船の楫枕、夢路ほどなき名殘かな（唐船）

明石潟月待つ方に行く舟の、波靜かなる浦傳ひ（住吉詣）

などが、僅かに見出される例である。

一聲に多いのは、羇旅を離れた敍景又は抒情の歌である。

わたつみのそことも知らぬ波間より、現れ出づる日影かな（大瓶猩々）

海士の呼び聲ひまなきに、しば鳴く千鳥音ぞ遠き（忠度）

折を得て春の薪にさす花の、匂ひを運ぶ山颪（龍虎）

これらは一般的な叙景であるが、特定の所について歌つたものが多い。

高砂の松の春風吹きくれて、尾上の鐘も響くなり　（高砂）

さざ波や志賀の都の名をとめて、昔ながらの山桜　（志賀）

見渡せば松の葉白き吉野山、幾代積りし雪ならん　（二人静）

竜田川錦織りかく神無月、色づく秋の梢かな　（逆鉾）

景を見て、わが心境の感慨を洩らすものも少くない。

波ならで乾す隙もなき海士衣、身の秋いつと限らまし　（阿漕）

海士の刈る藻に栖む蟲にあらねども、われから濡らす袂かな　（海士）

しをりして花をかざしの袖ながら、老木の柴と人や見ん　（小塩）

景色をも忘れて、ひたすらわが身境を感慨するものには、

釣の営みいつまでか、隙も波間に明け暮れん　（白髭）

持ちかぬる汐汲む桶の苦しきに、又力づく老の杖　（絃上）

老の波越えて藤戸の明暮に、昔の春のかへれかし　（藤戸）

感慨は大抵果敢ない老の身の心細さであるが、既にこの煩悶から解脱して、後世の浄土を頼むものや、或は又喜んで現世の国土を楽しむものもある。

法による道ぞと渡る船橋は、後の世かくる頼みかな　（船橋）

三つの車に法の道、火宅の門をや出てぬらん　（葵上）

は前者の例であり、

治まれる御代の光に數ならぬ、身までも安き住居かな　（東方朔）
天地の開けし御代は久方の、神と君との御影かな　（和布刈）

は後者の例である。

これを要するに、一聲は次第に似て、その形式も内容もそれより一歩擴がつたもので、その關係が丁度道行と歌とのそれに似てゐるのである。

六、破一段の構成

世阿彌は謠曲全體を凡そ序破急の五段に分けて、能作書に、

自是破、さて爲手の出て、一聲より一歌まで一段。

といひ、又同書の老體の條に、

さて爲手の出て、自是破一段、老人ふうふなどにて五七五七五の一聲より、七五／＼の二句遣て、さしこゑより、七五／＼と行事十句斗也、下てうたふより、甲の物までの一歌い、十句斗也。

といつてゐるのである。卽ちシテが出て、自分獨りで(又はツレと共に)、ワキとの交渉なしに謠つてゐる間を破一段と名づけてゐるのである。この定義に從つて、謠曲の實際に當つて見ると、その成分は主として一聲・サシ謠・歌の三から成り、ワキの序段と對偶をなしてゐるのである。

序　段(ワキ)………次第(稀には一聲)　名乘詞　道行(屢々歌)
破一段(シテ)………一聲(屢々次第)　サシ謠　歌

サシ

この後一段の成分の中、一聲及び次第については、既に大體の考究を終へた。

その次のサシ謠は、むしろ音樂上の術語と見るべきものであるが、これをヤキ名稱と對比すれば、ヤキ名稱に大抵散文の詞章がそれであるが——尤も「實盛」「安達原」「蟬丸」などはすべて律語、「山姥」「芭蕉」「和布刈」などは散文と律語との兩者から成つてゐるが、その律語はサシ謠とせられてゐる——このサシ謠は前掲の能作書に「さしごゑより、七五〳〵と行事十句斗也」とあるやうに、大抵律語である。

しかし、このサシ謠は律語であるといつても、次第や道行のやうな嚴密なものではなく、字餘、字不足は常例の事として、

誰をかも知る人にせん高砂の、松も昔の友ならで、過ぎ來し世々は白雪の、積り積りて老の鶴の、塒に殘る有明の、春の霜夜の起居にも、松風をのみ聞き馴れて、心を友と菅筵の、思ひを述ぶるばかりなり（高砂）

の如き五七五・七五調や、

それ陰陽の神代より、今人界に至るまで、山河草木國土は豐、神の惠みに作り田の、雨つちくれを潤して、千里萬里の外までも、靑柴しめる時とかや（淡路）

の如き冠首五文字のない七五調は寧ろ少くて、

それ花の名所多しといへども、大悲の光色添ふ故か、この寺の地主の櫻に若くはなし、さればにや大慈大悲の春の花、十惡の里に芳しく、三十三身の秋の月、五濁の水に影淸し（田村）

の如く、七五調の間に屢〻五文字を挿入して（又は七七字句などにして）、七五調の平坦を破つたものが少くなく、

互水漫々として、碧浪天を浸し、越を辭せし范蠡が、扁舟に棹を移すたる、五湖の煙の波の上、かくやと思ひ知られたり、あら面白の海上やな（白樂天）

の如く、七五調を離れた、むしろ朗詠調ともいふべきものや、

それ國を治め人を敎へ、善を賞し惡を去る事、直なる御代のためしたり、かるが故に、知れるはいよいよ萬德を得、無知は又惠みに叶ひ、自ら積善の餘慶殊に滿ち、善惡の影響の如し、かかる御影の道廣き、誓ひの海のうろくづの、生きとし生ける物として、豐かなる世に住まふ事、偏に當社の御利生たり（放生川）

の如く、散文と見るべきものさへ散見するのである。

第三の歌に就ては、大體序段の歌と同列に論じ得るのであるが、兩者を比較すれば、破一段の方が多種多様で、——〔紅葉狩〕の如き序段と破一段と入れ替りにたつてゐるやうた曲では、序段のシテ歌なる曲名の下に序と括弧して加へ、比較に便した。——

下歌五七五の一句、上歌五七五。七五の數句（その第一句及び末句繰返しのもの）——

〔田　村〕　〔難　波〕　〔白樂天〕　〔春日龍神〕　〔敦　盛〕　〔弱法師〕　〔小袖曾我〕序

下歌五七五の一句、上歌七五の數句（その第一句及び末句繰返しのもの）——

〔采　女〕　〔大原御幸〕　〔玉　井〕　〔浮　舟〕　〔江　島〕　〔第六天〕　〔望　月〕

〔繪　馬〕

下歌五七五・七五の二句（第二句繰返し）、上歌七五の數句（第一句及び末句繰返しのもの）——

〔養　老〕

下歌五七五・七五の三句(末句繰返し)、上歌七五の數句(第一句及び末句繰返し)のもの――

〔天　鼓〕　〔高　砂〕(上歌の第一句字不足)

下歌七五の一句(繰返し)、上歌五七五・七五の數句(第一句及び末句繰返し)のもの――

〔代　主〕　〔西王母〕　〔道明寺〕　〔大　社〕

下歌七五の二句、上歌五七五・七五の數句(第一句及び末句繰返し)のもの――

〔玉　葛〕　〔　融　〕　〔朝　長〕　〔賀　茂〕　〔呉　服〕　〔舟　橋〕　〔氷　室〕

〔芭　蕉〕　〔右　近〕　〔白　髭〕　〔野　宮〕　〔弓八幡〕　〔九世戸〕　〔東方朔〕

〔放生川〕　〔松　蟲〕　〔現在七面〕　〔老　松〕　〔紅葉狩〕(序)(末句の繰返しがない)

同斷にて下歌第二句に返しのあるもの――

〔三井寺〕(序)

下歌七五の三句、上歌五七五・七五の數句(第一句及び末句繰返し)のもの――

〔井　筒〕　〔逆　矛〕　〔淡　路〕

下歌七五の二句、上歌七五の數句(第一句及び末句繰返し)のもの――

〔鵜　飼〕　〔卒都婆小町〕　〔志　賀〕　〔八　島〕　〔富士太鼓〕　〔檜　垣〕　〔唐　船〕

〔葵　上〕　〔　箙　〕　〔嵐　山〕　〔鐵　輪〕　〔石　橋〕　〔身　延〕　〔須磨源氏〕

〔昭　君〕　〔大佛供養〕(序)

凡そ右のやうな類で、序段の歌は上歌が主となつてゐるのに對して、これはいづれも下歌上歌兩者を具備してゐるのであるが、中には上歌だけのものも二三ある。

五七五・七五調のもの――〔二人靜〕〔鸚鵡小町〕〔小鹽〕〔寢覺〕

七五調のもの――〔道成寺〕〔夜討曾我〕(序)

はその例で、下歌だけの〔海士〕(七五調)の如き例外もある。

これに反して、また下歌上歌の外に、なほ下歌又は上歌を加へる、〔安宅〕(上歌下歌上歌)、〔木賊〕(下歌上歌下歌)の如きものもある。

字餘、字不足も序段の歌より更に多く、七五であるべきものを、三五、四五などとすることも少くなく、〔安宅〕の如きは七五調の中に幾度か五文字を加へて格調を新にしてゐるのである。

歌の内容

破一段の歌の内容は、やはり序段の歌に似てゐて、破段には道行と指定せられたものは、〔春榮〕(これも序段はワキ名乘だけで、次第、道行のない特殊なものである)だけで、他には全く見當らないが、その内容には道行の意を表した、

月は程なく入汐の、煙滿ち來る小松原、急ぐ心かまだ暮れぬ、日高の寺に着きにけり　(道成寺)

の如きものに、〔夜討曾我〕〔富士太鼓〕〔檜垣〕〔唐船〕〔鐵輪〕〔藍染川〕〔大佛供養〕〔望月〕などがあり、例に擧げた〔道成寺〕の如きは、古謡本には道行としてゐるのである。なほ甚しきに至つては、

上歌 時しも頃は二月の、二月の十日の夜、月の都を立ち出でて、これやこの、行くも歸るも別れては、知るも知らぬも逢坂の、山越す、霞ぞ春は恨めしき。下歌 波路遙かに行く舟の、海津の浦に着きにけり、東雲早く明け行けば、淺茅色づく有乳山。上歌 氣比の海、宮居久しき神垣や、松の木目山、なほ行く先に見えたるは、杣山人の板取、河瀨の水の淺生津や、末は三國の湊なる、蘆の篠原波寄せて、靡く嵐の烈しきは、花の安宅に着きにけり　(安宅)

の如き、二の道行を合はせたものもあるのである。

しかし、破一段の歌（シテ歌）としては、道行調のものよりも、「所盡し」を離れた叙景文や抒情文のものが多く、その種類も、序段の歌と同様、多様に亘つてゐるのであるが、兩者を比較すれば、序段の歌（ワキ歌）は叙景といひ抒情といつても、一般旅人としての普汎的な觀察や感想に過ぎないものが多いのに對して、破一段の歌には曲中人物に特有な、具體的必然的の觀察や感想が多いのである。例へば、景趣を叙べるにしても

下歌 濱里なれば程近き、こゝや住の江の浦傳ひ。上歌 潮風も吹くや岸野の秋の草、松も響きて沖つ波、聞えて聲々友呼ばふ、この市人の數々に、われも行き人も行く、阿倍野の原は面白や（松蟲）

の如く自己を景中に浮かび出させたり、進んでは、

下歌 我は人目つつましや、もしもそれとか夕まぐれ。上歌 月もろともに出でて行く、雲居百敷や、大内山の山守も、かかる憂き身はよも咎めじ、木隱れてよしなや、鳥羽の戀塚秋の山、月の桂の川瀬舟、漕ぎ行く人は誰やらん（卒都婆小町）

の如く、景趣よりも寧ろその所に於ける自己の不安を抒べたり、なほ進んでは、

下歌 畫圖にうつせる面影も、今こそ思ひ知られたれ。上歌 かの昭君の黛は、緑の色に匂ひしも、春や繰るらん糸柳の、思ひ亂るる折ごとに、風もろともに立ち寄りて、木蔭の塵を拂はん（昭君）

の如く、殆どその曲柄を推察せしむるに足るものさへあるのである。この傾向は、序段と破一段と入れ替つて、シテ歌が序段に位してゐるものには、それが多くは劇能であるだけ、この傾向が一層著しくて、

下歌 憐み給へ思ひ子の、行末何となりぬらん。上歌 枯れたる木にだにも、花咲くべくはおのづから、未だ若木のみど

破二段の職能

り手に、二度などか逢はざらん（三井寺）

下歌 人知れぬ大内山の山守も、上歌 木隠れてそれとは見えじ梓弓、矢頭にたらば鹿よりも、蕭繇を射留めて、名を富士の嶺にあげばやと、思ひ立ちぬる狩衣、たとへば君の御咎め、よしそれとても數ならぬ、身にはたかたか恐れなし（小袖曾我）

などと、明かに自己の所期を述べてゐるものがある。

破一段は、以上の如く、一聲・サシ・歌を主なる成分として、時に一聲に代ふるに次第を以てし、或はその一又は二を省略したもの、反對に更に詞を添へたものもあるが、特に著しいのは、この破一段の全然缺けてゐるものが、約半數もあることで、この場合には大抵序段の道行の次に更にワキ詞があつて、その次はシテの呼掛となり、直に破二段の形式をとつてゐるのである。なほツレの發達した曲では、ツレの同吟がシテとの對吟應答となつて、破二段の形をとつてゐるものもある。

七、破二段の構成

謡曲破二段は、世阿彌が能作書に示した定義に從へば、「開口人と問答ありて、同音一うたひ一段」、委しくいへば、

開口人と脇手との問答、こと葉四五つゝに過ぐべからず、此問答に、又老人夫婦など、事のいはれをもんだうして、若開事あり、其も又、二三つゝに過ぐべからず、さて甲の物にて、みな同音にうたいたる事より、うたひとむるまで、一句斗を、二きれにうたうべし。

遇然の會合

とある。即ち、序段はワキの獨白、破一段はシテの獨白、破二段に至つて始めてシテとワキとの對白となり、戯曲の形をなすのであつて、その最後が初同のコーラスとなつて、歌劇たるの様式を具へるのである。かくして、破二段はそれだけで一小歌劇として眺めることが出來るのである。

然らば、破二段を一つの小歌劇として觀察すれば、どういふ過程を取つてゐるか、まづシテとワキとの會合する動機から見れば、(甲)偶然ゆくりもなく出遭ふものと、(乙)初めからある目的を以て面會を求めるものと、二種に大別せられる。

不意に遭遇した二人が、その後惹き起す事件の經過及び結果について、甲を細分すれば、

(一)　ワキがシテと出遭つた場所で、そのあたりの景色について語り合ふ、地謠もこれに同じて詠歎するといふに過ぎないものがある。〔誓願寺〕〔右近〕〔吉野天人〕などがそれである。

(二)　前者より一歩進んで、ワキは旅行者であるが、シテはその土地の者であるから、附近の事情に通じてゐるであらうといふので、ワキがシテに色々の質問を發する。シテがその問に應じて答へ、地謠も亦シテの答を補足し、或はこれに從つて詠歎するものが多い。そして、その質疑の範圍を見ると、

(イ)　たゞ漫然と附近の景色を話材にするもの――〔賴政〕

(ロ)　ある特定の場所について語るもの――〔阿漕〕〔杜若〕〔野守〕

(ハ)　特に社寺の緣起に就て質問するもの――〔賀茂〕〔當麻〕〔代主〕〔放生川〕

があり、その應答振りには、

(い)　ワキの質問に應じて次第に答へて行くもの――前掲の諸曲

（ろ）シテが獨白で長々と説明するもの〔語〕――〔田村〕〔采女〕〔籠〕

がある。

（三）は（二）と内容は大體同じであるが、ワキの質問を發する動機が、シテの態度所行に不審を起すことにあるもので、これに對するシテの應答振りには、

（い）あつさりと自分の現狀を答へるもの――〔小鹽〕〔敦盛〕〔巴〕

（ろ）不審に思はれる行爲は、實は土地の昔語に關係があるといつて、舊蹟を説明するもの――〔井筒〕〔融〕〔志賀〕

（は）その昔語の主人公は實は自分自身でありさうに、仄かに身上を懺悔するもの――〔鵺〕〔芭蕉〕〔佛原〕

（に）更に進んで、はつきりと身分を明かし、身上を懺悔するもの……これには破三段のないものが多い――〔實盛〕〔檜垣〕〔夕顔〕

（ほ）身上話といふよりも、寧ろ自己の志を述べるもの――〔岩船〕

（へ）互に身分をうち明けた結果、兩者の間に密接な關係のあつたことを覺知するもの――〔朝長〕

（四）には、前者はシテの所行に不審を抱いて、ワキが質問するのであるが、ワキの無知無理解を悲しんで、シテが自ら進んで説明するものがある。――多くは呼掛の形式をとつてゐる。――〔定家〕〔龍田〕〔船橋〕〔東北〕〔殺生石〕〔六浦〕〔胡蝶〕などがそれで、これを細分すれば、前項と同樣に別たれるのである。

（五）には、上述のものは、いづれもシテ・ワキ會合の場所で對話するのであるが、シテと出遭つた場所からワキが行かうとする目的地の途中にあるので、シテが舟人などであるのを幸ひに、目的地への同伴を請ふ。シテは一度は拒絶するが、その熱心に動かされて承諾する。よつて地謡でその後の經過を述べるといふ、第一

有意の會合

項に擧げたものを「軟」の謡曲化したものとすれば、これは「遊行」の謡曲化と見られるものである。〔東北〕〔竹生島〕〔鵜羽〕〔經正〕などがそれで、〔寢覺〕は同行を求めたが、その主人公は住所不定であると告げられて、〔一〕の形に戻るものである。

〔六〕には、シテの住所に一宿を求めるもの〔三〕があり、この場合にも大抵一度は拒絶して後に承諾するもので、地謡はかくして落着いた住居の樣子を敍べてゐる〔梅枝〕〔安達原〕〔八島〕〔鉢木〕〔一角仙人〕〔雨月〕などがそれで、〔葛城〕ではシテの方から一宿を勸誘してゐる。――〔生若〕も後三段でこの形をとつてゐる。

乙の、ある目的を以て兩者會合する形のものも、その目的や經過によつて幾つかに分類すると、

〔一〕ワキとシテとの會合が、目的あつてのことには違ひないが、たゞ久々の物語をするだけで、地謡もその時のシテの感懷乃至會合場所の景趣を述べるに留まるもの〔楊貴妃〕〔雷電〕があり、

〔二〕ワキがある疑問を以てシテを訪ね、シテからその說明を聞く。地謡はシテの說明を補足又は感歎するといふ、前類の第二項と相似たもの〔養老〕〔東岸居士〕〔關寺小町〕があり、

〔三〕ワキがある報告を持つてシテを訪ねると、シテ及び地謡はこれを聞いて深い感慨に打たれるもの〔柏崎〕〔清經〕があり、

〔四〕ワキが用件を以てシテを訪ねると、シテがこれを承諾する、地謡はその感想を述べるといふもの〔天鼓〕があり、――〔正尊〕のシテは不承諾にも拘らず、ワキに强制せられてゐる。――

〔五〕ワキがシテを訪ねて、わが志を述べると、シテがこれを諫止する、地謡も亦これに同感してゐるもの〔春日龍神〕がある。

（六）には、シテが高德又は高位のワキに出會つたのを幸ひに、わが願ひを述べてゐるものがある。その願ひとは亡靈の菩提を弔ふことで、その亡靈には、

（い）自分自身であるもの――〔源氏供養〕〔身延〕

（ろ）自分以外のもの――〔藤戸〕

がある。

（七）前述の（一）乃至（五）がワキから訪ねられるのに對し、シテの方から訪ねるもので、

（い）ワキに疑問を述べてその說明を聞くもの――〔富士太鼓〕

（ろ）ワキからシテの要求を拒絕せられてゐるもの――〔大瓶猩々〕〔[illegible]〕…〔羽衣〕は自然の要求をワキから拒絕せられて、地謠が同情してゐる。

（は）シテが自ら進んでワキの希望を達せしめようと申し出てゐるもの――〔西王母〕〔東方朔〕〔皇帝〕〔[illegible]〕〔大會〕

以上は破二段が簡單ながら小戲曲の形をなしてゐるといふ一斑を述べたに留まるもので、嚴密な約束のもとに、前段及び後段に連續して、一曲の有機的な一部分を成してゐるのは當然のことである。

たゞ序段及び破一段に餘り甚しい破格の少いのに反し、これには戲曲的條件に支配せられる爲に、自然破格が多く、シテ・ワキの對白も世阿彌の標準とした「問答の言葉四五つ」「云開く事二三句」に過ぎたものの方が多く、「甲のもの」（上歌）も、「二きれに謠ふ」ことは、地謠の中半で、「げにや仰ぎても……」（高砂）、「げにや安樂世界より……」（田村）、「げにや名にし負ふ……」（賴政）の如く、「げにや……」などと轉換してゐるものは少くないが、七五の正調は甚しく亂れたものが多い。

なほ、破二段はシテとワキとの問答が定式であるが、次第や一聲などにツレだけで謠ふものもあるやうに、シテとツレとで破二段の形を成してゐるもの〔二人靜〕〔大佛供養〕、ワキとツレ又はツレばかりで破二段の形を作つてゐるもの〔輪藏〕〔三笑〕などのあることに留意して置きたいと思ふ。

八、クセ

破三段（又は破四段）は破二段の更に展開したものであるが、この段又は急段の重要な成分をなすものに、クセとロンギとがある。

クセの名義

クセは總說第二章（一九頁）に述べたやうに、曲舞節で謠ふ部分で、謠曲全體から見ても、主要な成分であるから、諸家のこの題目について研究せられたものが少くなく、それらを集成したものに、西村春明氏の「曲舞辨疑」（謠曲界十三ノ四）がある。たゞ諸家の論文中、やゝ有力なものとなつてゐた曲舞と幸若との同一論には首肯することが出來ない。幸若を雜舞といふと同樣な意味で曲舞といつてゐたのは事實であるが、幸若は世阿彌の所謂「次第にて舞ひそめて、次第にて止むる」曲舞ではなく、從つて謠曲のクセとは格段の交渉を持つてゐない（藝文十三ノ一・二・三、拙稿「幸若舞曲の詞章に就て」參照）

クセの數

さて內外別二百番について、クセの有無を檢べると、クセのないのは、

〔鵜飼〕　〔卒都婆小町〕　〔融〕　〔養老〕　〔通小町〕　〔梅枝〕　〔忠度〕
〔景清〕　〔賀茂〕　〔海士〕　〔鞍馬天狗〕　〔咸陽宮〕　〔隅田川〕　〔富士太鼓〕
〔右近〕　〔大會〕　〔猩々〕　〔邯鄲〕　〔道成寺〕　〔葵上〕　〔西王母〕

クセの成分

〔嵐山〕〔正尊〕〔項羽〕〔橋辨慶〕〔野守〕〔張良〕〔鐵輪〕
〔住吉詣〕〔禪師曾我〕〔車僧〕〔吉野天人〕〔大佛供養〕〔忠信〕〔烏帽子折〕
〔大瓶猩々〕〔鶴龜〕〔土蜘蛛〕〔合浦〕〔草子洗小町〕〔金札〕〔大江山〕
〔岩船〕〔戀重荷〕〔砧〕〔鷺〕〔七騎落〕〔絃上〕〔龍太鼓〕
〔錦戸〕〔枕慈童〕〔飛雲〕〔須磨源氏〕〔一角仙人〕〔鳥追舟〕〔水無月祓〕
〔雨月〕

の五十七番で、ほゞ次第と同等の數を占めてゐる。しかし、次第やロンギには、一曲の中に二箇所あるものが少くないが、クセの二度出てくるものは〔田村〕だけで、外にはない。

　クセの組織は他のどの成分よりも複雜且多樣であつて、しかも申樂談儀に「曲舞は次第にて舞ひそめて、次第にて止むる也、二段あるべし」とある定義に合致した現行曲は一つもない。二段になつてゐない、たゞ「次第にて舞ひそめて次第にて止め」たものも、〔百萬〕〔山姥〕〔杜若〕〔歌占〕〔東岸居士〕の五番に過ぎない。第一、地次第のあるものが、上掲五番の外、〔天鼓〕〔羽衣〕〔檜垣〕〔安達原〕〔楊貴妃〕〔三井寺〕〔盛久〕〔櫻川〕〔草子洗小町〕〔砧〕〔海士〕の、合はせて十六番だけで、〔草子洗小町〕以下三番にはクセもない。

　それで、世阿彌の定義を離れて、現行曲から歸納して、クセの原則を求めると、クリ・サシ。クセ・クセ上の四要素を具へてゐるものを正格と見做すべきやうである。なほこれを細分すれば、

　地クリ(a)、　シテサシ・地(b)、　シテ・地(c)、　地クセ(d)、　シテ・地(e)

この五單位の有無多少を標準として分類すれば、クセの組織がほゞ辨別せられ得ようかと思はれる。乃ち、

第一正格（四要素の具備）

（地クリ、シテサシ・地、シテ・地、地クセ、シテ・地の五單位を具備するもの）

（イ）地次第と五單位とを具へたもの——〔大會〕〔羽衣〕〔檜垣〕（クセ上の「シテ・地」eが二回）〔三井寺〕（クセの前に「シテ・地」あり）

（ロ）五單位各一を具へたもの——〔難波〕〔玉葛〕〔采女〕〔[illegible]〕〔忠度〕〔[illegible]〕〔[illegible]〕〔遊行柳〕〔玉井〕〔西行櫻〕〔呉服〕〔當麻〕〔定家〕〔氷室〕〔芭蕉〕〔關寺小町〕〔東北〕〔百萬〕〔錦木〕〔[illegible]〕〔[illegible]〕〔敦盛〕〔木賊〕〔代主〕〔九世戸〕〔[illegible]〕〔大社〕〔春榮〕〔舍利〕〔淡路〕〔身延〕〔放生川〕〔[illegible]〕〔[illegible]〕〔[illegible]〕〔土車〕

（ハ）右同斷、但シテ謠をツレ又はワキ謠とするもの——（ツレ）〔夜討曾我〕〔小督〕〔千方〕　〔安宅〕（ワキ）〔現在七面〕〔紅葉狩〕（クセ前のみワキ謠）

（ニ）クセ前の「シテ・地」（c）の二回以上あるもの——〔高砂〕〔井筒〕〔東岸居士〕〔蟬丸〕〔佛原〕〔善知鳥〕〔殺生石〕〔野宮〕〔江島〕〔知章〕〔八島〕（三回）

（ホ）右同斷、但シテ謠をツレ謠とするもの——〔松山鏡〕

（ヘ）クセ前の「シテ・地」（c）、クセ上の「シテ・地」（d）とも二回以上あるもの——〔兼平〕〔小鍛冶〕

（ト）サシ（b）の前に「シテ・地」の加はるもの——〔龍田〕〔柏崎〕（クセ上e二回）〔江口〕（サシの前後共二回）

第二正格（四要素の具備）

（四要素を具備してゐるが、第一正格に比し、クセ前の「シテ・地」cを缺くもの）

（イ）シテ謠のもの——〔浮舟〕〔鸚鵡小町〕〔善界〕〔三輪〕〔小鹽〕〔弓八幡〕〔雷電〕〔逆矛〕〔卷絹〕〔和布刈〕〔東方朔〕〔第六天〕〔石橋〕〔弱法師〕

（ロ）ツレ謠とするもの――〔碇潜〕

第三正格（四要素具備）

（五單位を具へてゐるが、クリをシテの謠ふもの、從つて、シテクリ・地、シテサシ・地、シテ・地、地クセ、シテ・地となるもの）

（イ）地次第と五單位とを具へたもの――〔山姥〕（クセ前c二回）〔歌占〕（クセ前cクセ上e各二回）〔楊貴妃〕（クリaの前に「シテ・地」あり）〔百萬〕（楊貴妃同斷及びクセ上e二回）〔杜若〕（百萬同斷）〔安達原〕（クリ前「シテ・地」二回、クセ上eなし）〔盛久〕（地次第とクリと距たる）〔東岸居士〕（クリ前に舞などあり）〔櫻川〕（東岸居士同斷）

（ロ）五單位を具へたもの――〔朝長〕〔大原御幸〕〔熊野〕〔夕顏〕〔大蛇〕

（ハ）クセ上（e）の二回以上あるもの――〔千手〕〔源氏供養〕

（ニ）同斷、ツレ謠とするもの――〔小袖曾我〕

第四正格（四要素具備）

（第三正格に比してクセ前「シテ・地」cを缺くもの）

（イ）シテ謠のもの――〔雲林院〕〔自然居士〕〔昭君〕

（ロ）ツレ謠とするもの――〔望月〕

第一變格（クリを缺くもの）

（シテサシ・地、シテ・地、地クセ、シテ・地を通則とするもの）

（イ）クリ（a）以外の四單位を具へたもの――〔田村〕後段〔老松〕〔春日龍神〕〔花月〕〔雲雀山〕〔生田敦盛〕〔俊寛〕〔忠度〕〔放下僧〕〔吉野靜〕〔花筐〕（クセ上e二回）

（ロ）右同斷、サシ謠をツレ又は地等とするもの——〔ツレ〕…〔[illegible]〕。〔ワキ〕…〔谷行〕。〔地〕…〔[illegible]〕〔[illegible]〕

（ハ）クセ前の「シテ・地」（c）を缺くもの——〔船辨慶〕

第二變格（クリ・サシを缺くもの）

（イ）シテ謠とするもの——〔清經〕〔船橋〕

（ロ）シテ・ツレ同吟とするもの——〔二人靜〕〔鉢木〕〔室君〕（ツレのみ）

（ハ）クセ前の「シテ・地」もクセと分離してゐるもの、即ち（c）を缺くと認められるもの——〔田村〕前段〔竹生島〕〔白樂天〕〔蟻通〕〔藤戸〕〔俊寛〕〔松風〕〔葛城〕〔皇帝〕〔女郎花〕〔唐船〕〔經政〕〔巴〕〔鍾馗〕〔半蔀〕〔三笑〕〔攝待〕〔雷電〕

（ニ）クセの第一句をシテ謠とするもの——〔熊坂〕

（ホ）ワキ謠又はワキヅレ謠とするもの——〔ワキ〕……〔藍染川〕。〔ワキヅレ〕……〔羅生門〕

第三變格（クリ・サシ・クセ上とも缺く、即ちクセのみのもの）

——〔阿漕〕〔國栖〕

なほこの外に、〔實盛〕は

シテクリ・地、シテサシ地、シテ語・地、地上歌、地クセ、シテ・地

といふ特殊な、第二正格の（ロ）の變格、（c）の分量の夥しい形をとつてゐる。

かくの如く多樣な形式を持つてゐるクセは、またその內容に於ても、一曲の主要な敍事文として、それぞれの曲にふさはしい、從つて千差萬別のもので、殊にクリ・サシとクセ・クセ上と內容を異にしてゐるものが少くないので、これを分類することは、謠曲全體の分類よりもむしろ困難な事業であるが、大體によつて分

クセ內容の類別

別すれば、

一、神　佛

（イ）神德——伊勢大神宮……〔第六天〕（日神月神）。八幡宮……〔弓八幡〕（石清水）、〔放生川〕（南都神道）。瀧祭神……〔逆矛〕。賀茂葛城神……〔代主〕（南都神道）。春日明神……〔春日龍神〕（南都神道）。

（ロ）神事——早鞆神事……〔和布刈〕。神有月……〔大社〕。氷室神事……〔氷室〕。

（ハ）神話——開闢神話……〔淡路〕。神婚説話……〔玉井〕（潮滿珠潮涸珠）。〔三輪〕（神人交道）。

（ニ）佛德——阿彌陀如來……〔土車〕、〔柏崎〕（善光寺）。〔誓願寺〕（聖衆來迎）。觀世音菩薩……〔盛久〕（清水寺）。月・勢至菩薩……〔姨捨〕。

（ホ）佛說——佛法東漸……〔春榮〕（明神靈驗）、〔舍利〕（佛舍利）。法華利益……〔身延〕。女人成佛……〔現在七面〕。禪話……〔放下僧〕。無常觀……〔安達原〕（五大）、〔鍾馗〕。六道廻り……〔大原御幸〕。地獄道……〔東岸居士〕、〔歌占〕。方便殺生……〔熊坂〕。殺生業因……〔善知鳥〕。魔道……〔善界〕（天狗）

（ヘ）緣起——白髭緣起……〔白髭〕。竹生島緣起……〔竹生島〕。江島緣起……〔江島〕。天橋緣起……〔九世戸〕。清水寺緣起……〔花月〕。天王寺緣起……〔弱法師〕。菅公緣起……〔道明寺〕。[illegible]緣起……〔[illegible]〕。輪藏由來……〔輪藏〕。三歸翁由來……〔寢覺〕。

二、文　藝

（イ）和歌——和歌の德……〔志賀〕、〔蘆刈〕、〔卷絹〕。歌體……〔蟻通〕（和歌の德も）、〔鸚鵡小町〕（特に小町に就て）、歌話……〔白樂天〕（歌の普及性）、〔俊成忠度〕（歌の變遷）。

（ロ）物語——伊勢物語……〔雲林院〕（祕事）、〔小鹽〕、〔杜若〕（業平東下り）。源氏物語……〔源氏供養〕（大白、

（ハ）附、管絃——琵琶……〔絃上〕

三、武事

（イ）古武士——〔田村〕後（鈴鹿道行）。

（ロ）源氏——〔朝長〕（情直懇討）、〔頼政〕、〔兼平〕（義仲の事）、〔巴〕、〔八島〕（弓流し）、〔[illegible]〕、

（ハ）平家——〔清經〕、〔敦盛〕、〔生田敦盛〕、〔知章〕、〔經政〕、〔通盛〕（小宰相と別離）、〔實盛〕（最後の錦）、

（ニ）劍の威德——〔小鍛冶〕（特に日本武尊に就て）。

（ホ）附、妖怪變化——〔鵺〕（退治）、〔殺生石〕（由來）。

四、人事

（イ）人倫——聖德…〔難波〕。主從…〔攝待〕。父子愛…〔天鼓〕、〔唐船〕、〔木賊〕。母子愛…〔[illegible]〕、〔櫻川〕（景趣に寄せて）、〔百萬〕（前半道行）、〔小袖曾我〕（對面）、〔夜討曾我〕（形見送り）。姉弟の情…〔蟬丸〕（後半邂逅）、師弟の情……〔谷行〕。友愛……〔松蟲〕。

（ロ）戀慕——思慕…〔江口〕（佛說愛着論）、〔楊貴妃〕（玄宗前半佛說）、〔松風〕（行平）、〔夕顔〕（源氏）、〔半蔀〕（同上）、〔野宮〕（同上）、〔浮舟〕（兵部卿宮）、〔定家〕（式子内親王の）、〔皇帝〕、〔錦木〕、〔女郎花〕（入水）、〔[illegible]〕（[illegible]）。故事引例…〔班女〕（班婕女扇）、〔花筐〕（李夫人）、〔小督〕（唐帝）、〔阿漕〕。追慕…〔[illegible]川〕。

（ハ）述懷——一般經歷……〔三笑〕、〔昭君〕（わが子の）、〔佛原〕（昔物語として）。生立…〔[illegible]〕（昔今）、〔井筒〕。落魄……〔雲雀山〕、〔吉野落〕、〔關寺小町〕（老衰）、〔檜垣〕（老衰、昔物語として）。

（ニ）故事——五節舞起原……〔國栖〕。舟起原……〔自然居士〕。破鏡故事……〔松山鏡〕。呉織故事……〔呉服〕。勾踐物語……〔船辨慶〕（別離）。箱王物語……〔望月〕。采女物語……〔采女〕。山姥物語……〔山姥〕。

クセの文章

（ホ）雜話――焚火……〔葛城〕（標）、〔鉢木〕（鉢木）。酒宴……〔紅葉狩〕（紅葉）、〔羅生門〕（雨夜物語）。

五、自　然

（イ）草木――松の德……〔高砂〕（和漢故事）。松・梅の德……〔老松〕（和漢故事）。仙桃……〔東方朔〕。柳の德……〔遊行柳〕（楊柳觀音・蹴鞠）。紅葉……〔六浦〕（景趣）。芭蕉……〔芭蕉〕（無常觀）

（ロ）景趣――淸水寺……〔田村〕前（春景）、〔熊野〕（春景）。西山……〔西行櫻〕（春景）。三保松原……〔羽衣〕（春景）。奈祜浦……〔藤〕（初夏景）。龍田……〔龍田〕（四季）。東北院……〔東北院〕（前半和歌の德）。石橋……〔石橋〕。鬼界島……〔俊寛〕。

（ハ）その他――胡蝶……〔胡蝶〕（故事）。龍虎……〔龍虎〕（故事）。

六、道行・物盡し

（イ）道行――〔千手〕（重衡東下り）、〔二人靜〕（義經吉野落）、〔玉葛〕（都上り）。

（ロ）物盡し――鐘……〔三井寺〕。棹……〔室君〕（船歌）。「かけて」詞盡し……〔繪馬〕。

凡そ右のやうな各種類を包容してゐるのである。――この分類は四要素中のクセを中心として觀たのであるが、曲名の下に括弧を施したやうに、或ものは三の武事から四の述懷又は六の道行へ、また或ものは四の人事から一の佛說へなど移して考へることも出來るのである。

文章はすべて破一段サシよりも更に破格の多い七五調、といふよりも寧ろ散文に近い叙事文又は叙事系の議論文・抒情文で、クリ・サシ、殊にクセの少くとも一箇所で、例へば、

クリ

地クリ それ朝に落花を踏んで、相伴つて出づ。夕には飛鳥に隨つて一時に歸る（西行櫻）

地クリ 昔にやありし世を、猶々頼の露の身の、消えにし跡はなかなかに……（玉葛）

地クリ さてもその時の有様、語るにつけて憂き名のみ、龍田の山のもみぢ葉の……（田章）

地クリ 抑も熊野の御神とは、即ち當社の御事なり、昔天皇の詔、末明らかの御國とかや（道子）

サシ

シテサシ それ十二因縁より二十五有の流轉、生じては死し、死しては生じ（春榮）

ワキ・ツレサシ それ歌には六義あり、これ六道の巷に詠じ（俊成忠度）

シテサシ 然ればその時に至つて、和歌の道盛んにして、古今の詠歌を撰み（志賀）

シテサシ 然るに神功皇后、三韓をしたがへ給ひしより（呉服）

クセ

地クセ そも漢皇の宣旨には、三千人の寵愛、いづれを分くる方もなし……（昭君）

地クセ 抑もこの淵明と申すは、彭澤の令となる、官にあること八十餘日……（三笑）

地クセ 然るにこの石橋と申すは、人間の渡せる橋にあらず……（石橋）

地クセ さるほどに嫡子惡源太義平は、石山寺に籠りしを、多勢に無勢……（朝長）

クリ・サシ・クセの三要素とも、このやうな形をとつてゐるものも少くない。例へば、

地クリ「それ世は末世に及ぶといへども…… 子方サシ「げにや現世の果を見て…… 地クセ「然るに義經弓馬の家に生まれ……（安宅）

地クリ「それ花の樹頭に上るは……シテサシ「然るに一門門を並べ……地クセ「然るに平家世をとつて……（敦盛）

地クリ「それ御裳濯川といつぱ……シテサシ然れば當國二見の浦に上り……地クセ抑も當社は垂仁の御宇に……（第六天）

要するに、謠曲のクセは一曲の主材を凝集した、從つて内容の多樣な、その結果形式にも種類の多い、そして、叙事の澁滯を防ぐために、屢々行文を新にしたものなのである。

九、ロンギ

ロンギの名義

ロンギは論義で、論義は僧家に行はれた一種の宗論であり、その盛んな景況は、平安朝の記錄に屢々詳述せられてゐるのである。勿論、當初は名僧が各その蘊蓄を傾けて、教義の深秘を討究したものであらうが、凡僧がその眞似をすれば、内容の空疎な、形式だけ整備したものになつてしまふ。論義する詞にも、その音調にも、最初から約束せられた、型の定まつた、一種の儀式的なものになつてゐたのが、鎌倉期の實狀であつたらしい。内容の貧弱な儀式はやがて滑稽の材料となる。大會の後に行はれた延年の連事は、この論義の滑稽化したもので、連事が更にまた滑稽な戲曲に發展して狂言となり、逆に古典文藝化して謠曲のロンギとなつたものでなからうかと思はれる。

ロンギの數

さて、謠曲のロンギは、破三段（又は四段）或は急段の一要素を成してゐるのであるが、序段の次第や破一二段の歌ほど必須のものではない。現行曲二百番のうち百十七番には組入れられてゐない。卽ちロンギの見えてゐるのは八十二番であるが、その中、

一、破段急段二個所にあるもの――

〔高砂〕　〔難波〕　〔融〕　〔柏崎〕　〔志賀〕　〔木賊〕　〔大社〕
〔寝覺〕　〔放生川〕　〔須磨源氏〕

二、破段にあるもの——

〔田村〕　〔江口〕　〔卒都婆小町〕　〔井筒〕　〔天鼓〕　〔白樂天〕　〔楊貴妃〕
〔玉葛〕　〔養老〕　〔阿漕〕　〔鵜飼〕　〔大原御幸〕　〔誓願寺〕　〔熊野〕
〔安達原〕　〔賀茂〕　〔松風〕　〔呉服〕　〔八島〕　〔當麻〕　〔定家〕
〔氷室〕　〔善界〕　〔芭蕉〕　〔右近〕　〔東北〕　〔佛原〕　〔小鹽〕
〔野宮〕　〔唐船〕　〔弓八幡〕　〔鉢木〕　〔蘆刈〕　〔江島〕　〔代主〕
〔九世戸〕　〔逆矛〕　〔西王母〕　〔道明寺〕　〔藤〕　〔巴〕　〔野守〕
〔住吉詣〕　〔谷行〕　〔烏帽子折〕　〔和布刈〕　〔草子洗小町〕　〔雲林院〕　〔七騎落〕
〔絃上〕　〔淡路〕　〔松蟲〕　〔[illegible]〕　〔現在七面〕

三、急段にあるもの——

〔班女〕　〔[illegible]〕　〔兼平〕　〔三井寺〕　〔實盛〕　〔朝長〕　〔梅枝〕
〔俊寛〕　〔源氏供養〕　〔櫻川〕　〔三輪〕　〔蟬丸〕　〔盛久〕　〔鐘馗〕
〔小督〕　〔半蔀〕　〔弱法師〕　〔水無月祓〕

これらロンギの一般的構造は、論義本來の性質を受け繼いで、必ず二役の持分から成つてゐる。その一役は必ず地謡で、他の一役は多くはシテで、シテがツレを同伴する時にはシテとツレとが同吟することがあり（〔高砂〕破段・〔呉服〕）、又は一部分ツレがシテに代ることがある（〔難波〕破段）。この形式は一般的な複式夢幻

能に於てのみならず、劇能に於ても同樣であるが、後者の、ワキ・ツレの發達した曲では、時としてシテとワキ又はツレ、或はワキとツレとの謠から成り立つてゐて、最後に地謠の出てくるものもある。

（イ）シテとワキとの對話から成つてゐるもの――〔楊貴妃〕〔柏崎〕

（ロ）シテとツレとの對話から成つてゐるもの――〔善界〕〔蟬丸〕〔唐船〕〔烏帽子折〕〔紘上〕

（ハ）シテとツレとワキとの對話から成つてゐるもの――〔俊寛〕〔鉢木〕

今こゝに對話といふ文字を用ゐたのであるが、ロンギの內容に入つて見ると、この文字が不適當に感じられる場合が多いのである。論義本來の性質から見れば、對話殊に糺問的問答が本旨のやうに思はれるが、

地「ありがたの御事や、奈落に沈む惡人を、佛所に送り給ふなる、その瑞相のあらたさよ

シテ「法華は利益深き故、魔道に沈む群類を、救はん爲に來りたり

地「げにありがたき誓ひかな、妙の一字はさて如何に

シテ「それは褒美の詞にて、妙なる法と說かれたり

地「經とはなどや名づくらん

シテ「それ聖教の都名にて

地「二つもなく

シテ「三つもなく

地「唯一乘の德によりて、奈落に沈み果てて、浮かみ難き惡人の、佛果を得ん事は、この經の力ならずや〔鵜飼〕

の如き質問的對話のものは少い。シテとワキ又はツレとの對話から成つてゐるものには、

ワキ「よしや身の、かくては果てじただ賴め、われ世の中にあらんほど、又こそ參り候はめ、暇申して出づるたり

シテ ツレ「名殘惜しの御事や、はじめはつゝましき御宿の、さも見苦しく候へども、馴れしにとまり給へや

ワキ「留まる名殘のさきたらば、さて幾度か今の日の

シテ ツレ「空冴え寒きこの暮に

ワキ「いづくに宿を狩衣

シテ ツレ「今日ばかり留まり給へや

ワキ「名殘に宿にとまれども、暇申して

シテ ツレ「御出でか

ワキ「さらばよ常世

シテ ツレ「又御入り

地「自然鎌倉に、御上りあらばお尋ねあれ、けうがる法師たり、かひがひしくはなけれども、披露の爲にたり申さん、御沙汰捨てさせ給ふなと、いひ捨てて出で給ふ、ともに名殘や惜しむらん（鉢木）

終りまで對話で進んでゐるのであるが、普通の對話で、論義的内容は持つてゐない。論義本來の面目を遺存してゐるのは、むしろかうしたワキ・ツレの發達した劇能よりも、普通の複式夢幻能の、

地「げにやけしきを見るからに、ただ人ならぬ粧ひの、その名如何なる人やらん

シテ「如何にともいさやその名も白雪の、跡を惜しまばこの寺に、歸る方を御覽ぜよ

地「歸るやいづく蘆垣の、間近き程か遠近の

シテ「たづきも知らぬ山中に

地「おぼつかなくも思ひ給はば、わが行く方を見よやとて、地主權現の御前より、下るかと見えしが、下りはせで坂の

上の、田村堂の軒漏るや、月のむら戸を押し開けて、内に入らせ給ひけり、内陣に入らせ給ひけり（田村）

の如き、破段中入前の、シテ眞性告白のために用ゐられるロンギで、これが謠曲ロンギの正格と見るべきものであらう。そして、ロンギの地謠は、普通最後の一節がシテの代辯又は地の文である外、他はワキの代辯と見るべきものであるが、中には、殊に急段に於けるロンギには、

地「げに痛はしき物語、兼平の御最期は、何とかならせ給ひける

シテ「兼平はかくぞとも、知らで戰ふその隙にも、御最期の御供を、心にかくるばかりなり

地「さてその後に思はずも、敵の方に聲立てて

シテ「木曾殿討たれ給ひぬと

地「呼ばはる聲を聞きしより

シテ「今は何をか期すべきと

地「思ひ定めて兼平は

シテ「これぞ最期の廣言と

地「鐙踏んばり

シテ「大音あげ木曾殿の、御内に今井の四郎

地「兼平と名乘りかけて……（兼平）

の如く、第一聯だけが問答の體をなして、以下はシテ（又はツレ）と地謠とで共同的叙述をなしてゐるもの、換言すれば地謠がワキの代辯でなく、シテの白の一部分を助けてゐるもの、形の上から見て、シテと地謠と共同して叙述してゐるものがある。

この共同的叙述——對話的でない、連吟的なものに、前例の如く純叙事文系のもので、シテと地謠とが適當に分割して連吟して居る如きものと、シテと地謠が連續して叙述してゐるもの、換言すれば、一人の制作した叙事文を二人で分讀する如きものと、二人で協同制作した連歌を分擔連吟する如きものとがある。この後例に屬するものも、さほど少くはない。例へば「熊野」の

地「河原おもてを過ぎ行けば、急ぐ心の程もなく、車大路や六波羅の、地藏堂よと伏し拜む

シテ「觀音も同座あり、闡提救世の方便あらたに、たらちねを守り給へや

地「げにや守りの末すぐに、頼む命は白玉の、愛宕の寺もうち過ぎぬ、六道の辻とかや

シテ「げに恐ろしやこの道は、冥途に通ふなるものを、心細鳥邊山

地「煙の末もうす霞む、聲も旅雁の横たはる

シテ「北斗の星の曇りなき

地「御法の花も開くなる

シテ「經書堂はこれかとよ

地「そのたらちねを尋ぬなる、子安の塔を過ぎ行けば

シテ「春の隙行く駒の道

地「はや程もなくこれぞこの

シテ「車宿り

地「馬留め、ここより花車、おりゐの衣播磨潟

これが道行、「所盡し」であるのに對し、「物盡し」のものもある。

地「さてそも五條あたりにて、夕顔の宿を尋ねしは
シテ「日陰の絲の冠著し、それは名高き人やらん
地「賀茂のみあれに飾りしは
シテ「絲毛の車とこそ聞け
地「絲櫻、色も盛りに咲く頃は
シテ「くる人多き春の暮
地「穗に出づる秋の絲薄
シテ「月に夜をや待ちぬらん
地「今はた賤が繰る絲の
シテ「長き命のつれなさを
地「思ひ明石の浦千鳥、音をのみひとり鳴き明かす（安達原）

シテと地謡との對立がかなり明確であるが、内容は兩者の問答ではなく、兩者の連吟に外ならない。この傾向の一層著しいのは、

地「雁がねの翼は文字の數なれど、跡定めねばあらはれず、穎川に耳を洗ひしは
シテ「濁れる世を澄ましけり
地「舊苔の鬚を洗ひしは
シテ「川原に解くる薄氷
地「春の嶽を洗ひては、霞の袖を解かうよ

ロンギの樣式

シテ「冬の日を迎へては
地「袂も寒き水鳥の、上毛の霜に洗はん、紫の色の文字なれば、忍ぶ草の墨消え
シテ「涙は袖に降りくれて、忍ぶ草も亂るる忘れ草も亂るる
地「狩衣の袖の數々に
シテ「簾の絲を亂るる
地「簾衣の袖に錦葉の
シテ「螢火に袖ぞ乾ける
地「時雨に濡れて洗ひしに
シテ「紅葉の錦たりけり
地「住吉の久しき松を洗ひては、岸に寄する白波を、さつとかけて洗はん　〔草子洗小町〕

全體として一脈相通じてゐるが、シテ又は地謠の分擔にそれ〴〵の意義を持つてゐるなど、こゝに於て、地謠は單なるシテ又はワキの代辯ではなく、その存在に特殊な理由を持つこととなつたのである。かくして、ロンギは論義としての本質を離れて來たが、連歌と同じ意味の新しい興味を作り出してゐるのである。謠曲のロンギに於て文學的價値の最も高いのは、この種のものであつて、かゝる創案については、事實連歌の影響を受けてゐるものと思はれるのである。

次にロンギの律語的樣式に就て觀察すると、ロンギは前述の通り、地謠と立方との文から成つて居り、最後の文は必ず地謠で結んでゐるが、起首の文は、必ずしも地謠には限らず、

（イ）　シテの謠ふもの――〔柏崎〕〔蟬丸〕〔小督〕

（ロ）　ワキの謠ふもの――〔楊貴妃〕〔鉢木〕

（ハ）　ツレの謠ふもの――〔善界〕〔唐船〕……〔子方〕〔七騎落〕

などがある。そのいづれにしても、大體正確な七五調から成つてゐて、起首に五文字を冠したり、七五の句を繰返して謠つたりして、その間に變化を加へてゐる。即ち、

第一節（最初の地謠）の第一句七五に五文字を冠するもの――

〔班　女〕　〔融　〕　〔鉢　木〕　〔木　賊〕急段　〔弱法師〕

第二節（最初のシテ謠）の第一句七五に五文字を冠するもの――

〔田　村〕　〔江　口〕　〔班　女〕　〔朝　長〕　〔誓願寺〕　〔賀　茂〕　〔善　界〕

〔芭　蕉〕　〔右　近〕　〔盛　久〕　〔野　宮〕　〔弓八幡〕　〔木　賊〕　〔九世戸〕

〔西王母〕　〔小　督〕　〔半　蔀〕　〔戀重荷〕　〔淡　路〕

第一句及び末句の七五を繰返して謠ふもの――

〔高砂〕破段　同急段（第一句五五）　〔難波〕破段　〔志賀〕破段　同　急段　〔吳　服〕　〔氷　室〕

〔弓八幡〕　〔江　島〕　〔逆　矛〕　〔代　主〕　〔九世戸〕　〔道明寺〕　〔烏帽子折〕

〔和布刈〕　〔大社〕破段　〔須磨源氏〕破段　〔淡　路〕　〔放生川〕破段　同　急段

第一句のみを繰返して謠ふもの――

〔白樂天〕　〔大社〕急段

ロンギの中途及び末句を繰返して謠ふもの――

〔[illegible]女〕　〔[illegible]〕　〔[illegible]〕　〔[illegible]〕　〔[illegible]〕　〔[illegible]〕　〔[illegible]〕

ロンギの中途の句のみを繰返して謡ふもの——

〔楊貴妃〕　〔誓願寺〕　〔蘆　刈〕　〔住吉詣〕　〔草子洗小町〕　〔戀重荷〕　〔紘　上〕

〔[illegible]〕

全く繰返して謡はないもの——

〔卒都婆小町〕　〔天　鼓〕　〔三井寺〕　〔玉　葛〕　〔養　老〕　〔[illegible]〕　〔[illegible]〕

〔松　風〕　〔源氏供養〕　〔櫻　川〕　〔右　近〕　〔三　輪〕　〔盛　久〕　〔巴〕

〔小　督〕　〔[illegible]〕

この外のものは末句のみを繰返して謡ふのである。

要するに、ロンギはその形式内容ともに自由な點に於て、歌とクセとの間にあるものと見られるのである。

一〇、待　謡

待謡の名義

謡曲文の破段から急段に移る途中に、「待謡」のあるものが少くない。待謡とは、ワキが後ジテの出現を待つ謡といふほどのことで、外に別段の意味はないやうである。

後ジテの出現を待つ謡であるから、シテの前後變化のないものには待謡はない。シテ中入があつても、シテとワキと劇的な關係を持つてゐる曲にはない。待謡のあるのは、複式夢幻能に限られてゐる。

謡曲の類型的な法則によれば、複式夢幻能には必ず待謡がありさうなものであるが、これの缺けてゐるも

のも少くない。五流詞章の異同も、この待謠の有無が最も著しい一つになつてゐる。

かう觀てくると、待謠は謠曲文の重要な成分ではないやうであるが、今觀世流謠本に待謠と指定してゐるものを見ると、六十五番即ち全體の丁度三分一を占めてゐるのみならず、待謠には、形式内容ともにある類型的な約束が存在してゐるので、謠曲文の構成要素を解剖して行く上には、見逃すことの出來ない一項目としなければならない。——演奏上の效果に就ては、更に重大な意味を持つてゐると思ふが、このことに就ては既に總說第五章の「複式夢幻能の意義」に略述して置いた。

待謠は上歌として謠はれてゐる通り、序段の道行や破段の歌と同樣、七五調の律語を以て組織されてゐる。委しくいへば、五七五・七五調又は七五調の數句から成り立ち、その最初と最後の七五を繰返して謠ふのである。しかも、この七五調は殆ど字餘、字不足のない、破段の歌などよりもなほ正格なもので、

夕月早くかげろふの、おのが友呼ぶ群千鳥の、跡見えぬ磯山の、夜の花に旅寢して、浦風までも心して、春に聞けばや音すごき、須磨の關屋の旅寢かな　（忠度）

の七五。七六・五五・六五・七五……の如きは、珍しい例外である。

この點、道行と餘程似通つてゐるのであるが、謠曲の他の成分との關係については、道行の如くに獨立したもの、即ち狂言の間語が濟んで直に待謠の本文に入るものの外に、ワキの獨白文はツレとの對白があつてそれから引續き待謠に入る、例へば、

ワキ「さて石山に參りつつ、念願の勤め事終り、夜も更け方の鐘の聲、心も澄める折節に

ワキヅレ「とありつる源氏の物語、眞しからぬ事なれども

ワキ「供養をのべて紫式部の
ワキツレ「菩提を深く
ワキ「弔ふべきなり
（待謠）「とゞ思へばあだし世の、夢にうつろふ紫の、色ある花も一時の、あだにも消えし古の、其源氏の物語、聞くにつけてもその誠、頼み少き心かな　（源氏供養）

の如きものがあり、また七五調の末句が繰返されないで、特別な文句に移つてゐるものがある。例へば、

一夜臥す牡鹿の角の塚の草、陰より見えし亡魂を、弔ふ法の聲立てて、南無幽靈出離生死頓證菩提　（女郎花）

この特別な文句は多くは經文であるが、中には、

夕陰過ぐる月影の、はや出でそめて面白や、萬里の雲も隈なくて、いづくの秋も隔てなき、心も澄みて夜もすがら、三五夜中の新月の色、二千里の外の故人の心　（姨捨）

の如く、朗詠の句を引いてゐるものもある。そのいづれにしても、大抵二句のもので、普通の待謠の、繰返しの末句と同じ心持で組織されてゐるものと思はれる。

そこで、待謠を獨立したものと、前附文句のあるものとに分ち、末句が特別の文句になつてゐるものは、これを一句に數へて、形式的に分類して見ると——繰返し句は一句として數へず、特殊の文句に移つてゐるものには、△印を附けて區別する——

甲、獨立したもの

五・七五の三句——〔雲林院〕

五・七五の四句——〔田村〕〔難波〕〔井筒〕〔融〕〔采女〕〔野宮〕〔逆矛〕〔箙〕〔熊坂〕〔藤〕△〔女郎花〕

待謠の内容

五・七五の五句――〔高砂〕〔志賀〕〔東北〕〔六浦〕〔淡路〕〔放生川〕〔胡蝶〕
五・七五の六句――△〔葛城〕〔經文一句〕
五・七五の七句――△〔藤戸〕△〔項羽〕
七五の四句――〔業平〕〔老松〕〔鵜〕〔呉服〕〔龍田〕〔夕顔〕〔山姥〕〔右近〕〔三輪〕〔佛原〕〔錦木〕〔敦盛〕〔代主〕
〔西王母〕〔巴〕〔鐘馗〕〔松蟲〕△〔通盛〕〔經文一句〕
七五の五句――〔鵜飼〕〔阿漕〕〔定家〕〔春日龍神〕〔船橋〕〔弓八幡〕〔知章〕
七五の六句――△〔姨捨〕

乙、前附文句のあるもの

五・七五の四句――〔須磨源氏〕
五・七五の五句――〔遊行柳〕〔砧〕
五・七五の七句――〔朝長〕
五・七五の八句――△〔實盛〕
七五の四句――〔賴政〕〔玉葛〕〔浮舟〕〔八島〕〔當麻〕〔檜垣〕〔芭蕉〕〔小督〕
七五の五句――△〔通小町〕
七五の七句――〔忠度〕〔源氏供養〕△〔誓願寺〕
七五の八句――△〔天鼓〕

待謠の内容を見ると、その能柄が幽靈物で、ワキが僧侶であるものが多いから、
これにつけても弔ひの、法事をなして夜もすがら、念佛申し敦盛の、菩提を猶も弔はん（敦盛）

の如く、誦經して主人公の亡靈を弔ふものが最も多い。〔田村〕〔玉葛〕〔藤戸〕〔采女〕〔鵺〕〔浮舟〕〔葛城〕〔定家〕〔夕顔〕〔通盛〕〔女郎花〕〔東北〕〔佛原〕〔野宮〕〔巴〕〔鍾馗〕〔項羽〕〔熊坂〕〔知章〕〔松蟲〕など皆この部類に入るであらう。この中、〔藤戸〕〔項羽〕〔松蟲〕などのワキは僧ではないが、僧と同じやうに回向してゐるのである。

これが一歩進んでは、

河瀬の石を拾ひ上げ、妙たる法の御經を、一石に一字書きつけて、波間に沈め弔はば、などか浮かまざるべき（鵜飼）

の如く、積極的に誦經の功力を述べてゐるものがある。誦經の功力は、更に一歩進めば、佛德の禮讃となる。

ふりにし跡を改めて、三寶加持の行ひに、五道の罪も消えぬべき、法の力ぞありがたき（船橋）

〔阿漕〕〔誓願寺〕〔芭蕉〕などがこの類である。

僧侶の詞はいつも教法の宣傳になりたがるものらしい。しかし、中には素直に後ジテの出現を待つてゐるものもある。

夜も更け行く浦風の、松が根枕そばだてて、思ひをのぶる苔莚、重ねて夢を待ちゐたり（八島）

〔頼政〕〔井筒〕〔融〕〔小鹽〕などがこの例に入る。

以上は、ワキ僧の幽靈物を主として觀たのであるが、神職や臣下をワキとした脇能になると、曲柄の性質上、神の出現を待つものや、神德を讃歎したものが多い。

嬉しきかなやいざさらば、この松蔭に旅居して、風も嘯く寅の時、神の告をも待ちて見ん（老松）

〔呉服〕〔龍田〕などもこの例である。

都に歸り神勅を、悉く奏し上ぐべしと、いへばお山も音樂の、聞えて異香薫ずなり、げにあらたたる奇特かな（弓八幡）

この外、〔右近〕〔逆矛〕〔淡路〕〔放生川〕など、いづれも神德を稱へてゐる。美しい景色を叙べることは、やがて國土を守護し給ふ神德を顯すこととなるから、叙景の待謠も少くない。

見て暮らす花の下臥更くる夜の、月影ともに靜かなる、景色に染みて音樂の、花に聞ゆる不思議さよ（難波）

〔志賀〕〔代主〕なども美しい景色を主としてゐる。この叙景的なものは、脇能ばかりでなく、優雅な鬘物や、凄壯な修羅物にもある。

松風ともに吹く笛の、聲澄みわたる谷川に、手まづ遮る曲水の、月に聲すむ深山かな（山姥）

かうした叙景は、後ジテの出現に相應した氣分を誘發するので、〔雲林院〕〔六浦〕〔須磨源氏〕〔姨捨〕〔忠度〕〔朝長〕〔籠〕など可なり多い。

叙景を以て氣分を誘發するといふよりも、一歩進んで、曲柄にふさはしい感情を表した抒情的なものもある。

さきだたぬ悔の八千度百夜草、陰よりも二度、歸りくる道と聞くからに、梓の弓の末弭に、言葉をかはすあはれさよ（砧）

〔源氏供養〕〔胡蝶〕〔藤〕などの待謠も抒情的である。

待謠の内容は、これ以上擧げた如きもの丈であるが、なほこの外に、

　　高砂やこの浦舟に帆をあげて、月もろともに出汐の、波の淡路の島影や、遠く鳴尾の沖過ぎて、はや住の江に着きにけり（高砂）

の如き、「三輪」「通小町」の如き、道行と全く同趣のものもある。

これを要するに、待謠は後段の歌と大體同趣のもので、歌よりは句調が正格で、内容がやゝ限定されてゐるものと見られるのである。

なほ、謠曲文中、待謠に類似したものに就て一瞥すると、

　　ありし教へに從つて、五條あたりに來て見れば、げにも昔のいまし所、さながら宿りも夕顔の、瓢簞しば〳〵空し、草顔淵が巷に滋し（半蔀）

の如き、拍子にかゝるだけで、上歌・待謠と指定してゐないが、文章の形からいへば、第一句の繰返しがないだけで、「姨捨」などと變りのないものである。

「藤戸」の「様々に弔ふ法の聲立てて」云々は、刊行會本にはたゞ上歌とだけ記してゐるが、檜木本には待謠と認めてゐる。「殺生石」の「木石心なしとは申せども」云々は律格を外れてゐるが、全曲に於ける位置は待謠に似てゐる。「紅葉狩」の「あらあさましやわれながら」云々も、待謠に似てゐるが、直に地の文に續いて獨立性を失つてゐる。

「藤戸」から「殺生石」、「殺生石」から「紅葉狩」へと、待謠の變化から觀ても、複式能から劇能へ移つて行く文章の變化が認められるのを面白く思ふ。

二、ワカ

ワカの數

ワカは急段、舞の直後に謡はれるもので、謡の上からは最も華やかな要素であるが、その數は極めて少い。卽ち、

眞序舞の後——〔老松〕〔白樂天〕
序舞の後——〔江口〕〔千手〕〔井筒〕〔楊貴妃〕〔采女〕〔姨捨〕〔誓願寺〕〔西行櫻〕〔定家〕〔芭蕉〕〔關寺小町〕〔東北〕〔佛原〕〔小鹽〕〔羽衣〕〔木賊〕〔半蔀〕〔六浦〕〔吉野靜〕〔藤〕
中舞の後——〔班女〕〔紅葉狩〕〔松風〕〔[illegible]〕〔草子洗小町〕〔水無月祓〕
神舞の後——〔養老〕
天女舞の後——〔難波〕〔氷室〕
神樂の後——〔三輪〕〔現在七面〕
男舞の後——〔安宅〕〔小督〕〔春榮〕
イロへの後——〔弱法師〕
早舞の後——〔松蟲〕
亂拍子の後——〔道成寺〕

の三十九に過ぎない。しかもこの中、〔誓願寺〕と〔佛原〕とは、

シテ「ひとりたゞ佛の御名を尋ね見ん。地「おのおの歸る法の場人

といふ同じ歌を謡つてゐるのである。

ワカの性質

さもあれ、これらワカの約三分二を占めてゐるのは、和歌又は和歌調のもので、その中古歌をそのまゝ、

（又は二三字かへて）謡つてゐるものには、

東路の秩父の山の松の葉の、千代のかげ添ふ若緑かた　（春栄）——東遊
秋の夜の千夜を一夜に重ねても、言葉残りて鳥や鳴かまし　（六浦）——伊勢物語
春の夜の闇はあやなし梅の花、色こそ見えね香やは隠るる　（東北）——古今集
わが心慰めかねつ更科や、姨捨山に照る月を見て　（姨捨）——同
ただ頼めしめぢが原のさしも草、われ世の中にあらん限りは　（船弁慶）——新古今集
西の海檍が原の波間より、現れ出でし住吉の神　（白楽天）——續古今集
鷲の山いかにすみける月なれば、入りての後も世を照らすらん　（現在七面）——同
住吉の松の隙より眺むれば、月落ちかかる淡路島山　（弱法師）——詞花集
折りてこそそれかとも見めたそかれに、ほのぼの見えし花の夕顔　（半蔀）——源氏物語
木枯に吹き合はすめる笛の音を、引き留むべき言の葉もなし　（小督）——源氏物語
賤や賤しづの苧環くりかへし、昔を今になすよしもがな　（吉野静）——義経記、原伊勢物語

前に挙げた「ひとりなほ」の歌も、一遍上人の詠と傳へられてゐる。なほこの外、〔井筒〕〔楊貴妃〕〔養老〕〔采女〕〔氷室〕〔小鹽〕〔草子洗小町〕〔藤〕〔水無月祓〕のも和歌調で、未だ出典を確め得ないが、古歌かと思はれるものもある。

この和歌又は和歌調のものは、上句をシテが謡ひ、下句を地謡として、第五の七字句を二回繰返すこととなつてゐる。——〔白楽天〕では繰返し句を「住吉の神の」として、〔弱法師〕では第五句を繰返さないで「淡路島山と」として下に續けてゐる。

稻葉の山の峯に生ふる松とし聞かば今歸り來ん（松風）――古今集

花の蔭より明けそめて、鐘をも待たぬ別れこそあれ（西行櫻）

は、その第一句五文字「立ち別れ」、「春の夜の」を舞の前に謠つてゐるが、當然前揭のものと同じ部類に入るべきもので、「松風」はシテのみで謠つてゐるが、「西行櫻」の方はシテと地との關係も前揭のものと變りがないのである。

ところが、殘りの十五章に至つては、全く雜多で、その間から一貫した原則を見出し難い。例へば、

シテ「鳴るは瀧の水。地「日は照るとも絶えずとうたり（安宅）

は今樣であるが、

シテ「一樹の蔭や一河の流れ。地「皆これ他生の緣といふ、白拍子をぞ謠ひける（千手）

は今樣ではなく、今樣を謠つたといふ叙事文である。

シテ「道成の卿承り、始めて伽藍たちばなの、道成興行の寺なればとて、道成寺とは名づけたり（道成寺）

純粹の叙事文であるが、形は七五四句の今樣に近い。中には、どこまでがワカであるか、殆ど區劃のつけ難いものがある。

シテ「面白や千草にすだく蟲の音の。地「機織る音の。シテ「きりはたりちやう。地「きりはたりちやう、つゞりさせてふ蟋蟀ヶ蜩、色々の色音のなかに、わきてわが忍ぶ、松蟲の聲りんりんりんりんとして…（松蟲）

シテ「或は天つ御空の綠の衣。地「又は春立つ霞の衣。シテ「色香も妙なり少女の裳裾。地「左右左右さいふ颯々の、花をかざしの天の羽袖、靡くも返すも舞の袖……（羽衣）

後者などは殆どロンギに近いものである。こゝに於いてワカとは如何なるものであるか、その定義に迷はざるを得ないのである。高野辰之博士は、

ワカ。従来和歌であらうといつてゐたが、僧家の延年舞曲には答辭・答音に對して若音といふ節の名目があり、若音見と呼ばれる者もあつた。謡曲に於ては多く高音に謡ふ處に此のしるしを附けてあるが、恐らくは延年舞曲の若音見の變調の意であらう（日本歌謡史）

といつて居られる。單に聲調の上の名目であるとすれば、詞章様式の種々であることは何等問題とならないが、それにしては、謡曲構成上のワカの位置が定まり過ぎてゐる。歌詞もあまりに和歌が標準的のものになり過ぎてゐる。或は一聲に於ける二句一聲と多句一聲（サシ謡）のやうに、詞章上のワカと音樂上のワカと區別せられるのではなからうか。さうすれば、舞上げの和歌はすべてワカと指定せられる筈であるが、

〔序舞〕シテ「和歌の浦に潮滿ちくればかたをなみの。地「蘆邊をさして田鶴鳴き渡る（鸚鵡小町）

〔序舞〕シテ「植ゑ置きし昔の宿の杜若。地「色ばかりこそ昔なりけれ（杜若）……檜本にはワカとす。

〔序舞〕シテ「身をづくし戀ふるしるしにここまでも。地「廻りあひける縁は深しな（住吉詣）

〔序舞〕シテ ツレ「賤や賤賤の苧環繰りかへし。地「昔を今になすよしもがな（二人靜）

〔序舞〕シテ「青柳に鶯傳ふ羽風の舞。地「柳花苑とぞ思ほえにける（遊行柳）

〔中舞〕子方「君が世は千代に一度ゐる塵の。地「白雲かかる山となるまで（正尊）

などはワカと指定してゐない。やはり單なる聲調上の名稱に過ぎないのであらうか。姑く疑ひを殘して後考を俟ちたいと思ふ。

キリの數

キリの形式

一二、キリ

キリは一曲の末尾、終結の意で、從つてどの曲にも結末のないものはないのであるが、多くの曲は、ロンギ・地上歌又は普通の地謠で曲尾を結んでゐて、特にキリといふ名目を以て結んでゐるものは、二百番中、わづか三十四番に過ぎない。これまで擧げて來た名目のうち最も用途の少いものなのである。そして、これらのキリは多くは地謠で謠はれてゐるのであるが、中にはシテが一二句謠つて、その後を地謠の承けるものもある。卽ち、

(一) シテの第一句を謠ひ出すもの――〔清經〕〔船橋〕

(二) シテの中途で謠ふもの――〔松風〕〔雲林院〕〔盛久〕

(三) 地謠のみで謠ふもの――〔鵜飼〕〔卒都婆小町〕〔老松〕〔三井寺〕〔梅枝〕〔忠度〕〔花筐〕〔富士太鼓〕〔通盛〕〔櫻川〕〔百萬〕〔女郎花〕〔三輪〕〔野宮〕〔錦木〕〔唐船〕〔羽衣〕〔道成寺〕〔蘆刈〕〔木賊〕〔葵上〕〔鶴龜〕〔砧〕〔望月〕〔放下僧〕〔籠太鼓〕〔鳥追舟〕〔土車〕〔昭君〕

いづれも破格の多い七五調の歌詞で、多くの曲では、上歌と同じやうに、その第一句と末句とを繰返して謠ふ（シテの謠ふ曲では地謠がこれを繰返す。從つて〔雲林院〕〔盛久〕などでは初中終三度繰返す）のであるが、中には、

(イ) 首尾とも繰返さないもの――〔老松〕〔忠度〕

(ロ) 第一句だけ繰返すもの――〔清經〕〔唐船〕〔羽衣〕〔蘆刈〕

(ハ) 末句だけ繰返すもの――〔卒都婆小町〕〔松風〕〔土車〕〔道成寺〕（第二句は第一句の頭句）〔野宮〕（繰返し不完全）

(ニ) 第一句に近い中途で繰返すもの――〔錦木〕（五文字だけ）

キリの内容

（ホ）第一句及び末句に近い中途で繰返すもの——〔花筐〕〔忠度〕

ワキ、その内容を見るに、直に前文に引續いて、

御身この花の蔭に立ち寄り給ひしを、かく物語り申さんとて、日を暮らしとどめしなり、今は疑ひよもあらじ、花は根に歸るなり、わが跡弔ひて賜び給へ、木蔭を旅の宿とせば、花こそ主なりけれ（忠度）

の如く、殆ど終りまで、シテ白として綴つて居るもの、

嵐に吹き來る風も狂じて、須磨の浦波夜すがら、妄執の夢に見ゆるなり、わが跡弔ひてたび給へ、暇申して歸る波の音の、須磨の浦かけて、吹くや後の山颪、關路の鳥も聲々に、夢も跡なく夜も明けて、村雨と聞きしも今朝見れば、松風ばかりや殘るらん（松風）

謹請東方青龍清淨、謹請西方白體白龍、謹請中央黄體黄龍、一大三千大千世界の、恒沙の龍王哀愍納受、哀愍自謹のみぎんなれば、いづくに大蛇のあるべきぞと、祈り祈られかつぱと轉ぶが、又起き上つて忽ちに、鐘に向つて吐く息は、猛火となつてその身を焼く、日高の川波深淵に、飛んでぞ入りにける、望み足りぬと驗者達は、わが本坊にぞ歸りける（道成寺）

の如く、前半をシテ白又はワキ白、後半を叙事文として綴つてゐるもの、

御遊も既に時過ぎて、今は還幸なし奉らんと、供奉の人々御車やりつづけ、もみぢ葉散り來る、……も出御に、誘はれ行くや玉穗の都、誘はれ行くや玉穗の都に、惠みを戴き頼みそめし、ありがたき（花筐）

の如く、前文に引續いた叙事文として綴つてゐるものなどがあるが、叙事で演ぜられるべき事件は前文で一まづ完結して、キリではその後の状況を報告する、

かくて伴ひ立ち歸り、親子の契り盡きせずも、富貴の家となりにけり、げにありがたき孝行の、威徳ぞめでたかりけ

る（三井寺）

かくて本望遂げぬれば、かの本領に立ち歸り、子孫に傳へ今の世に、その名隱れぬ御事は、弓矢のいはれなりけり（望月）

や、その事件を批評した、

これを見かれを聞く時は、たとひ惡人なりとても、慈悲の心を先として、貧者を供養するならば、その諸縁に引かれつつ、佛果菩提に到るべし、げに往來の利益こそ、他を助くべき力なれ（鵜飼）

これにつけても後の世を、願ふぞ實なりける、砂を塔と重ねて、黄金の膚こまやかに、花を佛に手向けつつ、悟りの道に入らうよ（卒都婆小町）

などが多い。前に擧げた、シテ白、ワキ白又は前文に引續いた叙事を以て綴つてゐるものでも、最後には作者の批評を以て結んでゐるものが多く、そして、それらには、「五常正しき弓取の末」をたゝへた「鳥追舟」、「曇らぬ人の心」をたゝへた「昭君」、「二世の縁」の「盡きせぬ契り」を叙べた「班女」「通盛」「天鼓」なども あるが、主なものは、「三井寺」のやうに孝行の威德をたゝへたものと、「鵜飼」のやうに佛教の功德を說いたものとで、

かくて親子に合竹の、世を古里を改めて、佛法流布の寺となし、佛種の縁となりにけり、跡に住居の御寺、繁昌所になりにけり（木賊）

かくて伴ひ立ち歸り、母をも助け樣を變へて、佛果の縁となりにけり、二世安樂の縁深き、親子の道ぞありがたき（櫻川）

のやうに、この兩者を結びつけたものもある。そのいづれにしても、戯曲の末尾を、かうした道德的な

又は宗教的な叙事文で結んでゐるところに、室町文藝に共通した、殊にお伽草子・幸若舞曲に於て最も著しく現れてゐる啓蒙文藝の根跡が認められ、當時の文藝としては勿論のこと、わが國前後の文藝を通じても最も高い地位にある、この謠曲に於ても、猶且時代の勢ひに支配せられてゐたことを、一つの興味ある問題として考へさせられるのである。

古事記

風土記

萬葉集

謠曲引歌考

（上欄に〻印のあるのは和漢朗詠集に、△印のあるのは新撰朗詠集に收められたもの。引用句に圏點を施したのは、本歌と大同にして小異あるもの。）

一、上代歌

（イ）古事記

夜久毛多都伊豆毛夜弊賀岐都麻碁微爾夜弊賀岐都久留曾能夜弊賀岐袁（須佐之男命）…………古今集を見よ。

（ロ）丹後風土記

阿麻能波良布理佐兼美禮婆加須美太智伊弊治麻止比天由久弊志良受母（天女）…………〔羽衣〕二四九〇「天の原ふりさけ見れば霞立つ雲路まどひて行方知らずも」

（ハ）萬葉集

高山波雲根火雄男志等耳梨與相諍競伎神代從如此爾有良之古昔母然爾有許曾虚蟬毛嬬乎相格良志吉（天智天皇）…………〔三山〕一九五 萬葉第一に出だされたる三山」

茜草指武良前野逝標野行野守者不見哉君之袖布流（額田王）…………〔右近〕三四六「茜さす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖古き御幸」…………〔松尾〕二六四七 日も茜さす紫野北野」

山邊乃御井乎見我底利神風乃伊勢處女等相見鶴鴨（山邊御井）…………〔御裳濯〕二九六四「山のべの御井を見かへり[illegible]が瀬の伊勢の少女等あひ見ゆるかた」

磐白乃濱松之枝乎引結眞幸有者亦還見武（有間皇子）……〔鵜羽〕三五四「岩代の松の枝結ぶ……（一四）
絹〕三六〇「岩代の松の何とか結びし」
大宮之内二手所聞網引爲跡網子調流海人之呼聲（長忌寸意吉麿）……〔當麻〕三二「原状のよ、」
天地之分時従神左備手高貴寸駿河有布士能高嶺乎天原振放見者（長歌、赤人）……〔富士山〕三七七「天地の開けし時より神さびて高く貴き駿河の富士がねにも勝れる」
田兒之浦従打出而見者眞白衣不盡能高嶺爾雪波零家留（赤人）……〔富士〕三六六「田子の浦ゆ打出でて見れば白たへの富士の嶺」
吉野爾有夏實之河乃川余杼爾鴨曾鳴成山影爾之底（湯原王）……新古今集を見よ。
須磨乃海人之鹽焼衣乃藤服間遠之有者未著穢（大網公人主）……〔吉野靜〕三八〇「御代衣間遠に織れる藤袴」
神風之伊勢乃濱荻折伏客宿也將爲荒濱邊爾（碁檀越妻）……〔御裳濯〕三七二「神風や伊勢の濱荻折りしきて旅寢
ますらをも涙に」
珠衣乃狭藍左謂沈家妹爾物不語來而思金津裳（人麿）……〔東岸居士〕三三三「玉衣のさゐさゐ沈み浮き世の」
戀草呼力車二七車積而戀良苦吾心柄（廣河女王）……〔百萬〕三七三「戀草の力車に七車積むとも盡きじ」
銀母金母玉母奈爾世武爾麻佐禮留多可良古爾斯迦米夜母（憶良）……〔唐船〕六八六「千金も何ならず子程の寶とも
あらじ」
若浦爾鹽滿來者潟乎無美葦邊乎指天多頭鳴渡（赤人）……〔鸚鵡小町〕四四「和歌の浦に潮滿ち來ればかたをなみ
の葦邊をさして田鶴鳴き渡る」……〔知章〕三四「汀のかたをなみ葦邊をさして行く田鶴の」……〔松風〕六八八「寄せ
ては歸るかたをなみ葦邊の田鶴こそは立ち騒げ」

橘花者實左倍花左倍其葉左倍枝爾霜雖降益常葉之樹　（元正天皇）………〔草薙〕八八一「實さへ花さへ常磐に實る橘の」

風早之三穗乃浦廻乎榜舟之船人動波立良下　（卷七）………〔羽衣〕三四八六「風早の三保の浦わを漕ぐ舟の浦人騒ぐ波路かな」

春野爾須美禮採爾等來師吾會野乎奈都可之美一夜宿二來　（赤人）………〔求塚〕三〇七七「春の野に菫摘みにと來し人の」

鶯之生卵乃中爾霍公獨所生己父爾似而者不鳴己母爾似而者不鳴　（後略、蟲麻呂集）………〔歌占〕三五九「鶯のかひこの中の子規しやが父に似てしやが父に似ず」

古之益荒丁子各競妻問爲祁牟葦屋乃菟名日處女乃　（後略、福麻呂集）………〔求塚〕。大和物語「住みわびて」を見よ。

棚機之五百機立而織布之秋去衣孰取見　（卷十）………〔山姥〕三八二「織姫の五百機立つる窓に入つて」

鴨川後瀨靜後相妹者我雖不今　（人麻呂集）………〔水無月祓〕二九四五「賀茂川の後瀨しづかに後も逢はん妹にはわれよ今ならずとも」

時守之打鳴鼓數兒者辰爾波成不相毛怪　（卷十一）………〔籠太鼓〕三三九四「時守の打ち出す鼓聲聞けば時にはなりぬ君は遲くて」

難波人葦火燎屋之酢四手雖有己妻許會常目頰次吉　（卷十一）………〔蘆刈〕二七「難波人蘆火焚く屋は煤たれておのが妻衣それならで」………〔松蟲〕二八六三「難波人蘆火焚く屋も市館も」

千葉破神之伊垣毛可越今者吾名之惜無　（卷十一）………〔水無月祓〕二九四「千早振る神の忌垣も越えつべしもと來

し方の」（伊勢物語參照）

彼方之赤土少屋尓霈霂零床共所沾於身副我妹（巻十一）……「合浦」六八四「八方の遠土の小屋に小雨降り床さへ濡れば身に添へ我妹」

御獵爲鴈羽之小野之櫟柴之奈禮波不益戀社益（巻十二）……「鞍馬天狗」九四「心空に浦若の馴れはまさらで戀の増さらん」

可見都氣野佐野乃九久多知乎里波夜志安禮波麻多牟惠許登之許受登母（東歌）……「求塚」三〇六「佐野の茎立若菜摘むたちて」

可美都氣努佐野乃布奈波之等里波奈之於也波左久禮騰和波左可流賀倍（東歌）……「舟橋」三六五「東路の佐野の舟橋取り放し親しさくれば妹に逢はぬかも」……「鉢木」三七〇「上野や佐野の舟橋取り放れし本領に」……「求塚」三〇七「妹背の橋も中絶えし佐野の」

可良須等布於保乎曾杼里能麻左低尓毛伎麻左奴伎美乎許呂久等曾奈久（東歌）……「善知鳥」八六「鳥てふ名を借りて鳥も心して」

無耳之池羊蹄恨之吾妹兒之來乍潜者水波將涸（有由縁歌）……「三山」二九九「耳成山の池水の渕に臨みて」

安積山影副所見山井之淺心乎吾念莫國（有由縁歌）……古今集序に見ゆ。

奈良山乃兒手柏之兩面尓左毛右毛佞人之友（消奈行文）……「百萬」三六七「奈良坂の兒の手柏の二面とにもかくにも佞人のなき跡の」……「雲雀山」三四六「奈良坂の兒の手柏の二面とにもかくにも古里の」……「春日龍神」六〇三「奈良坂のこの手を合はせて禮拜する」……「千手」七〇〇「奈良坂や棗徒の手に渡りたはとにもかくにも果て」

安乎能宇良尓餘須流之良奈美伊夜麻之尓多知之伎与世久安由乎伊多美可聞（家持）……「藤」七〇三「英遠の濱

風多祜の浦わに吹き寄する音さゆる波も」

多祜乃浦能底左倍爾保布藤奈美乎加射之氐將去不見人之爲 （縄麻呂）………〔藤〕三七二七原歌のまゝ（但初句「多祜の浦の」ののを省く）

櫻花伊麻佐可里奈里難波乃海於之氐流宮爾伎許之賣須奈倍 （家持）………〔梅〕四二六、原歌のまゝ。

布敷賣里之波奈乃波自米爾許之和禮夜知里奈牟能知爾美夜古敝由可無 （家持）………〔梅〕四三六、原歌のまゝ。

布奈藝保布保利江之可波乃美奈伎波爾伎爲都都奈久波美夜故杼里香蒙 （卷二十）………〔隅田川〕二五五「舟競ふ堀江の川の水際に来居つつ鳴くは都鳥それは………〔船橋〕三七五「舟競ふ堀江の川の水際に寄るべ定めぬ」

始春乃波都禰乃家布能多麻婆波伎手爾等流可良爾由良久多麻能乎 （家持）………〔氷室〕二六九「初春の初子の今日の玉箒手にとるからにゆらぐ玉の緒さび」

㈡ 催馬樂

東屋のまやのあまりの雨そゝぎわれ立ち濡れぬその殿戸開かせ （東屋）………〔千手〕一七〇「軒の雨滴へて音づるるこれや東屋なるらん」………〔小督〕二〇四「音にたに立てよ東屋の」

伊勢の海の清き渚のしほがひになのりそや摘まん貝や拾はん玉や拾はん （伊勢海）………〔岩船〕三八八伊勢島や汐干に拾ふたまたまも待ちえにけりた………〔阿漕〕三六「伊勢の海清き渚のたまたまも弔ふこそ」………〔御裳濯〕二九七「伊勢の濱荻……清き渚の玉の數々」

總角やとうとう尋ばかりやとうとう放りて寝たれどもまろび逢ひにけりとうとうかよりあひにけりとうとう（總角）………〔翁〕七「總角やとんどや尋ばかりやとんどや坐して居たれども参らうれんげりやとんどや」

㈭ 雜、謠ひ物

東路の秩父の山の松の葉の千代に栄ゆる若葉かな（序賀東直幹）……「春栄」二四八、原歌のまゝ。
梅が枝にこそ鶯は巣をくへ風吹かばいかにせん花に宿る鶯（國大系明寂）……「経正」一〇五、原歌のまゝ。

二、勅撰集その一

（イ）古今集

八雲立つ出雲八重垣妻ごめに八重垣造るその八重垣を（序古註須佐男命、古事記参照）……「俊成忠度」一四四、原歌のまゝ。……「源太夫」一〇六、原歌のまゝ。……「大社」一五六「八雲立つ出雲八重垣妻ごめし」……「大蛇」一五九「立つや八雲の妻ともに八重垣造る言の葉の」……「絵馬」一四四「歌には八雲をさきとして」……「巻絹」三八〇「歌は出雲八重垣片そぎの」

難波津に咲くやこの花冬籠り今は春べと咲くやこの花（序古註王仁）……「蘆刈」六〇、原歌のまゝ。……「難波」三三〇、原歌のまゝ。……「雲林院」四五九「難波津に咲くやこの花冬ごもり今は現に……」「弱法師」三七〇「難波津の春ならばただこの花と……今は春べも半ばぞ」……「櫻川」一三二「冬ごもりして見えずとも今は春べになるものを」

浅香山影さへ見ゆる山の井の浅くは人をわが思はなくに（序古註采女、萬葉集参照）……「采女」四八「浅香山影さへ見ゆる山の井の浅くは人を思ふかの」……「志賀」二九八「浅香山の影見えし山の井の浅くは誰か思ひ草」……「養老」三三六「掬ぶ手の影さへ見ゆる山の井の」

わが戀はよむとも盡きじ荒磯海の濱の眞砂はよみ盡すとも（序古註）……「蘆刈」六二「わたづみの濱の眞砂によみ盡し盡すともこの道は」……「白樂天」三四七「ありそ海の濱の眞砂の數々に生きとし生ける」……「泰山府君」

一七五三 荒磯海の濱の眞砂の數々に事を盡すや」………「梅」四六 一荒磯海濱の眞砂はよみ盡とも歌の言葉の………「關寺小町」二六二五 一濱の眞砂は盡くるとも詠む言の葉はよも盡きじ」

※ 年の内に春は來にけり一年を去年とやいはむ今年とやいはむ （元方）………「繪馬」二四四 一年も立つ春を去年とやいはん年の暮」

※ 袖ひぢて掬びし水の凍れるを春立つ今日の風や解くらん （貫之）………「氷室」二六五八、原歌のまゝ。………「草子洗」二二九四 一春の歌を洗ひては霞の袖を解かうよ」

ヘ 雪の内に春は來にけり鶯の凍れる涙今や解くらん （二條后）………「羽長」三三九 一雪の内春は來にけり鶯の凍れる涙今ははや解けても………「放下僧」三四八 一鶯の凍れる涙解けそめて雪解の水の」

梅が枝に來居る鶯春かけて鳴けども未だ雪は降りつゝ （讀人不知）………「難波」三三七 一梅が枝に來居る鶯春かけて鳴けども雪はふるき」

春の日の光にあたるわれなれど頭の雪となるぞわびしき （康秀）………「龍虎」三六三 一白頭の雪とつみ積り積りて老が身の春の光にあたれどもわびしき業を………「小鹽」二四五八 一今白雪を戴くまで光にあたる春の日の

霞立ち木の芽も春の雪降れば花なき里も花ぞ散りける （貫之）………「求塚」三〇六三 一木の芽も春の淡雪に森の下草なほ寒し」

春日野は今日はな焼きそ若草の妻もこもれりわれも籠れり （讀人不知）………伊勢物語に見ゆ。

春日野の飛火の野守出でゝ見よ今幾日ありて若菜摘みてん （讀人不知）………「求塚」三〇六〇 一春日野の飛火の野守出でて見よ若菜摘まんも程あらじ」………「野守」二四四 一春日野の飛火の野守出でて見れば今幾程ぞ若菜摘む」「佐保山」二三七 一春日野の飛火の野守出でて見よと影さす月の」………「春日龍神」二六九 一飛火の野守も出でて見よと……

……〔二十八番〕三〇三「雪の下なる若菜をば今幾日ありて摘ままし」……〔小[illegible]〕一三一「心變りし春日野の雪間の野守出でてだに」

深山には松の雪だに消えなくに都は野邊の若菜摘みけり〔讀人不知〕……〔夫木〕三五三「深山には松の雪だに消えなくに都は野邊の若菜摘む頃かな」……〔二十八番〕三〇三「深山には松の雪だに消えなくに都は野邊の若菜摘む頃にも」

君がため春の野に出でゝ若菜摘むわが衣手に雪は降りつゝ〔光孝天皇〕……〔夫木〕三〇六「君がため春の野に出でゝ若菜摘むわが衣手寒し」……〔和布刈〕二三三「君がため春の野に出でゝ摘む若菜」

春の着る霞の衣ぬきをうすみ山風にこそ亂るべらなれ〔行平〕……〔佐保山〕三〇九「春日に着る霞の衣緯薄き雲の亂れも」

淺緑絲よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か〔遍昭〕……〔吉野天人〕三三〇「淺緑絲よりかけて白露の玉もて亂るる」……〔遊行柳〕三〇四「玉にもぬける春の柳の糸中にこれ」……〔當麻〕一四八「淺緑絲よりかけて春の柳は」

百千鳥囀る春は物毎に改まれどもわれぞ古り行く〔讀人不知〕……〔東岸居士〕二七七、原歌のまゝ。……〔西行櫻〕二三〇「百千鳥囀る春は物毎にあらたまり行く日數經て」

遠近のたづきも知らぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな〔讀人不知〕……〔雲雀山〕三〇〇「遠近のたづきも知らぬ山中におぼつかなくも呼子鳥の」……〔山姥〕三〇〇、〔雲雀山〕と同斷。……〔田村〕二九四「遠近のたづきも知らぬ山中におぼつかなくも思ひ給はゞ」……〔當麻〕一四八「われは誰をか呼子鳥たづきも知らぬ山中に聲立つる」〔紅葉狩〕三〇七「風遠近のたづきも知らぬ山中におぼつかなしや」……〔一角仙人〕二六八「たづきも知らぬ山中におぼつかなくも踏み迷ふ」……〔唐船〕八六八「呼ぶ子もあれば……たづきも知らず泣きゐたり」……〔清經〕八四「修羅道にをちこちのたづきは敵」

春来れば雁帰るなり白雪の道行きぶりに言やつてまし（躬恒）………〔隅田川〕一五三「白雪の道行き人に言傳てて行方を何と尋ぬらん」

※春霞立つを見捨てて行く雁は花なき里に住みや習へる（伊勢）………〔雲雀山〕二六五、原歌のまゝ。………〔三井寺〕二九六「都の秋を捨てて行かば月見ぬ里に住みや習へると」………〔熊野〕三三四「花を見捨つる雁がねのそれは越路」………〔賀茂物狂〕三四九「雁がねの花を見捨つる名殘まで」

鶯の笠に縫ふてふ梅の花折りてかざさん老隱るやと（源常）………〔小鹽〕三六二「若木の花の枝老隱るやとかざさん」………〔蘆刈〕一四一「名に負ふ梅の花笠縫ふてふ鳥の翼には」

※君ならで誰にか見せん梅の花色をも香をも知る人ぞ知る（友則）………〔藤〕一七七「咲く花の色をも香をも知る人ぞ知ると詠みし」………〔小督〕一〇四「深き情の色香をも知る人のみぞ花鳥の」………〔小鹽〕三四九「色をも香をも知る人ぞ知らずな」

梅の花匂ふ春べはくらぶ山闇に越ゆれどしるくぞありける（貫之）………〔梅〕四四九「移るその香は隱れなき闇にもしるき木蔭かな」

※春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隱るゝ（躬恒）………〔東北〕三三〇、原歌のまゝ。

※年を經て花の鏡となる水は散りかゝるをや曇るといふらん（伊勢）………〔櫻川〕一三六、原歌のまゝ。………〔昭君〕一五七「年を經て花の鏡となる水は散りかかる花や曇るらん」

年ふれば齢は老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし（良房）………〔小鹽〕三四八、原歌のまゝ。………〔雲林院〕四四「花をし思ふ心ゆゑ木隱れの月に」

※見てのみや人に語らん櫻花手毎に折りて家づとにせん（素性）………〔雲林院〕四六、原歌のまゝ。

※

見渡せば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける（素性）……「西行桜」二七・見渡せば柳桜をこきまぜて都は春の錦なりける」……「春栄」二六・見渡せば柳桜をこき交ぜて錦と見ゆる故郷の」……「右近」三四・見渡せば柳桜をこきまぜて錦を飾る花車」……「雲林院」四三・柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なる」……「遊行柳」三〇三「柳桜をこきまぜて錦をかざる都人の」……「嵯峨物狂」七五・柳桜をこきまぜて錦をさらす糸桜の

桜花咲きにけらしも足引の山のかひより見ゆる白雲（貫之）……「西行桜」二七・桜花咲きにけらしな足引の山のかひより見えし白雲」

あだなりと名にこそ立てれ桜花年に稀なる人も待ちけり（読人不知）……伊勢物語を見よ。

今日来ずは明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや（業平）……伊勢物語を見よ。

見る人もなき山里の桜花ほかの散りなん後ぞ咲かまし（伊勢）……「鞍馬天狗」九五「見る人もなき山里の桜花よその散りなん後にこそ咲かば」

この里に旅寝しぬべし桜花散りのまがひに家路忘れて（読人不知）……「西行桜」一四・家路忘れて諸共に今宵は花の下臥して」

いざ桜われも散りなん一盛りありなば人に憂き目見えなん（承均）……「泰山府君」七六「いざ桜われも散りなん一盛り誘ふ嵐も」

枝よりもあだに散りにし花なれば落ちても水の泡とこそなれ（高世）……「桜川」一七・梢よりあだに散りぬる花なれば落ちても水のあはれとぞ」

春風は花のあたりをよぎて吹け心づからやうつろふと見ん（好風）……「雲林院」四六、原歌のまゝ。……「桜川」一三七・御神木の花なれば風もよぎて吹き・

※

春雨の降るは涙か櫻花散るを惜しまぬ人しなければ（黒主）……「熊野」三五三「春雨の降るは涙か櫻花散るを惜しまぬ人やある」……「雲林院」四九「朧夜に降るは春雨か落つるは涙かと」……「籠太鼓」三五四「春雨の袂に咽ぶ心かた」

櫻花散りぬる風の名殘には水なき空に波ぞ立ちける（貫之）……「櫻川」三三〇「櫻花散りにし風の名殘には水たき空に波ぞ立つ」

いざ今日は春の山邊に交りなん暮れなばなげの花の蔭かは（素性）……「志賀」一三〇「いざ今日は春の山邊に交りなん暮れなばなげの花の蔭」……「雲林院」四六六「いざさらば木蔭の月に臥して見ん暮れなばなげの花衣」

梓弓春の山邊を越えくれば道もさりあへず花ぞ散りける（貫之）……「志賀」一三四「梓弓春の山邊を越えくれば道もさりあへず散る花の」

吉野川岸の山吹吹く風に底の影さへうつろひにけり（貫之）……「松山鏡」六八七「吉野の岸の山吹風吹けば底なる影も散れば散り」

梓弓春立ちしより年月のいるが如くも思ほゆるかな（躬恒）……「箙」五〇八「來る年の矢の生田川流れて早き月日かな」

花散れる水のまにまにとめくれば山には春もなくなりにけり（清原深養父）……「櫻川」三三〇「花散れる水のまにまにとめくれば山にも春はなくなりにけり」……「熊野」三四六「名も清き水のまにまにとめくれば川は音羽の山櫻」

五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする（讀人不知）……伊勢物語にも見ゆ。

音羽山今朝越えくれば郭公はるかに今ぞ鳴くなる（友則）……「志賀」一九二「音羽山今朝越え來れば[illegible]め」

五月雨に物思ひ居れば郭公夜深く鳴きていづち行くらん（友則）……〔飛鳥川〕一、原歌のまゝ。

蓮葉の濁りにしまぬ心もてなにかは露を玉と欺く（遍昭）……〔西行桜〕一五四「蓮葉の濁りにしまぬ心もてなにか
憂ひのあるべき」……〔常夏〕八四二「濁りにしまぬ蓮の露の色にいでて」

夏と秋と行きかふ空の通ひ路はかたへ涼しき風や吹くらん（躬恒）……〔水無月祓〕二七四「夏と秋行きかふ空の
通ひ路はかたへ涼しき風ぞ吹く」

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる（敏行）……〔東北〕六二五「秋来ぬと目にはさやかに
見えねども風の音かいかいかとも」……〔放生川〕四〇七「秋来ぬと目に
見ぬ〕三八〇「秋来ぬと目に見ぬ空はおのづから」……〔放下僧〕四九九「目に見ぬ秋を風に驚き」

昨日こそ早苗とりしかいつの間に稲葉そよぎて秋風の吹く（読人不知）……〔鳥追舟〕二六六「昨日や昨日の早苗
いつの間に稲葉もそよぐ」

木の間よりもり来る月の影見れば心づくしの秋は来にけり（読人不知）……〔阿漕〕九九「心づくしの秋風に木の
間の月ぞすくなき」……〔綾鼓〕一九「心づくしの木の間の月の桂にかけたる」……〔玉葛〕二九六「心づくしの木の間
の月雲居の」……〔絃上〕一〇四六「漏り来る月は木の間にて心尽くしの旅の道」……〔皇帝〕九九一「心づくしの春の夜の
木の間の月も朧にて」……〔金札〕八七二「木の間にたさん檜の木」

秋の野に人松虫の声すなりわれかと行きていざとぶらはん（読人不知）……〔松虫〕六〇、原歌のまゝ。

名にめでて折れるばかりぞ女郎花われ落ちにきと人に語るな（遍昭）……〔女郎花〕三四九二、原歌のまゝ。……
…〔小督〕二二〇「女郎花われも憂き世のさがの身ぞ人に語るな」

女郎花憂しと見つつぞ行き過ぐる男山にし立てりと思へば（今道）……〔女郎花〕三四九一、原歌のまゝ。

※女郎花多かる野邊に宿りせばあやなく仇の名をや立ちなん（美材）………「女郎花」三九〇「女郎花の多かる花にとりわきて」

※女郎花うしろめたくも見ゆるかな荒れたる宿に獨り立てれば（兼覽王）………「女郎花」三九三「女郎花うしろめたくや思ふらん女郎と書ける」

※われのみやあはれと思はんきりぎりす鳴く夕陰のやまと撫子（素性）………「蟬丸」六八二「松蟲鈴蟲きりぎりすの鳴くや夕陰の山科の」

※白露も時雨もいたくもる山は下葉殘らず色づきにけり（貫之）………「飛雲」六一七「白露も時雨もいたくもる山は下葉殘らぬもみぢ葉を」………「六浦」三〇六「露時雨もる山は下葉殘らぬ色とかや」………「烏帽子折」四七「守山の下葉色照る日の影も」

※誰が爲の錦なればか秋霧の佐保の山邊をたち隱すらん（友則）………「佐保山」一七六、原歌のまゝ。

※濡れてほす山路の菊の露の間にいつか千年をわれは經にけん（素性）………「俊寛」四七「濡れて干す山路の菊の露の間にわれも千年を經る心地する」………「養老」三二六「菊の水その養ひの露の間に千年を經るや」

※龍田川紅葉亂れて流るめり渡らば錦中や絶えなん（讀人不知）………「龍田」一九四、原歌のまゝ。………「紅葉狩」三〇八「流れもやらぬもみぢ葉を渡らば錦中絶えんと」

※霜のたて露のぬきこそ弱からし山の錦のおればかつ散る（關雄）………「芭蕉」四一「霜の經緯の緯こそ弱からし草の袂も」

※見る人もなくて散りぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり（貫之）………「逆矛」三〇五「紅葉も徒らにたゞ闇の夜の錦なり」

※

※

山川に風のかけたる柵は流れもあへぬ紅葉なりけり（列樹）……〔紅葉狩〕一六八「山川に風のかけたる柵は流れもやらぬもみぢ葉を」

年毎にもみぢ葉流す龍田川湊や秋の泊りなるらん（貫之）……〔龍田〕一九二「年毎にもみぢ葉流す龍田川湊や秋の泊りたる山も」

龍田川錦織りかく神無月しぐれの雨をたてぬきにして（読人不知）……〔逆矛〕二三四「龍田川錦織りかく神無月色づく秋の」……〔龍田〕一九六「龍田川錦織りかく神無月の冬川になるまで」

山里は冬ぞさみしさまさりける人目も草もかれぬと思へば（宗于）……〔砧〕八九「秋の暮人目も草も枯れ枯れの契りも絶え果てゝ」

わが宿は雪降りしきて道もなし踏み分けて訪ふ人しなければ（読人不知）……〔求塚〕三四「道たしとても踏み分けて野澤の」

梅の花それとも見えず久方の天ぎる雪のなべて降れれば（読人不知）……〔東北〕三九四「久方の天ぎる雪のなべて世に聞えたる」……〔絵馬〕二四六「天ぎる雪のなべて降るこれ等は……〔老松〕五五「天ぎる雪の古枝なるたは

昨日といひ今日と暮らして飛鳥川流れて早き月日なりけり（列樹）……〔通盛〕六八八「昨日過ぎ今日と暮れ明日またかくこそ……」〔錦木〕二四五「身になす事は淀川流れて早き月日かな」

わが君は千代に八千代にさざれ石の巌となりて苔のむすまで（読人不知、和漢朗詠集には「君が代は千代に……とある）……〔弓八幡〕三三四「君が代は千代に八千代にさざれ石の巌となりて苔のむす松の」……〔老松〕五五「神松の千代に八千代にさざれ石の巌となりて苔のむすまで」……〔養老〕三三三「さざれ石の巌となりて苔のむす千代に八千代のためしまで」……〔春栄〕三四八「千代に八千代にさざれ石の祝ふ心は……〔呉服〕九六「君が代は……

撫づとも盡きぬ巖ならなん千代に八千代を松の葉の」

わたつみの濱の眞砂を數へつゝ君が千年のあり數にせん（讀人不知）……「繪馬」三四四「濱の眞砂を數へても君が千年のある數をたとへても」

千早振る神のきりけんつくからに千年の坂も越えぬべらなり（遍昭）……「蟬丸」一六七「つくからに千歳の坂をも越えなんどかの遍昭が」

徒らに過ぐる月日はおもほえで花見て暮らす春ぞ少き（興風）……「錦木」二五「いたづらに過ぐる心は多けれど」

春日野に若菜摘みつゝ萬代を祝ふ心は神ぞ知るらん（素性）……「難波」三九「春日野に若菜摘みつゝ萬代を祝ふなる心ぞしるき」

住の江の松を秋風吹くからに聲うち添ふる沖つ白波（躬恒）……「松尾」一六五「住の江の浦傳ひ……吹くや岸野の秋の草葉も靡きて沖つ波」

立ち別れいなばの山の峯に生ふるまつとし聞かば今歸り來ん（行平）……「松風」一八七「唯歌の……」「戀重荷」二六五「立ち別れ稻葉の山風吹き亂れ」

命だに心に叶ふものならば何か別れの悲しからまし（しろめ）……「俊成忠度」一四一「命だに心に叶ふものならば何か別れのものの憂かるべき」

君が行く越の白山知らねども雪のまにまに跡は尋ねん（兼輔）……「花筐」三六六「君が住む越の白山知らねども行きても見まし……」「歌占」五三「君が住む越の白山知らねども古りにし人の……」「佛原」二六八「道なき雪の白山知らざりしそなたの」

※

※天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも（仲麿）……〔野守〕四二一「天の原ふりさけ見ると霞めける三笠の山陰の月かも」……〔谷行〕一九四「ふりさけ見れば春日なる三笠の山をさし過ぎて」

※わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと人には告げよ海士の釣舟（篁）……〔[illegible]〕三二六「天の原八十島かけて漕ぎ出づる船路の末も」

※都出でて今日みかの原泉川川風寒し衣かせ山（読人不知）……〔谷行〕一九四「都出で今日みかの原泉川川風寒いい鳥啼く」

ほのぼのと明石の浦の朝霧に島隠れ行く舟をしぞ思ふ（読人不知）……〔草子洗〕二八七、原歌のまゝ。……〔住吉詣〕二〇七「ほのぼのと明石の浦わの舟をし思ひの別れかな」……〔俊成忠度〕二四四「明石の浦の朝霧と詠みしも」……〔知章〕三〇八「うつす[illegible]島の島隠れ行く舟を惜しと思ふ」

唐衣着つゝ馴れにし妻しあれば遥々来ぬる旅をしぞ思ふ（業平）……伊勢物語を見よ。

名にし負はばいざ言問はん都鳥わが思ふ人はありやなしやと（業平）……伊勢物語を見よ。

山隠す春の霞ぞ恨めしきいづれ都のさかひなるらん（おとど）……〔[illegible]〕八二「山隠す霞ぞ春は恨めしきに」

この度は幣もとりあへず手向山紅葉の錦神のまにまに（道真）……〔龍田〕一九八「この度は幣とりあへ[illegible]折たるに心して吹け嵐紅葉を幣の神慮」

手向にはつゞりの袖も切るべきに紅葉に飽ける神や返さん（素性）……〔谷行〕一九四「手向にはつゞりの袖も切るべきに別れは」

散りぬれば後は芥になる花を思ひ知らずもまどふ蝶かな（遍昭）……〔櫻川〕三三六「散りぬれば後は芥になる花と思ひ知る」……〔雲林院〕四六〇「遍昭がつられし花の散り積る芥川」

秋來れど月の桂の實やはなる光を花と散らすばかりを（源）……「融」一二三三「さすや桂の枝々に光を花と散らす粧ひ」

時鳥鳴くや五月のあやめ草あやめも知らぬ戀もするかな（讀人不知）……「草紙洗」一八八二「時鳥花橘の香をとめて鳴くや五月のあやめ草」

音羽山音に聞きつつ逢坂の關のこなたに年を經るかな（元方）……「融」一二二七「音羽山音に聞きつつ逢坂の關のこなたにと詠みたれば……」「源氏供養」一〇九九「音羽の瀧をよそに見て關のこなたの朝霞……」「蟬丸」一六八一「關のこなたと思ひしに後になるや音羽山の」

春日野の雪間を分けて生ひ出でくる草のはつかに見えし君はも（忠岑）……「班女」一六〇三「春日野の雪間を分けて生ひ出でくる草のはつかに見えし君かも」

夕暮は雲の旗手に物ぞ思ふ天つ空なる人を戀ふとて（讀人不知）……「班女」一六〇三「夕暮の雲の旗手に物を思ひうはの空にあくがれ」

吉野川岩切り通し行く水の音には立てじ戀は死ぬとも（讀人不知）……「戀重荷」一一六四「吉野川岩切り通し行く、水の音には立てじ戀ひ死にし」

戀せじと御手洗川にせし御祓神はうけずぞなりにけらしも（讀人不知）……伊勢物語を見よ

あはれてふ言だになくは何をかは戀の亂れの束ね緒にせん（讀人不知）……「戀重荷」一一七〇「あはれてふ言だになくは何をさて戀の亂れの束ね緒も絶え果てぬ」

涙川なに水上を尋ねけん物思ふ時のわが身なりけり（讀人不知）……「俊寬」一四七一「涙川水上はわれなるものを」

行く水に數書くよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり（讀人不知）……〔水無月祓〕三〇四「行く水に數書くよりもはかなきは思はぬ人を思ひ寝の……〔竹雪〕一八四「行く水に數ならぬ身は有明の……〔錦木〕二四五「思はぬ人を思ひ寝の夢か」

思ひつゝ寝ればや人の見えつらん夢と知りせばさめざらましを（小町）……〔關寺小町〕一六八「思ひつつ寝ればや人の見えつらんと詠みしも」

うたた寝に戀しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき（小町）……〔清經〕六四七、原歌のまゝ。

いとせめて戀しき時は烏羽玉の夜の衣をかへしてぞ寝る（小町）……〔鳥追舟〕一一九「いとせめて戀しき時は烏羽玉の夜の衣をうちかへし夢にも……〔砧〕五一六「うば玉の夜の衣を返しつゝ更に行くまゝに……〔井筒〕四一〇「昔を返す衣手に夢待ちそへて」

包めども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬめの涙なりけり（清行）……〔籠太鼓〕三九二「包めども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬ目の涙かな……〔關寺小町〕一六七「包めども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬ目の涙の雨」

五月山梢を高み時鳥鳴く音そらなる戀もするかな（貫之）……〔飛鳥川〕七一「五月山梢を高み時鳥鳴く音そらなる戀やする」

宵々にぬぎてわが寝る狩衣かけて思はぬ時のまもなし（友則）……〔松風〕一八五「宵々にぬぎてわが寝る狩衣かけてぞ頼む同じ世に」

起きもせず寝もせで夜を明かしては春のものとてながめ暮らしつ（業平）……伊勢物語を見よ。

有明のつれなく見えし別れより曉ばかり憂きものはなし（忠岑）……〔龍虎〕三二三「有明のつれなき命ながらへて……〔放下僧〕二四〇「有明のつれなきながらながらふる……〔祇王〕八六二「有明月の影ともに面つれなき心と

∴

は………〔花筐〕五八三「有明のつれなき春もすぎま吹く………〔土車〕三〇七「御情は有明のつれなくも御通り」
君や來しわれや行きけん思ほえず夢か現か寢てかさめてか（讀人不知）………伊勢物語を見よ。
かきくらす心の闇にまどひにき夢現とは世人定めよ（業平）………伊勢物語を見よ。
うば玉の闇の現はさだかなる夢にいくらもまさらざりけり（讀人不知）………〔夕顔〕三二五「鳥羽玉の闇の現の人もなく」
君が名もわが名も立てじ難波なるみつともいふな逢ひきともいはじ（讀人不知）………〔盧刈〕四八「難波なる見つとはいはじかかる身に」
陸奧の淺香の沼の花かつみかつ見る人に戀ひや渡らん（讀人不知）………〔花筐〕五九〇「陸奧の淺香の沼の花かつみかつ見し人を戀草の」
さむしろに衣片しき今宵もや我を待つらん宇治の橋姫（讀人不知）………〔江口〕四八七「宇治の橋姫も訪はんともせぬ人を待つも」
天の原踏み轟かし鳴神も思ふ中をばさくるものかは（讀人不知）………〔綾鼓〕二四「何となる神も思ふ中をばさけぬとこそ聞きしものを」………〔鐵輪〕七〇七「鳴る神も思ふ中をば避けられし」
數々に思ひ思はず問ひがたみ身を知る雨は降りぞまされる（業平）………伊勢物語を見よ。
大幣の引く手あまたになりぬれば思へどえこそ賴まざりけれ（讀人不知）………伊勢物語を見よ。
僞りのなき世なりせばいかばかり人の言の葉嬉しからまし（讀人不知）………〔砧〕六二〇「僞りのなき世なりせば如何ばかり人の言の葉嬉しからん」
陸奧のしのぶもぢずり誰ゆゑに亂れんと思ふわれならなくに（融、伊勢物語參照）………〔小鹽〕二四七「陸奧の忍

ぶもぢずり誰ゆゑに亂れんと思ふわれならなくに……〔錦木〕二五「陸奥の信夫もぢずりの誰ゆゑに亂れそめにしわれならと……〔花筐〕二四〇「[illegible]の忍ぶもぢずりの誰ゆゑぞ亂れ心は君の爲……〔賀茂物狂〕二八四「思ひ亂れし信夫[illegible]の[illegible]を如何にと[illegible]……〔[illegible]〕三六五「忍ぶもぢずり誰ゆゑ[illegible]……〔[illegible]〕一二五「[illegible]陸奥の忍ぶもぢずりの誰ゆゑ[illegible]……〔采女〕四八「陸奥の忍ぶもぢずり誰[illegible]

形見こそ今はあだなれこれなくは忘るる時もあらましものを（讀人不知）……伊勢物語に見ゆ。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身一つはもとの身にして（業平）……伊勢物語に見ゆ。

逢ひに逢ひて物思ふ頃のわが袖に宿る月さへ濡るる顔なる（伊勢）……〔楊貴妃〕二一八「[illegible]月影も濡るる顔なる袂かな」

曉の鴫の羽搔きももはがき君が來ぬ夜はわれぞ數かく（讀人不知、千載集[illegible]）……〔卒都婆小町〕七九「曉の榻の端書百夜までと通ひて」

世の中の人の心は花染のうつろひやすき色にぞありける（讀人不知）……〔賀茂物狂〕二七三「人の心は花染の移ろひ易き頃も過ぎ」

色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける（小町）……〔關寺小町〕二六七「色見えで――うつろふものは世の中の人の心の花に見ゆる……〔西王母〕三五一「うつろふものは世の中の人の心の花ならぬ」

海士の刈る藻に棲む蟲のわれからと音をこそ泣かめ世をば恨みじ（直子）……〔阿漕〕七、〔[illegible]〕のとゝ、……〔藤戸〕一七四「海士の刈る藻にすむ蟲のわれからと音をこそ泣かめ世をばげに何か恨みん」……〔海士〕一七三「海士の刈る藻にすむ蟲にあらねどもわれから濡らす袂かな」……〔錦木〕二三五「われからの藻にすむ蟲の音に泣きて」

流れては妹背の山の中に落つる吉野の川のよしや世の中（讀人不知）……〔弱法師〕三二八「流れては妹背の山の

△ ※

中に落つる吉野の川のよしや世と思ひも……「錦木」一二三五 流れては妹背の中の川と聞く吉野の山は……「船橋」三七四 よしや吉野の山ならねどもこれも妹背の中川の

泣く涙雨と降らなん渡り川水まさりなば歸り來るがに（篁）……「船橋」三七三 原歌のまゝ

深草の野邊の櫻し心あらば今年ばかりは墨染に咲け（岑雄）……「墨染櫻」一五〇七 深草の野邊の櫻し心あらばこの春ばかり墨染に咲け」

先だたぬ悔の八千度悲しきは流るゝ水の歸り來ぬなり（閑院）……「身延」一五五二 先だたぬ悔の八千度悲しきには流るゝ悦びの涙……「現在七面」一〇七 罪科を悔の八千度身をかこち……「砧」六六六 さきだたぬ悔の八千度百夜草……「櫻川」二三七 今はさきだたぬ悔の八千度百千鳥

神無月時雨に濡るゝもみぢ葉は唯わび人の袂なりけり（躬恒）……「草子洗」三九五 時雨に濡れて濃ひしは紅葉の錦なりけり」

皆人は花の衣になりぬなり苔の衣よかわきだにせよ（遍昭）……「墨染櫻」一五三三 皆人は花の衣になり果てぬ苔の袂やせめてなど」

昔まで煙絶えにし鹽竈のうらさみしくも見え渡るかな（貫之）……「融」二二六 原歌のまゝ

嬉しきを何に包まん唐衣袂ゆたかにたてといはましを（讀人不知）……「小督」一一〇九 嬉しさを何に包まん唐衣ゆたかに袖うち合はせ……「七騎落」三三一 嬉し泣きの涙は何かつゝまん唐衣……「夕顔」一三三九 [illegible]の衣の袖ながら今宵は何を包まん」

紫の一本ゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る（讀人不知）……「雲林院」四六八 紫の一本ゆかりの[illegible]

日の光やぶしわかねば石の上ふりにし里に花も咲きけり（今道）……「井筒」四〇五 石の上古りにし里も花の春

大原や小鹽の山も今日こそは神代の事も思ひ出づらめ（業平）………伊勢物語を見よ。

天つ風雲の通ひ路吹き閉ぢよ少女の姿暫し留めん（宗貞）………「羽衣」二四五」天つ風雲の通ひ路吹き閉ぢよ少女の姿暫し留まりて………「吉野天人」二九五」天つ風雲の通ひ路吹き閉づるや少女の姿留まる作の………「泰山府君」一七三六」天つ風雲の通ひ路吹き閉ぢよ少女の姿暫しだに留めかねたる………「寝覚」二四〇」天つ風雲の通ひ路吹き閉ぢよ少女の衣色々に………「定家」三一〇」雲の通ひ路絶え果てて少女の姿とどめ得ぬ………「西王母」二五四」天つ風雲の通ひ路心せよ」

形こそ深山がくれの朽木なれ心は花になさばなりなん（兼藝）………「小鹽」二四九」姿こそ山のかせきに似たりとも心は花にならばこそなほにならめや」

わが心慰めかねつ更科や姨捨山に照る月を見て（讀人不知）………「姨捨」三四五、原歌のまゝ。

おほかたは月をもめでじこれぞこの積れば人の老となるもの（業平）………伊勢物語を見よ。

今こそあれわれも昔は男山榮ゆく時もありこしものを（讀人不知）………「弓八幡」三三三」神代も榮ゆく男山………「放生川」二四三」榮ゆくや男山………「女郎花」二九一」男山榮ゆく道のありがたさよ」

鏡山いざ立ち寄りて見て行かん年經ぬる身は老やしぬると（黒主）………「志賀」二三三」鏡山年經ぬる身は老の身の………「盛久」三九七」立ち寄る影は鏡山さのみ年經ぬ身なれども………「松山鏡」三八三」鏡山立ち寄り給へ」

老いぬればさらぬ別れもありといへばいよいよ見まくほしき君かな（業平母）………伊勢物語を見よ。

世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もと歎く人の子のため（業平）………伊勢物語を見よ。

千早ぶる宇治の橋守なれをしぞあはれとは思ふ年の經ぬれば（讀人不知）………「頼政」三三四」宇治の橋守年を經て老の波も」

※われ見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫松幾代經ぬらん（讀人不知）……伊勢物語を見よ。

※誰をかも知る人にせん高砂の松も昔の友ならなくに（興風）……〔高砂〕一六六二「誰をかも知る人にせん高砂の松も昔の友ならで」……〔鞍馬天狗〕九五三「誰をかも知る人にせん高砂の松も昔の友鳥の」

わたつみの插頭にさせる白妙の波もてゆへる淡路島山（讀人不知）……〔淡路〕一五二「わたづみの插頭に插せる白玉の波もて結へる淡路島月春の」……〔梅枝〕四四六「住吉の松の隙より眺むれば波もて結へる淡路潟」

雨により田簑の島を今日行けば名には隱れぬものにぞありける（貫之）……〔蟬丸〕一六七「雨による田簑の島と詠み置きつる」……〔蘆刈〕五四「雨に着る田簑の島もあるなれば」

裁ち縫はぬ衣著し人もなきものをなに山姫の布晒すらん（伊勢）……〔室君〕三〇三、原歌のまゝ。……〔佐保山〕三七〇、原歌のまゝ。

落ちたぎつ瀧の水上年積り老いにけらしな黑き筋なし（忠岑）……〔賀茂〕七三九「波まぬ音羽の瀧波は受けて頭の雪とのみ」

世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵は今日の瀬になる（讀人不知）……〔飛鳥川〕七一、原歌のまゝ。

都人いかにと問はゞ山高み晴れぬ雲居にわぶと答へよ（貞樹）……〔祇王〕八六二「都人如何にと問はゞ山高み晴れぬ思ひにかきくれて」

わびぬれば身を浮草の根を絶えて誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ（小町）……〔關寺小町〕一六二六、原歌のまゝ。……〔卒都婆小町〕二七〇「身は浮草を誘ふ水なきこそ悲しかりけれ……〔野宮〕一四三二「身は浮草の寄るべなき心の水に誘はれて……〔檜垣〕三六五「ねをこそ絶ゆれ浮草の水は運びて」

世の中は夢か現か現とも夢とも知らずありてなければ（讀人不知）……〔善界〕一六三二「世の中は夢か現か現

とも夢ともいさや白雲の」

山里はものの寂しき事こそあれ世の憂きよりは住みよかりけり（讀人不知、平家物語卷四）……〔大原御幸〕一五八「山里はものの寂しき事こそあれ世の憂きよりはなかなかに」

思ひきや鄙の別れに衰へて海士の縄たぎいさりせんとは（篁）……〔櫻川〕三三一「天ざかる鄙の長路に衰へにし」

わくらはに問ふ人あらば須磨の浦に藻鹽たれつつわぶと答へよ（行平）……〔松風〕三八三、原歌のまま。……〔忠度〕一九八、原歌のまま。……〔敦盛〕二七「問はばこそ獨りわぶとも答へまし須磨の浦藻鹽誰とも知られなば」……〔絃上〕二〇四九「わくらはに問ふ人 あらば侘ぶと答へてこの須磨の浦の」

わが庵は三輪の山もと戀しくはとぶらひ來ませ杉立てる門（讀人不知）……〔三輪〕三九〇「わが庵は三輪の山もと戀しくはと詠み　とぶらひ來ませ杉立てる門」……〔玉葛〕二九五八「法のしるしや三輪の杉山本行けば」……〔谷行〕一九四四「布留の神杉過ぎがてに三輪の山もとよそに見て誰わが庵と」

わが庵は都の巽しかぞ住む世を宇治山と人はいふなり（喜撰）……〔頼政〕三〇二、原歌のまま。

神無月時雨降りおける楢の葉の名に負ふ宮のふることぞこれ（有季）……〔玉葛〕二九五八「楢の葉の名におふ宮の古ことを思ひつづけて」……〔千手〕二七〇「神無月時雨降りおく奈良坂や」……〔大佛供養〕二七五二「楢の葉の時雨降りおく天が下に」

呉竹の世々のふることなかりせば（中略）これを思へばいにしへも藥けがせるけだものの雲に吠えけん心地して千々の情もおもほえず（後略、忠岑）……〔春榮〕一四一六「今の心は獸の雲に吠えけん心地して千々の情ありがたき」

うち渡す遠方人に物申すわれそのそこに白く咲けるはなにの花ぞも（讀人不知）……〔半蔀〕一五〇五「うち渡す

遠方人に問ふとてもそれその花と答へずは……〔頼政〕三七四「うち渡す遠方人にもの申すわれ頼政が」

山吹の花色衣ぬしやたれ問へど答へず口なしにして（素性）……〔仲光〕二三〇「問へともいはぬ口なしのこは誰が爲なれば」

いくばくの田を作ればか時鳥四手の田長を朝な朝な呼ぶ（敏行）……〔飛鳥川〕三一、原歌のまゝ。

秋の野になまめき立てる女郎花あなかしがまし花も一時（遍昭）……〔女郎花〕二四九二「なまめき立てる女郎花うしろめたくや」……〔祇王〕八六四「舞人のなまめき立てる女郎花」

秋風にほころびぬらし藤袴つゞりさせてふきりぎりす鳴く（棟梁）……〔錦木〕三三五「きりぎりすつゞりさせよと鳴く蟲の衣のためか」……〔松蟲〕六六五「きりはたりちやうつゞりさせてふ蟋蟀茅蜩」

枕よりあとより戀のせめくればせん方なみぞ床なかになる（讀人不知）……〔松風〕六六五「枕よりあとより戀のせめくればせん方涙に伏し沈む」

難波なる長柄の橋も造るなり今はわが身を何にたとへん（伊勢）……〔難波〕三三六「君が代の長柄の橋も造るなり難波の春も幾久し」

標結ふ葛城山に降る雪の間なく時なく思ほゆるかな（大貮所御歌）……〔葛城〕六九五「標結ふ葛城山に降る雪の間なく時なく思ほゆるかな」……〔代主〕二四八、「葛城」と同斷。

青柳を片絲によりて鶯の縫ふてふ笠は梅の花笠（大貮所御歌）……〔老松〕五五四「梅の花笠[illegible]」……〔蘆刈〕五四「梅の花笠縫ふてふ鳥の翼には」

陸奥はいづくはあれど鹽竈の浦漕ぐ舟の綱手かなしも（東歌）……〔融〕三三二「陸奥はいづくはあれど鹽竈の浦みて渡る」

後撰集

御侍御笠と申せ宮城野の木の下露は雨にまされり（東歌）……「蝉丸」二六七七「御侍御笠と申せと詠み置きつる」
最上川のぼれば下る稲舟の否にはあらずこの月ばかり（東歌）……「正尊」二六六一「否にはあらず稲舟の上れば下
る事もいさ」……「住吉詣」二五五七「のぼれば下るや稲舟の物事も」
君をおきてあだし心をわが持たば末の松山波も越えなん（東歌）……「清経」八六六「末の松山千代までとかけし頼み
はあだ波の」……「班女」三六〇「末の松山波越えて帰らずりし」……「善知鳥」九二一「末の松山風荒れて袖に波越す沖
の石」
こよろぎの磯たちならし磯菜摘むめざし濡らすな沖にをれ波（東歌）……「和布刈」三三七二「こゆるぎの磯菜摘む
めざし濡らすな沖に居れ波」
筑波根のこのもかのもに陰はあれど君が御かげにますかげはなし（東歌）……「櫻川」一六八「筑波山このもかの
もの花盛り」
わがせこが来べき宵なりさゝがにの蜘蛛のふるまひかねてしるしも（衣通姫）……「関寺小町」二六六「原歌の
まゝ。」……「土蜘蛛」三〇六〇「わがせこが来べき宵なりさゝがにの蜘蛛の振舞かねてより」
道知らば摘みにも行かん住の江の岸に生ふてふ恋忘れ草（貫之）……「梅枝」四五一「恋忘れ草も住吉の岸に生ふて
ふ花なれば手折りやせまし」……「住吉詣」二五四六「摘めを早く住吉の岸に生ふてふ草ならん」

三、勅撰集　その二

(ロ) 後撰集

降る雪の蓑代衣うち着つつ春来にけりと驚かれぬる（敏行）……「鵜祭」四一三「降る雪の蓑代衣袖さえて春待ちわ

ぶる心かな」

春霞たなびきにけり久方の月の桂も花や咲くらん（貫之）……〔羽衣〕二四三「春霞たなびきにけり久方の月の桂の花や咲くげに……」〔三山〕三九三「光散る月の桂も花ぞかし」

春來れば木隠れ多き夕月夜おぼつかなくも花かげにして（讀人不知）……〔雲林院〕四六四「夕映の花をし思ふ心ゆゑ木隠れの月に現れぬ」

常よりも春べになれば櫻川波の花こそ間なく寄すらめ（貫之）……〔櫻川〕二三三、原歌のまゝ。

折りつれば手ぶさにけがる立てながら三世の佛に花奉る（遍昭）……〔女郎花〕二四九「折りとらば手ぶさにけがる立てながら三世の佛に花奉る」……〔半蔀〕三四九「手に取ればたぶさに穢る立てながら三世の佛に花奉る」

いひそめし昔の宿の杜若色ばかりこそ形見なりけれ（義方）……〔杜若〕六六八「植ゑ置きし昔の宿の杜若色ばかりこそ昔なりけれ」

宿もせに植ゑならべつつぞわれは見る招く尾花に人やとまると（伊勢）……〔通小町〕七六八「われも穂に出でて尾花招かば留まれかし」

もみぢ葉を分けつつ行けば錦着て家に歸ると人や見るらん（讀人不知）……〔實盛〕一三〇、原歌のまゝ。

思ひ川絶えず流るる水の泡のうたかた人に逢はで消えめや（伊勢）……〔夕顔〕三二五「思ひ川うたかた人は息絶えて」

呉織あやに戀しくありしかば二村山も越えずなりにき（諸貫）……〔呉服〕九八「呉織あやに戀しくありしかば二村山と詠みし」

小山田の苗代水は絶えぬとも心の池のいひははなたじ（讀人不知）……〔綾鼓〕一七七「小山田の苗代水は絶えずい

とも心の池のいひは離さじ」………〔實盛〕三三六「心の池といひがたき修羅の」

嵯峨の山御幸絶えにし芹川の千代の古道跡はありけり（行平）………〔松尾〕六四三「嵯峨の山御幸絶えにし芹川の千代の古道跡ふりて」………〔小督〕一二四「嵯峨の山御幸絶えにし跡ながら千代の古道たどり來し」………〔中將〕七三「浮世の嵯峨なれや今の古道跡深き」

翁さび人な咎めそ狩衣今日ばかりとぞ田鶴もなくなる（業平）………伊勢物語を見よ。

これやこの行くも歸るも別れてはイつつ知るも知らぬも逢坂の關（蟬丸）………〔盛久〕三七七、原歌のまゝ。………〔安宅〕八三「これやこの行くも歸るも別れては知るも知らぬも逢坂の山隱す」………〔第六天〕二七九「これやこの行くも歸るも逢坂の」………〔蟬丸〕二六八「逢坂の知るも知らぬもこれ見よや」

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな（兼輔）………〔隅田川〕二五三「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に迷ふとは」………〔木賊〕三二四、〔隅田川〕と同斷。………〔藤戸〕三七五、〔隅田川〕と同斷。………〔元服曾我〕二〇八「人の親の迷ふ事をことの闇にはあらねども子を思ふ道にはたどるといふ」………〔百萬〕三六七「親子の道にまとはりて猶この闇を晴れやらぬ」………〔藍染川〕三七七「法族の心は子にや迷ふらん」

※

年經ればわが黑髮も白川のみづはぐむまで老いにけるかな（檜垣嫗）………〔檜垣〕六七、原歌のまゝ。

たらちめはかかれとてしも烏羽玉のわが黑髮を撫でずやありけん（遍昭）………〔春榮〕一四三「烏羽玉のわが黑髮の裾を切り……一筋を千筋と撫でさせ給ひし髮を」

世の中といひつるものはかげろふのあるかなきかのほどにぞありける（讀人不知）………〔經政〕一六七「あるかなきかにかげろふのまぼろしの常なき身とて」

信濃なる淺間の山も燃ゆなれば富士の煙のかひやなからん（駿河）………〔富士太鼓〕六九「信濃なる淺間の嶽も

燃ゆるといへば富士の煙のかひやなからん」

いとどしく過ぎ行く方の戀しきに羨ましくも歸る波かな（業平）……伊勢物語を見よ。

大原や小鹽の山の小松原はや木高かれ千代の影見ん（貫之）……〔小鹽〕一四〇〇「大原や小鹽の山の小松原より煙る霞の」

(ハ) 拾遺集

∵ 春立つといふばかりにや三吉野の山も霞みて今朝は見ゆらん（忠岑）……〔二人靜〕三七三「春立つといふばかりにや三吉野の山も霞みて白雪の」

春立ちてあしたの原の雪見ればまだふる年の心地こそすれ（祐擧）……〔求塚〕三六七「春立ちてあしたの原の雪見ればまだふる年の心地して」

△ わが宿の梅の立枝や見えつらん思ひの外に君が來ませる（兼盛）……〔江口〕四九九、原歌のまゝ。……〔右近〕三四一「梅が枝の立枝も見えて紅の」

∵ 子の日する野邊に小松のなかりせば千代のためしに何を引かまし（忠岑）……〔鶴龜〕三九九「千代のためしの數々に何を引かまし姫小松の」

※ 春の田を人に任せてわれは唯花に心をつくる頃かな（齋宮內侍）……〔淡路〕四三一「春の田を人に任せてわれは唯花に心の憧るる」

∵ 櫻狩雨は降り來ぬ同じくは濡るとも花の蔭に隠れん（讀人不知）……〔右近〕三四一「櫻狩雨は降りきぬ同じくは濡るとも花の蔭ならば」……〔雲雀山〕三四一「櫻狩雨は降りきぬ同じくは濡るとも花の木蔭に宿らん」

∵ 櫻散る木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞ降りける（貫之）……〔昭君〕一五八〇「散りかゝる花の木蔭に宿る

れは空に知られぬ雪ぞ降る」……〔竹雪〕六八五「空に知られて木の下に吹き立てて降る雪は」

花の色に染めし袂の惜しければ衣替へ憂き今日にもあるかな（重之）……〔雲林院〕六四六「花色に染めし袂の惜しければ衣替へ憂き今日にぞありける」

行きやらで山路暮らしつ時鳥今一聲の聞かまほしさに（公忠）……〔賀茂〕七五五「時鳥なほ過ぎまでに行きやらで今一通り村雨の」……〔隅田川〕一五三「今一聲こそ聞かまほしけれ南無阿彌陀佛」

さばへなす荒ぶる神もおしなべて今日はなごしの祓へなりけり（長能）……〔水無月祓〕一九四「さばへなす荒ぶる神もおしなめて今日はなごしの祓へなるらん」……〔金札〕六七六「狹蠅なすあらぶる神も祓へのひもろぎ」

八重葎茂れる宿のさみしきに人こそ見えね秋は來にけり（惠慶）……〔紅葉狩〕三八一「八重葎茂れる宿のさみしきに人こそ見えね秋の來て」

逢坂の關の岩角踏みならし山立ち出づるきりはらの駒（高遠）……〔關原與市〕一六九「關原の山の岩角踏みならし駒うちつづく」

逢坂の關の清水に影見えて今や引くらん望月の駒（貫之）……〔蟬丸〕二六一、原歌のまゝ。……〔蟻通〕二二一「逢坂の關の清水に影見ゆる月毛のこの駒を引き立て」……〔烏帽子折〕三三七「逢坂の關路の駒の後に立ちて」

水の面に照る月なみを數ふれば今宵ぞ秋の最中なりける（順）……〔融〕二二三「水の面に照る月なみを數ふれば今宵ぞ秋の最中なる」……〔三井寺〕三九七「水の面に照る月なみを數ふれば秋も最中夜もなかば」

わが宿の菊の白露今日毎に幾代積りて淵となるらん（元輔）……〔邯鄲〕七五五、原歌のまゝ。……〔大瓶猩々〕一七五「菊の露積りて盡きぬこの泉盡きせぬ宿に」……〔三笑〕二六七「菊の白露積り積つて……幾萬代も限らじな」……〔菊慈童〕八二一「菊の葉に……滴りも匂ひ淵ともなるや谷陰の水の」

蘆の葉に隠れて住みし津の國のこやもあらはに冬は來にけり　（重之）……一「蘆刈」兲一包み井の隠れて住める小屋の戸を」

※

思ひかね妹がり行けば冬の夜の川風寒み千鳥鳴くなり　（貫之）……一「谷行」一九四一川風寒み千鳥鳴く聲こそ今日の夕なれ」

水鳥の下安からぬ思ひにはあたりの水も凍らざりけり　（讀人不知）……一「鳥追舟」一三九六一うき鳥の下安からぬ思ひの數」

※

見渡せば松の葉白き吉野山幾代積れる雪にかあるらん　（兼盛）……一「二人靜」一二七二一見渡せば松の葉白き吉野山幾代積りし雪ならん」

※

三千年になるてふ桃の今年より花咲く春に逢ひにけるかな　（躬恒）……一「西王母」一五七二一三千年になるてふ桃の今年より花咲く春に逢ふことも」

水無月の夏越の祓する人は千年の命延ぶといふなり　（讀人不知）……一「水無月祓」一三九四三一水無月の夏越の祓する人は千年の命延ぶとこそ聞け」

・

君が代は天の羽衣稀にきて撫づとも盡きぬ巌ならなん　（讀人不知）……一「呉服」六六、原歌のまゝ……一「羽衣」三四五「君が代に天の羽衣稀にきて撫づとも盡きぬ巌ぞと……一「吉野天人」一三九五一少女は幾度君が代を撫でし巌も盡きせぬや……一「梅」四三一天つ少女の天の羽領巾撫づとも盡きせぬ巌もわが君が代のたとしへに足らじ」……一「采女」一四〇九一天衣撫づとも盡きぬ巌ならなんや……「翁」一七一君が千歳を經ん事も天つ少女の羽衣よ……「葛城」一六九七「蔦葛のみかかる巌の撫づとも盡きじ」

君が住む宿の梢の行く行くと隠るるまでにかへり見しはや　（道眞）……「大鏡」を見よ。

※神南備の御室の岸やくづるらん龍田の川の水の濁れる（家持）……「龍田」三〇三「神南備の御室の岸やくづるらん龍田の川の水は濁るとも……「逆矛」三〇五「神南備の御室の岸も崩るらん龍田の川の水の色は濁るかと」

※かくばかり經がたく見ゆる世の中に羨ましくもすめる月かな（高光）……「伏見」六六六「かくばかり經がたく見ゆる世の中に羨ましくもすむ月の」

※琴の音に峯の松風通ふらしいづれのをより調べそめけん（齋宮女御）……「松風」九五五「琴の音に峯の松風通ひ來る天つ少女の」……「千手」三七一「五琴の緒合はせに合はせて調ぶる琴の音に通ひ來にけり」……「小督」三三三「峯の嵐か松風かそれかあらぬか尋ぬる人の琴の音か」

久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしかな（菅原道真）……「鉢木」四九五「久方の月の桂も手に取るばかり弓矢の家を守り」

勅なればいともかしこし鶯の宿はと問はばいかが答へん（家の女）……「小督」三三七「いともかしこき勅なれば宿はと問はれてなしといかが答へん」

君なくてあしかりけりと思ふにもいとど難波の浦は住み憂き（男）……大和物語を見よ。

惡しからじ善からんとてぞ別れけんなにか難波の浦は住み憂き（女）……大和物語を見よ。

陸奥の安達が原の黒塚に鬼こもれりといふはまことか（兼盛）……「安達原」三八「陸奥の安達が原の黒塚に鬼こもれりと詠じけん」……「大江山」五七三「陸奥の安達が原の塚にこそ鬼籠れりと聞きしものを」……「羅生門」三五一「陸奥の安達が原にあらねどもこもれる鬼を」……「現在七面」三三七「陸奥の安達が原の黒塚も　假にも鬼のすだくなる」

ぬす人の龍田の山に入りにけり同じかざしの名にや穢れん（義政）……「龍田」二九六「名に負ふ龍田山同じかざ

※

＾

しの榊葉を－

なき名のみ高雄の山といひ立つる君は愛宕の峯にやあるらん　(八條)………「車僧」九六六「わが名のみ高雄の山にいひ立つる人は愛宕の峯に住むな」

かの岡に草刈るをのこしかな刈りそありつつも君が来まさんみまくさにせん　(人麿呂)………「錦木」三四九「かの岡に草刈るをのこ心して………〔敦盛〕三三六「かの岡に草刈る男野を分けて」

戀すてふわが名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめしか　(忠見)………〔班女〕三〇二「戀すてふわが名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめしか」

忍ぶれど色に出でにけりわが戀は物や思ふと人の問ふまで　(兼盛)………「定家」三二〇「人の契りの色に出でけるぞ悲しき包むとすれど－

大井河下す筏の水馴棹見馴れぬ人も戀しかりけり　(讀人不知)………〔兼平〕七六八「柴舟の竿さす筏も水馴棹の見馴れぬ人なれど－

逢ひ見ての後の心にくらぶれば昔は物を思はざりけり　(敦忠)………「定家」三〇九「昔は物を思はざりし後の心ぞはてしもなき」

たらちねの親の飼ふ蠶の繭籠りいぶせくもあるか妹に逢はずて　(人麿呂)………「松山鏡」八七三「たらちねの親の飼ふ蠶の繭の－

東風吹かば匂ひおこせよ梅の花主なしとて春を忘るな　(道眞)………大鏡を見よ。

岩橋の夜の契りも絶えぬべし明くるわびしき葛城の神　(左近)………「葛城」六七七「岩戸の内明くるわびしき葛城の神に－

後拾遺集

山科の木幡の里に馬はあれど徒歩よりぞ來る君を思へば（人麿）……〔通小町〕七〇一「山科の木幡の里に馬はあれども君を思へば徒歩跣足……」〔谷行〕二九四「馬にあれども徒歩に行くこは萬葉集卷十一

吾妹子が寢くたれ髪を猿澤の池の玉藻と見るぞ悲しき（人麿）……大和物語を見よ。

冥きより冥き道にぞ入りぬべき遙かに照らせ山の端の月（和泉式部）……〔鵜飼〕三九三「冥きより冥き道にぞ入りにける遙かに照らせ山の端の月」……〔俊寛〕一四五「身の果の暗きより暗き道にぞ入りにける」

靈山の釋迦の御前に契りてし眞如朽ちせず逢ひ見つるかな（行基）……太平記を見よ。

迦毘羅衛にともに契りしかひありて文殊の御顔逢ひ見つるかな（婆羅門僧正）……太平記を見よ。

（三）後拾遺集

△ 心あらん人に見せばや津の國の難波わたりの春の景色を（能因）……〔蘆刈〕五三「心あらん人に見せばや津の國の難波わたりの春の景色朧舟」

△ 薄墨に書く玉章と見ゆるかな霞める空に歸る雁がね（閑基）……〔高野物狂〕六〇七「薄墨に書く玉章と見ゆるかな霞める空に歸る雁の翼に」

△ 御田屋守今日は五月になりにけり急げや早苗老いもこそすれ（好忠）……〔飛鳥川〕七六、原歌のまゝ。

△ 夏の日になるまで消えぬ冬氷春立つ風やよぎて吹くらん（頼實）……〔氷室〕六九九、原歌のまゝ。

水もなく見えこそ渡れ大井河岸の紅葉は雨と降れども（定頼）……〔賀茂〕七九「水も無く見えし大井河それは紅葉の雨と降る」

神無月深くなり行く梢よりしぐれて渡る深山邊の里（永胤）……〔大社〕五八「紅も深くなり行く梢よりしぐれて渡る深山邊の里」

△

△

木の葉散る宿は聞きわくことぞなき時雨する夜も時雨せぬ夜も（頼實）………〔雨月〕二三四「時雨せぬ夜も時雨する木の葉の雨の音づれに」

君が代は千代に一度ゐる塵の白雲かかる山となるまで（嘉言）………〔正尊〕二三五、原歌のまゝ。

君が代は盡きじとぞ思ふ神風や御裳濯川の澄まん限りは（經信）………〔御裳濯〕二九七、原歌のまゝ。

君が代は白玉椿八千代とも何に數へん限りなければ（資業）………〔氷室〕二六三「花の名の白玉椿八千代經て」

都をば霞とともに出でしかど秋風ぞ吹く白河の關（能因）………〔班女〕二六〇「都をば霞とともに立ち出でて暫し程經る秋風の音白河の關路より」………〔遊行柳〕三九三「白河の關路と聞けば秋風も立つ夕霧の」

しほたるるわが身の方はつれなくて異浦にこそ煙立つなれ（道命）………〔蘆刈〕四九「しほたるるわが身の方につれなくて異浦見れば夕煙恨めしや」

錦木は立てながらこそ朽ちにけれ狭布の細布胸合はじとや（能因）………〔錦木〕三四八、原歌のまゝ。

契りきなかたみに袖をしぼりつつ末の松山波越さじとは（元輔）………〔現在七面〕一〇七「末の松山や袖に涙の波越えて」

見る度に鏡の影のつらきかなかからざりせばかからましやは（業平）………〔鸚鵡小町〕一六一「九十九髪かからざりせばかからじと昔を戀ふる」

萬代をすめる龜井の水やさは富の小川の流れたるらん（舞乳母）………〔弱法師〕三三三「萬代にすめる龜井の水までも水上清き」

物思へば澤の螢もわが身よりあくがれ出づる玉かとぞ見る（和泉式部）………〔鐵輪〕七二「われは貴船の川瀬の螢火」

津の國のなにはの事か法ならぬ遊び戯れまでとこそ聞け（宮木）………〔弱法師〕三三一「なにはの事か法ならぬ遊

び戯れ舞ひ謠ふ……〔難波〕三七「なにはの事か法ならぬ遊び戯れ色々の……〔[illegible]〕……

れに謠へや舞へや津の國のなにはの事も忠度なり……〔山姥〕三九「木の花のなにはのことか法ならぬ」

（ホ）　金　葉　集

紫の色のゆかりに藤の花かかれる松も睦しきかな（顯輔）……〔藤〕七三「たつかしき色のゆかりと思ふにも心にかかる藤波の」

夏山の青葉まじりの遲櫻初花よりもめづらしきかな（盛房）……〔大原御幸〕四六「青葉隠れの遲櫻初花よりもめづらかに」（この句平家物語に據る）

草枕この旅寢にぞ思ひ知る月より外の友なかりけり（忠命）……〔松風〕六六「里離れなる通ひ路の月より外は友もなし」

有明の月待つ程のうたたねは山の端のみぞ夢に見えける（師房）……〔紅葉狩〕三〇八「山陰に月待つ程の轉寢に」

淡路島通ふ千鳥の鳴く聲に幾夜寢覺めぬ須磨の關守（兼昌）……〔敦盛〕三二「淡路潟通ふ千鳥の聲聞けば寢覺も須磨の關守は」……〔阿漕〕三九「淡路潟通ふ千鳥の聲聞きて旅の寢覺を須磨の浦」

君が代は末の松山はるばると越す白波の數も知られず（永成）……〔雪〕三六「末の松山はるばると行方[illegible]く」

戀ひわびて思ひ入るさの山の端に出づる月日の積りぬるかな（公長）……〔芭蕉〕四三「思ひいるさの山はあれど唯月ひとり伴ひ馴れ」

思ひ草葉末に結ぶ白露のたまたま來ては手にもたまらず（俊頼）……〔花筐〕二九二「思ひ草葉末に結ぶ白露の手

※　八

にもたまらで程もなく」

もろともにあはれと思へ山櫻花より外に知る人もなし　（行尊）………〔現在七面〕一〇五「花より外は知る人もなき
庵なるに」

玉くしげ二見の浦のかひしげみ蒔繪に見ゆる松の村立　（輔弘）………〔松風〕一八八「二見の浦二度世にも出でばや
松のむら立ち」

大江山いく野の道の遠ければまだふみも見ず天の橋立　（小式部）………〔大江山〕一五三「大江山生野の道に行過し」

住みわびてわれさへ軒の忍ぶ草しのぶかたがたしげき宿かな　（周防内侍）………〔夕顔〕一三一「古き軒端の忍ぶ草
忍ぶ方々多き宿を」

天の川苗代水にせき下せ天降ります神ならば神　（能因）………〔飛鳥川〕一六六「天の川苗代水にせき下せ天降ります
事ならば神ぞ知るらん」

あさましや劔の枝の撓むまでこは何の身のなれるなるらん　（和泉式部）………〔女郎花〕一五三「恐ろしや劔の枝の
撓むまで如何なる罪のなれるにてぞや」

（八）詞花集

深山木の其梢とも見えざりし櫻は花にあらはれにけり　（頼政）………〔春榮〕二四八、原歌のまゝ。但し第三句「そ
の梢とは」………〔實盛〕二五〇「深山木のその梢とに見えざりし櫻は花に顯れたる」………〔二人靜〕七六「誰とも見
し櫻は花に顯るるものを」………〔卒都婆小町〕一七三「深山の朽木なりとも花咲きし木は隠れなし」

古の奈良の都の八重櫻今日九重に匂ひぬるかな　（伊勢大輔）………〔雲雀山〕三四九「奈良の都の八重櫻をかへる」

御垣守衛士の焚く火の夜は燃え晝は消えつつ物をこそ思へ　（能宣）………〔鉢木〕三五八「御垣守衛士の焚く火は晝

千載集

ためなり」

忍ぶるも苦しかりけり數ならぬ身には涙のなからましかば（出羽辨）……〔攝待〕一六五「かほど數ならぬ身には思ひのなかれかし」

あしかれと思はぬ山の峯にだに生ふなるものを人の歎きは（和泉式部）……〔鐵輪〕七二「悪しかれと思はぬ山の峯にだに人のなげきは生ふなるに」

（ト）千　載　集

松が枝に降り積む雪は鶯の羽風に散るも花かとぞ見る（顯輔）……〔雲林院〕四六〇「花を散らすは鶯の羽風に落つるか松の雪か」

さゞ波や志賀の都は荒れにしを昔ながらの山櫻かな（讀人不知）……平家物語を見よ。

池水に汀の櫻散りしきて波の花こそ盛りなりけれ（後白河天皇）……平家物語を見よ。

櫻散る水の面にはせきとむる花のしがらみかくべかりけり（能因）……〔櫻川〕二三七「浮波の花の柵かけまくも」

花は根に鳥は古巣に歸るなり春のとまりを知る人ぞなき（崇德天皇）……〔東北〕三三〇「花は根に鳥は古巣に歸るぞとて」……〔竹雪〕一八二「花は根に鳥は古巣に歸れども」……〔籠〕五〇「花は根に鳥は古巣に歸る春の」……〔忠度〕二九一「花は根に歸るなりわが跡」……〔三山〕九五「花は根に歸れわれも」

夏衣花の袂にぬぎかへて春の形見もとまらざりけり（匡房）……〔賀茂物狂〕七三「又ぬぎかへて夏衣花の袖をやかへすらん」

夕されば野邊の秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里（俊成）……〔融〕三三八「夕されば野邊の秋風身にしみて鶉鳴くなる深草山よ」

いかばかり露けかるらん小牡鹿の妻戀ひかぬる小野の草臥し（長覺）………〔放下僧〕二四九「妻戀ひかぬる小牡鹿のたたずむ」

さりともと思ふ心も蟲の音も弱り果てぬる秋の暮かな（俊成、盛衰記には宗盛）………〔清經〕八五一、原歌のまま。………〔砧〕八三三「思はじと思ふ心も弱るかな聲も枯野の蟲の音の」

高砂の尾上の鐘の音すなり曉かけて霜やおくらん（匡房）………〔三井寺〕三〇〇一「高砂の尾上の鐘曉かけて秋の霜」………〔高砂〕一八〇「高砂の松の春風吹きくれて尾上の鐘も響くなり」

朝ぼらけ宇治の川霧絶え絶えにあらはれ渡る瀬々の網代木（定頼）………〔半〕三八九「朝ぼらけ野田の川霧絶え絶えにあらはれ渡る姿もさすが」

別れよりまさりて惜しき命かな君に二度逢はんと思へば（公任）………〔船辨慶〕一七五五「別れよりまさりて惜しき命かな君に二度逢はんとぞ思ふ行末」

草枕假寢の夢に幾度か馴れし都に行き歸るらん（隆房）……〔景清〕六四一「雲居の花いつかさて假寢の夢に馴れて見ん」

たらちめやとまりてわれを惜しまゝし代ふるに代はる命なりせば（匡昭）………〔皇帝〕九四一「代ふるに代ふるものならばかく苦しみを見るべきか」

憂かりける人を初瀬の山颪はげしかれとは祈らぬものを（俊頼）………〔玉葛〕一九六八「憂かりける人を初瀬の山颪はげしく落ちて」

わが袖は汐干に見えぬ沖の石の人こそ知らね乾く間もなし（讃岐）………〔善知鳥〕一五九一「袖に波越す沖の石又は干潟とて」

思ひきや榻のはしがきかきつめて百夜も同じまろねせんとは（俊成、古今集「榻の端書」参照）……「錦木」七三「思ひきや榻のはしがきかきつめに百夜も同じまろ寝せんと詠みしい」……「通小町」七三「榻の端書よみて見れば九十九夜なり」

包めども枕は戀を知りぬらん涙かからぬ夜半しなければ（兼通）……「清經」八四「戀らるる枕に知くえ枕や戀を知らすらん」

人知れぬ大内山の山守も木隠れてのみ月を見るかな（頼政）……「小袖曾我」二一九「人知れぬ大内山の山守も木隠れてそれとは……」「卒都婆小町」七二「大内山の山守も……木隠れてよしなや」

まどろみて覚めても止みなばいかがせん寝覚ぞあらぬ命なりける（西住）……「安達原」三九「まどろむ夜半ぞ命なるあら定めなの生涯やな」

四、勅撰集　その三

（チ）新古今集

夕月夜汐滿ち來らし難波江の蘆の若葉を越ゆる白波（秀能）……「蘆刈」六一「浮襲忘るる難波江の蘆の若葉を越ゆる白波」

降り積みし高嶺の深雪解けにけり清瀧川の水の白波（西行）……「賀茂」七九「清瀧川の水波まは高嶺の深雪解けぬべき」

見渡せば山本霞む水無瀬川夕は秋と何思ひけん（後鳥羽天皇）……「蘆刈」四五「有明の山本霞む水無瀬川」

梅が香に昔を問へば春の月答へぬ影ぞ袖にうつれる（家隆）……「胡蝶」二四六「梅が香に昔を問へば春の月答へ

ぬ影もわが袖に移る匂ひか」

照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき（千里）……〔八島〕三五〇「照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものもなき……〔采女〕三九八「深夜の月朧々と杉の木の間を洩りくれば神の御心にしくものなくや思すらん」

つくづくと春のながめのさみしきはしのぶに傳ふ軒の玉水（行慶）……〔羅生門〕三三四八、原歌のまゝ。

うちなびき春は来にけり青柳の蔭踏む道に人の休らふ（高遠）……〔右近〕二四三「鼓木の櫻の蔭踏む道に休らへば」

吉野山櫻の枝に雪散りて花遅げなる年にもあるかな（西行）……〔胡蝶〕一二四三「三吉野の高嶺の深雪まだ冴えて花遅げなる春風の」

百敷の大宮人は暇あれや櫻かざして今日も暮らしつ（赤人）……〔采女〕四〇八「大宮人の小忌衣櫻をかざす今日とり今日もくれはとり」……〔放生川〕一四〇七「百敷の舞には大宮人のかざすなる櫻襷」……〔小鹽〕一四六六「百敷の上人の櫻かざしの袖ふれて

この程は知るも知らぬも玉鉾の行きかふ袖は花の香ぞする（家隆）……〔第六天〕二七一「知るも知らぬも道のべの行きかふ袖の花の香に」……〔西行櫻〕二一七〇「知るも知らぬも諸共に誰も花なる心かな」

山寺（イ里）の春の夕暮來て見れば入相の鐘に花ぞ散りける（能因）……〔道成寺〕一九九五、原歌のまゝ、但し初句「山寺の」にて。……〔三井寺〕三〇〇一、原歌のまゝ。

花誘ふ比良の山風吹きにけり漕ぎ行く舟の跡見ゆるまで（宮内卿）……〔白鬚〕一四六五「花誘ふ比良の山風吹きにけり漕ぎ行く舟の跡見ゆる鳰の浦」

散りにけりあはれ恨みの誰なれば花の跡訪ふ春の山風（寂蓮）……〔藤〕二七三九「法の蔭添へて花の跡訪ふ春の風」

……〔桑山府君〕二七〇七「嵐の風緒には花の跡とはん」

暮れて行く春の湊は知らねども霞に落つる宇治の柴舟（寂蓮）……〔藤戸〕一七九九「春の湊の行く末や藤戸の渡りなるらん」

忘れめや葵を草に引き結び假寢の野邊の露の曙（式子内親王）……〔賀茂物狂〕二五五八、原歌のまゝ。

時鳥花橘の香をとめて鳴くは昔の人や戀しき（讀人不知）……〔草薙〕八八二「時鳥花橘の香をとめて鳴くや五月の」

道のべに清水流るる柳蔭暫しとてこそ立ちとまりつれ（西行）……〔遊行柳〕二一七七「道のべの清水流るる柳蔭暫しとてこそ立ちとまり涼みとる」

白露の情置きける言の葉やほのぼの見えし夕顔の花（頼實）……〔夕顔〕二二一四「また人の心の色は白露の情置きける言の葉の」

夏はつる扇と秋の白露といづれか先におかんとすらん（忠岑）……〔班女〕二〇〇五「夏はつる扇と秋の白露といづれか先に起風の床」

昨日だに訪はんと思ひし津の國の生田の森に秋は來にけり（家隆）……〔生田敦盛〕二八七七「昨日だに訪はんと思ひし津の國の生田の森に着きにけり」

明けぬとて野邊より山に入る鹿の跡吹き送る萩の下風（通光）……〔紅葉狩〕二三八二「明けぬとて野邊より山に入る鹿の跡吹き送る風の音に」

心なき身にもあはれは知られけり鴫立澤の秋の夕暮（西行）……〔龍虎〕三三六三「心なき身にもあはれは有明の」

武藏野や行けども秋のはてぞなきいかなる風の末に吹くらん（通光）……〔春日龍神〕二〇二二「いづくぞと問ふは武藏野のはてしなの心や」……〔東北〕二九一「はてはありけり武藏野を分けくらしつつ」……〔隅田川〕一五三三「尋ぬ

る心のはてやらん武藏の國と」

松島や鹽汲む海士の秋の袖月はもの思ふ習ひのみかは（長明）……「松風」六六八「松島や小島の海士の月にだに影を汲むこそ心あれ」

拂ひかねさこそは露のしげからめ宿かる月の袖のせばきに（雅經）……「西王母」二七三「露の間に宿るか袖の月の影」

下紅葉かつ散る山の夕時雨濡れてや鹿のひとり鳴くらん（家隆）……「紅葉狩」三八二「錦を色どる夕時雨濡れてや鹿のひとり鳴く」

秋來れば朝けの風の手を寒み山田のひたをまかせてぞ聞く（匡房）……「安達原」一四九「かかる憂き世に秋の來て朝けの風は身にしめども」

時鳥鳴く五月雨に植ゑし田を雁がね寒み秋ぞ暮れぬる（爲政）……「飛鳥川」七三一「面白や頃もさつき暮れし田を又時鳥早苗とる」

きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに衣かたしき獨りかも寝ん（良經）……「砧」八三二「衣かたしく小筵に思ひをのぶる」

薄霧の立ちまふ山のもみぢ葉はさやかならねどそれと見えけり（高倉天皇）……「住吉詣」一五四四「薄霧も立ちまふ山のもみぢ葉のそれたよりほの見えそむる村紅葉」

露時雨漏る山陰の下紅葉濡るとも折らん秋の形見に（家隆）……「一角仙人」一九九「露時雨漏る山陰の下紅葉色添ふ秋の」

移り行く雲に嵐の聲すなり散るかまさきの葛城の山（雅經）……「紅葉狩」三八七「移り行く雲に嵐の聲すなり散

ろか槇拆の葛城の神」

鵲の渡せる橋におく霜の白きを見れば夜ぞ更けにける（家持）……「張良」二〇九「川浪に渡せる橋に置く霜の白きを見れば今宵はまだ」

津の國の難波の春は夢なれや蘆の枯葉に風渡るなり（西行）……「蘆刈」六二「津の國の難波の春は夢なれや蘆の枯葉に風渡る波の」

吉野なる菜摘の川の川淀に鴨ぞ鳴くなる山陰にして（湯原王、萬葉集卷三）……「二人靜」三七九「三吉野の川の名の菜摘の……川淀近き山陰の香もなつかしき」

矢田の野に淺茅色づく有乳山峯の淡雪寒くぞあるらし（人麿）……「安宅」八三「東雲早く明け行けば淺茅色づく有乳山」

駒とめて袖うち拂ふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮（定家）……「鉢木」五五一、原歌のまゝ。……「船橋」三七九「同じ名の佐野のわたりの夕暮に袖うち拂ひて」

高き屋に登りて見れば煙立つ民の竈は賑ひにけり（仁徳天皇）……「難波」三三一、原歌のまゝ。……「放生川」四六二「國富み民の竈まで賑ふ都の」

山人の折る袖匂ふ菊の露うち拂ふにも千代は經ぬべし（俊成）……「一角仙人」六八二「山人の折る袖匂ふ菊の露うち拂ふにも千代は經ぬべき契り」

※

末の露本の雫や世の中の後れ先だつためしなるらん（遍昭）……「夕顔」三三八「夕顔の末葉の露の消え易きもとの雫の世語を」……「仲光」三三二「上露も下露も後れ先だつ浮世の習ひ」……「藍染川」三三六「末の露本の雫もよしやよしわれとてもながらへ果てじ」

※

いつ歎きいつ思ふべき事なれば後の世知らで人の過ぐらん（西行）………「佛原」一七九三「いつ歎きいつ驚かん浮世ぞと」

あるはなくなきは數添ふ世の中にあはれいづれの日まで歎かん（小町）………「關寺小町」一六六八、原歌のまゝ。

ここにありて筑紫やいづこ白雲のたなびく山の西にあるらし（旅人）………「柏崎」六六三「夫の行方を白雲のたなびく山や西の空の」

信濃なる淺間の嶽に立つ煙遠近人の見やは咎めぬ（業平）………伊勢物語を見よ。

駿河なる宇都の山邊の現にも夢にも人に逢はぬなりけり（業平）………伊勢物語を見よ。

立ち歸り又も來て見ん松島や小島の苫屋波に荒らすな（俊成）………「善知鳥」一九〇「松島や小島の苫屋うちゆかし」

いづくにか今宵は宿をかり衣日も夕暮の峯の嵐に（定家）………「遊行柳」二九三「いづくにか今宵は宿をかり衣日も夕暮、い、い、になりにけり」

初瀬山夕越えくれて宿問へば三輪の檜原に秋風ぞ吹く（禪竹）………「浮舟」三五一「初瀬山夕越え暮れし宿とはゞ檜原のよそに三輪の山」

世の中を厭ふまでこそかたからめ假の宿りを惜しむ君かな（西行）………撰集抄を見よ。

世を厭ふ人とし聞けば假の宿に心とむなと思ふばかりぞ（妙）………撰集抄を見よ。

年たけて又越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山（西行）………「盛久」一五七〇「かく來て見んと思ひきや命なりけり小夜の中山」………「賀茂物狂」二五四「小夜の中山なかなかに命のうちは白雲の又越ゆべしと思ひきや」

よそにのみ見てや止みなん葛城や高間の山の峯の白雲（讀人不知）………「谷行」一九四二「よそにのみ見てや止みな

ん葛城や高間の山の峯の（白キシ雲）……（花筐）一九六「白雲の高間の山のよそにのみ見てや止みなん及びなき……

……（花月）一〇九「日頃はよそにのみ見てや止みなんと詠めしに葛城や高間の山」……（小袖曾我）一一三「高間の山の峯の雲よそにのみ見てや止みなん同じ子に」……（葛城）六九五「よそにのみ見し白雲の高間山の山の嶺の」……（鞍馬天狗）九九九「葛城高間よそまでもあるまじ」……（雲雀山）六八六「よそめになりて葛城や高間の山の峯」

園原や伏屋に生ふる帚木のありとは見えて逢はぬ君かな（是則）……（木賊）三二九、原歌のまゝ。……（伯崎）六六四「園原や伏屋に生ふる帚木のありとは見えて逢はぬとこそ聞きし」……（隅田川）一五一「あるはかひなき帚木の見えつ隠れつ」

玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする（式子内親王）……（定家）二〇九「玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶる事の弱るなる」

由良のとを渡る舟人梶を絶え行方も知らぬ恋の道かな（好忠）……（玉葛）一九九「浮舟の梶を絶え綱手かなしき」

年も経ぬ祈る契りは初瀬山尾上の鐘のよその夕暮（定家）……（玉葛）一九六「年も経ぬ祈る契りは初瀬山尾上の鐘のよそにのみ思ひ絶え」

待つ宵に更け行く鐘の声聞けば飽かぬ別れの鳥はものかは（小侍従）……（三井寺）四〇三、原歌のまゝ。……（初雪）三五五「戀路にはあらねども別れの鳥となり」

これもまた長き別れとなりやせん暮を待つべき命ならねば（知家）……（熊野）三四五「玉の緒のながき別れとなりやせんただ御暇を」

聞くやいかに上の空なる風だにも松に音する習ひありとは（宮内卿）……（隅田川）一五二「聞くや如何に上の空

たる風だにも松に音する習ひあり（とはナシ）………〔身延〕二九二「松吹く風も法の聲聞くやいかにと音すらん」………〔俊寛〕一四三「頼みを松蔭に……聞くや如何にと夕波の」

世の常の秋風ならば荻の葉にそよとばかりの音はしてまし（安法法師女）………〔班女〕三六八「秋風は吹けども荻の葉のそよとの便りも聞かで」

生きてよも明日まで人はつらからじこの夕暮をとはばとへかし（式子内親王）………〔三山〕三九九「生きてよも明日まで人のつらからじこの夕ぐれを限りぞと」

つくづくと思ひ明石の浦千鳥波の枕に鳴く鳴くぞ聞く（公經）………〔安達原〕一二一「命のつれなさを思ひ明石の浦千鳥音をのみひとり鳴き明かす」

とへかしな尾花がもとの思ひ草萎るる野邊の露はいかにと（通具）………〔錦木〕二三三「今ぞ歸るなれと尾花がもとの思ひ草の」

夏野行く牡鹿の角の束の間も忘れず思ふ妹が心を（人丸）………〔錦木〕二五二「牡鹿の角の束の間も寢られんものか」………〔一角仙人〕二〇「牡鹿の角の束の間も仙人を今見る」………〔女郎花〕三九八「牡鹿の角の塚の草葉より……〔求塚〕三〇七、〔女郎花〕と同斷。

歎かじな思へば人につらかりしこの世ながらの報いなりけり（尾張）………〔葵上〕一六二「われ人のためつらければ必ず身にも報うなり」

はし鷹の野守の鏡得てしがな思ひ思はずよそながら見ん（讀人不知）………〔野守〕三四六、原歌のまゝ。

おのが波に同じ末葉ぞしをれぬる藤咲く多祜のうらめしの身や（慈圓）………〔藤〕二七九「おのが波に同じ末葉のしをれけり藤咲く多祜のうらめしの身ぞ」

天の戸をおし明け方の雲間より神代の月の影ぞ殘れる（良經）………〔大蛇〕三〇七「天の戸をおし明け方の雲間より神代の月の影清く」

淺茅生や袖に朽ちにし秋の霜忘れぬ夢を吹く嵐かな（通光）………〔小督〕二〇七「淺茅生や袖に朽ちにし秋の霜忘れぬ夢を吹く嵐の」………〔遊行柳〕二〇六「淺茅生や袖に朽ちにし秋の霜分け衣」………〔定家〕二三〇「淺茅生の霜に朽ちにし名ばかりに」

時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子斑に雪の降るらん（業平）………伊勢物語を見よ。

奧山のおどろが下も踏み分けて道ある世ぞと人に知らせん（後鳥羽天皇）………〔菊慈童〕八〇七「山より山の奧までも道あるや時代なるらん」………〔枕慈童〕三八六「山より山の奧までも道ある時代なりけり」

朝倉や木の丸殿にわれ居れば名乘をしつつ行くは誰が子ぞ（天智天皇）………〔八島〕二三五「朝倉や木の丸殿にあらばこそ名乘をしても行かまし」

白波の寄する渚に世をつくす海士の子なれば宿も定めず（讀人不知）………〔胡蝶〕一二四六「海士の子なれば宿も定めなき身は」（この想源氏物語夕顔卷にあり）

天つ風ふけひの浦にゐる田鶴のなどか雲居に歸らざるべき（清正）………〔八島〕二三〇「群れ居る田鶴を御覽ぜよ」

おほぞらに契る思ひの年も經ぬ月日もうけよ行く末の空（後鳥羽天皇）………〔浮舟〕三三六「月日も受けよ行く末の神に祈りの」

世の中はとてもかくても同じこと宮も藁屋も果てしなければ（蟬丸）………今昔物語を見よ。

情なく折る人つらしわが宿の主忘れぬ梅の立枝を（菅公神詠）………〔女郎花〕三九一「かの菅公の神木にも折らで

米

も手向けよと」
補陀落の南の岸に堂たてて今ぞ榮えん北の藤波（春日神詠）………「海士」一七二「三笠山今ぞ榮えんこの岸の南の海に」………「采女」四〇七「所は補陀落の南の岸に至りたり」
夜や寒き衣や薄き片そぎの行合のまより霜や置くらん（住吉神詠）………「卷絹」六八〇「神は出雲八重垣片そぎの寒き世のためし」………「岩船」三九〇「住吉の神と君とは行合のまのあたり ………「船橋」一七六五「霜の行き合ひの間近くなり」
睦ましと君はしらなみ瑞籬の久しき世よりいはひそめてき（住吉神詠）………伊勢物語を見よ。
飛びかける天の岩船尋ねてぞ秋津島には宮始めける（理平）………「岩船」三九二「飛びかける天の岩船尋ねてぞ秋津島根は宮始め住吉の」
神風や御裳濯川のその上に契りし事の末を違ふな（良經）………「第六天」一七七〇「神路山御裳濯川のその上に契りし事の末は違はじ」
石川や瀬見の小川の清ければ月も流れを尋ねてぞ澄む（長明）………「賀茂」七三六、原歌のまゝ。
なほ頼め標茅が原のさしも草われ世の中にあらん限りは（清水觀音）………「田村」一九五三「たゞ頼め標茅が原のさしも草われ世の中にあらん限りは」………「船辨慶」三七七八、「田村」と同斷。………「藍染川」一一四四、「田村」と同斷。………「鉢木」三六二「たゞ頼めわれ世の中にあらんほど又こそ」………「三井寺」一九九〇「觀世音さしも草さしもかしこき誓ひの末」………「盛久」二〇九六「三井寺」と同斷。………「熊野」一二五一「たゞ頼め頼もしき春も」………「戀重荷」二六〇「唯頼めしめぢが腹立ちや」
阿耨多羅三藐三菩提の佛たちわが立つ杣に冥加あらせ給へ（傳教）………「大江山」一五六一、原歌のまゝ。………

續古今集

鹽竈の浦の煙は絶えにけり月見んとての海士のしわざに（源兼資朝臣）……（融）二二「鹽竈焼く煙も今は絶えにけり月見んとての海士のしわざに」

小倉山しぐるる頃の朝な朝な昨日は薄き四方のもみぢ葉（定家）……（松尾）二六四二「小倉山しぐるる頃の朝な朝な昨日は薄き色も今日は[illegible]……（六浦）三〇六一「昨日は薄き四方の紅葉も露時雨」

急ぎ立つここには假寝の草枕なほ思ひ深し三吉野の里（八條院高倉）……（二人静）七〇三「吉野の奥……六、山路かな」

何となく明けぬ暮れぬとすごしても今日を過ぎ行く月日なるかな（〔?〕家）……（西王母）二五三「楽しみに明けぬ暮れぬと送り迎ふ」

（ト）續古今集

吹きのぼる木曾の御坂の谷風に梢も知らぬ花を見るかな（〔?〕明）……（寝覚）三二九六「〔?〕路」に行けば御坂の谷風に行方も知らぬ花を散る

われを知れ釈迦牟尼仏の世に出でてさやけき月の世を照らすとは（春日明神）……「春日龍神」六七〇「われを知れ釈迦牟尼仏世に出でてさやけき月の世を照らさんとは」

撫子の薄くも濃くも日くるれば見ん人わきて思ひ定めよ（北野神詠）……（東北）二六六「大和撫子の花だにも…薄くも濃くも花は花」

神風に心安くぞ任せつる桜の宮の花の盛りは（西行）……（第六天）一七三一「神風に心安くぞ任せつる桜の宮の花盛り」

久方の月の桂の男山さやけき影は所からかも（兼直）……（放生川）二四六「久方の月の桂の男山さやけき影は所

から〔かい〕かもナシ）……「女郎花」二三四「放生川」と同断。……「弓八幡」三三五「久方の月の桂の男山げにもさやけき影に來て」

西の海や檍が原の汐路より現れ出でし住吉の神　（兼直）……「岩船」二九二「西の海（やナシ）あをきが原の波間よりあらはれ出でし住吉の神」……「雨月」三三六「西の海（やナシ）檍が原の波間より現れ出でし住吉の神託」……「高砂」一八七「西の海（やナシ）あをきが原の波間より現れ出でし神松の」

鷲の山いかに澄みけん月なればはいりての後も世を照らすらん　（[illegible]昭）……「現在七面」二三一、原歌のまゝ。

忘れずよ清見が關の波間より霞みて見えし三保の浦松　（宗尊親王）……「羽衣」二八七「忘れめや山路をわけて清見潟遙かに三保の松原に」

旅人は袂すゞしくなりにけり關吹き越ゆる須磨の浦風　（行平）……「松風」二八六「行平の中納言關吹き越ゆると詠め給ふ……」「住吉詣」二五四「關吹き越えて行く程に須磨の浦わも」

踏み分けし昔は夢かうつの山あとゝも見えぬ蔦の下道　（雅經）……「定家」三二四「夢かと[illegible]のうつつの宇津の山月にもたどる蔦の細道」

手弱女の袖吹きかへす飛鳥風都を遠み徒らに吹く　（田原天皇）……「飛鳥川」一七四「都に近き手弱女の袖吹き返す飛鳥風心も亂るゝ」

思ひあまり三角柏に問ふことの沈むに浮くは涙なりけり　（小侍從）……「[illegible]」二八七「三角柏にあらばこそ沈むに浮かむ縁ならめ」

春深き深山櫻も散りぬれば世を鶯の鳴かぬ日ぞなき　（醍醐天皇）……「寢覺」三五六「世を鶯の聲しげし」

見るからに袂ぞ濡るゝ櫻花空より外の露や置くらん　（實賴）……「大蛇」三〇六「見るからに袂そ濡るゝ櫻花空よ

續拾遺集

新後撰集

と共に涙ハ落つ」

山田もるそほづの身こそあはれなれ秋果てぬれば訪ふ人もなし（玄賓）……「三輪」五九九「山田守るそほづの身こそ悲しけれ秋果てぬれば訪ふ人もなし」

吹く風もとふにつらさのまさるかな慰めかぬる秋の山里（定家）……「摂待」三三一「訪ふだにつらさのまさる草のかれかれなる宿」

(チ)　續　拾　遺　集

わが宿の外山の櫻日数経て移ろふ峯の白雲（後京極）……「六浦」二三六「月日経て移れば変る櫻の花の散りし庭の面」

ながらへて生けるを今は歎くかな憂きに命のとがならねども（寂蓮）……「大蛇」二七〇「ながらへて生けるを今は歎くかな憂きは命のとがならず」

老いらくの鏡の山の面影は積もる雪の色や添ふらん（貫之）……「賀茂」七〇九「雪とつみ積く白らがの上と老も頻れ老いらくの」

面影を忘れんと思ふ心こそ別れしよりも悲しかりけれ（貫之）……「天鼓」三二四「忘れんと思ふ心こそ忘れぬよりは思ひなれ」……「藤戸」三八八、「天鼓」と同斷。……「綾鼓」九〇、「天鼓」と同斷。

石清水絶えぬ流れは身にうけつわが世の末を神にまかせん（亀山天皇）……「弓八幡」三五二「石清水絶えぬ流れの末までも」

(ワ)　新　後　撰　集

あはれにも昔の春の面影を身さへ老木の花に見るかな（基忠）……「昭君」二九三「げにや心も昔の春老の妻もさ

さがにの」

汐風の波かけ衣秋を經て月に馴れたる須磨の浦人　（儀氏）……〔松風〕三八三「月にも馴るる須磨の海士の」

跡つけぬ程をも見せん庭の雪人の訪ふまで消えずもあらなん　（後二條天皇）……〔仲光〕三三〇「跡をつけぬ庭の雪人に見せんも」

思ひ立つ心ばかりを知るべにてわれとは行かぬ道とこそ聞け　（蓮生）……〔鵺〕三三二「思ひ立つ心ぞ知るべ雲を分け」

波越ゆる袖の湊の浮枕うきてぞひとりねは泣かれける　（忠宗）……〔絃上〕一四六「波越す袖の涙川また知らぬか」

玉　葉　集

花見にと群れつつ人の來るのみぞあたら櫻のとがにはありける　（西行）……〔西行櫻〕二一四、原歌のまゝ「但し初句「花見んと」。……〔櫻川〕二三六「あたら櫻のとがは散るぞ恨みなる」

しひてやはなほ過ぎ行かん逢坂の關の藁屋の秋の夕霧　（貫氏）……〔蟬丸〕二六七「逢坂山の關の戸ざしの藁屋の竹の」

賴むぞよ神もうけ引け御注連繩長くと祈る君が千年を　（公雄）……〔浮舟〕三一六「賴みをかけて御注連繩長くや世をも祈らまし」

世の中を思ふも苦し思はじと思ふも身には思ひなりけり　（本院侍從）……〔天鼓〕二一四「思はじと思ふ心もなとやらん夢にもあらず現にもなき世の中」

彌陀賴む人は雨夜の月なれや雲晴れねども西にこそ行け　（眞如堂夢告）……〔百萬〕一六七二「彌陀賴む人は雨夜の月なれや雲晴れねども西へ行く、……〔當麻〕一八四三「雨夜の月の影をだに知らぬ心の行方をや西へとばかり賴むらん」

續千載集

續後拾遺集

かくこそあるし下に涙のかゝるかな又いつかはと思ふあはれに（西行）……〔賀茂物狂〕七四二「影に見えつゝかのにき又いつかもと思ひ出でしまゝ」

そのかみに祈りしまゝに忘れじをあはれはかけよ賀茂の川波（俊成）……〔賀茂物狂〕七四四「そのかみに祈りしまゝは忘れじをあはれはかけよ賀茂の川波」

(一) 續 千 載 集

よしさらば涙に曇れ見る度にかはる鏡の影もはづかし（成實）……〔龍虎〕三三二「見る度に曇る鏡やますます見えつゝる月日は」

老が身のながらへて今年また二度春の花や見るべき（後宇多天皇）……〔天鼓〕二三四「露の世にたゞ老が身のいつまでか又この秋に殘らん」

(々) 續 後 拾 遺 集

多結の浦や汀の藤の咲きしよりうつろふ波ぞ色に出でける（房實）……〔藤〕三七六「多結の浦や汀の藤の咲きしより波の花さへ色に出でつゝ」

夕されば松吹く風の音羽川あたりも涼し山の下陰（實兼）……〔西行櫻〕三六八「松吹く風の音羽山ここはまた」

偽りのなき世なりせば神無月誰が誠よりしぐれそめけん（定家）……拾遺愚草を見よ。

かひなき和歌の浦わの藻鹽草かきおくまでを思出にせん（貞直）……〔志賀〕二九六「和歌の浦わの藻鹽草かく喩へ置く世語りの」

君が代のしるしとぞ見る住吉の松吹く風ものどけかりけり（經房）……〔藤戸〕三七四「松吹く風ものどかにてげに春めける」

(レ) 風雅集

若菜摘むいく里人の跡たらん雪間あまたに野はなりにけり（爲定）……〔求塚〕三六四「若菜摘むいく里人の跡なら ん雪間あまたに野はなりぬ」

分け來つる山又山は麓にて峯より峯の奥ぞ遙けき（道昭）……〔邯鄲〕七八「関を雲路のあとに見て山又山を越え行けば」……〔東北〕三九一「跡遠き山又山の雲を經て」

鷺のゐる池の汀に松ふりて都の外の心地こそすれ（定家）……〔鷺〕三一八「鷺のゐる池の汀に松ふりて都にも似ぬ住居は」

ふりにける雪のみ山は跡もなし誰踏み分けし道を知るらん（法深）……〔鷺〕三一七「誰踏みならし通ふらん、これは妙なる御幸とて」

貢物絶えず供ふる東路の勢田の長橋音もとどろに（俊盛）……〔烏帽子折〕二四七「貢物もとどろと踏み鳴らし勢田の長橋うち渡り」

(ソ) 新千載集

春來ぬとみかきが原は霞めども猶雪さゆる三吉野の山（俊成）……〔胡蝶〕四二一「三吉野の高嶺の雪もまだ冴えて花遲げなる」

さればこそ厭ふ憂き名の嵐山花の時といかでなりけん（良基）……〔嵐山〕三三六「さればこそ厭ふ憂き名の嵐山とりわき」

根に歸る古巣を急ぐ花鳥の同じ道にや春も行くらん（爲定）……〔東北〕三九五「花鳥の同じ道にと歸るさの」

下くぐる水に秋こそ通ふらし結ぶ泉の手さへ涼しき（中務）……〔誓願寺〕一五九「すむ水の上にも秋や通ふらし」

物ごとのみぞ知らる」

數へ置くその品々の法の門開くる道は一つなりけり（後伏見天皇）……〔當麻〕二八四「數へうれしき法の門開く

る道に出でうよ」

跡垂れし神の御幸の古を思へば遠き辛崎の松（尊道法親王）……〔右近〕二四三「神の御幸の跡古りて末も末遠き」

よしさらば思ひ出でじと思へども涙に絶えぬ袖の上かな（信寿）……〔天鼓〕三三四「よしさらば思ひ出でじと思

ひ寝の」

苗代に心の種を蒔きそへて鳴くや蛙のやまと言の葉（國冬）……〔淡路〕四二「苗代の水に心の種蒔きて言はれにこ

こそ」

（四）新拾遺集

いかなれば荻の葉そよぐ風の音の秋と聞くより寂しかるらん（式乾門院御匣）……〔放下僧〕四四七「月に見る荻

を風に聞き荻の葉そよぐ古里の」

（五）新後拾遺集

佐保姫の霞の衣おりかけて乾す空高き天の香具山（信寿）……〔佐保山〕三七一「佐保姫の霞の衣と詠みたれば」

水や空空や水とも見えわかず通ひて澄める秋の夜の月（讀人不知）……〔八島〕三六二「水や空空行くも又雲の波

の」

露をこそ拂ひも果てめうたた寝の夢をも誘ふ荻の上風（英時）……〔源氏供養〕三〇五「この夜半の……夢をも誘

ふ風の前」

秋風のたよりならでは真葛原恨むとだにもいかで知らせん（成景）……〔班女〕三六〇「世は秋風の便りならでは

ゆかりを知らする人もなし」

朝々に見ればこそあれ住吉の浦よりをちの淡路島山（円冬）………「住吉詣」一五四三「住吉の浦よりをちの淡路島あはれはてなきながめかな」

（十）新續古今集

いとゞ憂き身の代衣恨みてもかひなく積る花の白雪（貴達）……「自然居士」一三九「身の代衣恨めしき浮世の中を」

秋来ての風の宿りはここにのみありとやそよぐ庭の荻原（永助法親王）………「芭蕉」一五四一「秋来る風の音づれは庭の荻原まづそよぎ」

ぬしやたれ田の面に落つる雁がねの稲葉にむすぶ露の玉章（頼之）………「放下僧」三四九「田の面に落つる雁鳴きて稲葉の雲の」

明くる間の鐘をも待たぬつらさかな夜深き鳥の聲に別れて（為相）………「西行櫻」一一七九「明けそめて鐘をも待たぬ別れこそあれ」

日に磨き月にぞさらす白玉の亂れて落つる布引の瀧（貴俊）………「佐保山」一二六八「日に磨き風にさらせる玉衣の春の日影も色ふかり」

六、物語類

（一）伊勢物語

春日野の若紫のすり衣しのぶの亂れ限り知られず………「小鹽」一三七〇「春日野の若紫の摺衣しのぶの亂れ限り知ら

すい

陸奥のしのぶもぢずり誰ゆゑに乱れそめにしわれならなくに……古今集を見よ。

起きもせず寝もせで夜を明かしては春のものとてながめ暮らしつ（古今集参照）……〔三山〕二九八「起きもせず寝もせで夜半を明かしては春のものとて眺め侍る……〔錦木〕三二五「起きもせず寝もせで夜半を明かしては春の眺めもまた如何ならん……〔源氏供養〕三〇五「起きもせず寝もせで明かすこの夜半の……〔大會供養〕二七九「起きもせず寝もせで夜半を明かしかね」

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身一つはもとの身にして（古今集参照）……〔雲林院〕四〇七、原歌のまゝ。……〔杜若〕六〇七、原歌のまゝ。……〔小鹽〕四五五「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ぞもとの身も知ら」……〔東北〕三七四「春や昔の春ならぬわが身ひとりぞ心なき……〔賀茂物狂〕七六六「月やあらぬ春や昔の春ならぬ思ひ出はわれも……〔井筒〕四二一「月やあらぬ春や昔と詠めしも……〔夕顔〕二二〇「住家の月やあらぬとかこちける」

人知れぬわが通ひ路の関守は宵々ごとにうちも寝ななん……〔泰山府君〕二七六「人知れぬわが通ひ路の関守は宵宵毎にうちも寝よ……〔卒都婆小町〕二七九「通ひ路の関守はありともとまるまじや」

白玉か何ぞと人の問ひし時露と答へて消えなましものを……〔山姥〕三一八「白玉か何ぞと問ひし人までもわが身の上に」

いとゞしく過ぎにし方の恋しきにうらやましくも帰る波かな（後撰集参照）……〔杜若〕六〇六、原歌のまゝ。……〔小袖曽我〕二三七「伊勢や尾張の海面に立つ波までも帰る事よと羨み」

信濃なる浅間の嶽に立つ煙遠近（イかた）人の見やは咎めぬ（新古今集参照）……〔杜若〕六〇六、原歌のまゝ。……〔鉢木〕二四八「信濃なる浅間の嶽に立つ煙遠近人の袖寒く」

唐衣きつゝなれにし妻しあればはるばる来ぬる旅をしぞ思ふ（古今集参照）…………「杜若」六二、原歌のまゝ。…………「小鹽」二四六七、原歌のまゝ。…………「千手」二七〇七「唐衣きつゝ馴れにし妻しある都の…………「飛雲」三六一四「摺衣遙々来ぬる旅をしぞ思ひの末も」…………「雲雀山」三六四六「杜若いつ唐衣はるばるの」

駿河なる宇津の山邊の現にも夢にも人に逢はぬなりけり（新古今集参照）…………「賀茂物狂」七五五「うつゝの山現や夢になりぬらん」…………「鐵輪」七三三「打つゝやうつの山の夢現とも」

時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子斑に雪の降るらん（新古今集参照）…………「富士山」三六八九、原歌のまゝ。…………「小袖曾我」二三六「富士の雪五月雨雲に降りまさで鹿の子斑や筑山の」…………「竹生島」三〇五六「白雪の降るか残るか時知らぬ山は都の富士なれや」…………「元服曾我」二〇七九「うつろふ富士を潮の波の雪も時知らで」

名にし負はばいざ言問はん都鳥わが思ふ人はありやなしやと（古今集参照）…………「隅田川」二五三、原歌のまゝ。…………「巴」三七九「都に近き住居とて名にし負ひたるやさしさよ」

三吉野の田のむの雁もひたぶるに君が方にぞよると鳴くなる…………「花筐」三六八六「われも田のむの雁がねこそ連れて越路の」

武藏野は今日はな燒きそ若草の妻も籠れりわれも籠れり（古今集 春日野は今日は 參照）…………「小鹽」二四六七「武藏野は今日はな燒きそ若草の妻も籠れりわれもまたこもる心は」

しのぶ山忍びて通ふ道もがな人の心の奥も見るべく（新勅撰集參照）…………「定家」一三〇九「心の奥の信夫山忍びて通ふ道芝の」…………「錦木」二四三「げにや聞きても信夫山その通ひ路を尋ねん」

あだなりと名にこそ立てれ櫻花年に稀なる人も待ちけり（古今集參照）…………「井筒」二四〇、原歌のまゝ。

今日來ずは明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや……〔古今集春上〕……小町〔一三六〕「今日來ずは明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや」

忘れ草植うとだに聞くものならば思ひけりとは知りもしなまし……〔住吉詣〕一三六「忘れ草植うとだに聞くものならばそのかね言も」

秋の夜の千夜を一夜になせりとも言葉殘りて鳥や鳴きなん……〔六浦〕三三七「秋の夜の千夜を一夜に重ねても言葉殘りて鳥や鳴かまし」

筒井筒井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに……〔井筒〕二二七、原歌のまゝ、

くらべこし振分髮も肩過ぎぬ君ならずして誰かあぐべき……〔井筒〕二二七、原歌のまゝ。

風吹けば沖つ白波龍田山夜半にや君がひとり越ゆらん〔古今集雜下〕……〔井筒〕二二六、原歌のまゝ、但し末句「ひとり行くらん」

梓弓眞弓槻弓年を經てわがせしがごとうるはしみせよ……〔井筒〕二二二「梓弓の昔よりの眞弓槻弓年を經て」

古の賤の苧環くりかへし昔を今になすよしもがな……〔義經記〕「賤や賤」と見よ。

行く螢雲の上まで往ぬべくは秋風吹くと雁に告げこせ……〔杜若〕三六七「飛ぶ螢の雲の上まで往ぬべくは秋風吹くと雁に現れ」

大幣の引く手あまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ……〔水無月祓〕五四一「大幣の引く手あまたの人心頼みがたき」……〔玉井〕三八八「誠にぞ實く大幣の引く手あまたの心かな」

葎生ひて荒れたる宿のうれたきは假にも鬼のすだくなりけり……〔現在七面〕一〇七「荒れたる宿のうれたきに假にも鬼のすだくなると詠みし」……〔梅枝〕四四八「葎の宿はうれたくとも袖をかたしき」

五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする　（古今集參照）……〔雲雀山〕二六四二、原歌のまゝ。……〔蟬丸〕二六四「風たちばなの香をとめて花も連なる」……〔藤〕二七二「夏橘の匂ふにぞ見ぬ世の人も忍ばるれ」……〔通小町〕一七五五「昔の戀しさは花橘の一枝」……〔浮舟〕三一七「古の戀しかるべき橘の」

百年に一年足らぬ九十九髪われを戀ふらし面影に見ゆ……〔玉葛〕一九六七「つくも髮われや戀ふらし面影に立つや」……〔卒都婆小町〕一七三六「百年に一年足らぬつくも髮かかる思ひは」

戀せじと御手洗川にせし御祓神はうけずもなりにけるかな　（古今集參照）……〔定家〕二二〇九「戀せじと御祓せし賀茂の　神や受けずもなりにけん」……〔水無月祓〕一九四一「この川波に戀せじとかけし御祓も」……〔班女〕二六三三「御手洗川に戀せじと誰かいひけん」……〔野宮〕二四一九「生死の道か神は受けずや思ふらん」

君や來しわれや行きけん思ほえず夢か現か寢てか覺めてか　（古今集參照）……〔錦木〕二三四五「思ひ寢の夢か現か寢てか覺めてか」

かきくらす心の闇に惑ひにき夢現とは世人定めよ　（古今集參照）……〔錦木〕二三二四、原歌のまゝ。……〔藍染川〕三二三「かきくらす心の闇のひたすらに夢現なき」……〔小鹽〕三四六八「まどろめば夜に結べる夢か現かよひと定めよ」

千早振る神の忌垣も越えぬべく大宮人の見まくほしさに　（萬葉集參照）……〔水無月祓〕一九四四「千早振る神の忌垣も越えつべしもと來し方の」

大原や小鹽の山も今日こそは神代の事も思ひ出づらめ　（古今集參照）……〔小鹽〕三四六一、原歌のまゝ。……〔融〕三三一九「大原や小鹽の山も今日こそは御覽じそめつらめ」

老いぬればさらぬ別れのありといへばいよいよ見まくほしき君かな　（古今集參照）……〔熊野〕二〇四、原歌のまゝ。

世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もと祈る人の子の爲（古今集参照）……〔熊野〕二三四「げにや世の中にさらぬ別れの
なくもがな千代もと祈る人の子の爲と詠み……」〔楊貴妃〕三二四「世の中にさらぬ別れのなかれかし千代も
人には添ひてまし」
蘆の屋の灘の鹽燒き暇なみ黄楊の小櫛もささず來にけり……〔蘆刈〕一六三「蘆の屋の灘の鹽燒き暇なみ黄楊の小櫛
はささず來にけり」……〔松風〕六八九「蘆の屋の灘の汐汲む憂き身ぞと人にも告げよ蘆の屋の
大方は月をもめでじこれぞこの積れば人の老となるもの（古今集参照）……〔關寺小町〕四四「おほかたは月をもめ
でじこれぞこの積れば人の老となるもの」
見ずもあらず見もせぬ人の戀しくはあやなく今日やながめ暮らさん（古今集参照）……〔右近〕三三四、原歌の
まゝ。
知る知らぬ何かあやなくわきていはん思ひのみこそしるべなりけれ（古今集参照）……〔右近〕三三四「業平の何
かあやなくわきていはん思ひのみこそしるべなりしを」
數々に思ひ思はず問ひがたみ身を知る雨は降りぞまされる（古今集參照）……〔雲林院〕一六四「ひとり志しむ身を
知る雨の晴れぬ心と……」〔富士太鼓〕二七三「身を知る雨の涙かと……」〔富士山〕二六七「身を知る雨は住む庭の屋の
窓の雨……」〔菊慈童〕六〇八「夜もすがら身を知る雨に濡されて」
翁さび人な咎めそ狩衣今日ばかりとぞ田鶴も鳴くなる（後撰集參照）……〔代主〕一四八四「翁さび人な咎めそわれ
こそは……」〔大社〕一七五三「翁さび人な咎めそ神たにも……」〔實盛〕一三五一「翁さび人な咎めそかりそめに……」
〔鉢木〕三五一「いづくに宿を狩衣今日ばかり留まり」
われ見ても久しくなりぬ住吉の岸の姫松幾代經ぬらん（古今集參照）……〔高砂〕二八七、原歌のまゝ。……

〔住吉詣〕二五三、原歌のまゝ。……〔草子洗小町〕二一九「住吉の久しき松を洗ひては」

睦ましと君は白波瑞籬の久しき代よりいはひそめてき（新古今集参照）……〔高砂〕一八七一「睦ましと君は知らずや瑞籬の久しき代々の……〔岩船〕二六八「住吉の神と君とは隔てなき誓ひぞ深き瑞籬の久しき世々のためしとて……」……〔翁〕八「千早振る神のひこさの昔より久しかれとぞ祝ひ……〔住吉詣〕二四一「瑞籬の久しき御代を守り給へ」……〔弓八幡〕三三〇「瑞籬の久しき代より仕へてき」

形見こそ今はあだなれこれなくは忘るる時もあらましものを（古今集参照）……〔柏崎〕六六〇「形見こそ今はあだなれこれなくは忘るる隙もあらましものを」……〔班女〕六六九〔柏崎〕と同断。……〔清経〕八〇九「形見こそなかなか憂けれこれなくは忘るる事もありなん」……〔夜討曾我〕三六八「形見は人の亡き跡の思ひの種と申せども」

思ふことといはでただにぞ止みぬべきわれと等しき人しなければ……〔小塩〕二三六「思ふこといはでただにや止みぬべきわれに等しき人しなければ」

(ロ) 源氏物語

宮城野の露吹き結ぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ（桐壺）……〔須磨源氏〕一四九七「小萩が下のさみしさまではごくみ給ひし」

いとどしく蟲の音しげき浅茅生に露置き添ふる雲の上人（桐壺）……〔須磨源氏〕一四九七「いとどしく蟲の音しげき浅茅生の露けき宿に明け暮らし」

尋ね行く幻もがなつてにても魂のありかをそこと知るべく（桐壺）……〔楊貴妃〕三二六「尋ね行く幻もがなつてにても魂のありかはそことしも」

木枯に吹き合はすめる笛の音をひき留むべき言の葉もなし（帚木）……〔小督〕二〇九、原歌のまゝ。

山賤の垣ほ荒るとも折々にあはれはかけよ撫子の露（帚木）……〔半蔀〕三五三「山賤の垣ほに生ふる撫子にあはれをかけし撫子の花」

心あてにそれかとぞ見る白露の光添へたる花の夕顔（夕顔）……〔賀茂物狂〕七〇七「夕顔の露の宿りは心あてにそれかあらぬか」

寄りてこそそれかとも見めたそかれにほのぼの見つる花の夕顔（夕顔）……〔半蔀〕三五三「折りてこそそれかとも見めたそかれにほのぼの見えし花の夕顔」……〔班女〕三六〇「折節たそかれにほのぼの見えし夕顔の花も」

優婆塞が行ふ道をしるべにて来ん世も深き契りたがふな（夕顔）……〔夕顔〕三二八「優婆塞が行ふ道をしるべにて来ん世も深き契り絶えすな」

古もかくやは人の惑ひけんわがまだ知らぬ東雲の道（夕顔）……〔楊貴妃〕二二五「われもまだ知らぬ東雲の道といつくと尋ねん……」「夕顔」三二五「東雲の道の迷ひの言の葉も」

山の端の心も知らで行く月は上の空にて影や絶えなん（夕顔）……〔夕顔〕三二一、唄歌のまゝ……〔半蔀〕三五三「山の端の心も知らで行く月は上の空にて絶えし跡の」

夕露に紐解く花は玉鉾の便りに見えしえにこそありけれ（夕顔）……〔夕顔〕三三四「ただ休らひの玉鉾の便りに立てし」

光ありと見し夕顔の上露はたそかれ時の空目なりけり（夕顔）……〔戀重荷〕二九九「露のかごとを夕顔のたそかれ時もはや過ぎぬ」……〔半蔀〕三五〇「夕顔の空目せし間の夢となり」……〔藍染川〕二三四「夕顔の空目して藍染川に身を投ぐる」

物思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の袖うち振りし心知りきや（紅葉賀）……〔船辨慶〕二七六「立ち舞ふべくも

あらぬ身の袖うち振るも恥かしや」………〔小督〕二〇九「物思ひに立ち舞ふべくもあらぬ心今は歸りて………〔芭蕉〕

三五二—物思ひ立ち舞ふ袖暫しいざや」………〔楊貴妃〕三二五「少女子が袖うち振れる心しるしや」

深き夜のあはれを知るも入る月の朧けならぬ契りとぞ思ふ　（花宴）………〔須磨源氏〕一四九七「春の夜の行方も知ら
で入る月の朧けならぬ契りゆゑ」

袖濡るる戀路とかつは知りながらおり立つ田子のみづからぞ憂き　（葵）………〔絃上〕一〇四九「田子の浦の汐をば
いざ下り立たん」

神垣はしるしの杉もなきものをいかにまがへて折れる榊ぞ　（榊）………〔野宮〕一四一〇、原歌のまゝ。

鈴鹿川八十瀬の波にぬれぬれず伊勢まで誰か思ひおこせん　（榊）………〔野宮〕一四一三「鈴鹿川八十瀬の波にぬれぬ
れず伊勢まで誰か思はん」

戀ひわびて泣く音にまがふ浦波は思ふ方より風や吹くらん　（須磨）………〔絃上〕一〇五三、原歌のまゝ。

秋の夜の月毛の駒よわが戀ふる雲居に翔れ時の間も見ん　（明石）………〔小督〕二〇〇「秋の夜の月毛の駒よ心して
雲居に翔れ時の間も急ぐ心の」

逢ふまでのかたみに契る中の緒の調べはことに變らざらなん　（明石）………〔住吉詣〕一五四六「よその調めの中の緒
のその音違はず逢ひ見んの頼めを」

身をづくし戀ふるしるしにここまでも廻りあひける緣は深しな　（澪標）………〔住吉詣〕一五四七、原歌のまゝ。

數ならでなにはの事もかひなきになど身をつくし思ひ初めけん　（澪標）………〔住吉詣〕一五四七「數ならでなには
の事もかひなきになに身をつくし思ひ初めけん」

露けさの昔に似たる旅衣田蓑の島の名には隠れず　（澪標）………〔住吉詣〕一五四七「露けさも昔に似たる旅衣田蓑の

島も泣きかる」

舟人も誰を戀ふとか大島のうら悲しげに聲の聞ゆる（玉葛）……「玉葛」一九五「舟人も誰を戀ふとか大島のうら
悲しげに聲立てて」

浮島を漕ぎ離れても行く方やいづく泊りと知らずもあるかな（玉葛）……「玉葛」一九六「浮島を漕ぎ離れても
行く方やいづく泊りと白波に」

憂きことに胸のみ騷ぐ響には響の灘も障らざりけり（玉葛）……「玉葛」一九六「響の灘も[illegible]思ひに障る方なし」

二本の杉の立所を尋ねずは古川野邊に君を見ましや（玉葛）……「玉葛」一九六、原歌のまゝ。

初瀬川早くの事は知らねども今日の逢瀬に身さへ流れぬ（玉葛）……「玉葛」一九四「初瀬川早くも知るや涙から
ぬに」

戀ひ渡る身はそれなれど玉葛いかなるすぢを尋ね來つらん（玉葛）……「玉葛」一九七「戀ひ渡る身はそれながら
玉葛いかなるすぢを尋ね來ぬらん」

花園の胡蝶をさへや下草に秋待つ蟲は疎く見るらん（胡蝶）……「胡蝶」二〇八、原歌のまゝ。

胡蝶にも誘はれなまし心ありて八重山吹を隔てざりせば（胡蝶）……「胡蝶」二一二「胡蝶にも誘はれなまし心あ
りて八重山吹も隔てぬ梅の」

思ふとも君は知らじな湧き返り岩もる水の色し見えねば（胡蝶）……「玉葛」一九八「湧き返り岩もる水の思ひに
咽び」

聲はせで身をのみ焦がす螢こそいふよりまさる思ひなるらめ（螢）……「玉葛」一九八「焦がるるや身より出づ
る玉と見るまで包めども螢に亂れつる影もよしなや」

常陸なる駿河の海の須磨の浦に波立ち出でよ箱崎の松　（常夏）……〔櫻川〕一三〇「箱崎の波立ち出でて須磨の浦又は駿河の海過ぎて常陸とかや、まで」

橘の小島は色も變らじをこの浮舟ぞ行くへ知られぬ　（浮舟）……〔浮舟〕三三「橘の小島の色は變らじをこの浮舟ぞ寄るべ知られぬ」

峯の雪汀の氷踏み分けて君にぞ迷ふ道は迷はず　（浮舟）……〔雪〕三八「峯の雪汀の氷踏み分けて君にぞ迷ふ道は迷はじ」……〔浮舟〕三九「汀の氷踏み分けて道は迷はずとありしも」

眺めやるそなたの雲も見えぬまで空さへくるる頃のわびしさ　（浮舟）……〔融〕三二九「眺めやるそなたの空は白雲のはや暮れそむる遠山の」

水まさるをちの里人いかならん晴れぬながめにかきくらす頃　（浮舟）……〔浮舟〕三九「晴れぬながめとありしにも涙の雨や增りなん」

歎きわび身をば捨つとも亡き影に浮名流さんことをこそ思へ　（浮舟）……〔浮舟〕三三「寄る方わかで漂ふ世に憂き名漏れんと思ひわび」

（八）大和物語

住みわびぬわが身投げてん津の國の生田の川は名のみなりけり　（萬葉集參照）……〔求塚〕二六九「住みわびつわが身捨ててん津の國の生田の川は名のみなりけり」……〔生田敦盛〕二七一「あはれも深き生田川の身を捨てし物語」……〔箙〕五二「生田川の身を捨ててこそ名は」

君なくてあしかりけりと思ふにもいとど難波の浦ぞ住み憂き　（拾遺集參照）……〔蘆刈〕六〇「君なくてあしかりけりと思ふにぞいとど難波の浦は住み憂き」

悪しからじとてこそ人の別れけめ何か難波の浦は住み憂き　（拾遺集参照）……〔蘆刈〕三七一「悪しからじよからんとてぞ別れにし何か難波の浦は住み憂き」

吾妹子が寝くたれ髪を猿澤の池の玉藻と見るぞ悲しき　（拾遺集参照）……〔采女〕四〇二、原歌のまゝ。

(ニ) 狭衣物語

尋ぬべき草の原さへ霜枯れて誰に問はまし道芝の露　（巻二）……〔柏崎〕六六一「道芝の露の憂き身の置き所誰に問はまし旅の道」……〔東北〕三九五「白雲の古事を誰に問はまし道芝の露の世に」……〔綾鼓〕一九〇「道芝の露の命の限りをば誰に問はまし」……〔錦木〕三四九「道芝の露をば誰に問はまし」

この頃は苔のさ筵かたしきて岩根の枕ふしよからまし　（巻四）……〔融〕三三二「藤は苔の衣を片敷きて岩根の床に夜もすがら」

(ホ) 住吉物語

朝顔の花の上なる露よりもはかなきものはかげろふのあるかなきかの心地して世を秋風のうち靡きむれゐる田鶴を別れつつただひとりのみ荒磯海のかひなき浦にしほたるる天の羽衣わが如く乾しやわづろふ（後略）……〔鐘馗〕一四五三「朝顔の花の上なる露よりもはかなきものはかげろふのあるかなきかの心地して世を秋風のうち靡き群れゐる田鶴の音を鳴きて」

七、私撰・家集類

(甲) 私撰集

(イ) 古今和歌六帖

妹が門行き過ぎかねつひぢ笠の雨も降らなん雨隱れせん（第一）……〔合浦〕六八四「吾妹子がひぢ笠の雨に降り來ぬ雨宿り」

逢ふことを阿漕が島に引く網の度重ならば人も知りなん（第三）……〔阿漕〕三二「逢ふことも阿漕が浦に引く網も度重ならば顯れやせん」……〔絃上〕一〇四九「阿漕か浦の汐をば度重ねても汲み難し」……〔松風〕一六八「阿漕が浦に引く汐その伊勢の」

百千鳥花に馴れ行くあだし身ははかなき程に羨まれぬる（拾葉抄所引）……〔右近〕三三五、原歌のまゝ「但末句「羨まれて」）……〔櫻川〕一三七〔右近〕に同じ。……〔胡蝶〕二四七「花に馴れ行くあだし身ははかなきものを」

（ロ）夫木和歌抄

吹きおろす春の嵐の山風に戸無瀨の瀧の花の白波（雅有）……〔嵐山〕二〇五「嵐山戸無瀨に落つる白波も散るかと見ゆる花の瀧」

めぐりくる三月も久し三千年になるてふ桃の花の盃（爲家）……〔西王母〕一五七五「君に捧ぐる桃實の花の盃とりあへず」

葛城や木蔭に光る稻妻を山伏の打つ火かとこそ見れ（寂蓮）……〔葛城〕六九五「葛城や木の間に光る稻妻は山伏の打つ火かとこそ見れ」

初雪のしなしの榊は立てしかどそこととも見えず越の白山（家佐）……〔室君〕三〇三「越路の雪の深さをも知るやしるしの棹立てて」

いかにせん冬木も未だこらなくに深くも雪のなりまさるかな（雅賴）……〔鉢木〕二五七「いかにせんまづ冬木より咲きそむる窓の梅の北面は雪封じ」

歌學類
—古今秘抄
—俊頼口傳
—袖中抄

木賊刈る園原山の木の間より磨き出でぬる秋の夜の月（仲正）……〔木賊〕二四〇「木賊刈る園原山の木の間より磨かれ出づる秋の夜の月」

愛宕山樒の原に雪積り花摘む人の跡だにぞなき（好忠）……〔車僧〕六九「愛宕山樒が原に雪積り花摘む人の跡だにもなし」

里近く山路の末はなりにけり野飼の牛の子を思ふ聲（寂蓮）……〔唐船〕一六二「野飼の牛の聲までに子ゆゑに物や思ふらん」

昔がたり逢が島もよりぬべし生薬とる住吉の浦（家隆）……〔養老〕一三四「蓬が島の遠き世に今のためしも生薬」

入相の遠山寺の鐘の聲あな心憂それが身いくよぞ（基俊）……〔通盛〕一八〇「遠山寺の鐘の聲　入相こそめれ」

姿こそ山のかせきに似たりとも心は花になさばならめや（友則、拾葉抄所引）……〔小鹽〕二四九「姿こそ山のかせきに似たりとも心は花にならばこそ」（古今集「形こそ深山隠れの」参照）

（乙）歌學類

（ハ）古今秘抄

初春の朝毎には来れども逢はでぞ還るもとの栖に……曾我物語參照。

（ニ）俊頼口傳

陸奥のけふの細布ほど狭み胸合ひ難き戀もするかな……〔檜垣〕二六四「陸奥の狭布の細布胸合はず」

（ホ）袖中抄

錦木は千束になりぬ今こそは人に知られぬ閨の内見め……〔錦木〕二三〇、原歌のまゝ。

帚木に妻やこもれる園原に鳴く聲ぞ聞ゆる……〔木賊〕二四〇「牡鹿鳴く野の行方まで妻や籠りし園原

―雲玉集

家集類

―菅家後集

―貫之集

―頼政集

の」

(ヘ) 雲玉集（拾葉抄に據る）

道のべのたよりの櫻折り添へて薪や重き春の山人………〔志賀〕三五五、原歌のまゝ

花も憂し嵐もつらしもろともに散ればぞ誘ふ誘へばぞ散る………〔櫻川〕三三八「花も憂し風もつらし散ればぞ誘ふ誘へばぞ散る」

(丙) 家集類

(ト) 菅家後集

山人の笠も薪も埋もれて雪こそくだれ谷の下道………〔葛城〕六九三 山人の笠も薪も埋もれて雪こそくだれ谷の道を」

山里の折りかけ垣の梅の花いかなる人の見じといふらん………〔鉢木〕二三八「山里の折りかけ垣の梅をただに情なしと惜しみしに」

(チ) 貫之集

かき曇りあやめも知らぬ大空にありとほしをば思ふべしやは………〔蟻通〕二一九「雨雲のたゝ重なれる夜半なればありとほしとも思ふべきかは」

(リ) 頼政集

花咲かば告げよといひし山守の來る音すなり馬に鞍置け………〔鞍馬天狗〕九三〇「花咲かば告げんといひし山里の使は來たり馬に鞍鞍馬の山の」

住吉の松の木間より見渡せば月落ちかかる淡路島山………〔弱法師〕三三五「住吉の松の隙より詠むれば月落ちかかる淡路島山」………〔富士太鼓〕三〇一「住吉の松の隙より眺むれば月落ちかかる山城も………〔梅枝〕四四六 住吉の松の

—拾玉集　—山家集　—月清集　—拾遺愚草

隙より讃むれば枝もて結へる淡路潟」

（ヌ）拾　玉　集（慈鎮）

君が代は春に春ある時ながら八千代こめたる玉椿かな………〔三輪〕三九五「八千代をこめし玉椿變らぬ色を」

秋しるや深山の秋のもの憂きにそれかあらぬか風の夕暮………〔雲林院〕四六〇「それかあらぬか木の下風か」

（ル）山　家　集（西行）

花見にと群れつゝ人のくるのみぞあたら櫻のとがにはありける（玉葉集參照）………〔西行櫻〕一七四、原歌のまゝ（但し初句「花見んと」）

風吹けばあだにやれ行く芭蕉葉のあはれと身をも頼むべきよか………〔芭蕉〕一五二「芭蕉に落ちて松の聲あだにや風の破るらん」

（ヲ）月　清　集（良經）

蓬生の末葉の露の消え返りなほこの世にと待たんものかは………〔葵上〕一六二「蓬生のもとあらざりし身となりて葉末の露と消えもせばそれさへ殊に恨めしや」

（ワ）拾　遺　愚　草（定家）

都邊はなべて錦となりにけり櫻を折らぬ人しなければ………〔小鹽〕四六〇「都邊はなべて錦となりにけり櫻を折らぬ人しなき」

僞りのなき世なりけり神無月誰が誠よりしぐれそめけん（續後拾遺集參照）………〔定家〕一〇八、原歌のまゝ

歎くとも戀ふとも逢はん道やなき君葛城の峯の白雲………〔定家〕一一〇「歎くとも戀ふとも逢はん道やなき君葛城の峰の（白ナシ）雲」

あはれ知れ霜より霜に朽ち果てて世々にふりぬる山藍の袖（拾葉抄所引）………〔定家〕三一〇九「あはれ知れ霜より霜に朽ち果てて世々にふりにし山藍の袖」

(カ) 壬 二 集 (家隆)

龍田川もみぢ葉閉づる薄氷渡らじそれも中や絶えなん………〔龍田〕一九六「龍田川紅葉を閉づる薄氷渡らばそれも中や絶えなん」

(ヨ) 七 玉 集 (家長)

今朝よりも龍田の櫻色ぞ濃き夕日や花に時雨なるらん………〔龍田〕一九三「今朝よりは龍田の櫻色ぞ濃き夕日や花の時雨なるらん」

(タ) 藤 谷 集 (爲相)

いかにしてこの一木にしぐれけん山にさきだつ庭のもみぢ葉………〔六浦〕三〇二、原歌のまゝ。

(レ) 草 庵 集 (頓阿)

いつよりかむなしき空に散る花のあだなる色に迷ひそめけん………〔藤〕二七三「いかなればむなしき空に散る花のあだたる色に迷ひそめけん」

(丁) 百 首 類

(ソ) 堀 川 百 首

しののめにおきつつぞ見ん朝顔は日影待つ間の程しなければ………〔葵上〕一六一「變へぬれば朝顔の日影待つ間の有様なり」

百年は花に宿りて過してきこの世は蝶の夢にぞありける（匡房）………〔關寺小町〕二六三「百年は花に宿りし胡蝶

—禪林寺殿七百首	—神祇百首	—神道百首	—詮七百首

の舞」

打ちならす人しなければ君が代にかけし鼓も苔生ひにけり　（紀伊）………〔難波〕三三七「苔むして打ち鳴らす人もなければ君が代にかけし鼓も時守の」

旅人の道妨げに摘むものは生田の小野の若菜なりけり　（爲相）………〔求塚〕三三六「旅人の道妨げに摘むものは生田の小野の若菜なりよしなや」

（ツ）　禪林寺殿七百首　（爲氏）

思ひやる方のなきこそ悲しけれ破れ車のかかるわが身は………〔葵上〕一六六「夕顔の宿の破れ車やる方なきこそ悲しけれ」

（ネ）　神　祇　百　首　（群書類從）

烏羽玉のわが黒髪も亂れぬに結び定めよ小夜の手枕　（烏丸光寧）………〔淡路〕一四九、原歌のまゝ（但し第三句「亂れずに」）

（ナ）　神　道　百　首　（拾葉抄所引）

穴貴わが邪をなさざればなどかは神の守らざるべき　（神道二百首）………〔蟻通〕一三一「わが邪をなさざればなどかは神も納受の心に叶ふ」

思ふ事叶はねばこそ浮世なれこれ神道のいのる理をしれ　（神道三百首）………〔安宅〕九九「げにや思ふ事かなはねばこそ憂き世なれと知れども」………〔佛原〕三七九三「思ふ事叶はねばこそ浮世なれわれはもとより」

（ラ）　詮　七　百　首　（拾葉抄所引）

春駒の勇める心青柳の絲もて繋ぐ風は吹くとも………〔蟻通〕一二八「柳蔭の絲もて繋ぐ駒かくとも知らで」

史傳
―大鏡
―今鏡
―今昔物語

八、史傳・軍記類

甲 史傳

(イ) 大　鏡

東風吹かば匂ひおこせよ梅の花主なしとて春を忘るな（巻二道眞、拾遺集參照）………「東北」二一四「花も主を慕ふかと年々色香も」……「水無瀬」一九三「窓の梅主忘れぬしるしぞと匂ひをとめて吹く風の」

君が住む宿の梢を行く行くも（イとゞ）隱るるまでもかへり見しかな（イはや）（巻二道眞、拾遺集參照）………「道明寺」二八三「君が住む宿の梢をゆくゆくも隱るるまでにかへり見ぞする」

(ロ) 今　鏡

親の親ぞ今はゆかしき時鳥はや鶯のこは子なりけり（打聞）………「歌占」三六〇「鶯のこは子なりけり」………「櫻川」二二四「こは子なりけり鶯のあふ時も」

麻裳よい紀の關守が手束弓ゆるす時なくまづゑめる君（打聞）………「誓願寺」一五二「旅衣紀の關守が手束弓出て入る日數」………「雲雀山」二六五「麻裳よい紀の關守が手束弓入るさか歸るさか」

(ハ) 今 昔 物 語

世の中はとてもかくても過してん宮も藁屋もはてしなければ（巻廿四、新古今集、江談抄參照）………「蟬丸」一六八「世の中はとにもかくにもありぬべし宮も藁屋もはてしなければ」

わが宿の松はしるしもなかりけり杉むらならば尋ね來てまし（巻廿四）………「三輪」一九八「松はしるしもなかりけり杉むらならばかり立ったる神垣は」

ー江家次第　ー江談抄　ー古事談　ー十訓抄　ー古今著聞集　ー沙石集

（ニ）江家次第

秋風之吹仁津毛天毛阿那目阿那目小野止波不曰薄生計里（古事談巻四）………〔通小町〕一六六、原歌のまゝ。

（ホ）江談抄

三輪川の渚の清き唐衣くると思ふなえつと思はじ（第一）………〔三輪〕二九三「三つの輪は清く清きぞ唐衣くると思ふな取ると思はじ」

世の中はとてもかくても過してん宮も藁屋もはてしなければ（第三）………今昔物語を見よ。

こけ衣きたるいはほはまろひけむ衣着ぬ山の帯するはなぞ（第四）………〔白楽天〕四四五「苔衣着たる巌はさもなくて衣着ぬ山の帯をするかな」

（ヘ）古事談

秋風の吹くたび毎に穴目穴目小野とはいはじ薄生ひけり（第二）………江家次第を見よ。

（ト）十訓抄

雲の上はありし昔に變らねど見し玉だれの内やゆかしき（第一成範）………〔鸚鵡小町〕一九、原歌のまゝ。

（チ）古今著聞集

時雨する稲荷の山のもみぢ葉のあをかりしより思ひそめてき………〔熊野〕二三五「稲荷の山の薄紅葉の青かりし葉の秋」………〔松尾〕六四七「稲荷の山のもみぢ葉の青かりし悪みも」………〔融〕二一八「またき時雨の秋なれば紅葉も青き稲荷山」

（リ）沙石集

香なしに咲きそめにける梅の花匂はざりせばいかで知らまし（第五）………〔巻絹〕六〇八「香なしにかつ咲きそむ

る梅の花匂はざりせば誰か知るべき」

（ヌ）撰 集 抄

よしや君昔の玉の床とてもかからん後は何にかはせん（第一）………〔松山天狗〕二六八、原歌のまゝ、

月は漏れ雨はたまれと思ふには賤がふせやを葺きぞわづらふ（第五）………〔雨月〕三三一「月は漏れ雨にたまれととにかくに賤が軒端を葺きぞわづらふ」………〔蟬丸〕一六六「月にも疎く雨をただに聞かぬ藁屋の」

世の中を厭ふまでこそかたからめ假の宿りを惜しむ君かな（第九、新古今集參照）………〔江口〕四七六、原歌のまま。

世を厭ふ人とし聞けば假の宿に心とむなと思ふばかりぞ（第九、新古今集參照）………〔江口〕四七七、原歌のまゝ

（ル）徒 然 草

月にめで花をながめし古のやさしき人はここにあり原（慈鎮）………〔賀茂物狂〕一七五六「月にめで花を詠めし古の跡はここにぞ在原なる」

乙 軍 記 類

（チ）平 家 物 語

伊勢武者は皆緋縅の鎧着て宇治の網代にかかりぬるかな（巻四仲綱）………〔頼政〕三三七、原歌のまゝ、但末句「かかりけるかな」

埋木の花咲くこともなかりしに身のなる果ぞ悲しかりける（巻四頼政）………〔頼政〕三三三、原歌のまゝ、………〔鉢木〕三五七「埋木の花咲く世にあはん事」

時鳥名をも雲居にあぐるかな（頼長）弓張月のいるにまかせて（巻四頼政）………〔鵺〕三九一、原歌のまゝ、………

—源平盛衰記

……〔寝覚〕三九九「射術を傳へこその名を雲の上にあげ」

さざ波や志賀の都は荒れにしを昔ながらの山櫻かな（巻七忠度、千載集春上）……〔俊成忠度〕二四一、原歌のまゝ。……〔志賀〕一五九四「さざ波や志賀の都の名をとめて昔ながらの山櫻」……〔兼平〕七二一「さざ波の昔ながらの山櫻は青葉にて」……〔竹生島〕三〇四「志賀の都花園昔ながらの山櫻」

呉竹の筧の水は變れどもなほすみあかぬ宮のうちかな（巻七經政）……〔經政〕二〇八七「呉竹の筧の水はかはるとも（なほナシ）住みあかざりし宮のうちまぼろしに」

世の中のうきには神もなきものをなに祈るらん心づくしに（巻八宇佐詣）……〔清經〕八五一、原歌のまゝ。

さりともと思ふ心も蟲の音も弱り果てぬる秋の暮かな（巻八俊成）……千載集を見よ。

行き暮れて木の下蔭を宿とせば花や今宵の主ならまし（巻九忠度）……〔忠度〕二九〇、原歌のまゝ。……〔俊成忠度〕二四一、原歌のまゝ。……〔項羽〕五九九「たかめ暮らして花にまた宿かる草を尋ねん」

いかにせん都の春も惜しけれど馴れし東の花や散るらん（巻十侍従）……〔熊野〕三三三、原歌のまゝ。

池水に汀の櫻散りしきて波の花こそ盛りなりけれ（灌頂巻後白河法皇、千載集春下）……〔大原御幸〕一四一、原歌のまゝ。

思ひきや深山の奥の住居して雲居の月をよそに見んとは（灌頂巻建禮門院）……〔大原御幸〕一四七「思はずも深山の奥の住居して雲居の月をよそに見んとは」

（ワ）　源　平　盛　衰　記　（平家物語にあるものは省く）

少女子が少女さびすも唐玉を少女さびすもその唐玉を（巻一神女）……〔國栖〕九七五「少女子がその唐玉の琴の絲ひかれ奏づる」

|太平記

いふならく奈落の底に入りぬれば刹利も首陀も變らざりけり　（巻八後醍醐天皇）………〔錦木〕三五六、原歌のまゝ、

………〔船橋〕三五四「いふならく奈落の底の水屑と」

伊勢の海阿漕が浦に引く網も度重なれば人もこそ知れ　（巻八………〔阿漕〕三一「伊勢の海阿漕が浦に引く網も度重なれば顯れにけり」

見るからに心づくしの髪なればうさにぞ返す本の社に　（巻卅三清經妻）………〔清經〕六四七、原歌のまゝ、（但初句「見る度に」）

今ぞ知る御裳濯川の流れには波の底にも都ありとは　（巻四十三、二位尼）………〔大原御幸〕五五二、原歌のまゝ、

(カ)　太　平　記

さして行く笠置の山を出でしよりあめが下には隱れ家もなし　（巻二後醍醐天皇）………〔二人靜〕一七三〇「花の雪雨もたまらぬ奥山の」

いかにせん頼む蔭とて立ち寄ればなほ袖濡らす松の下露　（巻三藤房）………〔二人靜〕一七三〇「三吉野の顏ぬ木蔭の花の雪雨もたまらぬ」

草も木もわが大君の國なればいづくか鬼の栖なるべき　（巻十六朝雅）………〔土車〕二〇七五「土も木もわが大君の國なればいづくか鬼の宿と定めん」………〔羅生門〕三三七「土車」に同じ。………〔大江山〕三六九「土も木もわが大君の國なればいづくか鬼の宿りたる」………〔土蜘蛛〕三〇四「大江山」に同じ。………〔田村〕一九九「土も木もわが大君の國に」………〔高砂〕一八〇七「土も木もわが大君の國なればいつまでも君が代に」………〔氷室〕三六九「土も木も大君の御影にいかで漏るべき」………〔難波〕三三三「大君の國なれば土も木も榮え榮うる」………〔御裳濯〕六〇一「草も木もわが大君の國なればいづくも同じ神と君」

—義經記
—曾我物語
佛書
—一遍語錄
—身延山御書

迦毘羅衛にともに契りしかひありて文殊の御顏相見つるかな（卷廿四行基、拾遺集參照）……「卷絹」六三九
「迦毘羅衛に契りし事のかひありて文殊の御顏を見るなり」
靈山の釋迦の御許に契りてし眞如朽ちせず相見つるかな（卷廿四婆羅門僧正、拾遺集參照）……「卷絹」六三九
「靈山の釋迦の御許に契りて眞如朽ちせず逢ひ見つと詠歌」

（ヨ）義經記
しづやしづ賤のをだまきくりかへし昔を今になすよしもがな（卷六靜、伊勢物語「古のしづの」參照）……「二人靜」三二、原歌のまゝ。……「吉野靜」三六六、原歌のまゝ。……「安達原」二二一「眞麻苧の絲を繰り返し昔を今になさばや」

（タ）曾我物語
初春のあした每には來れども逢はでぞ還る本の栖に（古今秘抄參照）……「白樂天」三四七、原歌のまゝ。

丙　佛書

（レ）一遍語錄
稱ふれば佛もわれもなかりけり南無阿彌陀佛の聲ばかりして……「誓願寺」一五六「稱ふれば佛もわれもなかりけり南無阿彌陀佛の聲ばかり至誠心」

（ソ）身延山御書（日蓮）
立ち渡る身の浮雲も晴れぬべしたえぬ御法の鷲の山風……「現在七面」一〇三「鷲の御山も餘所ならず……時知る風にたち渡る身の浮雲も晴れぬれば」

拾葉抄所引雜書

出典未詳古歌

九、雜

（イ）　拾葉抄所引雜書

世の中の人は何とも石淸水澄み濁るをば神ぞ知るらん　（日本風土記、石淸水八幡神詠）……〔船辨慶〕二七〇、原歌のまゝ。

寄神者今底寄兮來長濱于蘆毛之駒于手綱搖懸（よるかみはいまぞよりくるながはまにあしげのこまにたづなゆりかけ）　（先代舊事詠歌本紀）……〔葵上〕一兲「寄り人は今ぞ寄りくる長濱の蘆毛の駒に手綱ゆりかけ」

ささ波や三井の古寺鐘はあれど昔に歸る聲は聞えず　（新撰歌枕、定圓）……〔三井寺〕三九八、原歌のまゝ。

（ロ）　出典未詳古歌

二月の初卯の神樂面白や諸へや諸へ日影さすまで　（藻鹽草に八幡神詠）……〔弓八幡〕三三、原歌のまゝ。

心だに誠の道にかなひなば祈らずとても神や守らん　（菅原道眞詠と傳ふ）……〔班女〕三六四、原歌のまゝ。……〔安達原〕二三「心だに誠の道に叶ひなば祈らずとても終になど」

何事のおはしますとは知らねどもかたじけなさに淚こぼるる　（謠曲に行教和尙詠）……〔巴〕三七八、原歌のまゝ。

北は黃に南は靑く東白西くれなゐの蘇命路の山　（紫式部詠と傳ふ）……〔歌占〕三五七、原歌のまゝ。

立てぬ的引かぬ弓にて放つ矢のあたらずしかもはづれざりけり　（拾葉抄に夢窓國師詠と傳ふ）……〔放下僧〕二四六「引かぬ弓放さぬ矢にて射る時は當らずしかも外れざりけり」

今日見ずは悔しからまし花盛り咲きも殘らず散りも始めず　（拾葉抄に定賴詠と傳ふ。新古今集公任に「今日來ず

作者未詳古歌

は見てまかせし山里の紅葉も人も常ならぬ數世に」………〔鞍馬天狗〕九〇、原歌のまゝ。………〔小鹽〕三四六「散り
もせず咲きも殘らぬ數花なり」
ひとりだに佛の御名を尋ね見んおのおの歸る法の場人〔一遍詠と傳ふ〕………〔誓願寺〕三六四、原歌のまゝ。……
…〔佛原〕七九八、原歌のまゝ。………〔實盛〕三三〇「獨りだに佛の御名を尋ね見んおのおの歸る法の場知るも」
名のらずはいかがそれとも夕暮の面影かはるはほその松〔[illegible]詠と傳ふ〕………〔竹雪〕二八九「名のらずはいか
でそれとなき夕暮の面影かはる月若かな」
埋木の人知れぬ身と沈めども心の花は殘りけるぞや〔拾葉抄に西行といへど疑はしといふ〕………〔西行櫻〕二二四
原歌のまゝ。
陸奥の外の濱なる呼子鳥鳴くなる聲はうとうやすかた〔定家詠と傳ふ〕………〔善知鳥〕二六八、原歌のまゝ。
風向ふ雲の浮波立つと見て釣せぬさきに歸る舟人〔鳥相詠と傳ふ〕………〔羽衣〕三八七「風向ふ雲の浮波立つと見
て釣せで人や歸るらん」

（八）作者未詳古歌と思はるるもの

雪ならば幾度袖を拂はまし花の吹雪の志賀の山越………〔志賀〕二七、原歌のまゝ。………〔三井寺〕一九九五「雪な
らば幾度袖を拂はまし花の吹雪と詠じけん」
櫻川瀬々の白波繁ければ霞うながす信太の浮島………〔櫻川〕三三、原のまゝ。
春霞立ち出で見れば深山邊の梢にかかる(峯の)白雲………〔鸚鵡小町〕七〇、原のまゝ。(但し末句不完)
谷水をせく水口に五十串立て苗代小田の種蒔きにけり………〔淡路〕一四、原のまゝ。
月は見ん月には見えじながらへて憂き世を廻る影も恥かし………〔雲雀山〕三六三、原のまゝ。………〔草薙〕八八三

新作

原のまゝ。

たれぞこの鳴門の沖に音するはとまり定めぬ海士小舟かな………〔海士〕一七三「淡路のわたり末近く鳴門の沖に音するはとまり定めぬ海士小舟」

蜘蛛のいに荒れたる駒は繋ぐとも二道かくる人は頼まじ（古今六帖第四に「蜘蛛の網に吹きくる風に留めつとも人の心をいかが頼まん」）………〔鐵輪〕七〇五「蜘蛛のいへにあれたる駒に繋ぐとも二道かくるあだ人を頼まじ」………〔繪馬〕三四八「絲よりかけて繋ぐ駒に二道かけて」

三瀨川絶えぬ涙の憂き瀨にも亂るる戀の淵はありけり………〔松風〕三六六、原のまゝ。

釋迦は遣り彌陀は導く一筋に心ゆるすな南無阿彌陀佛………〔當麻〕一八四二、原のまゝ。………〔柏崎〕六九九「釋迦は遣り彌陀は導く一筋にここを去ること遠からず」

何事も思ひ捨てたる身ぞ安き梭を投ぐる間の夢のうき世に（拾葉抄所引）………〔當麻〕一八五四「御法の舟の水馴棹さを投ぐる間の夢の夜はほのぼのと」………〔佐保山〕一三七四「山の名のさをたぐるまの夢の夜の」

いかなれば雪や氷と隔つらんとくれば同じ谷川の水（拾葉抄に天皇と記す）………〔東岸居士〕三一七五「何と唯雪や氷と隔つらん萬法皆一如」

後の世の闇をば何と照らすらん胸の鏡よ心濁すな………〔歌占〕三八六、原のまゝ。

白露のおのが姿をそのままにもみぢに置けば紅の玉）………〔身延〕三九五一、原のまゝ（但し末句「紅なり」に

戀よ戀わが中空になすな戀戀には人の死なぬものかは（俗謠であらう）………〔戀重荷〕一六六二、原のまゝ。

（二）　新作と思はれるもの

鶯のかひこの中の子規しやが父に似てしやが父に似ず（萬葉集「鶯のかひこの中に」の改作）………〔歌占〕三九九。

原歌未詳

月に鳴け同じ雲居の時鳥天つ空音の萬代までに………〔采女〕四〇九

鶯の聲ものどけき春風に梅の匂ひや已に滿つらん………〔梅〕四三一

墨衣思ひ立てどもさすが世を出づる名殘の袖は濡れけり………〔高野物狂〕六六五

浮世をば何とか廻る車僧まだ輪の内にありとこそ見れ………〔車僧〕九六五

浮世をば廻らぬものを車僧乘りも得るべきわがあらばこそ………〔車僧〕九六六

苺かなくに何を種とて浮草の波のうねうね生ひ茂るらん………〔草子洗小町〕一一八四

極樂の内ならばこそ惡しからめそとは何かは苦しかるべき………〔卒都婆小町〕一一七五

頼めただ袖ふれ馴れし月影の暫し雲居に隔てありとも………〔花筐〕三八二

水物ぶ釣瓶の繩の繰り返し昔に歸れ白河の波………〔檜垣〕三六五

古りはつるこの一本の跡を見て袖のしぐれぞ山にさきだつ………〔六浦〕三〇二

(ホ)　原歌未詳のもの

思ひには死なれざりけりと詠みしも………〔柏崎〕六五七

頼めにしかひこそなけれ獨寢の枕詞ぞ恨みなる………〔菊慈童〕八〇八

そのままやる文の干ぬ間にと詠ぜし………〔夜討曾我〕三六九

昭和六年七月一日印刷
昭和六年七月五日發行

謠曲大觀總說奧附　（非賣品）

不許複製

著者　佐成謙太郎

東京市神田區錦町一丁目十番地
發行者　三樹退三

東京市本所區厩橋一丁目二十七番地ノ二
印刷者　守岡功

東京市本所區厩橋一丁目二十七番地ノ二
印刷所　凸版印刷株式會社分工場

發行所　東京市神田區錦町一丁目
【振替貯金口座東京四九九一番】
株式會社　明治書院
電話神田(25)一四一四番　二八九五番　二六九六番

謠曲大觀總目錄

（曲名の右に括弧のあるものは括弧内の曲を見よ。別卷は索引その他）

首卷

第一卷

第二卷

第三卷

第四卷

第五卷



